
探偵オペラ ミルキィホームズ ~ Game Remake Ver ~

探偵コアラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵オペラ ミルキィホームズ ～Game Remake Version～

【Nコード】

N5826P

【作者名】

探偵コアラ

【あらすじ】

時は未来、大探偵時代の「ヨコハマ」。

この世界には「トイズ」という能力を持った人間がいる。

その「トイズ」を使って悪事を起こす者を「怪盗」、その「怪盗」を同じ「トイズ」を使って捕まえる「探偵」。

これは「探偵」を目指す4人の少女達と「トイズ」を失った若き天才探偵の物語。

この小説はDES、QCAを採用しています

Detective Experience Systemとは「探偵体験システム」です。初めての方は少なくとも第八話から入ることをお勧めいたします（このシステムの説明がされています）
QCAはゲームでも採用されているシステムです。

キャラは基本ゲームの性格です。

この小説は皆さんに「探偵オペラミルキイホームズ」を知ってもらおうと思い書きました。少しでも興味のある方は覗いてみてはいかがでしょうか？

この小説のベースはゲームですが推理のファクターなどは作者が考えました。

略称はミルキイGRです

第一話 はじまり（前書き）

なかなかミルキィホームズ好きな人がいないので皆さんに知ってもらおうと思って書きました。

ただこの小説、「ラグラージの冒険」のように設定などが決まっています。（今日思いついて書いたので）

なので先が見えない小説ですが皆さんに楽しんで頂けるよう頑張りたいと思っています。

第一話 はじまり

????? 「ぎゃあああああ!?!」

部屋の窓から暖かい日差しが降り注ぐ朝。
その声は響いた。

????? 「しまった、遅刻ですうー!?!」

声の発音者はどうやら少女らしくその少女はあわててベッドから飛び降りた。

髪はピンクで長髪、顔は少々幼く背も低かった。

それはさておき、少女はクローゼットへと急ぎ着替えた。
服は制服なので学生なのだろう。

????? 「え〜っとバックは・・・あ、ありました!」

少女はバックをもつと壁に貼られたメモを見ながらぶつぶつとつぶやいた。

????? 「・・・コンロの火は止めたし、エアコンのコンセントは抜いた・・・オッケーです!」

少女は嬉しそうに言うと言いで玄関へ行き、靴をはき、ドアをしめた。そして「カチャ」とカギを閉めた。

???「戸締まりもオツケー・・・あゝ、遅刻しちゃう!!」

安心もつかの間、遅刻にせかされ少女は走り始めた。

・・・

同時刻

・・・

???「僕のポンガシ・・・ん？」

髪は茶色で短髪の一人の少女が目を覚ました。
そして時計をみるなり・・・

???「やばっ、遅刻だ。」

少女は冷静に判断しベッドから降りた。
そしてパジャマを脱ぐと元から制服を着ていたようであったという間に着替えた。

「さあ、僕の朝ご飯僕の朝ご飯」

遅刻の時間帯だが少女は気にせず、袋を開いた。「朝ご飯」と言っているあたりから想定すると食べ物が入っているのだろう。

「え」と．．．あつたあつた」

少女は上機嫌でパンを取り出し、バックを持って外にでた。そしてドアを閉めるとカギをかけた。

「さあ、行きますか！」

少女はパンの袋を開けて一口食べると走りだした。

．．．

同時刻

．．．

「あつ！？」

スヤスヤと寝息をたてていた少女は急いで跳ね起き、頭の上の時計を見た。

???「遅刻・・・しちゃう!？」

少女は静かに、しかし急いでベッドから降り、ハンガーにかけてある制服をとった。

それから着替えを済まし、玄関へ行こうとするが・・・

???「あっ?!」

バタン

こけてしまった。

???「痛い・・・うう・・・でも・・・遅刻しちゃう・・・」

少女は痛みを気にしながらも遅刻しないようにとバックをとって玄関へ急ぎカギをかけて走り始めた。

・・・

同時刻

・・・

「???」・・・今何時かしら・・・」

少女は目をこすりながら時計を見るとその時間は学校に行く時間を過ぎていた。

「???」「—————!?!?」

少女は声にならない声で飛び上がるとベットから降りた。

少女の髪は金髪で長髪、身長はぼちぼち高い。

そんな少女は椅子にかけてある制服をとって着替えた。

「???」あとは・・・」

少女は机の上にある花の髪どめ(?)を複数手に取ると髪につけた。そしてバックを手にしてドアへと向かいドアを閉めた。

「???」「えつとカギは・・・あつ中だわ。」

少女は急いで玄関のカギをとると今度こそちゃんとカギをした。

「???」さて、行きましょー!!

少女は走りだした。

これはそんな4人の少女の物語・・・

第一話 はじまり（後書き）

まずはこんな感じですよ。

本編的なのは次回からです。

第二話 自己紹介！それと・・・（前書き）

さあついに第二話更新です。

ラグ「ずいぶん時間がかかったね」

ゲームのほうにするか迷った結果・・・オリジナルもいれたゲームストーリーになりました。

ラグ「ちなみにこの前書きや後書きには僕が出たりすることもあるんで・・・」

では第二話・・・どうぞ！！

第二話 自己紹介！それと・・・

キーンコーンカーンコーン

あたり一帯にチャイムの音が響いた。

ここはホームズ探偵学園、「トイズ」という能力を持つ者が同じく「トイズ」を持つ「怪盗」を捕まえる立場「探偵」になるために通う学校。

「トイズ」を持つもので「トイズ」を使って悪事を働く者を「怪盗」、その「怪盗」を自身の「トイズ」で捕まえる者を「探偵」と呼ぶこの世界においてある意味専門学校といったイメージでいいかもしれない。

そして今のチャイムはあと5分で授業が始まるということをつたえるチャイムだ。

そんな中校門に4人の少女が走ってきた。

????「あ、皆さん。おはようございます!」

しゃべったのはピンクの髪の少女。どうやらこの4人は友達同士らしく声をかけられた3人は「おはよう」と微笑んだ。しかし金髪の長髪の少女が「はっ!？」と慌てた。

「???」「いけない、このままだと遅刻だわ!」

「???」「あ、そうでしたー!」

「???」「しかも・・・今日は小林さんの・・・授業・・・」

「???」「僕は別に歩いてもいいと・・・」

「???」「ダメ!急ぐわよ!」

遅れてもいいんじゃないかという茶色の短髪ね少女の意見を否定して金髪の少女は走り出した。それに続いて残りの2人も走り出し、短髪の少女は「はぁ」とため息をつきながら走らざるをえなくなつた。

「???」「おはようございます、教官!」

「???」「おはようございます、先生。」

「???」「はぁ、はぁ、おはよう・・・ございます、小林さん・・・。」

「???」「おはよう、小林さん。」

ここは一つの小部屋。

少女達は急いで走ったかいあってなんとか授業に間に合ったようだ。そして現地につくなりそれぞれに挨拶をした。ある青年に・・・

小林「おはよう、みんな。」

そう、この人こそがミルキイホームズの指導者にして過去に天才と言われた探偵「小林オペラ」その人だった。

小林「みんな随分と急いだね。大丈夫かい？」

小林が苦笑いしながら聞くと全員「コクッ」と頷いて大丈夫だと伝えたい。

小林「よし、それじゃあ生徒会長室に行こうか。」

小林の言葉に4人は頷きトコトコと会長室へ向かった。

生徒会長、それは学園をまとめる生徒達のトップ。特にこのホームズ探偵学園の生徒会長は成績優秀で抜け目のない生徒会長という。

????「どんな人なんでしょう？」

????「分かんないけど偉い人なのは間違いないよね。うわ、僕、そういう人苦手なんだけどなあ。」

????「噂では・・・怖い人って聞いたことが・・・」

????「もうみんな、何言ってるの？私たちは今回あいさつに来ただけなのよ？怒られるわけじゃないじゃない！」

小林「（別にそんな怖いわけじゃないと思うけど・・・）」

4人の会話を聞きながら苦笑してしまう小林。

ただ、小林自身も生徒会長に会ったことがないため「怖くない」とは一概に言えない。

なので今思ったことは小林が自分自身に言い聞かせたようなものでもあった。

そうこうしている内に生徒会長室に着いた。

小林「さて、入るよ。」

小林は扉を「トントン」とノックし「失礼します」と言って中に入った。それに続いて少女達も「失礼します」と入ってくる。すると外を見ていた会長は小林達の方を見てニコッと笑った。

会長「よくいらして下さいました。私はアンリエットです。」

小林「小林オペラです。」

アンリエット「あ、あなたが小林さんですか？随分優秀な探偵さんだとうかがっておりますよ。」

小林「あ、いえ、そんなのは昔の話です。」

アンリエット「あ、すみません。」

小林「いえ、気にしないで下さい。」

少し暗い表情になる小林にアンリエットはしまったと思い謝った。

小林「そういえばあいさつでしたね？シャーロック。」

小林に「シャーロック」と呼ばれたのはピンクの長髪の少女だった。

シャーロック「え、えと、シャ、シャーロック・・・シエリンフォード15歳です。好きな食べ物がかまぼこです。」

シャーロックはいい終わると目をギュッとしめたまま深くおじぎをした。

かなり焦っているらしくおじぎをしたままなかなか頭をあげない。

アンリエット「元気のいいあいさつありがとうございます。ところでシャーロックのトイズは一体なんですか？」
シャーロック「え・・・」

アンリエットの笑顔の質問だったがシャーロックはうつむいてしまった。

アンリエット「シャーロック?」

シャーロック「あ、あたしのトイズは念動力、サイコネシスです。といっても軽いものしか無理ですけど・・・」

アンリエット「そうですか、ありがとうございます。さて次は・・・」

???「はい、はい、はい!次は僕がするよ!」

そついうと茶髪で短髪の少女が前に出た。

???「ボクはネロ、譲崎ネロっていうんだ。ボクのトイズはダイレクトハック。電子機器に触れることでハッキングができる。その時何かしらの繋げる金属があればやりやすいから腕にはいつもこれを巻いてるんだ。」

ネロは自身の手首に巻かれた金属のへらを手に説明した。

アンリエット「分かりました、では次お願いします。」

「あつ……はい……。」

出てきたのは内気そうな少女。恥ずかしがり屋なようで今アンリエットの目の前にいり時ですから少し顔が赤い。

「……私は……エルキュール・バートンです……。トイズは……。」

アンリエット「……?どうしました?」

エルキュールが突然いきなり黙ってしまったのでアンリエットは何事かと驚いた。

ネロ「エリーのトイズは簡単に言えば「怪力」だよ。「力量」、「体重」、「硬度」が上がるんだ。あ、エリーっていうのはエルキュールのことね。」

アンリエット「なるほど……ご説明ありがとうございます、ネロ。」

ネロ「うん。」

アンリエット「では最後は……。」

「……?」あ、はい。」

最後に登場したのは金髪で長髪の少女。他の三人とあまり歳は変わらなそうだがどこか大人びていた。

???「私はコーデリア、コーデリア・グラウカと申します。私のトイズは「ハイパーセンシティブ」、五感強化です。他に何かご質問は・・・」

アンリエット「ありがとうございます、とてもわかりやすかったですよ。」

アンリエットは笑顔でいうとコーデリアも笑顔で返し、全員の名前とトイズの紹介が終わった。

アンリエット「では皆さん、わざわざ来ていただいてありがとうございます。ちなみに私はご存知の通りホームズ探偵学園の生徒会長アンリエットです。これからも宜しくお願いしますね。」

アンリエットの笑顔の言葉に4人と小林も微笑み生徒会長室をあとにした。

ネロ「あゝ緊張したね。」

コーデリア「でもなんか紹介が簡単すぎなかった?」

ネロ「いいじゃんいいじゃん、会長も笑ってたし。ねーエリー？」

エリー「あ……う……うん……」

小林「ははは……うん……？」

ネロの言葉に静かに答えるエリー、そんな3人を見て小林は苦笑いした……がある一人のメンバーの異変を感じた。

小林「(……シャーロック……?)」

そう、シャーロックがさつきから元気がないのだ。それから時間は経ちみんな各部屋に戻る時間になった。

コーデリア「それでは教官、失礼します。」

ネロ「じゃあね〜」

エリー「おつかれ……さまでした……」

シャーロック「それじゃあまた明日……」

小林「あ、シャーロック、ちょっと残ってもらっていい？」

シャーロック「あ……はい……。」

小林に残るよう言われたシャーロックを除いてメンバーは各部屋に戻った。

シャーロック「あの・・・先生・・・どうしたんですか？」

小林「シャーロック・・・」

シャーロック「はい・・・って先生!？」

シャーロックが驚くのも無理はない、小林はいきなりシャーロックの肩に手をおいたのだ。

シャーロック「先生・・・？」

小林「シャーロック・・・」

シャーロック「・・・はい」

小林「気にしているのかい？」

シャーロック「・・・なにを・・・ですか？」

シャーロックの問いに小林は「はぁ・・・」とため息をついた。

小林「君のトイズだよ。」

シャーロック「あ……なんで……」

その瞬間シャーロックはうつむいてしまい小林はまたため息を吐いた。

小林「君はいつもトイズの話になると落ち込むからね、わかるんだよ」

シャーロック「……やっぱり先生には分かつちゃうんですね」

シャーロックは苦笑いしたがやはり気分は落ち込んでいるようだ。

シャーロック「やっぱりあだし、自分のトイズに自身が持てないんです」

小林「なんで……?」

シャーロック「だって軽いものしか浮かせられないんですよ?そんなの……」

小林「違うよ」

シャーロック「え……」

突然の小林の発言にシャーロックは驚いたが小林は話を進めた。

小林「君のそのトイズは君だけが起こせる奇跡なんだ」

シャーロック「でも同じ系統のトイズなら・・・」

小林「それも違うよ」

シャーロック「えっ・・・」

小林「確かに君のような「サイコネシス」系統のトイズはある。でもこの世で「シャーロック・シェリンフォード」の「サイコネシス」を起こせるのはここにいる「シャーロック・シェリンフォード」だけなんだよ。」

シャーロック「・・・」

小林「だから君だけが起こせる奇跡なんだ。その力にもっと・・・自身を持たなくちゃ」

シャーロック「・・・」

小林「・・・ん・・・？」

小林は真剣な表情を変えず、シャーロックの目を見て話した。がシャーロックからの返事がないことに疑問を感じた。

小林「・・・シャーロック？」

小林が覗き込むと・・・

小林「シャーロック!？」

シャーロックは泣いていた。

小林「ご、ごめんシャーロック。僕なにか気に障る事を・・・」

シャーロック「違うんです」

小林「・・・なにが・・・？」

シャーロック「あたし、自分のトイズに自身がなかつたんです。トイズといってもそんな強力じゃないから・・・。でもそんな風にほめてもらったの初めてで・・・だから・・・嬉しくて・・・」

小林「・・・そうか・・・」

うれし泣きをすること約3分、シャーロックは落ち着いたようだった。

シャーロック「じゃあ先生、あたし部屋に戻りますね」

小林「ああ、また明日。」

シャーロック「はい!!」

シャーロックは元気に走っていった。

小林「元気になってよかった」

安心したのち、小林も自分の部屋に戻った。

第二話 自己紹介！それと・・・（後書き）

シャーロック「こんにちはわ、シャーロック・シェリンフォードです」

ネロ「ネロだよ」

エリー「エ、エルキユールです・・・」

コーディリア「コーディリアです」

はい、というわけでこの小説のヒロインです。

小林「僕は主人公なんだね？」

はい、先生はゲームでも主人公なんです！！

小林「先生つて・・・（汗）」

いやあ、尊敬してますから！！あ、でも・・・

（小声で）シャロには手エだすなよ。

小林「え、え〜！？なんかキャラ変わってませんか？作者さん!？」

え、気のせいですよ、気のせい。

小林「・・・（汗）」

ちなみにシャーロックはシャロっていう愛称です。

小林「次回もお楽しみに・・・してもいいんですか？」

・・・たぶん。

第三話 発生！ビル倒壊事件（前書き）

ながく待たせてしまつてすみません。

キノガツサ「何やってんだよ!？」

いやあ〜ミルキイ見てて・・・

キノガツサ「はあ〜」

あ、でもラグ冒に使えそうなのあったよ（実用するかどうかは別で）

キノガツサ「マジ!？」

うん、ラグのだけど・・・

キノガツサ「・・・はあ・・・」

ちなみにそれは「メタル」です。

キノガツサ「何それヒント?」

まあちょっとしたね。

シャロ「あの、ここあたし達の小説なんです・・・」

ああ、ごめんごめん。

シャロ「いいえ、あたしは分かってもらえばいいんですよ」

コーデリア「まあせっかく遊びにきてくれたんだし……」

エリー「みんな……仲良く……」

ネロ「同じ作者だしね」

キノガツサ「あ、そうか。作者は俺らの作者か」

いや、キノガツサ、それ当たり前だよ？

キノガツサ「なんか作者は友達みたいな感じが……」

まあそんな感じにしてるしね。

ではそろそろ「探偵オペラミルキィホームズ第三話」……

全員「どうぞー!!」

第三話 発生！ビル倒壊事件

ミルキィホームズがあいさつに行ってから数日後、小林を目を覚ました。

小林「ふああああ．．．ん、今日もいい朝だ．．．って11時！？」

現在の時刻は11時、もう朝とは言えない時間帯だ。

小林「こんな時間だからみんないないのか。昨日は書類の整理とかがあったからなあ．．．。」

そんなことをつぶやきながら小林はテレビをつけた。すると「搜索！！ヨコハマの有名人！！」という番組があった。

「今回はこのヨコハマ中華街では知らない人はいないといわれる有名な資産家「王偉」さんのところにやってきています！」

王偉「とにかく風水は大事なのだ！わしの家が繁栄したのも代々伝わる家宝のおかげなのだ！」

「王偉さん、その家宝とは一体・・・？」

王偉「鏡・・・それも純金でできた黄金鏡なのだ！！」

「それはすごそうですね？ぜひ拝見させていただきたいのですが・・・」

王偉「それはダメだ。なにせ大切なものだからな、厳重に保管してあるんじゃないよ。」

「そこをなんとか・・・」

王偉「代わりに写真がある。それを見てくれ。」

「わ〜キレイ・・・」

王偉「そうじゃろう、そうじゃろう？なにせ黄金鏡じゃからな。はははは・・・」

小林「幸運をもたらす黄金鏡・・・そんなものが・・・？・・・え！？」

王偉の黄金鏡に少し興味を持った小林だったが次の瞬間テレビで起ったことにその興味を奪われてしまった

小林「ビルが・・・倒壊している！？」

そう、テレビでは中華街のビルが倒壊、そんな映像が王偉達の後ろで起きていた。テレビのスタッフも気付いたようでアナウンサーが「こっちこっちー！」とカメラを誘導している。

小林「いったい何が・・・ん？」

その時小林の携帯が鳴った。何事かと思い小林は慌てて電話に出た。

小林「はい、もしもし・・・」

シャロ「あ、先生ー！」

かけてきたのはシャロのようだ。

小林「シャーロックじゃないか、どうしたんだい？」

シャロ「それが・・・今ヨコハマの中華街に来ているんですけどなんかあちこちでビルが倒壊していて・・・」

小林「なんだって！？今中華街にいるのか！？」

あまりのことに小林は驚き、その声にびっくりしたシャロも電話の向こうで驚いていた。

シャロ「はい、だからどうしたらいいかなって・・・」

小林「分かった、僕も今から向かうから絶対に動かないで！」

シャロ「分かりました・・・きゃ！！！！・・・」

小林「シャーロック！？シャーロック！！？？くそ！！」

突如シャロの声が遮断、残ったのはザーという機械音だけだった。

小林「急がないと！！」

小林は勢いよくドアを開けると中華街へと向かった。携帯を置いて・
・

・
・

中華街

・
・

小林「はあ、はあ、ここか・・・」

急いで中華街に小林は一番にシャロ達を探し始めた。すると

シャロ「せんせーい！」

小林「シャーロック！」

シャロが自分から現れた。

小林「よかった、しんぱ……」

シャロ「なんでですか!？」

小林「えっ!？」

シャロ「あのあと何度も電話したのになんで出てくれなかったんですか!?!心配したんですよ!！」

小林「ああ、ごめんよ。携帯を置いてきてしまって……って君の怪我は!?!」

シャロ「怪我?」

小林「そう、だって君電話で悲鳴をあげていたらどう?」

シャロ「あ……それは……その……」

シャロが少し恥ずかしそうにしますので小林は疑問を浮かべた。す

るとシャロから衝撃の真実が告げられた。

シャロ「肉まんを・・・落としちゃったんです」

小林「肉・・・まん・・・？」

シャロ「はい、みんなで今日の朝ご飯は肉まんにしようってことでここに集まったんです」

小林「みんなも！？怪我は！？」

シャロ「してません、大丈夫です」

小林「そうか・・・はあ、よかった・・・」

シャロ「心配かけちゃって・・・ごめんなさい」

小林「いいんだよ、みんなが無事ならそれで。しかし・・・これは凄いことに・・・」

シャロ「はい、さっきからあちこちで爆発があつて、それで・・・」

小林「これも怪盗の仕業かもしれないな・・・とりあえずみんなと合流しよう。案内頼めるかい？」

シャロ「はい、こつちです」

こうして小林はシャーロックとともにみんなの元へと向かった。

シャロ「みんな、先生を連れてきましたよ」

コーデリア「教官、おかれ様です」

ネロ「お疲れ」

エルキユール「お疲れ様です」

小林「ああお疲れ……ってこれは……なんだ？」

小林が足元で見つけたもの、それはトランプだった。しかし……

小林「このトランプ……穴があいている？」

そう、このトランプからはマークの部分がくりぬかれていた。

小林「（明らかにおかしい、それにくりぬかれた位置もおかしい。なんだ……）」

エリー「それ……あちこちに落ちています……」

ネロ「爆発で飛んだんじゃない？」

小林「（確かにネロの考え方も間違いじゃない、だけど……）」

「????」「あゝ!?!」

小林「ん?」

突然の声に小林は反応、その声の主の方を見た。そこにいたのは1人の女の子だった。

「????」「あんた達また……」

シャロ「わゝい、こころちゃんだー」

「????」「だからこころちゃんっていうな!?!」

シャロと話しているその子は小林は知らないがシャロ達とは知り合いのようだ。

小林「シャーロック、知り合いかい?」

シャロ「はい、さっきあったこころちゃ……」

「????」「こころちゃんっていうな!」

その少女は手に持った仮面でシャロを攻撃、シャロは一瞬で倒れた。

シャロ「うう〜・・・」

小林「君は・・・っていうか君たちは一体・・・？」

いつの間にか少女の後ろには3人が増えており、小林は戸惑ったがとりあえず説明してもらうことにした。

一番小さい（おそらく身体的にも精神的にも）子は・・・

???「いいわ、教えてあげる。私は明智小衣よ」

背の高いお姉さんのようなタイプの子は・・・

???「あたしは銭形次子ってんだ、よろしくな」

おとなしそうで礼儀正しそうな子は・・・

???「私は長谷川平乃と申します」

一見無関心そうな子は・・・

???「あたしは遠山咲くさくちゃんだからよろしく」

という名前のようだ。

小林「そ、そう・・・（ずいぶん個性的な子たちだな・・・）ころでなんで君たちはここにいるんだい？」

小衣「はあ〜！？なんでここにいますって！？そりゃ私たちが警察だからよ！！」

小林「け、警察！？」

小衣「そうよ、私たちは・・・」

次子「怪盗たちに対抗するため警察から選抜されたメンバーで構成されたチーム「G4」ってんだ」

小林「警察から・・・？」

小衣「もう、次子！G4のリーダーは私だから私が言おうと思ったのに〜！」

次子「別にどっちでもいいだろ、そんなの」

小衣「どっちでもよくな〜い！！」

小衣は次子に自分たちの自己紹介を言われたのが嫌らしく怒っていたが小林は他の点に疑問を持っていた。

小林「（警察からの選抜……つまりこういう怪盗事件に警察も黙っていているわけにはいかなかったってことか……？）」

ちなみに警察と探偵の違いは「「トイズ」を持っているかどうか」というもの。故に昔から「怪盗」には「探偵」というのがお決まりだった。

また同じような役職だがそういう違いがあるため以前から探偵と警察は仲良くはない。

小衣「とにかく、この事件は怪我人も1人もでてないんだから……」

小林「怪我人が!？」

小衣「そうよ、だから早く帰……」

???「小衣、うるさいぞ」

小衣「け、警視!」

小林の知っている人物が現れた。眼鏡をかけた身長はあまり小林と変わらないといった容姿だ。

???「久しぶりだな、小林」

小林「神津……」

小林に「神津」と呼ばれたその男は静かに小林を見た。

小衣「警視、こいつら捜査の邪魔をするんですよ！だから小衣が追
い出そうとするのにこいつらったら……」

神津「小衣……」

小衣「は、はい！」

神津「少し口を閉じていろ、お前がしゃべると話が進まん」

小衣「はい……」

神津の指示で小衣はおとなしくなった。どうやら神津には逆らえないようだ。

神津「さて……」

小林「神津」

神津「なんだ？」

小林「この建物の倒壊の事件……これは怪盗の仕業なのか？」

神津「なぜそう思う？」

神津に問われると小林は静かに答えた。

小林「理由には3つある。その1、トランプだ。これは爆発によって撒かれたんじゃないか？」

小林「2つ目、彼女ら「G4」がここにいること。彼女らはさつき自分たちを「怪盗たちに対抗するため警察から選抜されたメンバーで構成されたチーム」と言っていた。つまり怪盗がらみの事件担当・・・そんなチームがここにいるから。」

小林「3つ目、これだけ大規模な爆破にも関わらず怪我人が1人もいない、これは犯人がむやみに人を傷つけるのを嫌っているということ。怪盗によくあるパターンだ。」

小林「これらのことから僕はこの事件を「怪盗事件」ではないかと判断した。どうだ？」

神津「ふん、その通りだ」

次子「スゲー・・・」

咲「やるね」

平乃「さすが元名探偵ですね」

小衣「なによ、なによ。こんなの・・・」

神津「小衣、黙れといったはずだが？」

小衣「はい……」

神津「ふう……」

小林「では神津、この事件を怪盗事件と見なし「特時捜査権限」をつかせてもらおう、いいな？」

神津「かつてにしろ」

こうして「ミルキィホームズ」はこの事件に関わることになった。

第三話 発生！ビル倒壊事件（後書き）

ネロ「いよいよ事件だね」

シャロ「それとこころちゃん達G4も登場ですー!!」

小衣「こころちゃんっていうなー!!」

エリー「ビル・・・倒壊・・・いきなり凄いですね・・・?」

まあ基本的ゲーム通りだからね。

コーデリア「次回からは捜査ですか?」

うん、でもいつできるか・・・

コーデリア「不安ですね（汗）」

第四話 手がかり！？小林の過去とは？（前書き）

さて、なんとか投稿です。

シャロ「間に合いましたね」

そりゃシャロにお願いされたからね、頑張りました（笑）

第四話 手がかり!? 小林の過去とは?

怪盗が関係している事件の捜査をすることのできる権限「特捜捜査権」を使い、「ビル連続爆発事件」を調べることになったミルキイホームズ。今はあたりを捜索していた。

小林「みんなー、なにか手がかりになりそうなものはあったかい?」

シャロ「ないです」

エリー「はい……」

コーデリア「こっちもないですね」

小林「そうか……」

何か手掛かりがないかと探すミルキイホームズだったがなかなか見つからない。するとネロが走ってきた。

ネロ「小林」

小林「ネロ……なにかあったのかい?」

ネロ「まあね、ほら」

そういつてネロが差し出したもの、それは・・・

小林「これは・・・鏡？」

そうネロが拾ってきたのは鏡だった。

シャロ「ホコリがすごいですね」

エリー「昔のものかも・・・」

小林「うーん、確かに古いけど・・・ふっ!!」

小林は鏡に息を吹きかけた。すると鏡のホコリはとれて案外近頃の鏡が現れた。

シャロ「わ〜」

小林「これはホコリをかぶっていただけさ」

コーデリア「さすが教官!!」

小林「ありがと、でもこの鏡、緑青があるってことは銅製・・・」
銅鏡か「!でもこの形・・・どこかで・・・?」

鏡を見て素材を判断する小林。しかしその形はどこかで見たものだった。

小林「もしかして・・・」

小衣「あゝ!?!」

小林が答えが出そうな時突如小衣が現れた。

小衣「ちよつとあんた!」

小林「え、僕!?!」

小衣「そうよ、その手のもの・・・ここで見つけたものでしょ?」

小林「う、うん。そうだけど・・・」

小衣「じゃあ、かしなさい!?!」

小林「うわっ!?!」

小衣は小林から鏡を奪い取るとすぐさま神津の元にそれを運んだ。

小衣「警視、怪しいものを見つけました」

神津「よし、よくやった」

小林「あはは・・・」

コーデリア「なんて子かしら・・・」

小林「でもヒントは得たよ」

コーデリア「ヒント？」

小林「ああ、みんな「箱」を探してくれないか？」

コーデリア「箱・・・？」

突然「箱」と言われるメンバーだったがシャロがある質問をした。

シャロ「どんなのですか？」

小林「えつと金属製で大きさは・・・50cmくらいかな。厚さは
そんなには・・・」

エリー「・・・ありました」

小林「えつどいどい?」

いきなりあるといわれ焦る小林だったがコーデリアが教えてくれた。

コーデリア「教官の足元にありますよ?」

小林「えっ……わっホントだ!?!」

小林は急いでどくとそこには確かに箱があった。

ネロ「金属製で50cmくらい……厚さはあまりない……」

エリー「条件に……あいますね……」

シャロ「なんで先生はそれがあるってわかったんですか?」

小林「定礎板」って知ってるかい?」

コーデリア「建物がいつ建ったか彫るあれ……ですか?」

ネロ「よくマンションとかビルにあるよね?」

小林「そうそれ!そしてこの箱はその定礎板の後ろに収めておく箱で中に工事の記録、記念品などをいれるんだ、定礎箱っていうんだけどね」

シャロ「要はタイムカプセルですね」

小林「まあそういう解釈でもいいかな。さっきの銅鏡もおそらくはこの箱に……」

神津「なんだと!？」

小林の説明の途中ながら神津が叫んだ。

神津「……分かった、我々も急ぐ。G4集まってすぐ車に乗れ!」

神津はG4が乗っている間に小林の元へ来た。

小林「何があつたんだ?」

神津「……八王子ビルだ」

それだけを言い残して神津は車へと向かい、車を走らせた。

シャロ「なにがあつたんでしょう?」

小林「おそらく予告か何かだろう、二つ目の……」

ネロ「それじゃあ急ごうよ」

小林「ああ、みんな僕の車へ!!」

そして小林達も車に乗り八王子ビルへ向かった。

八王子ビル

シャロ「わ……」

ネロ「これは凄い……」

エリー「ヒドイ……」

コーデリア「完全に倒壊してるわね……」

4人の言うとおり完全に倒壊しておりどんなビルだったかすら分からない。

小林「でも周りに被害はないようだ。つまり犯人は爆発のスペシャリストってことだ」

ネロ「まあとりあえず現場検証といこうか」

コーディネリア「待って！ここはまだ災害直後、二次災害の恐れもあるわ！」

ネロ「じゃあどうするの？」

小林「確かにコーディネリアの言っとおり危険だ。周囲の捜査から始めよう」

少し興奮するネロを小林は落ち着かせながら話す。そしてミルクィホームズの捜査が始まった。

しばらくして・・・

シャロ「せんせーい！！」

小林「シャーロック！」

シャロが突然小林を呼ぶにで他のメンバーも何事かと集まった。

ネロ「なんかあったの？」

シャロ「うん、さっきこの管理人さんに話を聞いたんだけどやっぱり犯行予告があったみたいなんです」

小林「また電話でかい？」

シャロ「はい！声もセリフもさつきと同じでした」

小林「声？セリフ？」

シャロ「あ、あたしさつき咲さんに犯人の予告のテープを聞かせてもらったんですよ。で、それと同じ声とセリフでした」

小林「そうか……」

このシャロの言葉を聞いて小林は判断した。

小林「（つまり犯人は同一人物で爆破のスペシャリスト、おまけに人を傷つけることを嫌う……実に怪盗らしいな……。でもだとしたら怪盗の目的はなんだ？ビルを1ずつ爆破させる意味は……？）」

小衣「あ〜！？あんだ達!？」

「この声は……」と言わなくても分かるその声の主は……

シャロ「こころちゃん!!」

小衣「こころちゃんていうな!!」

神津「小衣、静かにしろ」

小衣「はい・・・」

平乃「警視！」

登場早々に黙れと命令された小衣、すると平乃が走ってきた。

神津「どうした？」

平乃「倒壊したビルの近くにこれが・・・」

神津「これは・・・」

シャロ「あー!!」

ネロ「それさつき・・・」

そう、それはさつき小林の見つけた定礎箱だった。

小林「平乃君、それをどこで？」

平乃「あ、えっとビルの東南側です」

小林「東南・・・みんな、そのあたりを調べてくれ！」

ミルキイ「はいー!!」

神津「お前たちも行け!!」

G4「はい!」

G4に行かせた後神津は小林の近くに行った。

神津「小林・・・」

小林「なんだ、神津?」

神津「何か気になることがあるんだな?」

小林「まあね」

神津「小林・・・」

小林「なんだ?」

神津「お前を爆発によってトイズを失った・・・」

小林「・・・それは・・・」

そう、小林はある事件がきっかけでトイズを失っていた。

神津「だってそうだろう?お前はあの事件で・・・「怪盗L」を追

い詰めたときの事件で・・・失っただろう？」

第四話 手がかり！？小林の過去とは？（後書き）

小林「僕の過去・・・」

ゲームに出だしはいらなかったんですがやっぱり必要かと思
いこうしました。

小林「つまり次回は僕の過去ですか？」

それと同時に4人と小林先生の出会い、そしてミルクィホームズ結
成の瞬間を書こうかと。あ、でも一話では終わらないので数話かけ
ます。

第五話 小林の過去（前書き）

さて一ヶ月ぶりの更新です。

シャロ「長すぎですよ〜」

しょうがないでしょ、ラグ冒が最終決戦だったんだから

シャロ「むう〜」

・・・ごめんなさい

シャロ「?いいですけど・・・どうしたんですか?」

怒ったシャロ・・・かわいすぎる・・・

第五話 小林の過去

そこには一人の少年と怪しい人物が燃える建物の屋根にいた。

小林「もう逃げられないぞ、怪盗L!!」

この少年・・・5年前の小林は今、各地で悪事を働く怪盗・・・通称「怪盗L」を追い詰めていた。周りは炎に囲まれているためLは逃げられない。しかし逆を言えば小林にも逃げ道はない。それだけの覚悟でLを捕まえようとしているということだ。

L「ここまで来るとは・・・見事だよ、小林君！しかし、私に負けない。決着をつけようではないか、小林君!!」

小林「望むところだ!!」

今ここで一人の怪盗と探偵が対決をしようとしたがその時、悲劇は起きた。

なんと燃えすぎて建物の屋根が崩れたのだ。

L「ぐああああ・・・!?!」

小林「うわああああ!?!」

二人は火の海に落下していった……。

それから何があったかは定かではないが小林はなんとか助かりしは・
・

それから5年、今小林はある学園へと向かっていた。

小林「本当にいくんですか、^{たち}館さん？」

館「はい、理事長様がお呼びですから……」

この返事を聞いて小林は「はあ」とため息をついた。彼は今「ホームズ探偵学園」とい探偵を育成するための学園へ向かっていた。理由は簡単、その学園の理事長に呼ばれたからだ。この館は小林の送迎を任されたらしい老人だ。

小林「でもなんで僕なんかを？」

館「はい、理事長様が是非名探偵にお会いしたいと申されますので・
・」

小林「館さん！！僕はもう探偵なんかじゃありません！トイズだっ

て失ったんだ。もう・・・探偵じゃ・・・」

小林は今の言葉に興奮してか少し落ち着かない口調で言った。
しかし館は落ち着いていた。

館「しかしあなたはトイズを失ってからも様々は難事件を解決されているではありませんか」

小林「それは・・・その・・・たまたま事件に遭遇しただけで・・・」

館「・・・さて、つきましたよ」

それから二人は会長に会うため車を降りた。

シャロ「うわ、見て見てネロ、エリーさん、コーディネアさん!」

ネロ「ん、何・・・ってまたあれ見てるの?」

シャロ「うん、お花さん」

エリー「お花・・・さん?」

コーデリア「ああ、エリーは「フォーチュンリーフ」、知らなかつたわね。海上に建てられた人工のエネルギー生産場・・・発電所みたいなものね」

コーデリアは「フォーチュンリーフ」を指さして説明した。

説明通りフォーチュンリーフは海上に建てられた人工の建物。その形が四枚の葉の中心に塔があり、花のようなのでシャロは「お花さん」と言っているのだ。

ネロ「でも僕は海の上にあんな人口の建物を作るなんて・・・反対だけどなあゝあむあむ・・・」

コーデリア「ネロ！あなたつたらまた食べながらしゃべって・・・」

ネロ「まあまあいいじゃん」

コーデリア「良くないわ！全く・・・」

エリー「コ、コーデリアさん。お、落ち着いて・・・」

コーデリア「え、ええそうね」

エリーに言われてコーデリアは怒りから我にかえる。

コーデリア「ってこんなことしている場合じゃないわ！私達理事長

に呼ばれていたのよ！早く……」

シャロ「わぁ……今日は晴れてるからよく見える……ホントに
キレ〜」

コーデリア「シャ、シャロ!?!」

エリー「も、もしかして……」

ネロ「まだ見てたんだ……」

シャロ「うん だってほら……」

手すりにぶら下がりに見えていたシャロは笑顔で後ろを見た。その瞬間
シャロの重心が手すりの外へ動いた。

シャロ「きゃあああああ!?!」

ネロ「シャ、シャロ!?!」

エリー「あ……あ……」

コーデリア「落ちたの!?!」

3人は慌てて下を見た。するとシャロは両手で手すりに捕まっていた。

シャロ「う……」

コーデリア「シャロ、待ってなさい！今引き上げるから！」

ネロ「エリーも手伝って！」

エリー「う、うん！」

――

館「さて、ここが探偵学園です」

小林「ここが……」

車から降りた小林は理事長室に行きながらあたりを見ていた。

小林「（さすがまだ新しい学園……キレイだし設備も整ってそうだな……）」

館「学園はどうですか、小林様？」

小林「あ、キレイでとてもいい学園だと思いますよ」

館「それはそれは」

小林「ところで館さん、そろそろなぜ僕が理事長に呼ばれたのかを・
」

きゃあああああ!?

館「!?!」

小林「!?!」

突然の悲鳴に二人は固まった。

小林「悲鳴!?!」

館「そのようです、やはり名探偵行くとこの事件あり……ですかな
?」

小林「そんなことを言ってる場合じゃありませんよ!?!」

小林は慌てて悲鳴のあった場所へと向かった。

・
・
・

小林「ここか!」

小林は悲鳴のあったと思われる場所に来ていた。

小林「一体どこから・・・」

「わ！落ち・・・落ちる・・・！」

小林「上か！」

小林は声のした上を見た。しかし

小林「ま・・・まぶしくてよく見えない・・・」

「もうダメエエ・・・きゃあああああ！？」

小林「危ない！」

ガシ！！

太陽の光が邪魔をしてよく見えなかった。しかし何か落ちてくる、それは分かったので落ちてきたものをつさに受け止めた。ちなみに対象が落ちてきたのは2階、故に思い衝撃が小林に伝わるはずだが・・・

小林「か、軽い！？」

軽かったので驚いた。そして小林が対象を見るとピンクの髪の女の子だった。

シャロ「あ……あれ？」

小林「あ、あの……大丈夫？」

シャロ「はあ……」

小林が声をかけるがシャロはボーっとしていた。そこで小林はもう一度声をかけた。

小林「君？」

シャロ「あ、はい！」

小林「降ろすけど……いいかな？」

シャロ「は、はい。お、お、お願いします」

シャロは動揺していたようで声が震えていた。小林は苦笑いしながらゆっくり降ろした。

シャロ「ふう〜・・・」

シャロは安心してか息を深く吐いた。

小林「えつと・・・ごめんね？」

シャロ「え、いえいえとんでもありません。あたしの方こそ・・・
すいません」

小林「この学院の子？」

シャロ「はい、シャーロック・シェリンフォード、15歳です!!」

小林「ハハ、怪我とかはない？」

シャロ「あ、はい。大丈夫です！」

シャロの元気な声を聞いて安心する小林。そんな彼の耳に誰かの声
が聞こえた。

「不審者あああああ!!」

小林「ん？」

いきなりの不審者発言に驚き声の方を振り向く小林。すると一人の少女が小林に猛スピードで迫っていた。

コーデリア「シャロから離れなさあぁい!!!!」

小林「え!?!」

対象が自分と分かった小林は慌てて違うと言おうとした。しかし間に合わず……

小林「ぐはッ!!?!?!」

小林は腰をつかまれて地面にたたきつけられた。

コーデリア「はぁ、はぁ、はぁ……」

シャロ「あの……コーデリアさん?」

いきなりのことにシャロは唖然としながら驚いていた。するとコーデリアが真剣なまなざしでシャロを見つめた。

コーデリア「シャロ、この人に何かされたの!?!」

シャロ「いえ、この人はあたしを助け・・・」

コーデリア「何かされたのね!!」

シャロ「ええええ!?!」

コーデリア「この・・・」

コーデリアは小林に近づき・・・

コーデリア「チカン!! 変態!! 犯罪者あああ!! どのだれか
答えなさい!!」

次々と合気道の技を決めた。とうの小林は気絶しているらしく返事は
ない。そんな後景を見てシャロが一言・・・

シャロ「気絶しているから無理かと・・・」

その時

ネロ「コーデリアー!! やめてやめて!!」

エリー「やめて・・・ください・・・」

ネロとエリーが登場、なんとかコーデリアを止めた。

コーデリア「何を言っているの二人とも！？この人はシャロに毒牙を……」

ネロ「全然違うって!!」

エリー「この人は……シャロを……助けて……くれたんです……」

コーデリア「そうよ！この人はシャロを助けてくれ……え？」

一瞬でコーデリアの怒った表情は焦った表情に変わった。

ネロ「コーデリアはすぐに行ったからでないだろうけど……」

エリー「シャロを……受け止めて……くれました」

コーデリア「そ……そんな……うそでしょ……？ねえ……シャロ？」

コーデリアは少し苦笑いになりながらシャロに聞いた。そしてシャロからの返事は……

シャロ「本当ですよ。助けてもらわなかったらあだし、大怪我してたかもです」

コーデリア「……ええええええ!?」

・ その瞬間コーデリアの絶叫があたりに響いたのは言うまでもない・

第五話 小林の過去（後書き）

ということまでコーさんやっちやいました

コーさん「ここぐらいオリジナルで・・・」

このシーンだからこそゲームを持ってきました（笑）

コーさん「もうー!!」 暴走してこっちにくる

あ、ちよつとストップ・・・ぎゃあああ

♪少々お待ちください♪

コーさん・・・いたい・・・っす

コーさん「作者さんが意地悪するからです!!」ところで次回は何ですか?」

（切り替え早っ!?!）次回はミルキイメンバーと小林の初対面だね

コーさん「もうあってますよ?」

いや、詳しくって意味ね。

第六話 初対面！小林と四人の少女（前書き）

さて、いよいよ小林とミルキィの四人が本格的に会います。

小林「あ、あの時ですか・・・」

はい、あの時です。

第六話 初対面！小林と四人の少女

コーディネリア「本当に、すみませんでした!!」

小林「あ、いや・・・大丈夫だから・・・」

学園のとある場所、今コーディネリアは小林にひたすら謝っていた。

コーディネリア「ホントにもうなんてお詫びしたらいいか・・・」

小林「いや、何もそこまで・・・」

コーディネリア「でも私は・・・」

シャロ「投げ飛ばしたり!」

コーディネリア「う・・・」

ネロ「関節技使ったり!」

コーディネリア「う・・・」

エリー「気絶させたりも・・・していました・・・」

コーディネリア「う・・・」

シャロ「凄いですよね、コーディネリアさんの護身術って!！」

シャロはほめていたが今のコーディネリアの胸には重く響くらしくだんだんと申し訳ないという気持ちが伝わってくる表情になる。

小林「ははは、確かに凄かったね・・・でもホント大丈夫だから」

くらった小林も苦笑い、相当な鍛練故に成せる技だろう。

それはともかく今の話からもう一度謝ろうとするコーディネリア、それに対してネロが言った。

ネロ「もういいでしょ?」

コーディネリア「何だよ!私はまだ・・・」

ネロ「だってもう良いつて言ってるでしょ?」

コーディネリア「うっ・・・」

コーディネリアがむきになって言おうとすると逆にネロに正論を言われ黙ってしまった。

ネロ「さて、シャロを助けてくれてありがとう、僕達からもお礼を言うよ」

エリー「シャロを……助けてくれて……ありがとう……」
「いました」

小林「いや、僕はたまたま……」

ネロ「ところでさ……あんた誰？」

小林「？」

いきなり雰囲気が変わったネロに少し驚く小林、そんな小林の表情など気にせずネロは続けた。

ネロ「だっておかしいでしょ？今日は学園は休日、なのにここにいる、学園の関係者？」

小林「いや、その……」

コーディリア「ちよつとネロ!？」

ネロ「だつていくらシャロを助けてくれたからって油断するわけにはいかないでしょ？だから身元を聞いてる、それだけさ」

コーディリア「……」

また正論を言われコーディリアは黙ってしまった。

ネロ「さあ、あんたはどこの誰？ついでに何してたの？」

小林「だ、だから・・・」

ネロ「言えないの？」

小林「そ、そんなことはないよ！」

迫るネロになんと説明すればいいか考える小林、それでもネロの問いは続いた。

ネロ「ねえ？」

小林「・・・(汗)」

「フオフオフオ、名探偵も若さの前にはたじたじですかな？」

小林「!？」

エリー「館・・・さん？」

シャロ「館さんです！」

突然の言葉に振り向いた小林とシャロ達、そこには小林をここまで連れてきた館がいた。

ネロ「館さん・・・この人のこと知ってるの？」

館「ええ、この方は私が連れてまいりましたから」

ネロ「なんでこの人を呼んだの？」

館「それは理事長が是非お会いしたいと申されたからです」

ネロ「理事長が？なんで？」

館「それは・・・彼がかの有名な「小林オペラ」様だからでございます」

コーディネリア「こ、小林オペラ!？」

ネロ「コーディネリア知ってるの？」

コーディネリア「あなた・・・知らないの!？」

ネロ「うん」

シャロ「あたしも知りません」

首をかしげるシャロとネロ、そんな二人を見てコーディネリアは驚くしかなかった。

エリー「「小林オペラ」さんは若くしてさまざまは難事件を解決し

てきた天才探偵・・・」

コーデリア「あの怪盗「L」を倒したのも小林さんよ」

ネロ「え、怪盗Lってあの伝説の怪盗の!？」

シャロ「す、凄いです!！」

怪盗Lはこの大探偵時代でもっとも有名な怪盗で幾多の謎をばらまいた。またLの持つトイズは強力で、警察、探偵共になかなか対処できなかった。そんな怪盗を倒したというのだから二人がビックリするのは無理なかった。

シャロ「すごい、すごい。そんな凄い探偵さんに助けてもらったなんて・・・嬉しいです!！」

小林「・・・」

館「では理事長が待っていていらっしゃるので行きましようか?」

館の言葉に全員頷き、学園へと入った。

・・・

館「もうすぐ理事長室です」

小林「あ、はい」

館に声を掛けられて答えた小林。そんな小林の後ろからあるものが・

シャロ「……」

ネロ「……」

エリー「……」

コーデリア「……」

小林「(うつ……視線が……なんだか痛い……)」

そう、後ろからは四人の少女に視線を送られていた。名探偵を目指す彼女たちにとってその憧れが目の目にいるので無理もない。

小林「(……ん?)」

視線耐えていた小林、そんな彼はある疑問点を持った。

小林「（館さん・・・ポケットに手を？）」

そう、館がポケットに手を入れていたのだ。一般的には問題なさそうに見えることだが小林の知識がそれは間違いだと訴えた。

小林「（確か執事はそういう行動はしてないはず・・・なんで・・・）」

小林が考えてたその時

ブムブムブムブム！！

小林「うわっ!?!」

シャロ「ぎゃ!?!」

突然何か警報のような音がした。

小林「な、なんだこの音は!?!まさかまた何かが・・・」

館「すみません、私の携帯です」

小林「え!?!」

小林がきよとんとした表情で館を見た。そこには自身の携帯電話を見せながら申し訳なさそうな顔だった。

シャロ「ビックリしました！」

ネロ「いつもそれなの？」

館「はい、この年になるとなにぶん耳の方も弱りまして……」

ネロ「へえ〜」

ネロと会話しながら携帯を開く館、すると今度は……

館「すみません、少々急ぎの用事なので返信させていただいてもよろしいでしょうか？」

小林「あ、はい。別にかまいませんよ」

館「では失礼……」

ピ、ピ、ピ……

あたりでは携帯のボタン音だけが静かに流れた。それを悪く思ったのか館口を開いた。

館「いやあ、この年になるとこういう機器の扱いも苦労しますなあ」

シャロ「あ、教えましょうか？」

ネロ「いやここは僕が・・・」

エリー「そういう機械なら私でも・・・」

コーデリア「ここは私が！！」

館の言葉に4人全員反応、次々に自分が教えるというが・・・

館「お言葉ありがとうございます、ですがここはなんとかなりそうですので・・・」

小林「（この四人、優しいんだなあ・・・）」

小林がそんな感想を持った時だった。
パリンツ！！

館「ん！？」

小林「なんだ今の音！？」

シャロ「ガラスの・・・割れるような音！？」

ネロ「理事長室あたりからじゃなかった！？」

エリー「うん・・・そうだった・・・」

コーディリア「みんな、いくわよ!」

コーディリアの指示でメンバーは全員移動、理事長室へと向かった。

館「小林さま、私たちも!」

小林「え、ええ・・・(なんだ、何か嫌な予感がする!)」

小林、そして館も彼女たちを追った。

第六話 初対面！小林と四人の少女（後書き）

ということでは何か起きる直前でした！

ネロ「ねえこれ何が起きたの？」

さあ？ネタばれは禁止だよ。ていうかネロって用心深いね？

ネロ「そう？油断大敵だからね、でも小林はいい人そうだよ」

まあ実際いい人だしね

第七話 初事件！？消えた理事長（前書き）

さて第七話です。

エリー「更新多い・・・ですね・・・？」

まあストックがあるんで。今は九話ぐらいまでね。

エリー「そうなんですか。テスト期間・・・ですけど大丈夫・・・ですか？」

あ、え、テスト！？な、なにそれおいしいの？

エリー「・・・（汗）」

第七話 初事件！？消えた理事長

理事長に呼ばれ探偵学園へやってきた小林。彼はひょんなことから4人の少女「シャロ」「ネロ」「エリー」「コーデリア」に出会い一緒に理事長に会いに行くことになった。しかしその行く途中で理事長室からガラスの割れる音が！？理事長に一体何があったのか？

小林「ハア、ハア、館さん、あとどれくらいですか？」

館「その角を右に曲がればすぐでございます」

ガラスの割れる音に嫌な予感がした小林。そんな彼は真実を知るべく急いで角を曲がった。そこには……

小林「な……何をやっているんだい？」

小林が見た後景、それはシャロ、ネロ、エリー、コーデリアが扉を叩いているという後景だった。

ネロ「何って……見て分かんない？ドアがあかないんだよ」

小林「あかない？」

不審に思い小林も開けようとした。しかし扉は開かない。

小林「本当だ・・・」

ネロ「だから館さんを待つてたんだ。館さんならきつとカギを・・・

」

館さん「申し訳ございません。私は部屋にカギを渡されていないのです」

ネロ「ええ！？」

申し訳なさそうにいう館。それにネロだけでなくシャロ、エリー、コーディリア、そして小林も驚いた。

シャロ「じゃあどうやってあけるんですか！？このままじゃ中で何が起きているか分かりませんよ！？」

コーディリア「いいえ、シャロ。開けられなくても中の様子は少しわかるわ」

シャロ「あ・・・トイズ・・・」

コーデリア「正解」

コーデリアはウィンクして答えると扉の隙間を見つげ耳をあてた。

小林「い、いくらなんでも耳をあてただけじゃ・・・」

シャロ「静かにしてください!」

小林がじゃべろうとするとシャロが小林の口に手で抑えて妨害した。

シャロ「コーデリアさんのトイズは「ハイパーセンシティブ五感強化」っていうトイズなんです」

小林「五感強化・・・そうか、それで中を?」

シャロ「調べる事ができるんです」

小林の理解に笑顔を見せるシャロ。するとコーデリアが扉から離れた。

ネロ「どうだった?」

コーデリア「おそらく中に人はいないわ。風が少し冷たいから・・・多分窓は開いてる。あるいは」

シャロ「割れてる……ってことですね」

コーデリア「ええ、でも詳しいことはやっぱり中に入らないと……」

ネロ「ってことは、エリーの出番だね」

エリー「え？」

コーデリア「エリー、お願いね」

エリー「ええ！？」

シャロ「エリーさん、頑張ってください！」

エリー「ええー！？」

任せる三人に任される一人、そんな後景を見た小林は

小林「み、みんな！一体なんで彼女だけに……」

エリー「後ろ……」

小林「え……？」

エリー「後ろを……向いてて……」

小林「な、なんで・・・」

エリー「は、恥ずかしいから・・・」

小林「は、恥ず・・・」

ネロ「ほら、いいから後ろ後ろ」

小林「うわっ」

小林はネロに強制的に後ろを向かされた。

小林「ネロ・・・だっけ？彼女はこれから一体何を・・・？」

バキッ！

小林「!？」

小林は自分の後ろで何か壊れる音がしたのでとっさに後ろを見た。そこには先ほどまでドアの一部だったはずの木製の板がエリーの手に握られていた。

小林「え・・・え？」

どういふことかわからず困惑する小林。そんな小林にネロは教えた。

ネロ「エリーのトイズは「怪力」トライアセンド下っていうんだ。力量、重量増加、硬化だから正確にはトライアセンドっていうほうが正しいと思うけど」

小林「そうか、それでドアを・・・」

小林は感心してエリーを見た。対するエリーは恥ずかしそうに顔を伏せた。

コーデリア「それじゃあみんな、行きましょう!」

コーデリア「すごい・・・」

ネロ「ずいぶんと荒らされてるね・・・」

シャロ「窓も割れてます・・・」

エリー「やっぱり・・・事件・・・?」

館「・・・どうですかな、小林様?」

館も焦っているようで事件かどうかを小林に問う。すると小林の口

から

小林「これは・・・警察を呼んだ方がいいですね・・・」

舘さん「・・・分かりました。では・・・」

舘は自身の携帯を取り出し電話しようとした。しかし

舘「ああ・・・」

小林「どうしました!？」

舘「携帯の電池が切れてしまいました。外の公衆電話でかけてまいります」

ネロ「あ、それなら僕の電話が・・・」

ネロが自身の携帯を貸そうと呼びとめるが舘は行ってしまった。

ネロ「あ・・・」

コーデリア「仕方ないわ、ずいぶん焦っていたみたいだし」

エリー「これから・・・どうしましょう・・・」

シャロ「それはもちろん・・・」

どうしようかと問うエリーにシャロは即答で答えた。

シャロ「調査しましょう!」

エリー「調・・・査・・・?」

シャロ「はい、あたしたちは見習いでも探偵なんですから!」

ネロ「いいね、おもしろそう」

コーデリア「でもいいのかしら、勝手に・・・」

シャロ「小林さんの目の前でやれば大丈夫ですよ」

小林「え、僕!?!」

いきなり話に名前を出されて驚く小林、しかし彼女たちの意見は決まっていた。

エリー「確かにこのまま何もしないのは・・・ちょっと・・・」

コーデリア「小林さん、いいですか?」

小林「う・・・」

すっかり盛り上がっているメンバーを見て小林が出せる答えは1つ。

小林「・・・いいよ」

4人「やったあ!!」

「YES」だけだった・・・

調査開始から2、3分、小林はあることに気がついた。

小林「ん？彼女たちに単独で調査させず僕が絡んでいる・・・ということは僕もこの事件を解決しようとしているってことじゃないか！？」

そう考えた小林の顔がみるみる青ざめた。

小林「だめだめだ。そんな、僕は探偵じゃないのにおかしいじゃないか、もうトイズは・・・」

館「小林様!!」

小林「うわっ」

幽霊のごとくさっそうと現れた館。その表情はいまにも泣きそうだった。

小林「館さん・・・もう電話は終わっただんですか・・・？」

館「はい・・・小林様!!」

小林「うわ!？」

話を変えても迫ってくる館、そんな館に小林は少しびびった。

館「小林様!!」

小林「な、何でしょう・・・？」

このとき小林には大方結果は見えていた。館の言いたいこと、それが自然と分かるのだ。その言いたいこととは・・・

館「どうか、理事長を!!」

小林「はあ、やっぱり・・・」

小林はため息をついた。いつも事件が起きると周りの人に頼られる。別にそのことに関してはおかまわなかったが、しかしそれは自分が「探偵」だったころの話。 Toysをなくしてしまった今では出来れば触れたくないことだった。

小林「あの・・・館さん？僕はもうたんでいじゃ・・・」

館「ではかつての名探偵のお力を！！」

小林「う・・・」

館の表情から断るのは無理だと判断した小林は

小林「・・・わかりました」

こうして小林も調査に加わることになった。

第七話 初事件！？消えた理事長（後書き）

さていよいよ事件（？）です。

コーディネリア「理事長はどこに!？」

それはネタばれになるんで控えさせていただくよ

コーディネリア「・・・で次回は何かあるんですか？」

次回からは調査なんだけど・・・

コーディネリア「なにかあるんですか？」

皆さんにも探偵になっていただこうかと

コーディネリア「・・・作者さん、テストに迫られておかしくなりました？」

いやこれは真面目だよ（汗）まあ詳しくは次回ね。

第八話 初調査！気になる手掛かりは？ シャロ&ネロ編（前書き）

さて調査開始です。

コーデリア「でもシャロ&ネロ編ってどういうことですか!？」

いやあ、四人一緒に書いたら結構長くなっただんで分けました。

コーデリア「なるほど。あと今回からいよいよ新しいシステムですね」

うん、皆さんには探偵になってもらいます。一時的ですが面白いかもしれませんね。

第八話 初調査！気になる手掛かりは？ シャロ&ネロ編

理事長失踪、その謎を解くために4人の少女と調査することになった小林。とりあえず彼はそれぞれがどんな点を怪しいと思うのかを知るため1人ずつ回ることにした。最初は・・・

小林「シャーロック・・・さん？」

シャロ「小林さん！」

「割れた窓」を調べていたシャロの元へと向かった。

シャロ「あ、あたしのこと呼び捨てでいいですよ」

小林「そう？じゃあシャーロック、君はここが怪しいと思うのかい？」

（作者から）

どうも、小説の途中すいません。この小説を書いているコアラです。さて、今回は読者の皆さんにも推理をして頂きたいと思います。今小林先生やシャロの目の前にはある後景があります。その中で怪

しいと思った「矛盾点」があるかもしれない……というかあります。なのでそれが何なのかを当ててください。

もちろんハズレたから話が終了なんてことはないですが各自で楽しんでいただければ幸いです。

またここで見つかった怪しい点は事件解決の際に使用されます。ファクター

その怪しいことがどうして怪しいか理由も考えておくところある程度ファクターが集まったときに誰が犯人か分かるかも知れません。

もちろんそんなこと考えず小説を読んでいただいても結構です。お好みでお願いします

ちなみに今回の怪しい点の答えはすぐ下のシャロのセリフにあるのでご注意ください

見つけた点

- ・割れたガラス
- ・花柄のカーテン
- ・木製の振り子時計

このようにいくつかの点をあげるのですがファクターが見つけてください。

では再開します。

シャロ「はい、どうもこのガラスの割れ方が……」

シャロが割れたガラスを見たので小林もそれを見た。ガラスは見事に粉々に割れていた。しかし小林はこのガラスにそれよりも強い違和感を感じた。

小林「確かにおかしいね・・・カーテンは普通だし、時計も窓の上にかけてあるだけ・・・怪しいのはガラスだ・・・」

シャロ「ですよ、でもそれが何が・・・」

小林「向き・・・」

シャロ「え？」

シャロは当然なんだろうという驚きの表情で小林をみた。

小林「ガラスの・・・飛び散った方向だよ」

シャロ「・・・あつ、ベランダ側に散らばってる・・・」

小林「ということとは？」

シャロ「なるほど！これは！」

小林「そう、これは重要なファクターだ！！」

シャロ「でも……」

小林「ん？ほかにも何か？」

自分の疑問が解けたのにまだ悩んでいるような表情を見せるシャロ。そんな彼女を見て小林は再度たずねた。

シャロ「理事長が……心配です」

小林「あ……」

そう、いくら今の謎が解けたって理事長の安全の確保にはつながらない。シャロはそう判断したらしく

シャロ「やっぱり何人かで探しにいったほうがよくないですか？」

小林「うーん、確かに君が心配するのも分かるよ。でもそうすることで視野を狭めてしまう。真相を見つけたいなら色々な方向からの見方も必要だよ」

シャロ「あ……」

小林「だから今はみんなで捜査すべきだと……ん？」

シャロ「同じ……」

小林「えっ？」

突然黙り込み啞然としたような表情のシャロを見て責めてしまったかと驚く小林。しかしシャロの口からはそんな小林の心理を打ち破る言葉が放たれた。

シャロ「真実は偏った見方からは見えてこない。真実は多角的に見てこそ見つかるものだ、授業で同じことを習いました！」

小林「あ、そ、そうなんだ・・・」

急にテンションの上がるシャロに戸惑う小林。

小林「まさかハイテンションとは・・・まあ落ち込んでいるよりは全然いいけど・・・」

小林がそんなことを考えているとシャロは小林の手をガシツ掴み・

シャロ「ありがとうございます！大事なことなのに・・・忘れてました！でも小林さんのおかげで思い出せました！」

小林「そ、そうっ？」

シャロ「はい！！本当にありがとうございます！！もっと色々な場所を捜査してみますね！！！！」

小林「あ、うん……」

シャロ「失礼しますっ！！！！」

そういうとシャロは急いで他の場所に向かった。
そんな彼女を見て小林は

小林「……元気な子だな……」

優しく微笑んでいた。しかし今が捜査中と思い出して

小林「いけないいけない、次は……あそこにもいくか」

小林はいすやソファアの倒れている場所へと向かった。

小林「やあ」

ネロ「あ……」

小林「えっと……」

ネロ「ネロでいいよ、みんなそう呼ぶから」

小林「そう、じゃあネロ、君はここの辺が怪しいと思っただね？」

ネロ「うん、なんかにおうんだよね、ここ」

見つけた点

- ・ 転がった大きなソファア
- ・ 締め切つてあるカーテン
- ・ 転がった小さいす

小林「確かにこの大きいす、怪しいね」

ネロ「だよね、こんな大きなソファアはちょっと争いが起きたくらいじゃ倒れない」

小林「カーテンが閉めてあるのは割りと普通だし、小さいいすならここで争いが起きた場合転がる可能性は高いからね。それに音の関係もある」

ネロ「音？」

小林「だってネロ、この部屋はいつたい何で出来ている？」

ネロ「ここは……というかこの校舎は木製……あ！？」

小林「この矛盾……分かったかい？」

何かに気づいたネロに小林は優しく聞いた。

ネロ「そうか、仮に争いで倒れたんだったら音が……」

小林「そう、つまりこれは重要なファクターってことさ……って、え？」

ネロ「すごいね〜あむあむ……」

小林「あ……」

謎が解けたと同時にネロはどこからかキャンディーを出して食べ始めた。

小林「キャンディー・・・糖分補給かい？」

ネロ「へえ、あんた分かってるじゃん」

小林「捜査には頭を使う。頭を使えば糖分が足りなくなってる・・・」

ネロ「はい！！」

小林「うぐっ！？」

小林は説明の途中ながらキャンディーを口に突っ込まれた。

ネロ「あなたにもあげるよ、糖分補給してその「重要なファクター」
ってやつ探してね！」

小林「あ、ありあと・・・」

ネロ「じゃあね」

そのままネロは別の場所へと向かった。

小林「・・・（この子もまた、元気がいいな）さて次は・・・」

そっぴいなながら小林は近かった本が散らばっているところへと向かった。

第八話 初調査！気になる手掛かりは？ シャロ&ネロ編（後書き）

ということでした。

シャロ「皆さん、できましたか？」

ネロ「読者に探偵になってもらう・・・よく考えたよね」

だってよんでるだけじゃ飽きちゃうかもしれないじゃん？まあある意味ゲームをそのまま取り入れてはいるけど。

シャロ「皆さんが楽しんでくれるといいですね」

ネロ「ちなみに感想にネタばれはダメだよ？」

第九話 初調査！気になる手掛かりは？ エリー＆コーデリア編（前書き）

次はエリーとコーさんです。

エリー「謎……ですか？」

うん、もちろんDESもあるよ

コーデリア「DESが何なのかはこの小説の最初のもくじを見て下さいね」

では第九話です！

第九話 初調査！気になる手掛かりは？ エリー&コーテリア編

小林「えつと・・・エルキュールさん・・・だよね？」

エリー「え？」

本の散らばった場所ではエルキュールことエリーが捜査をしていた。

エリー「エルキュールでいいです・・・呼び方・・・」

小林「そう？じゃあエルキュール、君はここが怪しいと思ったんだね？」

見つけた点

- ・きれいに閉じて散らばった本
- ・傷ひとつない本棚の窓
- ・散らばった色んな絵の描かれたしおり

エリー「はい、違和感はあるんですけど、それが何かが・・・」

小林「・・・」

エリー「でも、本たち・・・かわいそう・・・」

小林「え？」

エリー「あ・・・」

突然の発言に驚く小林、そんな小林を見てエリーも申し訳なく思ったのかハツとしながら

エリー「すいません。私本が好きで・・・だからこんな風に乱暴に扱われて、それで・・・」

小林「・・・あ!？」

エリー「!？・・・どう・・・しました・・・?」

エリーは小林がいきなり大声を出すのでびっくりしてしまいながらの質問をした。

小林「エルキユール」

エリー「は、はい？」

小林「大丈夫、本は乱暴に扱われていないよ。」

エリー「……なぜ……ですか……？」

エリーは意味が分からず首をかしげた。すると小林は説明を始めた。

小林「もし君の言ったとおり乱暴に扱われていたら……本はこんな状況になるかな？」

エリー「こんな……状況……？」

小林「そう、この本たちは今……どんな状態だい？」

エリー「え、散らばってあとは……あ！？」

小林「そう、これは重要なファクターなんだよ」

エリー「すごい……」

小林「すごいも何も君のおかげさ。君が本たちを気にしていたから

気づけた。君の優しさがあつたからこそさ」

エリー「いえ……そんな……。あ、あとすいません。私……
こんなじゃべり方で……」

小林「え？」

エリー「私……話すの苦手で……」

小林「……エルキユール？」

エリー「はい？」

小林「僕の手、見て見てなにか気づかないかい？」

そういうと小林は手を見せた。エリーの気づきはそれを見てすぐにあつた。

エリー「汗……？」

小林「うん、実は僕も初対面の人と話すの苦手でさ、さっきから心臓がバクバクなんだ」

エリー「ふふふっ」

小林は少し照れながら言った。それにエリーが優しく微笑んだ。

エリー「小林さんでも緊張・・・なさるんですね」

小林「まあね」

エリー「私、捜査に戻りますね」

小林「ああ」

そういつてエリーは捜査に戻った。

小林「よかった、笑ってくれて。それじゃああとはあそこか・・・」

そういつと小林は入ってきたドアに向かった。

小林「えつと・・・コーディネリアさん・・・だったよね?」

コーディネリア「あ、小林さん。というかコーディネリアでいいですよ」

小林「そう?とところで君はここが怪しいと思うのかい?」

コーディネリア「はい」

見つけた点

- ・ 白い携帯電話
- ・ 新しい花瓶
- ・ 閉じた本

コーディネリア「特にこの携帯なんか・・・怪しいと思います」

小林「ああ確かに怪しいな。なんでここに？」

コーディネリア「ドアの前・・・っていうのが気になりますね」

小林「うん・・・館さん！」

小林は何を思ったのかとっさに館を呼んだ。館は何事かと急いで姿を現した。

舘「なんででしょうか？」

小林「この携帯・・・理事長のものですよね？」

舘「はい」

小林「中を見させていただいてもよろしいですか？」

舘「はい、緊急事態ですからよろしいかと」

小林「ありがとうございます」

小林は確認するとすぐに携帯を開いた。そして操作しようとしたその時・・・

小林「あれ？」

コーディリア「どうしたんですか？」

小林「動かない・・・これは・・・ロック？」

コーディリア「ロックですか？」

小林「ああ、操作ロックがかけている。でも・・・画面には着信のメッセージ・・・あ!？」

コーディリア「なにか分かったんですか!？」

小林「コーデリア、君は携帯を持っていた場合ロックなんてかけるかい？」

コーデリア「かけませんね」

小林「なんでだい？」

コーデリア「なんでって電話が来たときにすぐに出られないから・・・あ!？」

小林「そう、これは重要なファクターだ!」

コーデリア「よかったです、謎が解けて・・・」

小林の話が終わると共にコーデリアはあたりをキョロキョロと見渡した。そして何かを確認すると「ふう」と一安心したように息をした。

小林「どうか・・・した？」

疑問に思った小林がコーデリアに聞いた。するとコーデリアは

コーデリア「あ、いえ、みんなちゃんと無事だなあ・・・って・・・」

「

小林「みんなって・・・あの3人かい？」

コーディリア「はい、もし侵入者ならあの子達にも危険がありますから・・・」

コーディリアの話聞いて小林は優しく微笑んだ

小林「コーディリア、君は・・・優しいね」

コーディリア「え？」

小林「君だって同じ状況なのにみんなの事を一番に心配してる・・・これなら安心だ。それに・・・君の護身術は・・・すごいから」

護身術の部分だけ苦笑いでいう小林。そんな小林を見てコーディリアは赤くなり

コーディリア「本当にすいませんでした！」

小林「あ・・・」

「しまった、またこのループにハマった」と思った小林は

小林「そ、それじゃあ他の場所も見てくるよ」

とらいつつ脱出した。

第九話 初調査！気になる手掛かりは？ エリー＆コーデリア編（後書き）

ということのでファクターはだいぶ集まりました。

小林「彼女たちの性格もだいぶ分かってきましたね」

はい、これでファクター探しは終わりかな

小林「次回はついに犯人ですか!？」

いや、その前にすとむみずみさんの要望に応えようかと。

小林「どういうことですか・・・?」

まあ色々あるんですよ、先生、次回ニヤけないようにして下さいよ

小林「?????」

第十話 それぞれの優しさ シャロVer（前書き）

これはシャロVerです！

シャロ「あたしが主役ですか？」

主役っていうより君たち四人はヒロインだからね？

シャロ「？」

第十話 それぞれの優しさ シャロVer

小林「ふう〜・・・」

小林は静かに息を吐いた。今はちょうど部屋のパソコンの周囲を見終わったところだ。

小林「ここもなし・・・やっぱり怪しいファクターは・・・」

「あの四人の見つけたファクター」だ、小林はそう思った。実は四人が調べた場所は小林も怪しいと思っていた場所だった。これは彼女たちの探偵としての能力の高さを物語っていた。

小林「(でもそのファクターを組み合わせると・・・)」

シャロ「小林さん!」

小林「うわっ!?!」

小林は突然の声に驚き急いで後ろを振り向いた。そこにはシャロ・・・シャロロックがいた。

小林「あ、シャーロックか。びっくりしたよ」

シャロ「あ、あたし……ごめんなさい」

小林「いや大丈夫だよ。ところで……どうしたんだい？」

小林はシャロに大丈夫と伝えるとシャロの表情が変わった。少し照れたような感じだ。

シャロ「あ……これどうぞ」

小林「これは……コーヒー？」

そう、シャロが小林に渡したものの、それは缶コーヒーだった。

シャロ「はい」

小林「なんで……」

シャロ「あたしたちが調査できているのは小林さんが見てくれるからです。それにアドバイスもくれました。だからそのお礼です」

小林「シャーロック……」

シャロ「あたしこういう現場って初めてだから分からないことばかりで……でも一緒に調査してくれている小林さんを見てあたし

ももつと頑張ろうって思えたんです」

素直に、恥ずかしそうにいうシャロに小林は戸惑った。このシャロの発言は小林の「ある秘密」を知らない故に発せられたもの。そう、小林を「探偵」として見た場合の発言だ。しかし小林は・・・

小林「シャーロック、僕はもう探偵じゃ・・・」

シャロ「知ってます」

小林「!?!」

表情の変わったシャロの発言に小林は驚いた。小林はまだ自身のことを打ち明けていない。つまりは探偵じゃないことも知らないはずだからだ。

シャロ「トイズが・・・なくなっただんですよね・・・」

さらに静かに、表情が暗くなりながらシャロは言った。

小林「(なんで・・・なんで知っているんだ!?!この子は僕のことをさっきまで全く知らなかったはずなのに・・・)なんで・・・それを・・・?」

シャロ「館さんに聞きました」

小林「館さんか・・・」

シャロ「怪盗Lとの戦いでトイズを失ったって・・・」「アダム涙の戦いで・・・」

小林「・・・そうさ、僕はあの戦いでトイズを失った。あの5年前の戦いで・・・」

小林の頭に炎の中にいる自分とLの姿が思い出された。メラメラと燃える中、決着をつけようとしたあの時、しかし小林は「ふう」とため息をついた。

小林「だから・・・ないんだよ、トイズは。つまり僕は探偵では・・・」

シャロ「でも！」

顔を伏せる小林にシャロは大きな声で言った。

シャロ「小林さんはあたしたちに色んな事をアドバイスしてくれました！それも優しく、分かりやすく・・・。あたし人として凄いと思います！」

小林「!？」

シャロ「だから探偵とかじゃなくて一人の人として自信を持って下
さい！」

小林「シャーロック・・・ああ、ありがとう」

シャロ「いえ、元気になられてよかったです」

シャロが笑顔で言ったその時

ガシャン！！

シャロ「！？」

小林「！？」

何かが割れた音がした。

シャロ「廊下からです！」

小林「行ってみよう！」

こうして小林は廊下へと向かった。

第十話 それぞれの優しさ シャロVer（後書き）

シャロ「な、なんですか!？」

廊下で何が!?!?っていうのは結構定番だよな。

シャロ「あ……」

第十話 それぞれの優しさ ネロVer（前書き）

これはネロVerです。

ネロ「シャロのとは違うの？」

いや、ストーリーも変わらないよ。

第十話 それぞれの優しさ ネロVer

小林「ふう〜・・・」

小林は静かに息を吐いた。今はちょうど部屋のパソコンの周囲を見終わったところだ。

小林「ここもなし・・・やっぱり怪しいファクターは・・・」

「あの四人の見つけたファクター」だ、小林はそう思った。実は四人が調べた場所は小林も怪しいと思っていた場所だった。これは彼女たちの探偵としての能力の高さを物語っていた。

小林「(でもそのファクターを組み合わせると・・・)」

ネロ「こゝば〜や〜し!」

小林「うわっ、ネロ!？」

小林は突然の声に驚き急いで後ろを振り向いた。そこにはネロがいた。

小林「あ、ネロか。びっくりしたよ」

ネロ「ビツクリした？」

小林「ああ、君は忍び寄る才能があるんじゃないか？」

ネロ「あつても困るの才能じゃん」

ネロは苦笑いで小林に言葉を返した。

小林「ところで・・・どうしたんだい？」

小林がネロに問うと表情が変わった。あめをくれた時の表情だ。

ネロ「はい、これ」

小林「これは・・・コーヒー？」

そう、ネロが小林に渡したものは缶コーヒーだった。

ネロ「うん」

小林「なんで・・・」

ネロ「だって小林が見てくれているから僕たち調査できてるじゃん。」

それにアドバイスもくれたし。そのお礼だよ」

小林「ネロ・・・」

ネロ「僕、最初はあんたを本当に怪しいと思ってたんだけどアドバイスからしてそんなことないみたいだし・・・本当にすごいね」

素直にいうネロに小林は戸惑った。このネロの発言は小林の「ある秘密」を知らない故に発せられたもの。そう、小林を「探偵」として見た場合の発言だ。しかし小林は・・・

小林「ネロ、僕はもう探偵じゃ・・・」

ネロ「知ってるよ」

小林「!？」

表情の変わったネロの発言に小林は驚いた。小林はまだ自身のことを打ち明けていない。つまりは探偵じゃないことも知らないはずだからだ。

ネロ「トイズが・・・なくなっただよね・・・」

さらに静かに、表情が暗くなりながらネロは言った。

小林「（なんで・・・なんで知っているんだ！？この子は僕のことをさっきまで全く知らなかったはずなのに・・・）なんで・・・それを・・・？」

ネロ「館さんに聞いたんだ」

小林「館さんか・・・」

ネロ「怪盗Lとの戦いでトイズを失ったって・・・「アダムの涙」って宝石を守るために・・・」

小林「・・・そうさ、僕はあの戦いでトイズを失った。あの5年前の戦いで・・・」

小林の頭に炎の中にいる自分とLの姿が思い出された。メラメラと燃える中、決着をつけようとしたあの時、しかし小林は「ふう」とため息をついた。

小林「だから・・・ないんだよ、トイズは。つまり僕は探偵では・・・」

ネロ「でもさ！」

顔を伏せる小林にネロは大きな声で言った。

ネロ「小林のアドバイスは的確だった！僕は探偵とかじゃなくてはひとりの人として小林を凄いと思うよ！」

小林「!？」

ネロ「だからさ、探偵とかじゃなくて一人の人間として自信持ちなよ」

小林「ネロ・・・ああ、ありがとう」

ネロ「えへへ、僕は正直な感想を言ったただだよ」

ネロが照れながら言ったその時

ガシャン！！

ネロ「!？」

小林「!？」

何かが割れた音がした。

ネロ「廊下からだ！」

小林「行ってみよう！」

こうして小林は廊下へと向かった。

第十話 それぞれの優しさ ネロVer（後書き）

ネロ「さて、いよいよ事件？」

かもね、ゲームやった人には分かってしまうけど・・・

ネロ「とりあえずは廊下だね」

うん

第十話 それぞれの優しさ エリーver（前書き）

これはエリーverです。

エリー「私・・・目立つんですか・・・？」

うん、目立つかも

エリー「・・・恥ずかしい・・・」

大丈夫だよ（汗）

第十話 それぞれの優しさ エリーver

小林「ふう〜・・・」

小林は静かに息を吐いた。今はちょうど部屋のパソコンの周囲を見終わったところだ。

小林「ここもなし・・・やっぱり怪しいファクターは・・・」

「あの四人の見つけたファクター」だ、小林はそう思った。実は四人が調べた場所は小林も怪しいと思っていた場所だった。これは彼女たちの探偵としての能力の高さを物語っていた。

小林「（でもそのファクターを組み合わせると・・・）」

エリー「小林・・・さん・・・」

小林「うわっ!?!」

小林は突然の声に驚き急いで後ろを振り向いた。そこにはエリーがいた。

小林「あ、エルキユールか。びっくりしたよ」

エリー「すいません・・・」

小林「あ、気にしないで！大丈夫だから！」

今にも泣きそうな表情のエリーを見て小林は慌てて大丈夫と伝えた。すると安心したのかエリーの表情もいつもどおりになった。

小林「ところで・・・どうしたんだい？」

小林がエリーに問うと表情が変わった。いつも以上に恥ずかしそうな表情だ。

エリー「これを・・・」

小林「これは・・・コーヒー？」

そう、エリーが小林に渡したものの、それは缶コーヒーだった。

エリー「はい・・・」

小林「なんで・・・」

エリー「今回の捜査は小林さんがいてくださったからこそできたものです……。そのお礼です……」

小林「エルキュール……」

エリー「私、今まで本で推理ものを読んでいたんですけど……小林さんのアドバイスはその……推理みたいで……さすがですね……」

素直にいうエリーに小林は戸惑った。このエリーの発言は小林の「ある秘密」を知らない故に発せられたもの。そう、小林を「探偵」として見た場合の発言だ。しかし小林は……

小林「エルキュール、僕はもう探偵じゃ……」

ネロ「知って……います……」

小林「!？」

表情が変わったエリーの発言に小林は驚いた。小林はまだ自身のことを打ち明けていない。つまりは探偵じゃないことも知らないはずだからだ。

エリー「トイズが……なくなっただんですよね……」

さらに静かに、表情が暗くなりながらエリーは言った。

小林「（なんで・・・なんで知っているんだ！？）なんで・・・それを・・・？」

エリー「館さんに・・・聞きました・・・」

小林「館さんか・・・」

エリー「怪盗Lとの戦いでトイズを失ったって・・・「アダムの涙」って宝石を守るために・・・」

小林「・・・そうさ、僕はあの戦いでトイズを失った。あの5年前の戦いで・・・」

小林の頭に炎の中にいる自分とLの姿が思い出された。メラメラと燃える中、決着をつけようとしたあの時、しかし小林は「ふう」とため息をついた。

小林「だから・・・ないんだよ、トイズは。つまり僕は探偵では・・・」

エリー「でも！」

顔を伏せる小林にエリーは珍しく大きな声で言った。

エリー「小林さんのアドバイスは的確でした！私は探偵ではなくひとりの人として小林さんを尊敬しています」

小林「!？」

エリー「だから……探偵ではなく……一人の人間として……自信を持って下さい……」

小林「エルキュール……ああ、ありがとう」

エリー「いえ、小林さんが笑ってくださって……嬉しいです……」

エリーが照れながら言ったその時

ガシャン!!

エリー「!？」

小林「!？」

何かが割れた音がした。

エリー「廊下から……です……」

小林「行ってみよう！」

こうして小林は廊下へと向かった。

第十話 それぞれの優しさ エリーVer（後書き）

エリー「事件……ですか……？」

まあね。だってミルクィはただの探偵じゃないでしょ？

エリー「はい……」

「トイズ」があるしね。

第十話 それぞれの優しさ コーデリアVer (前書き)

これはコーさんVerです。

コーデリア「何があるんですか？」

それは秘密だよ。他の3人とストーリーは変わらないけどね。

第十話 それぞれの優しさ コーデリアVer

小林「ふう〜・・・」

小林は静かに息を吐いた。今はちょうど部屋のパソコンの周囲を見終わったところだ。

小林「ここもなし・・・やっぱり怪しいファクターは・・・」

「あの四人の見つけたファクター」だ、小林はそう思った。実は四人が調べた場所は小林も怪しいと思っていた場所だった。これは彼女たちの探偵としての能力の高さを物語っていた。

小林「（でもそのファクターを組み合わせると・・・）」

コーデリア「小林さん!!」

小林「うわっ!?!」

小林は突然の声に驚き急いで後ろを振り向いた。そこにはコーデリアがいた。

小林「あ、コーディネリアか。びっくりしたよ」

コーディネリア「あ、私ったら・・・すみません・・・」

小林「あ、気にしないで！大丈夫だから！」

落ち込むコーディネリアに対して慌てて大丈夫だと伝える小林。するとなんとなくだが少し表情が明るくなった気がした。

小林「ところで・・・どうしたんだい？」

小林がコーディネリアに問うと表情が変わった。少し照れたような表情だ。

コーディネリア「これ・・・」

小林「これは・・・コーヒー？」

そう、コーディネリアが小林に渡したものの、それは缶コーヒーだった。

エリー「はい」

小林「なんで・・・」

エリー「今回の捜査は小林さんがいてくださったからこそできました。なのでそのお礼です」

小林「コーディネリア・・・」

エリー「私たちってこういうのは初めてで・・・でも小林さんのおかげで捜査することができてます。なんていうか・・・やっぱりあなたのような人がいて下さると落ち着きます」

尊敬のまなざしでいうコーディネリアに小林は戸惑った。このコーディネリアの発言は小林の「ある秘密」を知らない故に発せられたもの。そう、小林を「探偵」として見た場合の発言だと思ったからだ。しかし小林は・・・

小林「コーディネリア、僕はもう探偵じゃ・・・」

ネロ「知ってます・・・」

小林「!?!」

表情の変わったコーディネリアの発言に小林は驚いた。小林はまだ自身のことを打ち明けていない。つまりは探偵じゃないことも知らないはずだからだ。

コーディネリア「トイズが・・・なくなってしまうたんですね・・・」

さらに静かに、表情が暗くなりながらコーデリアは言った。

小林「（なんで・・・なんで知っているんだ！？）なんで・・・それを・・・？」

コーデリア「館さんに・・・聞きました・・・」

小林「館さんか・・・」

コーデリア「そうじゃなくても聞いたことはあつたんです。怪盗としての戦いでトイズを失ったって・・・「アダムの涙」って宝石を守るために・・・」

小林「・・・そうさ、僕はあの戦いでトイズを失った。あの5年前の戦いで・・・」

小林の頭に炎の中にいる自分としての姿が思い出された。メラメラと燃える中、決着をつけようとしたあの時、しかし小林は「ふう」とため息をついた。

小林「だから・・・ないんだよ、トイズは。つまり僕は探偵では・・・」

コーデリア「でも！」

顔を伏せる小林にコーデリアは大きな声で言った。

コーデリア「小林さんのアドバイスは的確でした！私には探偵ではなくひとりの人として小林さんを尊敬しています」

小林「！？」

コーデリア「あなたのその安心感にはあなたにしか出せない……もつと自分を大切にしてください」

小林「コーデリア……ああ、ありがとう」

コーデリア「いえ、本当のことですから……」

コーデリアがほほ笑みながら言ったその時

ガシャン！！

コーデリア「！？」

小林「！？」

何かが割れた音がした。

コーデリア「廊下からです！！」

小林「行ってみよう！」

こうして小林は廊下へと向かった。

第十話 それぞれの優しさ コーデリアVer (後書き)

コーデリア「事件発生ですね!」

はい、来ましたよ!

コーデリア「私たちの出番ですか!?!」

どうぞでしょう?!

コーデリア「分からないんですね・・・」

第十一話 追跡！逃げる犯人とそれぞれのトイズ（前書き）

さて、いよいよQCCAの登場です

シャロ「このQCCAが何なのかは本編で説明がありますよ」

第十一話 追跡！逃げる犯人とそれぞれのトイズ

小林「ここか!？」

廊下で何かが割れるような音を聞いた小林は部屋から廊下に来ていた。その目の前には驚くべき後景があった。

小林「た、館さん!？それにお前は誰だ!！」

今、小林の目の前には二人の人間の姿があった。一人は倒れた館。そしてもう一人は仮面をつけており、小林が目にしたことのない容姿だった。

シャロ「こ、小林さ〜ん……つてええ!？」

ネロ「何があつたの?」

エリー「あの人……見たことない……」

コーデリア「館さんも倒れてるわ!」

小林「落ち着くんだみんな!」

目の前の事態に個々の感想を口にする少女達に小林は静かにするよ
うに声をかけた。静かになると謎の人物は口を開いた。

仮面の人物「やあ、君が「小林オペラ」君かい？」

小林「な、なんで僕の名を・・・」

仮面の人物「そりゃあ君は私たち怪盗の中では有名だからね。恐ら
く君を知らぬ者はいないだろう」

小林「怪盗・・・やはりお前は怪盗か!？」

小林が問うと仮面の人物は「フツ」と笑った。声からは男性か女
性が分からない。

仮面の人物「いかにも、私は怪盗だが・・・何か？」

小林「館さんに何をした!？」

仮面の人物「館・・・? ああこの男か。私を見つけて叫ぼうとした
ので黙らせたのさ・・・コレでね」

そう言いながら怪盗はあるものを見せた。それは・・・

小林「それは・・・花瓶？」

怪盗「そうさ、これで頭を叩いたのさ」

怪盗は得意気に言った。声の質からして恐らく笑っているのだろう。しかし小林にはそんなことより気になる点があった。

小林「（なぜか・・・館さんに水がついていない？）」

そう、館には水がついていない、それが小林は引っかかるらしい。

小林「（床は水で濡れている・・・もし花瓶で殴ったなら館にも水がついているはず・・・それに割れた音がしたのに花瓶は割れてない・・・）」

怪盗「しかし・・・私はラッキーだ」

小林「？」

怪盗の言葉に小林は一度考えるのを中断した。怪盗は話しを続けた。

怪盗「私はまだ駆け出しの怪盗でね、しかしどうだろう。復活した名探偵小林オペラが取り逃がした怪盗がこの私・・・ともなれば、私も少しは知名度が上がる・・・とは思わんかね？」

小林「!?!」

怪盗「では……さらばだ!?!」

小林「ま、待て!?!」

怪盗は自身の話しを終えると逃走した。

シャロ「小林さん……」

ネロ「どうするの?」

コーデリア「追いかけるわよ!?!」

エリー「でも……」

小林「君たちい!?!」

四人「は、はい!?!」

突然叫ぶ小林、それに反対し四人はビクツとした。

小林「追うぞ!?!急げ!?!」

四人「は、はい!?!」

怪盗を追って走って行く小林に呼ばれ四人も怪盗を追って走り出した。

（作者から）

どうもです、作者のコアラです。前はDESの説明でしたが今回はゲームでも採用されているQCAクイック・コマンド・アクションについてのご説明をしたいと思います。

QCAとは上記で述べている通り実際にゲームで採用されているシステムです。簡単にいえば制限時間内にその場で一番適切な行動はどれかを選んでいただくというものです。

その行動というのはミルキイの誰の能力を使うか、というもので四人の中から選んでいただきます。

小林「こっちか！」

小林は逃走する犯人を捕まえるため廊下を右へ左へ走っていた。もちろん四人も一緒だ。

怪盗「くそっ！」

怪盗はそんな小林達から逃れるため壁にあつたボタンを押した。それは防犯用と思われるもので上からシャッターが降りてきた。

小林「(マズイ!!このままじゃ追えなくなる!!なんとか誰かのトイズを使って・・・)」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

(解説)

こんな感じで各キャラのどのトイズを使ったらこの状況を突破できるかを判断してください。その時の参考になるのが以前メンバーが説明してくれたことです。

(本文)

なにか手段がないかと考える小林。そんな彼の頭の中にある言葉が響いた。

(回想シーン)

ネロ「エリーのトイズは「怪力」^{トリアアセン下}っていうんだ。力量、重量増加、硬化だから正確にはトリアアSENDっていうほうが正しいと思うけど」

(解説)

このように以前メンバーのトイズは説明されているのでそれを思い出して考えて下さい。

正解はDESと同じで本文にあります。

なおこれに制限時間をつけるとよりゲームっぽくなりますよ。もちろんDESと同じで無視していただいても構いません

小林「(これだ!!) エルキュール!!」

エリー「は、はい!?!」

小林「あのシャッターが下りてくるのを防いで!!」

エリー「え?」

小林「シャッターを持って上に飛ばすんだ!!」

エリー「は、はい！」

小林の指示を受けたエリーは走って、降りてくるシャッターの底を持った。そして・・・

エリー「んっ・・・えい!!」

掛け声とともに上に飛ばす。するとシャッターは止まった。

エリー「ふう・・・」

コーデリア「ありがとうね、エリー」

シャロ「助かりました」

ネロ「ナイスだよ」

なんとかなつたことに安心して息を吐くエリーの横をシャロ達は通った。ちなみに小林は・・・

小林「あ、ちょ、前が見えない・・・」

エリーのトイズを見ないようシャロに目隠しされて通った。

そしてまっすぐ進むと・・・

小林「くっ、分かれ道か・・・」

分かれ道に出た。現在学校内・・・といっても小林達の目の前にあるのは右、左、前に進むための道で怪盗がどこを通ったかは分からない。

小林「確率は三分の一か・・・」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「ここは・・・コーデリア!!」

コーデリア「はい!!」

小林に呼ばれたコーデリアは返事をして意識を集中させる。どこに怪盗が行ったか、それを五感を強化して調べようというわけだ。しかしコーデリアから放たれた言葉は意外なものだった。

コーデリア「・・・上です!!」

小林「なに!?!」

怪盗「くそっ!」

小林は上を見た。すると壁に張り付いていた怪盗が悔しそうに降り、また走り始めた。

小林「待て!!」

小林達もまた懸命に追いかける。そして追いかけ続けると校舎から出てしまった。

小林「怪盗は・・・?」

小林があたりを見回してみる。すると怪盗は体育館へと逃げていた。

小林「あそこか!」

小林達が走って体育館へと向かい入った。すると予想外のこと起きた。

小林「なんだ!？」

なんと入った途端にローラー型のロボットが小林達に向かってきたのだ。

ネロ「警護ロボットだよ、多分あいつが僕たちを襲うように設定したんだ」

小林「これじゃあ追いかけれない・・・なんとかあれを・・・」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「ネロ、行けるかい？」

ネロ「もちろん!」

小林は電子機器ならばとネロに行けるか確認し、ネロも大丈夫だと返事した。するとネロは動いているロボットに向かってジャンプ、うまく着地した。

ネロ「（これぐらいなら・・・）ほい！」

ネロは手首に巻いた金属のヘラをロボットにさしてトイズを発動させる。するとロボットは「ガシャン！」と音を立てて止まった。

小林「よし、これでロボットは・・・」

コーデリア「小林さん！」

小林「!?!」

エリー「怪盗が二階へ・・・行きました」

小林「よし、行こう!」

小林達は急いで階段を駆けた。そして二階・・・屋上へと着いた。

小林「怪盗は・・・」

シャロ「小林さん、あれ!」

小林「あ!」

小林が見たもの、それはグライダーで逃げる怪盗だった。

コーデリア「宙に逃げられた・・・」

エリー「もう・・・追えません・・・」

ネロ「くそっ！」

シャロ「小林さん、なんとかありませんか!？」

小林「・・・(目の前には・・・旗?)」

小林達の目の前、怪盗の飛んでいく先には校舎の屋上の垂れた学園の旗があった。

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「・・・そうか!」シャーロック、あの旗を伸ばすんだ!」

シャロ「あ、はい!」

シャロが「うん」と言いながら旗に意識を集中させた。すると旗はトイズの影響で伸びた。

怪盗「な、なに!?!」

怪盗はそのまま旗に激突、そして下（地面ではなく校舎の屋上）に落下した。

小林「よし、みんな、行こう!」

小林達は落下した怪盗を捕まえるため校舎の屋上へと向かった。

第十一話 追跡！逃げる犯人とそれぞれのトイズ（後書き）

とうとうとで・・・

シャロ「やりましたー怪盗確保ですう」

・・・かな？

シャロ「え、どういことですか・・・？」

まあそれは次回でね

シャロ「気になりますよ」

第十二話 暴露！怪盗は！？（前書き）

今回は怪盗が捕まる？

ネロ「なんで疑問形なのさ？」

だって「捕まえる」って表現が正しいのかどうか・・・

ネロ「？」

と、とにかく今回はいままでのファクターを踏まえて推理します。

第十二話 暴露！怪盗は！？

謎の仮面の怪盗の逃走を防いだ小林と四人の少女。今は怪盗が落下したとみられる校舎の屋上に来ていた。

シャロ「はあく疲れました・・・」

ネロ「確かに、僕も疲れたよ・・・」

エリー「ハア、ハア・・・」

コーデリア「か、怪盗は・・・」

小林「あそこさ」

先に息を整えた小林が静かに言った。屋上・・・そのため別に遠いわけではない。怪盗は案外目の前にいた。しかし・・・

小林「問題はあの袋さ」

小林の言葉に四人は怪盗の持っている・・・というより抱えている袋を見た。

シャロ「何もなさそうです……」

ネロ「なにかあるの？」

小林「あの袋の大きさは……何が入るくらいだい？」

コーデリア「あの大きさなら一人ぐらいなら……!？」

エリー「ま、まさか……」

小林「ああ、あの中には人が入っている可能性が高い。だからこつちからは手が出せないのさ」

怪盗「フフフ、さすがは名探偵、お察しがいい。そうさ、この中には理事長がいるのさ」

得意げに話す怪盗に四人は驚いた。

シャロ「理事長が!？」

怪盗「そうだが？うそだと思っかね？」

ネロ「あの大きさから、持ち方からして本当だろうね……」

エリー「それに怪盗が持っているのは袋の中間部分、そして両端は下に垂れています」

コーディネリア「人を抱えても同じようにああなる・・・間違いなく入っているわ」

小林「そう、確かに。おそらくあの袋には何かが入っているんだろう」

コーディネリア「何かって・・・人じゃないんですか？」

小林のまさかの発言にコーディネリアは聞いてしまう。それもそうだろう、自分たちが今推理したばかりなのに元名探偵はこんな発言をしているのだから。

小林「確かに君たちの話で筋は通る。しかしそれはあくまで現状のみを見た場合さ」

エリー「どういう・・・ことですか？」

小林「それは君たちが教えてくれたじゃないか」

エリー「？」

ネロ「僕たち何か教えただけ？」

シャロ「教えられてしかいないです」

小林「そんなことはない。理事長室で見つけ出したことがあるじゃないか！！」

四人「あつ!!」

小林「さあ聞かせてくれ、君たちの見つけた疑問点・・・重要なフアクターを!!シャーロック!!」

シャロ「は、はい!」

シャロは戸惑いつつも口を開いた。

シャロ「あたしは理事長室で割れたガラスを調べました。何か違和感を感じたんです。そしてその違和感の原因はガラスの割れ方にあります」

シャロ「ガラスの散らばった方向がベランダ側だったんです。もしそのガラスが犯人が外から入ってきたときに割ったものだとしたら部屋側の散らばるはず・・・これは無視できないポイントだと思います!!」

小林「よし、次、ネロ!!」

ネロ「はいはい、僕は倒れたソファを調べただけどさどさもおかしかったんだ。重いはずの大きなソファまで倒れていた。中で人が争ったくらいじゃ倒れなさそうなソファがね。しかもここにはさらにおかしい点があつて音がなかったんだ。」

ネロ「あれだけ大きなソファなんだから倒れたら音がするはずなんだ。しかもあそこは木造だから余計にね。でも僕たちはガラスの割れる音しか聞いてないんだ。これは無視できないよね!!」

小林「よし、エルキユール!!」

エリー「は、はい。私は倒れて床に散乱した本を調べました。でもその本の散乱のし方がおかしかったんです。本は閉じたまま散乱していました」

エリー「もし争いで本棚が倒れて散乱したなら本はきれいに閉じてはいないはずです。少なくとも全ての本が閉じてるなんてことはありません。これは無視できないポイントだと思います」

小林「よし、最後、コーディネリア!!」

コーディネリア「はい、私はドアの前を調べました。そこには携帯電話が落ちていたんですがなぜかロックが掛っていたんです」

コーディネリア「さらに着信の表示もありました。普通着信が来るくらい手元にあるのにロックなんてかけるでしょうか？これは無視できないポイントだと思います!!」

小林「よし!!そして・・・」

小林は一度息を整えて話し始めた。

小林「これらのことを踏まえて怪盗の正体を考えていたらシャーロックの「ガラスの割れ方」から外からの侵入ではないこと、ネロ、エルキユールの「ソファア」や「本」から争ったように見せかけたということが仮定できる。そしてコーディネリアの「携帯」は僕たちに

操作されないためにロックをし、何か音を聴かせるために意図的にドアの前に配置したと考えられる」

怪盗「おいおい、それは単なる思い込みじゃないか小林君？」

小林「確かに、だがこれと「今」を合わせればつじつまが合うんだ」

怪盗「今？」

小林「ああ、お前・・・いやあなたはさっきからその袋を持っていてるが疲れている様子がまるで見られない。あなたの体つきから「人」の入った袋をこの証明の時間もっておけるわけがない。つまりその中身が「人」というのは嘘だ。ということはその中に理事長が入っているというのも嘘になる」

怪盗「・・・で？それで何が分かる？」

小林「このことからあなたの正体を暴くことができる。内部の人間で館さん以外、さらに今日は休日で生徒もいないから消去法で分かるんですよ・・・」

小林「理事長が犯人だってね」

シャロ「えっ!？」

ネロ「理事長が怪盗!？」

小林「ああ、もういいでしょう、その仮面をとってください」

怪盗が仮面に手を添えた。そしてはずし素顔をシャロ達に見せた。そこには

コーディネリア「り、理事長!？」

エリー「ほ、本当でした・・・」

シャロ「凄いです!!」

小林「ありがとうシャロック、でもまだ終わりじゃないんだ」

シャロ「え?」

ネロ「まだあるの?」

小林「ああ、コーディネリアの「着信」さ」

コーディネリア「あ、確かにありました」

小林に言われて思い出したのかコーディネリアが反応した。

小林「あの着信だけど実は理事長は見られなくなかったんだよ。僕たちに誰からの連絡なのか」

エリー「どうして・・・ですか・・・?」

小林「簡単さ、見てしまつとまずいんだ。」

小林は自分たちの入ってきた校舎の屋上のドアを見る。そして言った。

小林「館さんが怪盗・・・つまり理事長に協力していることがばれてしまうからね」

コーデリア「館さんが!？」

小林「ですよ、出てきてくださいよ館さん!」

小林が館を呼ぶとドアから館が現れた。

ネロ「ホントに出てきちゃった・・・」

館「しかし小林様、いつから・・・?」

小林「まず館さんが怪盗と協力していると気付いたのは初めて怪盗と会った時でした。あの時花瓶の水の影響で地面は濡れていたのに館さんは濡れていなかった。つまり館さんは怪盗に殴られて倒れたのではないと分かる。だから二人が協力者だと分かったんです。さら・・・」

小林は館の手を指して言った。

小林「館さんは理事長室に行く前、ポケットに手を入れていた。それは本来執事としてはいけないことだ。しかしなぜか館さんはそれを行った。なぜか、理由は電話が来ることが分かっていたからだ。しかも設定はあの大音量、早くでないとうるさいですからね。まあその後の行動もヒントがあっただんですが……」

シャロ「ヒントですか？」

小林「ああ、あの後館さんは画面を見て携帯を操作していたらどう？あれは確実に理事長の携帯……ドアの前にあった携帯に電話をするためなんだ」

コーデリア「それで着信のメッセージがあっただんですね！」

ネロ「でもなんで電話なんてしたの？」

小林「僕達にガラスの割れる音を聞かせるためさ。聞こえただろう、ガラスの割れる音が」

ネロ「あ、なるほど」

エリー「理事長の携帯の着信音をガラスの割れる音にしておけば……」

コーデリア「私達にガラスの割れる音を聞かせることが出来るわ」

シャロ「小林さんスゴいです!!」

小林「僕はこう考えたんですが……どうですか？」

質問する小林、そんな彼に理事長は「やられた」と言った顔で答えた。

理事長「さすが・・・見事です小林君。全て君の言ったとおりだ。では話しがある。四人も来てくれ。館、案内頼めますか？」

館「はい、こちらです」

館に案内され小林達はある部屋へ向かった。

第十二話 暴露！怪盗は！？（後書き）

ということでした。

ネロ「なんで理事長がそんなことやってるの？ていうか僕たちを騙してたの？」

それはない、君たちの学校の先生だからね。

ネロ「じゃあなんで？」

それは次回で！！

第一三話 結成！ミルクイホームズ！（前書き）

さてついに過去は終わりです。

エリー「ついに・・・ミルクイホームズが・・・」

結成です！！

第一三話 結成！ミルキイホームズ！

館「こちらでございます」

怪盗の正体を暴いた後、館に案内されある部屋に来た小林。そんな彼に四人も引っ付いて来ていた。

シャロ「どこに行くんでしょう？」

ネロ「こっちは僕たち来たことないもんね」

エリー「普段は・・・用事がないから・・・」

コーデリア「あ、見えてきたわよ」

小林「これは・・・」

小林が案内された場所、それはある部屋だった。

館「さあ、中へどうぞ」

小林「あ、はい」

館「皆さんもどうぞ」

小林は館に言われて中へと入る。それにつられて四人も入った。

小林「これは・・・」

小林は中に入って唾然とした。小林の目の前には小林好みの家具が並んだ言つならば「探偵の事務所」があつたのだ。

理事長「気に入っていただけましたかな？」

小林「気に入ってって・・・？」

理事長「はい、これからあなたにはここで生活していただきたいのです」

小林「はい!?!？」

驚きの余り声を上げる小林、そんな彼を見て理事長は言った。

理事長「実は怪盗が「組織化」しているのです」

小林「組織化・・・?怪盗が・・・ですか？」

理事長「はい」

小林「怪盗は以前から単独で行動して問題を起こしていた・・・なのにはですか？」

理事長「はい、実はIDO（国際探偵機構）に「怪盗帝国」という怪盗組織から怪盗の組織化宣言が行われました」

小林「IDOはイギリスにある国際探偵機構・・・そこに送られてきたなら間違いないですね・・・」

理事長「怪盗が組織化しているのに探偵が1人で対応するなんて・・・難しい話です。ですからこちらにも組織化することを決定しました。」

小林「でしょうね、でもそれが今回のことと何か関係が・・・あっ」

突然叫ぶ小林、何か分かったようだ。

シャロ「何か分かったんですか？」

小林「今回、僕は君たちと協力して事件を解決しただろう？」

シャロ「はい」

小林「それがヒントさ」

シャロ「・・・はい？」

ネロ「なるほどね」

シャロは分からないように首をかしげた。そんな中、ネロ、エリー、
コーデリアはわかったようだ。

シャロ「え、みんなも分かったんですか？」

ネロ「もちろん！」

エリー「「協力」がヒント……」

シャロ「協力……ですか？」

コーデリア「そうよ、ですよね小林さん？」

小林「ああ」

シャロ「うん……あつ、もしかして!?!」

シャロは何か分かったようで笑顔で言った。

シャロ「「あたしたちが探偵の組織になる」ですか？」

小林「たぶんね」

理事長「正解ですよシャーロック」

シャロ「ってええ！？あたしたちがですか!？」

シャロは自分で言っておきながら驚いた。

理事長「はい」

ネロ「でもさ、いくらなんでもやりすぎじゃない?」「ここまでやるって……」

コーディネリア「そうですね、こんな「本物の怪盗」がやったみたい……」

理事長「……ではお聞きしますがあなたたちは組織化して何を追うのですか?」

コーディネリア「それはもちろん怪盗ですけど……」

理事長「ではその追う怪盗に「本物の怪盗」以外の怪盗がいますかな?」

コーディネリア「!?!?」

理事長「わかったようです。あなたたちがこれから追うのは「本物の怪盗」なんです。これからこんな事態がたくさん起きるかもしれない……だからかなり実戦的に行ったのです」

コーディネリア「そうだったんですね・・・すみません」

理事長「わかっていただければいいんですよ」

コーディネリアの謝罪に理事長は笑顔で答える。優しい理事長なのだろう。

理事長「さて、ということですから小林さんも関わることなんですが・・・」

小林「まさか・・・四人の指揮・・・なんてないですよね？」

小林は苦笑いしながら言った。それに答えるように理事長は笑顔で

理事長「正解です」

小林「やっぱり・・・しかし理事長、僕にこの子たちの指揮は無理です。トイズのない僕に何が・・・」

理事長「指揮だけではありません。教育もお任せしたいのです」

小林「だから僕には・・・」

理事長「失礼ですが小林さん、あなたには確かにトイズがない。しかし今までの経験はないのですか？」

小林「!？」

理事長「あなたがトイズを持っていたところに得た経験は全くないのですか？」

小林「それは・・・」

理事長「この子たちはまだ何も分からない原石だ。そんな彼女たちにはあなたの経験が必要なんです。あなたの経験は彼女たちの成長へとつながるのです」

小林「・・・」

理事長「ですからこの子たちの指揮官を・・・お任せできませんか？」

小林「確かに僕は今まで探偵として色々な経験をしてきました。でもそれが彼女たちにとプラスに・・・」

シャロ「お願いします!!」

ネロ「頼むよ!」

エリー「お願い・・・します・・・」

コーデリア「お願いします!!」

小林「み、みんな!？」

小林は突然言った四人に驚いた。

シャロ「あたし、早く立派な探偵になってみんなを助けたいんです
！！お願いします！！先生！！」

小林「先生！？」

ネロ「僕も興味あるなあ。小林がどういう人なのか・・・まあこの
際引き受けちゃえば？」

小林「人ごとだと思つて・・・」

エリー「お願いします小林さん・・・」

小林「ちょ、泣かないで・・・」

コーデリア「よろしくお願いします！！教官！！」

小林「教官！？」

小林はそれぞれに言われてとても焦っていた。まあほとんどしゃべ
る間もなく言われるので仕方ない

理事長「このように私たちはあなたを迎え入れる準備は万端ですよ」

小林「・・・僕は・・・」

小林「僕は本当に無力な人間なんです。なにもできない・・・そんな僕でも何か教えてあげられることがあるなら・・・」

理事長「・・・それは良い返事として受け取っても？」

小林「はい」

シャロ「やったー！！これから本当に先生ですねっ！！」

ネロ「これから色々教えてよ？」

エリー「よろしく・・・お願いします！」

コーデリア「教官と私たちのチーム結成よー！」

小林「うわっ」

それぞれが小林の返事に喜び小林に抱きつく。小林は驚き困った表情をした。しかし本当に嫌なのではなくどうしたらいいか分からない、そんな表情だ。

理事長「では記念に写真でも撮りましょうか？」

シャロ「あ、お願いします」

理事長は部屋にあったカメラを手にして5人に向けた。

理事長「ではとりますよ」

ネロ「ちよつと待って!」

小林「ネロ?」

突然叫ぶネロに驚く小林。するとネロは冷蔵庫へと行き・・・

ネロ「・・・やっぱり。ケーキだ」

なんとケーキを見つけたらしく喜ぶネロ。そんな彼女にみんな苦笑
いだった。

コーディネリア「こんなときでもネロはネロね」

ネロ「だってケーキの匂いがしたんだ。小林、これ食べていい?」

小林「えつと・・・」

理事長「この部屋はもうあなたのものです。あなたから返事をどうぞ」

小林「それじゃあ・・・いいよ」

ネロ「やった」

ネロは更に喜び戻ってきた。その時

シャロ「あつ!?!」

小林「今度は何だい!?!」

小林に尋ねられるとシャロは笑顔で答えた。

シャロ「思いついたんです!」

ネロ「何を?」

シャロ「あたし達のチームの名前だよ!」

エリー「名前……?」

コーデリア「いいわね」

シャロ「それじゃあここで発表」

小林「え?」

シャロの突然の発言に小林は驚いた。するとシャロはみんなにひそひそと名前を教えた。

シャロ「どうですか？」

ネロ「いいじゃない？」

エリー「いいと思う・・・」

コーデリア「いいわね！」

小林「みんながいいならいいんじゃないかな」

シャロ「それじゃあいきますよ！！！」

理事長「3・2・1・・・」

シャロ「私たちの名前は・・・！！！」

全員「「ミルキイホームズ」」

これが探偵チーム「ミルキイホームズ」の誕生の瞬間だった。

第一三話 結成！ミルキイホームズ！（後書き）

エリー「でもシャロもよく思いつきましたよね、名前」

さすがだね、まあシャロは勘が良い・・・らしいよ

エリー「これからは事件に戻るんですか？」

うん、ビル倒壊事件に戻るよ。みんな忘れてそう・・・

エリー「その時は何話か前に戻ればいいんですよ」

それもそうだね

第十四話 回想終了！ファクター探しの続き（前書き）

今回のファクターは僕が独自で考えました

コーデリア「ゲームとは違うんですか？」

似てるけど内容は違うかな、シャロとか特にね

コーデリア「つまりコアワールドですね」

そうそう、それ！では僕が一週間以上かけて作ったファクターをど
うぞ！！

ちなみにこの事件のヒロインはネロ……の予定です（ある方から
の要望により）

第十四話 回想終了！ファクター探しの続き

小林「みんな！」

シャロ「あ、先生！」

神津との話しを終えた小林はミルクイメンバーの元に来ていた。

ネロ「あ、無事だったんだ」

エリー「よ、良かった・・・」

小林「ぶ、無事！？」

コーデリア「みんなで話してたんです。もしかして教官が警察の方に捕まってしまうんじゃないか・・・って」

小林「あはは（僕は何もしてないから捕まる理由がないんだけど・・・）それより定礎箱は？」

小林はあたりを見渡し定礎箱を探す。するとネロが何かを差し出した。

ネロ「これだよ」

小林「あ、ありがとう。えっとこの中には……」

小林は定礎箱を開けて何かを探した。すると「やっぱり」と言った表情をした。

小林「ないね……」

シャロ「先生、何がないんですか？」

小林「銅鏡だよ」

コーデリア「銅鏡……ですか？」

小林「ああ」

エリー「どうして……ですか？」

エリーの間に小林の表情がさらに真剣になった

小林「さっきから僕達が回ったビルの倒壊現場には必ず定礎箱が見えるようにあった。しかもある共通点があるんだ」

ネロ「銅鏡が外に出てる……だね？」

小林「ああ、いずれの定礎箱にも銅鏡が入っていないんだ。これはつまり誰かが出したため……」

コーデリア「でも、一体誰が出したんですか？」

小林「それは残念ながら分からない、でも……君たちは探偵だから……」

シャロ「調査ですね！」

小林「そういうこと！さあ、調査開始だ！！」

ミルキイ「はい！」

小林の一言で4人は一斉に散らばった。それぞれ怪しいと思ったら場所を調査するのだ

小林「もう時間も経ったから二次災害はないだろうし……僕はみんなを見て回ろうかな」

小林は4人を見て回ろうと思いき始めた

小林「やぁネロ」

ネロ「あ、小林じゃん」

ネロは調査・・・をしながらお菓子を食べていた。

小林「なんだ、君はまたお菓子を食べているのかい？」

ネロ「いいじゃん別に」

小林「ごめんごめん、でも悪いなんて言っていないさ。探偵たるもの周りに流されちゃいけないからね」

ネロ「さっすが小林！分かってる！」

小林「あはは・・・ところで何か怪しいものは見つけたかい？」

ネロ「うん・・・」

- ・ 名刺
- ・ 今日の新聞
- ・ 雑誌の切れ端

小林「これは・・・名刺が怪しいな」

ネロ「でしょ？新聞や雑誌の切れ端は飛んできて名刺はまずないよね？」

小林「ああ、だけどこれで分かることがあるよね？」

ネロ「・・・あっ！」

小林「そう、これは重要なファクターだ！！」

ネロ「・・・ところで小林？」

小林「なんだい？」

小林が聞くとネロは小林の方に頭を向けて帽子をとった。その中には・・・

小林「け、ケーキ!？」

ネロ「うん」

なんとネロの帽子の中にケーキがあり、ネロはそれを見せた。

ネロ「食べる？」

小林「い、いや遠慮しとくよ……」

ネロ「じゃあ僕が食べちゃお」

小林「あ、あの……ネロ？」

ネロ「ん？」

ケーキを食べるネロを小林が止めた。とうのネロはクリームをつけたまま小林を見た。

小林「なんでそんなところに……？」

ネロ「ここなら手もふさがらないからね。便利でしょ？」

小林「ま、まあ……」

小林は苦笑いしながら答えた。それに対してネロは少し自慢げだ

ネロ「小林はなにか無いの、こういう時に持ってる物？」

小林「そうだなあ……これかな」

小林が取り出したもの、それは飴だった

小林「これは僕の調査の必需品かな」

ネロ「小林も？」

小林「ああ、これがあれば糖分が補給出来るからね」

ネロ「何味が好きなの？」

小林「僕はオレンジかな」

ネロ「わあ、一緒だ！さっすが小林、見る目があるよ！」

小林「あはは、ありがとう」

ネロ「それじゃあ僕のがあげる！」

小林「じゃあ僕もあげるよ」

ネロから先にオレンジの飴が差し出され、小林もオレンジの飴を差し出した

ネロ「そっいえば交換しても意味ないね？」

小林「あ、じゃあ僕は他の味に・・・」

ネロ「あ、いいいいいよ。お互いにオレンジ交換しよ、ね？」

小林「まあネロがいいならいいけど・・・?」

そして二人は飴を交換した

小林「それじゃあ僕は他の場所も見回すから、じゃあね」

ネロ「はいはい」

小林「シャーロック?」

シャロ「あ、先生!」

次に小林はシャロのところに来ていた。

小林「苦戦・・・しているようだね?」

シャロ「はい、どうもこれらの謎が解けなくて・・・」

- ・地面の削られたような跡
- ・壊れたマンホール
- ・捨てられた空き缶

小林「シャーロックはどれが怪しいと思うんだい？」

シャロ「あたしはこの削られた跡が一番怪しいかなって思うんですけど……」

小林「うん、多分それが……」

小林&シャロ「重要なファクターだ!!」

シャロ「ですね!!」

小林の言うことを予測して同時に言ったシャロ、そんな彼女に小林は苦笑いしていた

小林「おいおい、よく僕が言うってわかったね(汗)」

シャロ「だって先生なにか見つけたら言うじゃないですか。あたしも真似したかったんですよ」

笑顔で言うシャロ、ちよっとしたイタズラ心のようなものだろう

小林「じゃあなんで重要なファクターかはわかるかい？」

シャロ「えっと・・・わからないです！！」

小林「あらら・・・」

シャロ「そこまではまねできませんでした」

小林「それじゃあ説明するよ。マンホールだけどこれはビルが崩れてきて当たれば普通に壊れる。だから問題ない。次に空き缶だけどもこれも誰かが捨てたと考えれば事件とは問題ない。まあ環境には問題があるから・・・」

シャロ「あ、あたしが捨てますよ」

小林が空き缶を拾おうとした瞬間、シャロが代わりに拾った

小林「ありがとう、シャーロック」

シャロ「じゃああたし、これを捨ててからもっと調べてきますね！！」

そういつてシャロは走って行った

小林「エルキユール？コーディネリア？」

エリー「小林……さん？」

コーディネリア「教官！」次に小林はエリーとコーディネリアの元に来ていた

小林「二人は一緒に捜査かい？」

コーディネリア「はい」

小林「ここは……市役所の前？」

エリー「はい」

小林「どうしてここにきたんだい？」

コーディネリア「何か証言いただけないかと思ってきたんですよ」

小林「なるほど……それで、何かあったかい？」

エリー「それが……」

コーディネリア「一応近頃住民の皆さんから求められたものは聞いて、何を求められたのか教えてもらっただけですけど……」

- ・火薬取り締まり書
- ・ビル損害保険書
- ・生命保険書

エリー「この三つが怪しいかと・・・」

小林「うん・・・エルキュールはどう思うんだい？」

エリー「私は・・・ビル損害保険書が怪しいと思います・・・」

小林「コーデリアは？」

コーデリア「私も同じです」

小林「どうしてか、理由はある？」

エリー「火薬取り締まりは犯人がわざわざ手続きをとるわけがありませんし何よりも取り締まりというのがおかしいです」

小林「どうしてだい？」

エリー「普通は火薬取り扱い許可証などです。だから取り締まり・・・」

・という表現は間違っています。

コーデリア「次の生命保険書も怪しいですが今回の事件では命に関わる問題は起きていません。なのでこの事件とは関係は薄いと考えられます」

小林「なるほど・・・」

小林は二人の見事な推理に驚いた。事実、小林も同じ意見だったのだ

小林「つまりこれは重要なファクターだ！」

コーデリア「ってことですね」

エリー「・・・はい」

こうしてファクター探しは無事に終了した

第十四話 回想終了！ファクター探しの続き（後書き）

ということではファクターは集まりました

コーデリア「次回はいよいよ犯人ですね」

うん、できればもっと早く更新したい・・・

第十五話 犯人は！？暴露開始！！（前書き）

さあ、いよいよ犯人がわかります？

シャロ「なんで疑問形なんですか？」

だって犯人っていうか・・・まあ色々あるんだよ

第十五話 犯人は！？暴露開始！！

小林「ふううう……」

ある程度見て回った小林は近くのベンチに座った。

小林「さて、今回色々なファクターが見つかったけど……まずシヤロックの「跡」はおそらく犯人がビルの大きさをはかるためにつけたもの……」

小林「次のエルキュールとコーデリアの見つけたビル損害保険書……あれはビルが損害した場合に保険金をもらえる制度……あつ！」

小林は何か分かったらしく立ちあがった。

小林「あとはネロの見つけた名刺……これなら全てのつじつまが合う……筋が通る！！」

そういつて小林は四人の元に走った。

小林「はあ、はあ、みんな!!」

シャロ「あ、先生!」

ネロ「どうかしたの?」

小林「分かったんだ」

コーデリア「ええ!?!」

エリー「犯人が……ですか?」

小林「犯人っていうか……関係者が!今から行くから君たちも来て!」

小林「ここだ」

シャロ「ここ……ですか?」

ネロ「ずいぶん大きいんだねえ」

今ミルキイホームズの前には大きなビルがあった。ただビルの少々壁が削れていたり、ペンキがはがれている様子から少し古いような……そんな感じのビルだ。

エリー「ここに・・・その人が・・・？」

小林「そうだよ」

コーデリア「教官、これは中に入っても？」

小林「ああ、構わないはずだよ」

コーデリアの問いにそう答えると小林を先頭にミルキイホームズはビルへと入った。

シャロ「あれ・・・？」

エリー「誰も・・・いません・・・」

コーデリア「なんでかしら・・・」

小林「避難しているからさ」

コーデリア「避難ですか？」

小林「ああ」

エリー「どうして避難・・・なんですか・・・？」

小林「恐らくはここにも予告があったからだよ」

シャロ「予告って・・・まさか・・・」

驚くシャロに小林は頷き

小林「爆破の予告さ」

ネロ「小林!」

小林が言った瞬間ネロが小林を呼んだ。

ネロ「ここ、人がいるよ」

エリー「えっ?」

コーディリア「予告が来てるのに・・・」

小林「その中にいる人が関係者だからさ」

シャロ「え?」

小林「とにかく入ろう」

そう言うと小林はドアノブに手をかけて回し、ドアを開けた。そこ

には・・・

王偉「だ、だれだ!？」

小林が朝にテレビで見た人物、黄金鏡をの所持者「王偉」さん
がいた。

ネロ「誰、この人？」

小林「王偉さんだよ」

ネロ「王偉・・・？」

王偉「コラッ! 貴様、人の部屋に勝手には入りおつて! 不法侵入で訴えるぞ」

小林「落ち着いて下さい、あなたにお話しがあつてきました。」

王偉「話・・・じゃと?」

小林「王偉さん・・・あなたはビル倒壊事件に深く関わつてらつ
ちやいますよね?」

王偉「！」

すごいけんまくで怒っていた王偉だったが小林のその言葉に苦笑いした。

王偉「な、何じゃと・・・ワシは何もし、知らん！」

ネロ「動揺してるあたりすっごく怪しいし」

エリー「態度も・・・変わりました・・・」

コーデリア「確かに怪しいわ」

シャロ「一緒に来て下さい！」

王偉「な・・・」

シャロが王偉を連れて行こうと接近すると王偉は後ずさりをして

王偉「じゃ、じゃあ証拠はなんなんだ！？まさか証拠も無しにワシを犯人扱いか！」

小林「そんなことはありません。ちゃんと証拠はありますよ」

王偉「ほ、ほう。では聞かせてもらおうじゃないか」

小林「分かりました。」

小林はそう答えると話し始めた。

小林「まずこの事件は怪我人が一人も出ていないんです。最近の怪盗は人をむやみに傷つけることをしません。つまりこれは怪盗が犯人です。これはわかりますよね？」

王偉「あ、ああ。だがわしはトイズは持っていないぞ！怪盗ではない！」

小林「確かに。ですがあなたは「トイズを使う者を雇うこと」はできませんよね？」

王偉「ど、どういうことだ!？」

焦る王偉に対して小林は冷静に話を続けた。

小林「それはまあいいでしょう。次に現場には「トランプ」が散らばっていた・・・いえ、撒き散らしてありました」

王偉「そ、それがどうした!？」

小林「トランプの絵柄は切り抜かれていました。実はそのトランプ、「キング」のマークのものだけ切り抜かれていたんです。つまり「王」を意味している」

王偉「そ、それがどうした!まさかそれだけ・・・」

小林「他にもありますよ。・・・みんな！」

4人「はい！」

小林は「まだ証拠はある！」と言わんばかりの表情で4人を見た。すると4人は笑顔で返事をした。

小林「シャーロック！」

シャロ「はい！あたしは現場で何か線のような跡を見つけました。普通道路にそんな跡はないはずだし瓦礫によって出来たものと考えるには直線過ぎました。これは無視できないポイントだと思います！」

小林「よし！ネロ！」

ネロ「はいはい。僕は今回、現場で名刺を見つけたんだ。新聞とかならまだ分かるけど名刺は大切なものだからその辺に落ちている訳がない。つまりこれは「落とし物」って事だよな？これは無視できないポイントだと思うな」

小林「よし！エルキュール！コーディネリア！」

エリー&コーディネリア「はい！」

エリー「わ、私たちは市役所で、最近使用された資料を・・・だしてもらって調べました。そ、その中にはビル破損保険の資料がありました。」

コーディネリア「ビル破損保険はその名の通りビルが破損したときに保険金が入る制度、しかもその金額はビル破損ということから高額です。つまりこれは・・・」

エリー&コーディネリア「無視できないポイントです（だと思います）！」

小林「よし！」

小林は4人の注目ポイントを言った四人に笑顔を送った。四人もかなり嬉しそうだ。

小林「以上のことから僕はこう考える。まずシャーロックの見つけた跡はビルの長さ測ったもの。つまりこれは計画的な犯行だ。そしてビルが倒壊することによってエルキュールとコーディネリアの見つけたビル損害保険により多額の保険金を得ることができる。さらにネロの見つけた名刺、あそこにはしっかりと記載されていました。「王偉」という文字がね」

王偉「!?!」

小林「さらに現場には「定礎箱」がありました。しかも中の銅鏡が外に飛び出ていたんです。これが何を意味するか・・・分かりますか？」

王偉「わ、分からん！」

小林「確かめたんですよ、中身を」

王偉「……し、しかし何のためじゃ、何のために……」

小林「王偉さん、あなた本当は黄金鏡の場所を知りませんか？」

王偉「な、何を言って……」

小林「ではお伺いしますがテレビで見せていた写真、いつ撮られたんですか？」

王偉「それは……」

小林の質問に焦る王偉。すると彼は何かがひらめいたような表情で

王偉「い、一週間前じゃ！」

小林「本当ですか？」

王偉「本当じゃ！」

小林「うそですね」

王偉「な……うそじゃない！」

小林「ではお聞きしますが写真の右下に書いてあった日付、あそこには何年も前の日付が書いてありましたかなぜですか？」

王偉「うう・・・」

小林「かなり前に撮ったからですよね？いや撮ったのはあなたじゃない、あなたの前の世代の人だ」

ネロ「つまりこの人はその黄金鏡の場所を知らないってこと？」

小林「そういうこと。結論、あなたは黄金鏡を探し、保険金を得るため怪盗にビルの破壊を依頼した。これがこの事件の真実だ！！」

小林の言葉に王偉は反抗もできずその場に膝をついた。

王偉「そ、その通りだ。わしは黄金鏡の場所を父さんから教えられておらず写真しかもっていなかった。だから探そうと怪・・・」

???「あゝ、ちよつとちよつと。そこから先は言っちゃダメだろ？」

小林「な、なんだ!？」

小林は突然の声に驚いた。すると上の板が外れて中から人間が降りてきた。

???「よつと」

小林「お前は誰だ！」

????「俺か？俺はラットだ！」

小林「ラット・・・？」

ラット「ったく、このじいさん簡単に吐こうとしゃがって・・・まあいいや、今からこのビルもぶっ壊すしな」

小林「このビルを壊すだと!？」

王偉「ま、待て！そんなことまでは依頼してないぞ！」

ラット「おまけだ、おまけ。じゃあな！」

焦る王偉を見てラットはそう告げると階段を駆け上がった。

小林「く、このままじゃ・・・みんな、追いかけるぞ!！」

四人「はい!！」

こうしてミルクィホームズは怪盗ラットを追いかけることとなった。

第十五話 犯人は！？暴露開始！！（後書き）

ということでした。

そういえば近頃この小説や情報センターを見てミルキイに興味を持つてくれる人が増えてきたよ。

シャロ「それは嬉しいですね」

うん、もっともっと広めてほしい・・・ということでもみんなでミルキイを広めていきましょう！この小説はそのお手伝いをしますよ！！

第十六話 追跡！怪盗「ラット」（前書き）

さあ久々のCAです！

ネロ「今回のCAは全部コアラが自分で考えたやつだよ」

授業中考えたアイデアは全部没になっちゃったからねえ・・・

ネロ「それじゃあ第十六話、スタートだよ」

第十六話 追跡！怪盗「ラット」

今回の「ビル倒壊事件」に王偉が関わっていることを突き止めた小林。そんな彼の前に爆破を実行した怪盗「ラット」が現れ逃走を始めた。

小林「はあ、はあ・・・」

シャロ「は、速いです」

エリー「それにここはビルだから・・・」

コーデリア「狭いし曲がり角が多いわ・・・」

ネロ「面倒だなあ」

そう、今ミルキイホームズはビル内にいる。ビル内部は曲がり角と階段で通路が複雑になっていた。しかしそれでもなんとかラットを見失わず、追いかけていた。

ラット「くそ、あいつらしつこいな・・・これでもくらえ！」

ラットは爆弾を手に持ち自身の後ろに転がした。つまりミルキイホ

ームズが向かうはずの通路に置いたのだ。

小林「ば、爆弾!？」

ネロ「しかもあれ火がついてない!？」

そう、爆弾のヒモにはすでに火が付いていた。もうすぐで爆発してしまう状態だ

小林「く、何かないか・・・」

コーデリア「教官、頭上にスイッチ式のスプリンクラーがあります!」

小林「よし!」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「シャーロック!」

シャロ「はい!」

シャロはスプリングラーに意識を集中させる。するとトイズが発動しスプリングラーのスイッチを入れた。その瞬間水が出てきて爆弾の火を消した。

シャロ「やりましたー」

小林「ナイスだ、シャーロック！」

ネロ「小林、怪盗が逃げるよ！」

小林「おっと、そうだった！」

小林はネロの言葉に反応し改めてラットを追い始めた。

ラット「げ、あれまで効かないのかよ・・・だったらこれだ！」

ラットは曲がり角を曲がった。その瞬間「バーン！」と爆発音がビル内に響いた。

シャロ「な、なんででしょう!?!」

小林「急いごう!」

何があったのかと思い、もちろんミルキイホームズも曲がったが異変があった。

コーデリア「これは・・・崩れてる!？」

ミルキイホームズの目の前に広がった後景、それは壁が崩れて道をふさいでいるというものだった。

シャロ「これじゃ通れません!」

小林「いや、ここは・・・」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「エルキユール!」

エリー「あ、はい」

エリーは瓦礫の前で腕を引きパンチの構えをした。そして

エリー「えーい！」

思いつきりパンチした。すると瓦礫はさらに細かく崩れ通れるようになった。

シャロ「流石です、エリーさん！」

小林「よし、これで追える。ありがとうエルキュール」

エリー「あ、はい……」

小林はそういうと怪盗を追いかけた。すると少し広い場所にでた。

ネロ「ねえ、どこにいったの？」

小林「ん……」

その場所にはエレベーター、下への階段、上への階段、左通路への道があった。

ネロ「この中のどれを選んだんだろ」

小林「これは・・・」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーディネリア

小林「コーディネリア！犯人の火薬のにおいがどこに行ったか調べてくれ！」

コーディネリア「はい！」

コーディネリアは小林から指示を受けるとすぐにトイズを発動、においを調べた。すると

コーディネリア「階段・・・上への階段です！」

小林「階段か！」

コーディネリア「でも結構速い速度で移動してます！」

小林「僕たちが階段で追いかけてもダメか。なら・・・」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「ネロ！」

ネロ「分かってる、エレベーターを操作するんだね」

小林「ああ！」

ネロは分かっていたように答えてトイズを発動、エレベーターのドアは開きメンバー全員を乗せた。

ネロ「それじゃあ行くよ！」

そついうとネロはダイレクトハックで操作、エレベーターは超高速で上へ移動した。

シャロ「は、早いですー！」

小林「ネロ、これはいくらなんでも……」

ネロ「しょうがないでしょ、急いでるんだから！」

そういつとエレベーターは止まった。

小林「よし、これで……」

エレベーターは開いた。すると小林たちの目の前にあるものが現れた。

小林「な……また壁!？」

そう、エレベーターから少しおりると目の前には壁があった。しかも普通の壁ではなかった。

小林「これは……防犯用の壁!？」

そう、その壁は防犯用の壁でセンサー付だ。

エリー「防犯用の壁は……下手に触ると……防犯システムが……」

・作動します・・・」

シャロ「つまりエリーさんは壊せないってことですね・・・」

小林「それなら・・・」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「ネロ！あけてくれ！」

ネロ「オツケー！」

ネロは手首のヘラを取って壁にさす、すると壁のセキュリティロックは解除されて壁は上に移動し通れるようになった。

小林「ありがとう、ネロ。さあ屋上だ！」

小林はネロにお礼を言うと駆け出した。

第十六話 追跡！怪盗「ラット」（後書き）

ネロ「今回は僕が大活躍だったね！」

まあこれはネロ回だしね。それにしてもネロのダイレクトハックって便利だよな？

ネロ「まあね、機械ならある程度操れるから使い勝手はいいかな。それより次回は？」

ラットを追い詰めるよ。そこで何がどうなるのか！？

ネロ「次回もお楽しみに〜」

第十七話 追い詰められたラットと女怪盗登場!?(前書き)

さあいよいよ追い詰めました!

エリー「」のまま・・・捕まる・・・のですか・・・?」

それは本編にて!..!

第十七話 追い詰められたラットと女怪盗登場!?

怪盗「ラット」を追った小林達ミルキイホームズ。先に進むラットは行く先は屋上、つまりは行き止まりだった。

小林「よし、狙い通り屋上へ追い込めた!」

ネロ「でも油断はできないよ?」

エリー「怪盗のトイズもまだ分かってません・・・」

小林「そうだね、油断は禁物だ」

コーデリア「はい!」

シャロ「それじゃあ行きましょう!」

シャロが屋上への扉を開いた。するとそこにはラットがいた。

ラット「くそっやっぱり追ってきたか」

小林「当たり前だ!ここは屋上だ、逃げ道はない、諦めて・・・」

ラット「逃げ道?そんなの関係ねえよ。これで降りれば問題ねえだろ」

小林「これ・・・?」

ラットが見せたもの、それはロープだった。

シャロ「それでどうやって・・・」

小林「・・・なるほど、それでビルを降りるつもりか」

ネロ「どういふこと?」

エリー「レスキューの人みたいにロープを命綱にして降りる・・・
そういうことですよね・・・?」

小林「おそらくはね」

コーデリア「そうすればビル爆破は成功、怪盗は逃げられる・・・」

シャロ「最悪の状況です!」

シャロの言うとおりにもしこれが成功してしまえば怪盗達にとっては
最高、ミルキィにとっては最悪である。

小林「でも爆破はできないはずだ」

コーデリア「どうしてですか?」

小林「この環境を考えてらんよ」

小林に言われた通り4人は周りを見て考えた。その結果・・・

ネロ「なるほど、「風」だね」

小林「ああ、ここは屋上だから風が強い。でも爆弾を爆破させるには「火」がいるだろう？ここでマッチとかで火をつけても消えてしまうんだ。なによりマッチを出したりなんかしたら僕たちが隙をついて取り押さえるさ」

ラット「流石元名探偵ってところか。でもその考えはちょっと甘いな」

小林「なに？」

そういつとラットの目の色が変わった。この世界で「トイズ」を使う時に起る変化だ。

その瞬間ラットの手のひらに火が発生した。

ネロ「ちょ、何あれ!？」

シャロ「なんで火が付いているんですか!？」

エリー「マッチも何も使ってません・・・」

コーデリア「じゃあなんで……」

小林「そうか……トイズ……」

ラット「正解だぜ」

ラットは火を見せながら得意げに言った。

ラット「俺のトイズは「炎のトイズ」、火を発生させられるトイズだ。これがあればマッチなんて使わなくても火をだせるんだよ」

小林「くっ（怪盗のトイズが火を起こすなんて……予想外だったな……）」

ラット「それにこの炎は風ぐらいじゃ消えないぜ。さあどうするよ、元名探偵さんよ……!?!?」

ニヤリと笑いながら言うラット。しかしその時、彼に異変が起きた。

ラット「な……うっ!?!?」

コーデリア「どうしたんでしょう?」

小林「分からない、だが様子は変だ」

突然のことに小林も驚いた。するとラットに変化が起きた。

ラット「ア……ルセーヌ……様……」

エリー「アルセーヌ？」

シャロ「一体誰のことでしょう？」

????「こんにちわ、皆さん」

小林「!?!」

ネロ「なんだ、今どこからか声が……」

????「うふふ……」

ネロ「誰だ、出てこいよ!」

ネロが上空に向かって言った。この謎の声は上空からする、そのためだろう。

すると景色は一気に変わり、写真に薄い紫のフィルムをつけたような後景になった。

小林「これは……」

シャロ「何がどうなっているんですか!?!」

ネロ「落ち着いてシャロ！」

突然のことにパニックになるシャロをネロがなだめた。しかし実際はメンバー全員が焦っていた。

エリー「これも・・・誰かのトイズ・・・でしょうか？」

小林「分からない、だが不自然なことが起きてるのは事実だ」

コーデリア「教官、あれ！」

コーデリアが何かに気付いたようなので小林はコーデリアの目線の先、ラットのの方を見たとラットの横の空間が歪み、一人の女性が現れた。

???「ふふふ、ごきげんよう、小林さん」

小林「お前は誰だ!!」

反射的に怒鳴りつける小林、しかし彼女はそんな小林を見て申し訳なさそうな表情をした。

???「私の名前はアルセーヌです」

小林「アルセー又？」

アルセー又「はい、「怪盗帝国」の長をやっております」

小林「怪盗帝国だつて!？」

以前、ミルキイホームズ結成の時にあつた名前を思い出した小林は思わず叫んでしまった。すると

アルセー又「この度はラットがご迷惑をおかけいたしました」

小林「？」

突然謝つてきたのだ。しかもラットの行動に対してだ。いきなり敵に謝られるのだから小林達が驚いても無理はない。

小林「なぜ・・・」

アルセー又「今回、怪盗帝国のラットがあなた達を巻き込みビルを爆破しようとしました。私が命じたのは「ビルの爆破」のみ。人々を巻き込んでいいとはいつておりません」

小林「命令は正確さ重視なのか・・・」

アルセー又「それは少し違います。私はわたくし「人々に危害を加えること

が許せない」だけです」

アルセーヌは小林の言葉に首を振りながら言った。彼女の表情からして本当のことなのだろう。

小林「だから近頃の怪盗は人々に危害がないようにしているのか・・・」

アルセーヌ「そうです、それが怪盗としての「美学」ですから。・・・
・それではそろそろ失礼させていただきますわ」

小林「ま、待て!!」

アルセーヌ「ごきげんよう・・・」

小林「くっ」

小林はとっさにアルセーヌに向かって走り、とらえようとした。しかしアルセーヌは消えてしまった。

コーデリア「消えた・・・?」

シャロ「これがアルセーヌのトイズ・・・なんでしょうか?」

エリー「多分・・・」

あたりはしばらく沈黙に包まれた。ビル爆破は免れたものの「アルセーヌ」という怪盗の首領の存在も明らかになったのだ、驚いてしまつのも無理もない。

ネロ「ねえ小林・・・？」

小林「ん？」

そんな中ネロが突然小林に話しかけた。シャロ達はネロが何を言うのか静かに見つめ、小林もネロが何を言うのか気になった。あたりの沈黙はさらに増した。先ほどまで強かった風ですら今は弱い。そしてネロが口を開いた。

ネロ「お腹すいちゃった」

小林「・・・え？」

ネロ「だからお腹すいちゃったよ」

小林「・・・」

ネロ「・・・」

小林「（この緊張感は何だったんだ!!）」

心の中で静かに小林は叫んでいた。

ネロ「おかわり！」

おばちゃん「はいよ」

ネロの声が響いたそこは探偵学園の近くにある食堂、そこに小林達
はいた。

小林「（今回の事件はネロのファクターがあつたからこそ解決でき
た。だからネロのお願いでここにきたけど・・・）ネロ、それで何
杯目だい？」

ネロ「にょん杯目！」

コーデリア「四杯目って言うてます・・・」

小林「ちょ……（これ……経費で落ちないかな……）」

シャロ「ネロよっぽどお腹すいてたんですね」

エリー「でも……うれしそう……」

小林「ネロ、少し食べすぎじゃないかい？」

たくさん食べるネロにみんな驚いていた。小林の場合は財布の中が
一気にさびしくならないか心配なようだ。するとネロは小林を見た。

ネロ「いいんだよ、成長期だから。それに小林が言ったんでしょ？
おごってくれるって」

小林「まあそれはそうだけど……」

ネロ「ねえ、小林？」

小林「ん、なんだい？」

ネロは小林を呼ぶとじっと見つめた。とてもきれいな瞳だ。

小林「なにかついてるかい？」

ネロ「……なんでもないよ。さあて今度は何を頼もうかな
」。全部小林のおごりだしね！」

小林「うう・・・」

そのあとの会計で小林の悲鳴が学園まで響いたのは言つまでもなかった。

第十七話 追い詰められたラットと女怪盗登場!?(後書き)

エリー「逃げられて・・・しまいました・・・」

まあ仕方ないよ、みんなよく頑張ったよ

エリー「それにしてもネロは・・・よく食べていました」

彼女の特徴は「元気」だからね。ちなみに次回はエリーさんがヒロインだよ

エリー「わ、私ですか?は、恥ずかしい・・・/ / /」

エリーさんファンの方は要望があればいつでも待ってますよ(笑)

第十八話 発見！泣いている男の子（前書き）

さあ新しい章ですよ！！

「コーデリア」今回は泣いている子ですか？

きっかけはね

第十八話 発見！泣いている男の子

小林「・・・あの・・・これは一体どういう状況だい？」

エリー「あ、小林さん・・・お待ちしていました」

困った表情の小林をエリーが素晴らしいほほ笑みで迎えた。エリーの近くには5・6歳と見られる男の子がいた。目が赤くいところをみるとさっきまで泣いていたのだろう。

小林「PDAからも泣き声は聞こえていたけど・・・誰か解説してもらえないかな？」

コーデリア「えつとですね・・・最初にエリーがこの男の子が泣きているのを見つけて・・・」

ネロ「話そうとしたらずつと泣いてて・・・」

シャロ「どうしようかと迷った結果、先生にPDAで連絡しました！」

小林「なるほどね・・・って僕はそんな状況で呼ばれたのかい！？」

小林は驚いた。状況が状況だけに驚くのは無理もない。時は30分

前のこと・・・

。。。。。。

小林「あ、PDAに連絡か誰だろう?」

小林はPDAをとり送り主を調べた。そこにはシャーロックと書かれていた。

小林「シャーロック・・・一体どうしたんだらう?」

小林はPDAを操作して出た

小林「はいもしもし?」

シャロ「あ、先生ですか!?」

小林「ああ、そうだけどうかし・・・」

シャロ「泣いてるんです!」

小林「え？」

シャロ「男の子が泣いてるんです！」

小林「ごめんシャーロック、詳しく……」

シャロ「ヨコハマ湾の近くのパン屋さんの前です！」

小林「わかった、そこにいけば良いんだね？」

シャロ「はい、お願いします！！」

ということがあったのだ。

コーデリア「せめてなんで泣いてるかだけでも分かればいいんですけど……」

小林「なんで泣いているか……ん？」

考えようとした時、小林はあることに気付いた。

エリー「どうか……しましたか？」

小林「分かったよ」

エリー「はい？」

小林「分かったのさ、この子がなんで泣いているかがね」

コーデリア「本当ですか!？」

小林「ああ、この子の名前は分かるかい？」

ネロ「リクって言うらしいよ」

小林「そうか、リク君？」

小林は優しい表情で膝を曲げてリクと同じぐらいの高さになってリクを覗き込んだ。

小林「リク君はあの家で何かがあって泣いているんだよね？」

リク「え、なんで・・・」

小林「だってリク君、さっきからあの家ばかりを見ているよね？だからあの家に何かあるのかなって思ったんだ」

リク「凄い・・・」

小林の推理にリクは目を輝かせた。「凄い!」と瞳で言っていた。

シャロ「凄いでしょ！この人は名探偵さんなんだよ」

ネロ「自称「元」だけどね」

小林「おいおい・・・」

シャロが笑顔で言っつてネロは舌を出してイタズラな顔で言う。小林は苦笑いだっつた。

コーデリア「でもなんでしゃがんでリク君に話したんですか？」

小林「自分より高い人と話すより同じ高さの方が怖がらないだろうか？だからさ」

コーデリア「なるほど・・・」

エリー「流石小林さんです」

小林「ははは、ありがとう。ところでリク君、あそこで何があったんだい？」

小林は改めてリクに聞いた。するとリクはゆっくりと口を開いた。

リク「あそこで・・・お兄ちゃんが消えちゃった・・・」

小林「消えた？はぐれたってことかい？」

リク「・・・うん」

シャロ「あ！」

リクは小さく頷いた。すると突然シャロが叫んだ。

シャロ「思いだしました！」

小林「思いだしたって何をだい！？」

シャロ「・・・出るんです」

小林「・・・はい？」

シャロの言葉に小林は固まった。

小林「でるって・・・何が？」

シャロ「あそこの家に出るんです」

小林「だから何がだい？」

シャロ「あたしにも分かりません！」

小林「ええ!？」

小林はさつき以上に驚いた。突然出ると言って何がかを尋ねると分からないという答えが返ってくる。しかもシャロはいたって真顔。驚くのも無理はない。

小林「ちよつと分からないって・・・」

シャロ「だって分かるわけじゃないですか、幽霊の正体なんて！」

小林「ゆ、幽霊？」

ネロ「近頃クラスの間で話題になってるんだよ。丘の上の家・・・まあ洋館に幽霊が出るって」

小林「そういうことか・・・」

小林はネロの捕捉でようやく理解できたようだ。

リク「僕、あそこの家でお兄ちゃんと宝探ししてて・・・それで気付いたらお兄ちゃんが消えてたんだ」

小林「なるほど、やはりあの小屋には何かがあるんだ。」

エリー「これは・・・行ってみるしか・・・なさそうです」

小林「そうだね、リク君のためにも行って調べる必要があるようだ」
ネロ「でもリクはどうするのか」

コーデリア「あ、私がリク君を学園に連れていくわ。館さんに預かってもらいましょう」

小林「それじゃあコーデリア、頼むよ」

コーデリア「はい、さあ行きましようリク君」

リク「うん」

コーデリアはリクを連れて学園へ向かった。

小林「僕たちはコーデリアが帰ってくるまで待っていようか」

シャロ「そうですね」

こうしてミルクィホームズは洋館へ向かうことを決定した。

第十八話 発見！泣いている男の子（後書き）

ということで次回から本格的に始まりますよ

「コーデリア」ということは作者さんがファクターも考えるんですね

・・・ですね。また大変だあ・・・

「コーデリア」でも頑張ってくださいよ！」

第十九話 怪しい洋館の秘密（前書き）

さあ、いよいよ洋館に入りますよ

シャロ「そ、そ、そうですね」

あれ、どうしたのシャロ？

シャロ「え、いえ、あ、ぜ、全然こ、怖くなんかありませんよ。ほ、ほら！」 わけのわからない踊りを踊る

あ、怖いんですな

第十九話 怪しい洋館の秘密

リクという少年のお兄さんを探すため、小林率いるミルキイホームズはその現場である「怪しい洋館」へと向かった。

小林「ここがその洋館か・・・」

シャロ「結構・・・暗いですね」

エリー「う、うん」

ネロ「それに意外と大きい」

小林「そうだね」

洋館を見てそれぞれに反応するメンバーたち。すると

コーデリア「教官、お待たせしました」

小林「あ、コーデリア」

コーデリアが戻ってきた。

小林「リック君はどうだった？」

コーデリア「学園に館さんがいらっしやっただんで預かっていたきました」

小林「そう、それは安心だ」

コーデリア「それにしても・・・遠くから見るとより大きいですね」

小林「ああ」

コーデリアが洋館を見ながら言った。洋館は二階建てではあったが周りは雑草が生えており、窓も木の板でふさいでありお世辞にも感じのいいところとはいいにくい感じだった。

シャロ「せ、先生？」

小林「ん？」

シャロ「ほ、本当には、入るんですか？」

小林「そうだけど・・・ってシャーロック、まさか・・・怖いのかい？」

シャロ「・・・はい」

エリー「私も・・・怖いです」

小林「エルキュールも!? ってことはネロとコーデリアも・・・」

小林は不安そうにネロとコーデリアを見た。

ネロ「あ、それなら僕は大丈夫だよ」

コーデリア「私もトイズがあるので大丈夫です」

小林「そうか・・・よかった。それじゃあ行こうか」

コーデリア「はい」

ネロ「だね」

シャロ「あううやっぱり入るんですね・・・エリーさん、頑張りましょうね」

エリー「う、うん」

そして小林達は洋館のドアの前へと向かった。しかし

コーデリア「このドア、カギがあるわ。どっやってあけたら・・・」

小林「その心配はないよ」

コーデリア「え？」

小林がドアの前に立ってドアを押した。するとドアはすんなりあいた。

コーデリア「ドアが・・・あいてる？どうして分かったんですか？」

小林「リク君のような子供でも入れたんだ。ということはドアは開いているってことにつながるだろう？」

コーデリア「なるほど」

ネロ「不用心だなあ」

小林「確かにね、さあ入ろう」

小林達はそのまま館内へと入った。

館内

小林「ここが中か・・・」

コーデリア「結構暗いですね」

ネロ「なんか出てきそう」

シャロ「ネ、ネロ!?!」

エリー「そ、そんなこと言わないでください」

シャロとエリーがネロの言葉に怖がったその時

ガシャン!!

エリー「!?!」

シャロ「ぎゃあああああ!?!」

突然ドアが閉まった。そのことで部屋の明るさは下がり少し暗くなった。その瞬間驚いたシャロとエリーが飛び上がりシャロは悲鳴をあげた。

シャロ「いいい、今ドアが閉まりました!?!」

エリー「ややや、やっぱり・・・おばけでしょうか・・・」

シャロとエリーは怖がってお互いに小林にひつついて言った。言葉からも分かる通り二人はおびえており、少々涙目だ。

ネロ「違うよ、勝手にしまったんだって」

シャロ「勝手にって……やっぱりおばけー!」

コーデリア「おばけなんかじゃなくてドアが古くて勝手に動いただけよ?」

エリー「えっ?」

シャロ「本当……ですか?」

シャロとエリーがドアを見た。するとドアは確かに古く、今でも小さく「ギィ、ギィ」と音を立てていた。

シャロ「ほ、本当に古かっただけなんですネ」

エリー「良かった……」

小林「あはは……」

シャロとエリーは「ふう」と胸をなで下ろす。そんな彼女達を見て小林は苦笑いだった。

小林「それじゃあ早速中を調べようか」

ネロ「そうだね、手分けして探そう」

コーディリア「えっと、とりあえず大丈夫なのは私とネロ、教官ですから・・・どう分けましょうか？」

小林「コーディリアはトイズで暗い所も見えるんだよね？」

コーディリア「はい」

小林「僕もコーディリアを待ってる間にこの懐中電灯を買ったから大丈夫。つまりコーディリア班と・・・」

コーディリア「教官の班ができますね」

小林「そういうこと、あとネロは・・・」

ネロ「ボクはコーディリアにつくよ。小林は一人でも色々見つけそうだし、何よりコーディリアはすぐ暴走するからね」

コーディリア「なっ、私はそんなに暴走しないわ!」

ネロ「さあ〜て、どうだか？」

小林「まあまあケンカしないで・・・」

ネロの言葉にコーディリアが怒ろうとするが小林がそれをなんとか抑えた。

小林「あとはシャーロックとエルキュールだけ……」

ネロ「この二人は分けるべきでしょ、ボクたちだけで二人は無理だよ？」

小林「まあ確かに人数は分けた方がいいね」

ネロ「それじゃあシャロもエリーもじゃんけんして。勝った方がボクたち側ね」

エリー「う、うん」

シャロ「最初はグー、じゃんけん……ポン！」

じゃんけんで出したのはシャロが「チョキ」でエリーが「パー」だった。

ネロ「はい決まりだね、シャロがボクたちの方だ」

シャロ「うん」

小林「エルキュールはこっちだね」

エリー「はい」

シャロはネロとコーデリアのそばに、エリーは小林のそばに移動し

た。

ネロ「それじゃあある程度回ったらまたここに集合、でいいよね？」

小林「ああ、何かあったらPDAで呼んで。」

ネロ「分かった」

コーデリア「それじゃあ行きましょう」

シャロ「えっ、早速ですか!?!」

コーデリア「もちろんよ、早くリク君のお兄さんを探さなくちゃならないんだから!さあ行くわよ!」

シャロ「わあ!?!」

コーデリアはシャロを引つ張りながら行った。ネロは小林に「じゃあね」というように手を上げたかと思うとすぐに下げて二人を追いかけた。

小林「それじゃあ僕達も行くのか、エルキュール？」

エリー「はい」

エリーは小林の服の裾を握ると小林にひつついた。そして洋館の内

部を調べ始めた。

第十九話 怪しい洋館の秘密（後書き）

というわけで次回の予定はフアクター探しです

シャロ「こ、怖くなんて・・・」

強がつてるシャロもかわいいなあ 次回はおばけが出てくる・・・
かもね

シャロ「えええー!? あ、あたしずっとここ（前書き&後書き）
にいます!」

それは無理だ（笑）

第二十話 洋館でファクター探し（前書き）

さあいよいよファクター探しです。

ネロ「これはボクの大活躍間違いなしかな」

いや今回の事件はエリーさんが主なんだけど…

第二十話 洋館でファクター探し

小林チームとコーデリアチームに分かれてリク君のお兄さんの手掛かりを探すため洋館内を調べ始めたミルキイホームズ達。小林チームは1階、コーデリアチームは2階を調べていた。

【小林チーム】

小林「エルキュール、何か見つかったかい？」

エリー「い、いえ何も・・・」

小林「そうか・・・」

小林達はある個室を調べていた。少し小さめの子供部屋のような広さの部屋だ。

小林「ん〜ここが最後なんだけど・・・」

実は小林達はもうすでに1階の部屋は見回っていて、あとはここだけ、という状態だった。

小林「ここに何もないとすると2階になにかあるのかな・・・」

エリー「・・・あ、小林さん」

小林「ん、なんだい？」

小林はエリーに呼ばれてアリーの元へ来た。するとエリーは壁を指した。

エリー「これは何かの暗号じゃないでしょうか？」

小林「暗号？」

小林が近づいてよく見てみる。するとそこにはこう書かれていた。

「押右日引左昇」

小林「読み仮名をつけて読むと読むと・・・」押す、右、日、引く、左、昇る「か・・・」

エリー「どうでしょうっ」

小林「まだ確信はできないけどおそらく何かの暗号だね。これはメモに取っておこう」

エリー「はい・・・きゃー」

小林「わっ！」

小林がポケットからメモを取った瞬間、エリーはバランスを崩して小林にもたれた。小林は倒れずその場にとどまったためエリーが小林に抱きついたようになってしまった。

エリー「す、す、す、す、す、す、すいません！！！」

小林「あ、僕は全然大丈夫だけど・・・エルキュールは大丈夫？」

エリー「あ、はい」

エリーはまだ小林の胸の中のことを忘れて答えた。と同時に今の自分の状態を思い出した。

エリー「あ、あ、あ、ご、ごめんなさい」

小林「あ、うん。まあ落ち着いて」

エリー「は、はい」

エリーは急いで小林から離れた。

エリー「すみません、寄り掛かったりして・・・」

小林「いいよ別に、そんな謝るようなことじゃないよ。エルキュー
ルが倒れなくてよかった」

エリー「本当にすみません、今首に冷たいものが当たって・・・」

小林「冷たいもの？」

エリー「はい、まるで水のような・・・」

小林「んゝ・・・ってことはあれが原因かな」

エリー「あれ？」

エリーは小林が指をさした方を見た。そこは天井だった。

エリー「天井・・・ですか？」

小林「そうだよ、あそこを見て」

エリー「・・・あ」

エリーの目の先には天井に空いた穴があった。そこからは水がポタ、
ポタと落ちていた。

エリー「雨漏れですか？」

小林「多分ね、あそこから落ちてきた水が君の首に落ちたんだよ」

エリー「そうだったんですね、流石・・・小林さんです」

小林「ははは、ありがとう。他にも何かないか探してみようか」

エリー「あ、はい。でも・・・」

小林「でも？」

小林はエリーが何を言いたいのか分からず「でも」というエリーの言った言葉を復唱した。するとエリーは赤くなりながら

エリー「小林さんの近くがいいです」

小林「あ、そっか怖いんだったね。それじゃあ一緒に探そうか」

エリー「・・・はい！」

エリーは小林の近くに行った。

そのころ、コーデリア達は・・・

コーデリア「そっちは何か見つかった？」

ネロ「なぐんにも、シャロの方は？」

シャロ「あたしの方も・・・ないですね」

1つの部屋で手がかりを探していた。しかしこの屋敷、2階の方が部屋の数が多くこのままだと文字通り日が暮れてしまいそうだった。そこで・・・

コーデリア「やっぱり手分けして探しましょう」

シャロ「えー！？」

ネロ「そうだね、それしかなさそうだし」

コーデリア「それじゃあ私はあの部屋を探すわ」

ネロ「じゃあボクはこっちにしよう」と

シャロ「ホントに手分けするんですか？」

コーデリア「そうしないといつまでたっても終わらないわ。幸いこの明かりがあるんだし大丈夫よ」

ネロ「そうそう、いざとなったらボク達が駆け付けるから」

コーディネリアは見つけたランプをシャロにわたし、ネロはウインクしていった。2人の意見は間違っていなかったのだ・・・

シャロ「・・・分かりました」

シャロはしぶしぶ移動した。それと同時にネロとコーディネリアもそれぞれの部屋へと向かった。

【コーディネリアの行った部屋】

コーディネリア「さて、ここね」

コーディネリアは部屋に着くなり早速調査を始めた。本棚の上や窓のカーテン、更にクローゼットも調べた。するとあることに気付いた。

コーディネリア「この部屋・・・」

- ・ところどころが妙に黄色い
- ・おふだが多い
- ・カップめんが置いてある

コーディネリア「……なんでカップめんが置いてあるのかしら?とにかくこれは教官に聞かないとダメね」

コーディネリアは上の3つをメモに書き留めると「ネロは平気なようだけれど、シャロは大丈夫かしら?」と言いながらシャロの元へ向かった。

【ネロの行った部屋】

ネロ「なんかないかな?もぐもぐ……」

ネロは調査をしていた……がお菓子、「モッキー」を食べていた。

ちなみにモツキーはクツキーで作られた棒にチョコをつけた手軽に食べれるお菓子である。

ネロは自身で見つけた懐中電灯を使い調査していた。

それから数分後、ネロは怪しい部分をいくつかにまとめた。

ネロ「とりあえずは・・・」

- ・電波時計
- ・テレビ
- ・携帯電話

ネロ「この3つが怪しいね。とりあえず小林に伝えようかな」とその前にコーデリアは大丈夫だと思うけどシャロが心配だからシャロのところに行こうかな」

そういつとネロもまたシャロの元へと向かった。

【シャロの行った部屋】

シャロ「うゝ、やっぱり怖いですう・・・」

シャロはあたりをきよろきよろしながら部屋を見ていた。明かりがあつて目の前が見える、でも怖いのだ。その恐怖に耐えること数分、シャロは部屋を見終わった。

シャロ「うゝん、怪しいところはいくつかありましたけど・・・」

見つけた怪しいもの

・水着

・ドレス

・マント

シャロ「うん、どれが重要なファクターなんでしょうか……」

シャロが頭を悩ませていると……

コーデリア「シャロ」

ネロ「大丈夫？」

シャロ「あ、コーデリアさん、ネロ」

2人がシャロの元へ来た。

コーデリア「何か見つかった？」

シャロ「はい、一応は……」

ネロ「じゃああとは小林にそれを報告しに行こう！」

シャロ「コーディネリアさん達も見つかったんですか？」

ネロ「いくつかね」

コーディネリア「それじゃあ行きましょう」

コーディネリア達は小林の元へ向かうために階段を下りた。

第二十話 洋館でファクター探し（後書き）

というわけでした。

ネロ「ホントファクター探ただけじゃん！」

だから言ったでしょ、ファクター探して。

第二十一話 推理開始！つながるファクター達（前書き）

いよいよ推理です！！

エリー「怖い……ですか……？」

いやまあ怖くはない……とか断言は……

エリー「怖いんですね……」

そんなにはないよ

第二十一話 推理開始！つながるファクター達

ファクターと思われるものを発見したコーディネリア達は1階にいる小林に報告するため階段を下りた。すると

コーディネリア「あ、教官！」

階段をおりた所にちょうど小林とエリーがいた。

小林「コーディネリア、それにシャロとネロも。もしかして……」

エリー「何か……見つけたの？」

ネロ「まあね、見つけたのは……」

シャロ「重要なファクターです！ただ……」

シャロは自信満々な表情で言った。しかし

シャロ「それがいくつかあって……どれが重要なファクターかが分からなくて……」

ネロ「んで小林にみてもらおうかなってさ」

小林「なるほどね」

シャロは上目遣いで、ネロは少し舌を出しながら言った。その二人の言葉に小林は納得した。

コーデリア「お願い出来ますか？」

小林「もちろんだよ、それでそのファクターっていうのは？」

シャロ「あ、じゃああたしから良いですか？」

小林「うん、いいよ。じゃあシャーロック、君の見たものを教えてくれ」

シャロ「はい、あたしが見つけたのは・・・」

- ・水着
- ・ドレス
- ・マント

シャロ「なんですけど・・・」

小林「うん、シャーロックはどれが怪しいと思うんだい？」

シャロ「え、あたしですか？あたしはやっぱり……これが怪しい
と思います」

そう言っつてシャロが指した先にあったもの、それは

小林「なるほど、「マント」だね」

シャロ「はい。水着は夏に使いますしドレスもパーティで使ったり
します。でもマントは使う時がないんです」

小林「確かにそうだね、でもシャーロック、マントは使う時、ある
よ」

シャロ「え、いつですか!？」

小林「肝試し」さ」

シャロ「き、肝試しですか……?」

小林「うん、あれならマントは使うことあるよね?」

ネロ「たとえば……お化けの格好に……とか?」

小林「そういつところだね」

確かに肝試しでは変装のためマントを使う、ということも考えられ

る。もつとも普通そんなことは考えないのだがこの「小林オペラ」はそこまで考えるのだ。

シャロ「じゃあ先生はどれが怪しいと思いますか？」

小林「僕はまだ判断できないかな、みんなのファクターも聞いてないし……」

シャロ「えっ、ええ〜！？そ、そんなのズルいですよあ、あたしは今判断したのに〜」

小林「あ、確かに……ごめんよ、シャーロック」

シャロ「ブウ〜」

小林「そ、そんな怒らないで……」

シャロ「……フフ」

膨れるシャロにタジタジの小林。するとシャロは少し笑った。

小林「シャ、シャーロック？」

シャロ「フフフ、安心して下さい先生ウソですよ。あたし怒ってないじゃないよ」

小林「ホントかい？」

シャロ「はい、先生にイタズラしたくなっちゃって……だましちやっでごめんなさい」

小林「それなら良かった。でも今度からはダメだからね？」

シャロ「はい、でも先生の反応面白かったです」

小林「全く、この子はこりてるのかこりてないのか……」

シャロの反応に苦笑いの小林だった。

小林「それはさておき、今度は……」

ネロ「はいはい、ボクがいくよ」

小林「うん、それじゃあネロが探したファクターらしきものはどれだい？」

ネロ「えつとね……」

- ・電波時計
- ・テレビ
- ・携帯電話

ネロ「だね」

小林「なるほど、全てが電子機器か・・・」

ネロ「そういうことだね・・・もぐもぐ」

小林「また君はお菓子を？」

ネロ「だってしょうがないでしょ、探したら小腹がすいちゃったんだ」

小林「そ、そう・・・」

ネロは小林の視線を無視して黙々とお菓子を食べ始めた。

小林「お菓子の世界に行ったネロは簡単には戻ってこないからな・・・」

コーデリア「それじゃあ私の見つけたものを見て下さい」

小林「いいよ、それで・・・見つけたものは？」

コーデリア「えっとですね・・・」

- ・ところどころが妙に黄色い
- ・おふだが多い
- ・カップめんが置いてある

コーディネリア「……の以上です。」

小林「そうだね……これは少し難しいな……」

シャロ「あう、先生でも難しいんですね」

ネロ「こりゃG4呼んだ方がよくない？」

コーディネリア「ダメよ、今回の事件は大切だけど警察の方に」ご迷惑をおかけしたらいけないわ」

エリー「警察の方も忙しいですから……」

4人が話している間コーディネリアからのファクターに小林は頭を集中させた。

小林「（これらのファクターはどれも怪しい……くっ、本当に難しいな……）ちょっと現場で見てくるから君たちはここにいてくれるかい？」

エリー「あ……はい、分かりました、あの……気をつけて下さいね、お化けがでたら危ないですから」

小林「心配ありがとう、それじゃあちよっど行ってくるね」

小林は他のメンバーが一先懸命に話していたので伝えやすいエリーにそういつと階段を上がっていった。

小林「まずはここかな」

小林は手に持った懐中電灯で照らしながらシャロの調べた部屋に入った。そこにはマント、ドレス、水着があった。

小林「これが」

小林はそう言いながら水着に触った。するとあることに気付いた。

小林「あれ、これは・・・？」

小林はもう一度触り確認した。しかし結果は同じだった。

小林「だとすれば・・・」

小林はマントとドレスに触った。すると何か分かった顔でになった。

小林「なるほど、これで分かった。あとは・・・」

エリー「きゃあああああ」

小林「これは、エルキュールの声!？」

小林は急いで1階へと降りた。そしてエリー達ミルキィの四人がいるはずの部屋に行った。すると

コーデリア「あ、教官おかえりなさい」

ネロ「何か分かった？」

小林「何か分かった?じゃないよ、エルキュールは!？」

コーデリア「エリー・・・ですか?」

小林「そう、エルキュール!!今叫び声が・・・ってあれ?」

必死に言う小林の目の前には泣いているエリーがいた。

小林「エ、エルキュール、どうしたんだい!？」

コーデリア「それが・・・」

シャロ「さっきいきなり音がしたんです。プルルルって！」

小林「プルルル・・・？それって携帯じゃないのかい？」

コーデリア「そうなんです。実はさっきネロが見つけた携帯をネロが持ってきていて・・・」

ネロ「それがなっただよ」

小林「なるほどね」

コーデリア「それでシャロとエリーがおびえてしまって・・・」

シャロ「だ、だっていきなり音がしたんですよ？ビックリしますよ」

エリー「う・・・うん」

泣きながら答えたエリー。そんなエリーを見て小林は優しくエリーに話しかけた。

小林「大丈夫だよ、エルキュール。もう大丈夫、みんながいるから・・・ね」

エリー「は・・・はい」

優しい小林を見てエリーはほほ笑い泣きやんだ。

小林「シャーロックも、もう大丈夫だから」

シャロ「・・・はい！それにしても怖かったです。ね、エリーさん？」

エリー「本物のお化けの声かと思いました」

小林「お化け・・・？」

エリー「はい、怖くて逃げそうに・・・」

小林「怖くて逃げそう・・・逃げそう・・・そういうことか！！」

エリー「え？」

小林「分かったよ、君たちの見つけてくれたそれぞれのファクターが！！」

コーデリア「本当ですか！？」

小林「ああ、それじゃあ説明しようか。まずシャーロックの見つけた三つの衣服、あれのファクターは「水着」だ」

シャロ「なんですか？」

小林「あの水着、水に濡れていたんだ」

シャロ「それなら水泳の帰りと考えれば怪しくなんて・・・」

小林「じゃあシャーロック、この家に人は住んでいるかい？」

シャロ「いえ、無人の洋館だから人はいな・・・あ！」

小林「そう、人がいないのに濡れた水着がある。つまり水着は最近使われたんだ。矛盾しているだろう？」

シャロ「はい！」

小林「そしてネロの見つけた携帯電話、あることをチェックするため見せてくれるかい？」

ネロ「いいよ、はい」

ネロは小林に見つけた携帯電話を渡した。すると小林は携帯を操作した。それから数秒後

小林「やっぱりね」

ネロ「何がやっぱりなのさ？」

小林「これを見てごらんよ」

ネロ「「発信履歴」・・・あ、今日の日付がある!？」

小林「そう、つまり今日、この携帯を使って電話をしてるんだ。無

人の洋館でそんなことがあるのはおかしいだろう?」

ネロ「確かに・・・これはおかしいね」

ネロも小林の意見に納得に意を示した。

小林「だろう、そして最後のコーデリアの見つけたもの・・・そのファクターはおふだじゃないかな?」

コーデリア「おふだ・・・ですか?」

小林「うん」

ネロ「理由は?」

小林「さつきこの洋館に入る時、シャーロックは「暗い」って言うてたよね?」

シャロ「はい」

小林「外は雑草だらけで窓には木の板で塞いである、人が近づこうとはしないだろう。おふだは雑草や木の板と同じ「人を寄せ付けない」ために張ってあるんじゃないかな」

エリー「ワザと不気味にしている・・・ということですか?」

小林「まあそういうことだね」

エリー「でも・・・それが何を意味しているのかわかりません」

言い終わった小林にエリーが言った。その言葉に小林は苦笑いで答えた。

小林「あはは、確かにね。でもエルキユール？」

エリー「はい？」

小林「僕たちだって見つけたじゃないか、大事なものを！」

エリー「あっ！」

コーデリア「一体何なんですか？」

ネロ「二人だけにしか意味が通ってないよ」

シャロ「ずるいです〜」

この会話に3人はわけがわからず混乱していた。

小林「ああ、ごめんごめん。ちょっとこっちに来てくれるかい？」

小林は「ある場所」へと向かった。

第二十一話 推理開始！つながるファクター達（後書き）

エリー「・・・怖かったです」

ごめんよ、でも小林と仲良くやってたね

エリー「そ、それは・・・／＼／」

さて今回は「あの場所です」

エリー「ついにあの謎が分かるんですね」

YES!!

第二十二話 不気味な洋館の謎（前書き）

今回は結構事件の核心に近づく？

コーデリア「なんで？（クエスチョンマーク）なんですか？」

だって核心かどうか怪しいような気が・・・

第二十二話 不気味な洋館の謎

シャロ、ネロ、コーディリアの見つけた「複数のファクター」を絞り、真のファクターを探した出した小林。そんな彼らミルキィホームズは「ある場所」へと来ていた。

小林「ここだね」

シャロ「ここって・・・」

ネロ「何かあるの？」

コーディリア「何かあるようには見えませんが・・・」

エリー「ここは・・・さっき小林さんと一緒に調べた場所・・・」

小林「そう、ここはさっき調べた部屋だ」

ネロ「でもさ、何もなさそうじゃない？」

小林「それがあるんだよ。エルキュール、さっきのメモをいいかい？」

エリー「あ、はい」

小林はさつきエリーと取ったメモをシャロ達に見せた。ちなみに明かりはランプがあるので少々明るかった。

シャロ「なんですか、これ？」

ネロ「何かの・・・暗号？」

コーデリア「でもよく意味がわからないわ」

エリー「小林さん、やっぱり私も分かりません」

そこに書かれた文字の意味が分からないシャロ達。そんな4人に小林は話し始めた。

小林「それじゃあ少しずつ考えてみよう。まずここにはなんて書かれているかな？」

ネロ「えっと「押右日引左昇」だね」

小林「うん、それじゃあ次にこの文字の意味は？」

シャロ「「押す」「右」「日」「引く」「左」「昇る」ですね」

小林「そうなる。最後にこれを見て何かに気付かないかい？」

コーデリア「そう言われても・・・」

小林「順番を変えてみるといいかもしれないね」

エリー「順番・・・あー!!」

シャロ「エリーさん、分かったんですか!？」

エリー「うん、もしかしたら・・・」

小林「それじゃあ、エルキュール、何を意味しているか言ってくれるかい？」

エリー「はい。まず最初の「押す」。これは後の「引く」と対義語です。更に次の「右」、これも「左」の対義語。つまり「押す」と「引く」、「右」と「左」はお互いに打ち消しあっています。そうなるという意味を持つのは「日」と「昇る」という言葉のみ。つまり「日は昇らせる」という意味です」

コーデリア「エリー凄いわ!!」

エリー「どうでしょう、小林さん・・・？」

エリーは不安そうな表情で小林を見た。おそらくは今言った自分の推理が当たっているか不安なのだろう。しかしそんなエリーに対して小林はほほ笑んでいた。

小林「正解だよ、僕の考えと同じだ」

エリー「ほ、ホントですか・・・？」

小林「ああ、同じさ。よくわかったね」

エリー「・・・はい!」

その瞬間エリーがこの洋館に入って初めて笑顔を見せた。

ネロ「でもさ、その「日」ってなんなの?」

コーデリア「そうね、やっぱり太陽のことかしら?」

小林「それは違うと思うな。シャーロック、君のその頭上らへんをこの懐中電灯で照らしてくれるかい?」

シャロ「あ、はい」

シャロは小林から懐中電灯を受け取りランプでは照らせてない天井を照らした。すると

シャロ「あ、雨もりしてます」

小林「雨もりしている雨の落下した場所を見てみて」

シャロ「はい」

シャロは雨もりしている場所の床を見た。そこには矢印が書いてあった。

シャロ「矢印があります」

小林「その矢印の先には何があるかな？」

シャロ「クローゼットです」

小林「それじゃあコーデリア、そのクローゼットに何かないかトイズを使って調べてくれるかい？」

コーデリア「はい」

小林からの指示を受けてコーデリアはトイズを発動、クローゼットを調べ始めた。

小林「（もし僕の予想が正しければ・・・）」

コーデリア「あ、何かあります。少し暖かいです」

小林「（やっぱりか）ネロ、そこに向かってダイレクトハックお願い！」

ネロ「了解！はあああ！」

ネロが少し暖かい場所にヘラを差しハックした。すると

シャロ「うわっ!？」

エリー「明るく・・・になりました」

部屋に明かりがついたのだ。

ネロ「なるほど、これが「日が昇る」ってこと?」

小林「そういうこと」

コーデリア「でもどうして・・・」

小林「他の部屋には蛍光灯は無かっただろう?でもこの部屋にはあったんだ。でもスイッチは見つからなかった。だからコーデリアに探してもらったんだよ」

コーデリア「そうだったんですか。そんなところに気づくなんて・・・」

シャロ「流石先生です!」

エリー「小林さん・・・凄いです」

小林は3人には誉められた。ここまで推理したのだから当然だろう。

しかし

ネロ「でもさ、日は昇っても何もなくなる？」

コーデリア「あ、そういえば……」

シャロ「変ですね、何か変化があってもおかしくないと思ったんですけど……」

エリー「小林さん……」

エリーは心配そうに小林を見つめた。しかし

小林「大丈夫だよ、ほら」

動じずに壁を指差した。そこには

ネロ「なにこれ？」

シャロ「光ってます！」

高さ2メートルぐらい、横1メートルぐらいの四角の線があり、まるで扉のようだった。

コーデリア「なかなか大きいわね」

エリー「小林さん、これは・・・？」

小林「反射板だよ」

ネロ「反射板？」

シャロ「それってなんですか？」

小林「光を当てると反射して光るように見えるんだ。ほら、よく交通安全の為に腕に巻く人がいるんだけど見たことないかな？」

シャロ「あ！あたしあります！車の明かりがあたるとピカーって光ってました！」

小林「そう、それだよ。それがここに張ってあるんだ。こんな形だね」

エリー「この形・・・」

コーデリア「形・・・？形がどうかしたの、エリー？」

コーデリアがエリーの発言に気づき聞いた。するとエリーは話し始めた。

エリー「ドア・・・に似てませんか？」

コーデリア「ドア？」

エリー「はい、この大きさ……ある程度の人なら通れる大きさです」

小林「いいところに目をつけたね、そう、これはドアさ。人が通るためのね」

ネロ「え！？」

シャロ「ここを人が通るんですか！？」

小林「そうだよ」

コーデリア「でもこれは壁ですよ？人が通るなんて……」

小林「こうすれば……どうだい？」

小林は反射板に囲まれた壁を少し強く押した。するとドアは「ギイイイ」と音を立てて開いた。

シャロ「凄いです！ドアになってます！！」

コーデリア「これは……一体どういふこと？」

ネロ「小林、何したのさ！」

小林「僕はただ押しただけだよ。ここは元々隠し扉だったんだ」

エリー「隠し扉ですか・・・でもなんで・・・」

小林「この洋館はさっき言った通り不気味になるように作られている。だから隠し扉があってもおかしくないって思ったんだ」

ネロ「なるほどね」

コーデリア「これまでのファクターが全てつながっているわ」

シャロ「先生凄いです!!」

小林「あはは、でもきっかけをくれたのは君田なんだよ?」

エリー「私達ですか?」

小林「ああ、みんなの行動の1つ1つがヒントをくれたんだ。ありがとう」

シャロ「えへへ、ほめられましたね」

ネロ「まあボクは頑張ってるしね」

コーデリア「もう、ネロ一人じゃないのよ!みんなよ、みんな!!」

小林「ま、まあケンカしないで・・・」

ネロの発言にカチンときたコーデリアを小林はなだめた。その時、

エリーが口を開いた。

エリー「ところで小林」

小林「ん？どうしたんだい？」

エリー「不気味な様子に隠し扉、もしかしてこれは……」

小林「エルキュールは気付いたみたいだね」

エリー「はい」

ネロ「何にさ？」

エリー「この洋館が不気味な理由……」

ネロ「理由？」

コーデリア「それは何なの？」

シャロ「知りたいです！」

3人は小林とエリーにグイグイ近づきながら聞いた。すると小林とエリーは少し苦笑いしながら答えた。

小林「わ、分かったから……エルキュール、お願いしてもいいかな？」

エリー「はい、この洋館が不気味にできている理由、それは……」
3人「それは？」

エリー「何か「宝物」が隠されているからです」

コーデリア「宝物？」

エリー「はい、……ですよね小林さん」

小林「正解だ。おそらくここには何か宝が隠されており、それを護るためにワザと人が近づかないような仕掛けを施したんだ」

シャロ「確かに、それならつじつまが合います」

ネロ「んでその宝がこの先にあると？」

小林「ああ、おそらくね」

コーデリア「それならばやく行きましょっつ」

エリー「はい」

こうしてミルクィホームズは暗い隠し扉の向こうへと足を踏み入れた。果たしこの先に彼女達を待つものとは!?

第二十二話 不気味な洋館の謎（後書き）

コーデリア「これから何があるんですか？」

それは秘密だね。でも予想外・・・じゃないかな？

コーデリア「予想外？宝があるんじゃないんですか？」

そんなにうまくいくと思うかい？

コーデリア「・・・そういえばそうですね」

第二十三話 お宝？それとも・・・？（前書き）

さあ、いよいよお宝！？

シャロ「わーい、お化けも終わりですうー」

・・・なわけがないんだな、これが

シャロ「しよんなあ〜」

まああとちょっとだから、ね！

第二十三話 お宝？それとも・・・？

全てのフアクターを結びつけ、隠し扉の存在を発覚させた小林。そんな彼率いるミルキィホームズは隠し扉の先にあった階段を先頭から小林、エリー、シャロ、ネロ、コーデリアの順で下りていた。

シャロ「く、暗いです。怖いです」

ネロ「そんなに怖がらなくてもいいんじゃない？」

コーデリア「そうよ、ただ階段を下りてるだけなんだから怖がる」とないわ」

シャロ「そ、それでも何か出てきたら・・・」

ネロ「その時はコーデリアが倒してくれよ」

コーデリア「そうよ、みんなは私が守るわ！！」

シャロ「コーデリアさん・・・」

コーデリアの言葉に感動するシャロ。とても怖い状況で「守ってあげる」と言われたシャロにとってはありがたいことばだろう。後ろ3人がそんな会話をしている中、先頭にいる小林とエリーはというと・・・

エリー「あの・・・小林さん・・・？」

小林「なんだい？」

エリー「この階段を下りた先には何かあるんでしょうか・・・？」

小林「分からないけど隠し扉を作ってまで隠したいものなんだろうね、かなり貴重なものじゃないかな。たとえば・・・財宝とか」

エリー「財宝・・・ですか？」

小林「ああ、宝箱みたいな箱の中にもものすごい宝物が入っているかもしれないよ？」

エリー「それは・・・すごいです」

小林「もしかしたら宝者じゃなくて面白い本がたくさんあるかもしれないね」

エリー「本ですか？ふふ、だとしたら早くおりたいです」

エリーは笑った。暗闇の中だが声だけでも楽しそうに聞こえる。そんなエリーの声を聞いて小林はホッとした。

小林「・・・少しは落ち着いた？」

エリー「はい・・・あ、もしかして小林さん、私が怖がらないように今の話を・・・？」

小林「怖いって気持ちに気を取られているとファクターを見つけないからね。それにエルキュールに怖いって思いをあまりさせたくないから」

エリー「ありがとうございます・・・落ち着けました」

小林「そう、それはよかった。」

コーデリア「・・・あ、教官！」

小林「ん？どうかしたかい？」

ネロ「この先少し明るくなってるよ」

シャロ「出口ですか？」

小林「そうかも知れないね」

エリー「行きましょう・・・」

小林たちは少し急いで明るい場所へと向かった。そして

シャロ「・・・なんですか、ここは？」

ネロ「曲がり角ばかりだね？」

エリー「どくなっているんじゃない？」

コーディリア「どう思われます、教官？」

小林「これは多分・・・」

????「まで」

小林「!？」

シャロ「だ、だれですか!？」

・ 小林が話そうとしたとき、ある人物たちが止めた。その人物とは・・・

コーディリア「あなたたちは・・・」

エリー「G4のみなさん・・・」

小衣「そうよ、G4よ!!」

次子「久しぶりだな」

咲「ビル倒壊事件以来なう」

平乃「お久しぶりです」

小林「ああ、久しぶり。・・・それで、なぜG4がここにいるんだ、神津？」

小林は神津を見ながらいった。それはけして睨んだりしているわけではなく、単になぜここにいるのかが知りたいという目だった。そして神津は答えた。

神津「実はな、この屋敷に近づいた人が消えるという不可解な現象が起きていてな」

小林「ああそれが、知ってるさ。僕らは今、ある男の子のお兄さんを探しているところだ。恐らくその現象が原因で消えたお兄さんね」

神津「そうか・・・実はな、その件に「怪盗」がかかっているかも知れない・・・だから我々はここに来た」

小林「怪盗が？」

神津「ああ「この洋館に近づいて行方が分からなくなる」というのが少し話題になっていてな。それが気になり独自で調査に来たわけだ」

小林「なるほど・・・」

小衣「それで調べようと中に入って調べてたらあんなたちがいたか

らついできたのよ」

シャロ「そうなんですか、こころちゃん！」

小衣「こ、こころちゃんっていうな!!」

小衣がシャロの「こころちゃん」という言葉に反応し怒る。ある意味普通の後景の中、神津が話を進めた。

神津「それで・・・なにか分かったのか？」

小林「まあね。・・・この先に何かがあるかもしれない」

神津「何か？」

小林「ああ、この洋館で様々なファクターを彼女たちが調べてくれたんだ。そしてその結果がここを示していたんだ」

神津「なるほどな・・・ではこちらからも情報を提供しよう」

小林「なんだ？」

神津「さっき言った「行方不明」の話しだがな、実はあれを怪盗の仕業ではないかと考えさせられる理由がある」

小林「それは？」

神津「この近くに「黄色い目の幽霊」が出るといふ噂があつてな」

小林「幽霊……?」

シャロ「ゆ、幽霊ですかあー!!???」

エリー「ゆ、幽霊……!?!?」

「幽霊」という単語に反応しシャロとエリーが驚く。そんな二人に小林は気づき……

小林「あ、まあ噂だから落ち着いて」

シャロ「ひゃ、ひゃい!」

ネロ「ちゃんと」はい」って言えてないし……」

コーデリア「……あら、エリーは?」

小林「エルキュールは……あ!」

エリー「う……」

小林の目線の先にはエリーがいた。しかし

コーデリア「気絶してますね……」

ネロ「よっぽど怖かったんじゃない？シャロよりひどく怖がってるよ……」

小林「仕方ない、背負って行こう」

小林はエリーを背負うと右手を右の壁につけてそれに沿って歩き出した。

シャロ「先生、なんで右手をつけながら歩くんですか？」

小林「ここはおそらく迷路状になっているからね。その時にこうして歩くと迷わずに、すべての通路を進めるんだ」

シャロ「なんでですか？」

小林「もし一直線の道がある場合右に沿って歩くと行き止まりの壁を曲がって進み元の地点に帰ってくる、それと同じで複雑な道も右か左に沿って進めば元の地点に戻ってくるんだ。全ての道を通ってね」

シャロ「なるほど！」

小林「ところで神津？」

神津「なんだ」

小林「なぜそんなに震えてるんだい……………こころちゃんは？」

小衣「こ、こころちゃんっていうなー!!」

小衣が小林に「こころちゃん」と呼ばれたことに対して怒った。しかしいつものとは少し違った。

神津「怖いんじゃないか、恐らく」

小林「ああ、なるほど」

小衣「そんな、警視まで…………べ、別に怖くなんか…………」

シャロ「こころちゃんも怖いんだね!!」

小衣「だから違つって!あと…………こころちゃんっていうなー!!」

咲「元気だねえ」

次子「ま、怖がつてるよりはいいんじゃない？」

平乃「ですね」

そんな会話をしながら小林達は迷路を進んで行った。そして…………

小林「ここは怪しいね」

エリー「うう……」

小林「あ、目が覚めたようだね」

ある場所へとたどり着いた。狭い道ながら奥には何かがあった。と同時にエリーが目を覚ました。

エリー「す、すみません！！私小林におぶってもらって……」

小林「いやいやそれは別にいいんだよ。それよりもう大丈夫？」

エリー「はい、大丈夫です」

そう言っつてエリーは降りた。

シャロ「あれって……宝物ですか!？」

コーディネリア「正確には今回の事件の鍵よ!！」

ネロ「やっと見つけた……」

エリー「何なのでしょうか……?」

小林「……あ、待つんだ!!!」

4人は興味深々でその「何か」に近づく。しかしそれを小林は止めた。

エリー「こ、小林さん・・・?」

小林「いくら見つけたからっていきなりその場所に行くなんて危険だ」

ネロ「あ、確かに・・・」

シャロ「この洋館何があるか分かりませんもんね」

コーデリア「全く警戒していなかったわ・・・」

エリー「すみません、小林さん」

小林「あ、いや、あの、僕はただ君たちに危険な目にあって欲しくないだけで・・・君たちが無事ならそれでいいんだよ」

エリー「小林さん・・・」

エリー「ありがとうございますと云った表情で小林を見た。もちろん他のメンバーもだ。そんなみんなの表情に小林は安心した。すると神津が来た。」

神津「小林、少しいいか？」

小林「ん、何？」

神津「実はな……」

小林「……それは本当かい!？」

神津「ああ、さっき見た。間違いない」

エリー「何か……あつたんですか……?」

小林「ああ、実は……」

????「フッフ……ご苦労だったな」

ネロ「な、なにこれ!？」

シャロ「声がします!!」

小林が話そうとした瞬間、突然の声に反応し、シャロとネロがあたりを見渡す。エリーやコーデリア、G4のメンバーもだ。しかし

小林「みんな、落ち着くんだ!」

神津「このくらいのこと騒ぐな!」

小林と神津は冷静に指示し、全員を落ち着かせた。

???「・・・いい判断だな」

小林「それはどうも。それで、姿を現わせばどうだい?」

???「そうだな、ではお目に掛けよう」

声がそういつと天井から影が降りてきた。恐らくその声の主だろう。影は小林達を見るなり言葉を放った。

???「私はストーンリバー、「怪盗」だ」

第二十三話 お宝？それとも・・・？（後書き）

シャロ「お化けはいなかったけど怪盗が現れたじゃないですか！」

そうですね〜どんな存在かは次回で！

シャロ「でもなんで来たんですか？」

そりやお宝のためでしょ

シャロ「なんか人探しと方向性が別々なような気がします・・・大丈夫ですか？」

イエス、大丈夫なんだよこれが。ちゃんと考えてあるから。

シャロ「それなら安心です。でもお化けは出さないでくださいね？」

分からないよ、だって黄色い目のお化けは出てきてないし・・・出てくるかもね

シャロ「それならやっぱりここにいますっ！」 前回も言っていました（笑）

第二十四話 宝をめぐり(前書き)

さて今回はストーンリバーとの会話ですね

ネロ「ねえお宝ってどうなるの？」

それは・・・どうなるんだろうね？

ネロ「・・・はあ」

第二十四話 宝をめくり

男の子のお兄さんを探すため怪しい洋館で調査を始めた小林達「ミルキイホームズ」。そんな彼らを待っていたのは「怪盗」だった。

小林「怪盗・・・だと？」

ストーンリバー「ああ、怪盗だ。アルセーヌ様のご命令によりこの宝は頂いていく」

ストーンリバーが箱に触れようとした。その時

バン！！

銃声が鳴りあたりは静まった。

小林「神津・・・」

神津「悪いな小林、だが怪盗が関わっていることが確認できた以上「警察」として対応しなければならぬ。こいつを包囲しろ！」

銃を撃った神津はG4に包囲するように指示、神津の隣に並んだ。

神津「ここは一方通行だ。貴様がこの迷路を抜けて地上へ出るためには俺達にいるこの道を通らなければならない。さて、どうする？ここを無理やり通るか、それとも諦めるか、無論我々は今から貴様を逮捕するがな」

ストーンリバー「ふ、どうやら少しは頭がさえるようだ。だが・
」

そういつた瞬間ストーンリバーが目をつぶる、それと同時にコーディアは危機感を感じた。

コーディア「みんな、何か来るわ！」

小林「（もしかして・・・）みんな目を閉じて！！」

小林の指示通りミルキイのメンバーは目を閉じた。

シャロ「うう・・・もう開けてもいいですか・・・ってええ！？」

シャロは徐々に目を開けて目の前を見た。そこには……

シャロ「こころちゃん!？」

G4のメンバー、こころが固まって倒れていた。まるで「人形」のよう。

シャロ「先生、こころちゃんが!」

小林「分かってる、これは恐らく奴の……ストーンリバーのトイズだ」

ネロ「トイズ!?!こんな能力のトイズがあるの?」

小林「聞いたことはある、人形化とは聞いてなかったけどトイズは謎の力だ。こんなことができてもおかしくはない」

ストーンリバー「ふふふ、よく免れたな。お前達の予想通り、私のトイズは「人形化」だ。この力でここにいる警察は人形とかした」

小林「く、神津まで……ん？」

小林は悔しそうな表情で神津を見た。そんな彼の視界にあるものが見えた。

小林「（あれ、でもこの銃の弾は……）」

ストーンリバー「私の……」

小林「!？」

ストーンリバー「私のトイズは一度使用するとしばし使えなくなる」

シャロ「ハイリクスハイリターンですね」

エリー「シャロ……それを言うなら「ハイリクスハイリターン」……」

シャロ「あ、間違えちゃいました」

ネロ「全く、シャロはこんな状況でもいつも通りか……まあシャロらしくていいけど」

小林「あはは……」

コーディネリア「……教官！ストーンリバーが動きます！」

小林「!?」

小林はコーディネリアの言葉に反応しストーンリバーを見る。するとストーンリバーは何かを持っていた。

小林「それは……刀？」

ストーンリバー「正確には木刀だ。……これならばトイズが使えずとも……アルセーヌ様の理想に反さずに戦える」

小林「（向こうは木刀か……くっ）」

ストーンリバー「さあ、覚悟し……むっ!？」

ストーンリバーが小林達に近づこうとした時、ストーンリバーの足元で変化が起きた。

ストーンリバー「な、なんだこれは!？」

エリー「小林さん、あれは……一体……?」

小林「分からない」

小林達の見ているもの、それは小林達に近づこうと歩み寄ったストーンリバーが謎の煙に包まれる、

そんな後景だ。

ネロ「今アイツ足元のスイッチみたいなのを踏んだよ」

小林「なんだって！？じゃあその影響か・・・」

ストーンリバー「くっくっくっ・・・」

小林「ん？」

煙が晴れて現れたのはストーンリバー、しかし先ほどとは何かが違う。違った。

シャロ「先生、何があったんでしょう？」

小林「まだ分からない、でも確実に言えることは・・・こういうことかなっ！！」

小林は走ってきたストーンリバーに向かって走り蹴りを入れた。そ

の衝撃でストーンリバーは倒れたがすぐに起き上った。

ネロ「何あれ、ゾンビ見たい」

小林「いいから、とりあえずここから逃げよう!」

小林達は来た迷路を戻った。

ストーンリバー「に〜がすかよ〜」

ストーンリバーはそれを追った。

—

エリー「ハア、ハア、小林さん」

小林「何、エルキュール？」

エリー「もしかしたら・・・怪盗ストーンリバーは今一種の催眠状態かもしれない・・・」

小林「催眠状態？」

エリー「はい、昔本で読んだんです。そのお話でも・・・こんな感

じでした」

ネロ「煙が出てからおかしくなったってこと？」

エリー「うん……」

小林「（はたしてエルキュールの言う通りなのか……）」

シャロ「先生！ストーンリバーが……！」

小林「えっ！」

小林は驚き後ろを振りむく、そこにはおかしくなったストーンリバーが徐々に近づいていた。

第二十四話 宝をめぐり（後書き）

というわけで次回VSストーンリバーです。

ネロ「サムライなんだ。僕のヘラで戦えないかな？」

そりゃ無理ですね。でも戦わなきゃいけないのは確かだよ

第二十五話 洋館での戦い（前書き）

いよいよ洋館編も終わりです。

エリー「長かったです」

そうだねえ、確認しておきますけど洋館編のヒロインはエリーさんです。

エリー「な、なんでそんなことを確認・・・するんですか？／／／」
いやね、書いてて最後のエリーさんかわいいなって思ったんでなんとなく（笑）

エリー「／／／」

第二十五話 洋館での戦い

突然の変な煙に包まれておかしくなってしまった怪盗「ストーンリバー」、そんな彼から逃げるため、今小林達は走っていた。そんな小林達に・・・

シャロ「先生！ストーンリバーが！！」

小林「えっ！」

ストーンリバーは確かに少しずつ近づいていた。

小林「（とりあえず足止めしないと・・・）この石の扉を・・・」

- ・ シャロ
- ・ ネロ
- ・ エリー
- ・ コーデリア

小林「エルキュール!!この扉を閉めて!!」

エリー「は、はい!!」

エリーがトイズを発動、その力により入り口付近にあった石の扉を閉めることに成功した。しかし

ストーンリバー「こんなものが・・・効くか!」

ストーンリバーは木刀で扉を粉碎した。しかしそれと同時に木刀も折れてしまった。

ストーンリバー「折れちゃったかあ、やっぱりこれしかねえよな」

そう言いながらストーンリバーが出したものは・・・

ネロ「ちょ、本物の刀!？」

小林「奴はサムライってことか!」

ストーンリバー「おらおら待てよお」

ストーンリバーが改めて追ってくる。今捕まれば完全にアウト、そう思ったミルクィホームズは一生懸命階段を駆け上がり逃げた。

小林「これじゃちがあかないな……ん、あれは……カーテン!?」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「シャーロック！あのカーテンで奴に目くらましだ！！」

シャロ「はい！！うぐんっ！！」

シャロは小林から指示を受けてカーテンを「サイコキネシス」で操りストーンリバーに投げつける。しかし

ストーンリバー「そんなもんくらつかよ！」

ストーンリバーは自身の剣でバツサリ切ってしまった。

シャロ「先生……」

小林「これでいいんだ、良い時間稼ぎができた。ありがとうシャーロック。次は……この部屋に入ろう！」

小林は1階の部屋に突入、そこには……

小林「やっぱりあった、電子ロックだ！！」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「ネロ！」

ネロ「分かってるよ！ほい！！！」

ネロは待つてましたと言わんばかりに勢いよくヘラを取り出し電子ロックに接続する。すると扉はロックされた。

ストーンリバー「くそ、ここか、はっ！はっ！」

エリー「小林さん、ストーンリバーが扉を壊しそうです・・・」

小林「だろっね、奴の剣の前ではこんなのは時間稼ぎだ」

エリー「じゃあどうして・・・」

小林「時間を稼ぐためさ、奴と戦うためのね」

エリー「え・・・？」

エリーの驚きの表情に対して少しほほ笑みながら答える。そんな中、
少しずつ扉は破壊されていた。

シャロ「先生、扉が！！」

小林「分かった」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「コーデリア!!」

コーデリア「はい!!」

コーデリアは小林からの指示を受けると構えた。そして

ストーンリバー「ケケケ、あいつらはどこだあ」

ついに扉を破壊したストーンリバーは部屋に入ってきた。そこには逃げも隠れもしないコーデリアがいた。

ストーンリバー「なんだあ、俺とタイマンで戦おうってか?」

コーデリア「はい」

ストーンリバー「ははは、やめとけ、やめとけ、どうせ素手じゃ・・・
ぐふっ!」

笑ったストーンリバーはいきなり腹部に凄まじい衝撃を感じ腹部を見た。そこには

ストーンリバー「お、お前……」

コーデリア「はっ……！」

コーデリアがいた。コーデリアが右ひじを腹部にぶつけて攻撃したのだ。その衝撃でストーンリバーは少々飛ばされた。

ストーンリバー「お前……なんだ？」

コーデリア「探偵学院の生徒です」

ストーンリバー「そんな奴が……」

コーデリア「はっ……！」

ストーンリバー「ぐあ……？」

ストーンリバーはいきなり腕を掴まれて投げ飛ばされた。

ストーンリバー「この野郎……調子に乗りやがって……！」

ストーンリバーはむきになりコーデリアに向かって走りだした。もちろん彼は剣を持っておりコーデリアは圧倒的に不利だった。

ストーンリバー「これで終わりだ!!」

ストーンリバーが剣を振りかざしコーデリアに向かって振り下ろした。しかし

小林「(いまだ!)」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「エルキュール!!」

エリー「は、はい!!」

エリーはコーデリアの前に立った。そして彼女のトイズが発動した。

ストーンリバー「ふん、俺の刀を止められるわけが・・・なに!？」

ストーンリバーは自身の目の前での出来事に驚いた。無理もない。なぜならただの「怪力」だけの少女が自身の自慢の刀を止めたのだから。

ストーンリバー「どうなっている!？」

小林「簡単なことさ、エルキュールのトイズは力量の上昇だけじゃない、硬化も含まれているんだ。だからお前の剣を受け止めることができたんだ。そして・・・エルキュール!!」

エリー「は、はい!!」

エリーはストーンリバーの胸元をつかんだ。これにおいては「力量」も上がっているのだから確かにつかめたようだ。

ストーンリバー「何を・・・!？」

エリー「えーい!!」

ストーンリバー「ぐあ!」

ストーンリバーはまたおどろいた。理由は簡単、ストーンリバーの世界がひっくり返ったからだ。そして数秒とたたないうちに「ドンッ!!」という音と共にストーンリバーは激しく床にたたきつけられた。

ストーンリバー「なんという力・・・」

小林「これがエルキュールのトイズの力だ」

ストーンリバー「流石・・・だな、小林オペラ。お前が・・・育てただけのことはある」

小林「僕はこの子たちを育ててなんかいない。この子たちが・・・自分たちで手にした結果だ、努力によって」

ストーンリバー「ふ、そうか」

ストーンリバーはそこまで言うと突然消えた。

ネロ「き、消えた!？」

シャロ「どこに行ったんでしょっ?」

コーデリア「分からないわ」

エリー「・・・何か聞こえませんか・・・?」

小林「ん?」

小林はエリーの言葉を聞いて

あたりを見渡す。すると本当に声が聞こえた。あたりを見渡す。すると本当に声が聞こえた。

ストーンリバー「見事だった。今回はお前たちの勝利で私の敗北だ」

小林「この声は・・・ストーンリバー!?!」

ネロ「一人称を聞くとどうやら戻ったらしいね」

コーデリア「でも一体どこ・・・?」

ストーンリバー「探しても無駄だ。私は闇と共にある。闇に消えこむなどたやすいことだ」

シャロ「じゃああなたは今回逃げるんですか!」

シャロが少し怒りながら言った。するとストーンリバーは「フツ」とほほ笑い答えた。

ストーンリバー「ああ、逃げる。今回は勝てないからな。安心しろ、今度決着をつける」

小林「G4はどうする気だ！あのままにして逃げるなんて卑怯だぞ！！」

ストーンリバー「ムッ、卑怯だと！？・・・あいつらは日の光に当てれば元に戻る」

小林「本当か！？」

ストーンリバー「嘘だと思えば実行しなければいいだけだ。ではな」

小林「ま、待て！！」

小林は少し興奮しながら言った。しかしその声もむなしく部屋に少し響くだけ、ストーンリバーの回答はなく、結局ストーンリバーの言葉を信じるしかなかった。

小林「逃げられたか・・・仕方ない。G4のみんなを助けに行こう」

シャロ「そうですね、早くこころちゃん達を助けてあげましょう」

ネロ「でも日のあたるって地下じゃ無理だよね？」

コーデリア「それもそうね、なんとかして地上に上げないと・・・
それにまだリク君のお兄さんを見つけてないわ」

小林「いや、それに関してはもう大体分かってるよ」

エリー「ホント・・・ですか？」

小林「それに地下にはまだ人形にされた人たちもいたんだ。多分その中にいると思う」

エリー「はあ、よかった・・・」

エリーは安心の吐息をした。心配していたのだろう、さっきの少し硬い表情が和らいだ。

コーデリア「でも警察を呼ばないと、これは立派な事件だわ」

「それに関しては、心配はいらない」

コーデリア「え？」

コーデリアはどこからかした声の方を見た。そこには

小林「神津！」

人形化されたはずの神津がいた。

シャロ「神津さん・・・人形になっていたんじゃない・・・」

小林「ストーンリバーのトイズ発動の瞬間目を閉じて人形化を回避、一応合わせるためにG4と一緒に倒れた・・・そうだよな、神津？」

神津「流石だな、その通りだ。今警察を呼んだ。時期にここに来るだろう」

小林「そうか、あとは人形化した人たちをどうやって運ぶかだけど・・・」

神津「なかなか数がある、ここにいるメンバーでやっても終わらんだろう。ましてや今から来る警察に運ばせれば人が多くなり逆に遅くなる」

小林と神津が「うん」と頭を悩ませているとネロが言った。

ネロ「それじゃあエリーのトイズの出番だね」

エリー「え、えー!？」

ネロ「そりゃそうでしょ、ボク達に運ぶ力はないし・・・エリーしかいないよ」

コーデリア「ん、確かにそれしかないわね」

エリー「え、ええええ！？」

エリーは本当に「えええ」といった表情をした。ただでさえ人前でトイズを使うのを恥じる子だ、こんなときでも抵抗はあるのだろう。

シャロ「エリーさん！エリーしかいません！！お願いします！！」

エリー「ううゝゝゝゝ」

ネロ「運んでくれたら小林が何かおごるからさあ」

小林「え！？」

エリー「ほ、本当……ですか？」

ネロ「もちろんだよ、小林この前こつそり財布にお金入れてたし」

小林「え、いやあれは……」

ネロ「ほらほら小林も男らしく腹をくくりなよ」

小林「人ごとだと思って……まあエルキュールに頑張ったご褒美としてなら……いいかな」

ネロに言われてしびしび答える小林、そんな小林を見ていたずらそうな表情でネロはほほ笑みエリーを見た。

ネロ「で、エリーは何がほしいの？」

エリー「そ、それじゃあ……」

あれから数日後、無事人形となったG4と一般の人は助けられ、リク君のお兄さんも戻っていた。リク君はお礼としてエリーに赤い石をあげたがその石はエリーにとって大切なものとなった。しかし自分で持つておくとなくしたりしたら困るので、管理能力の高い小林が保管することになった。

そして現在、ミルキイホームズは「本屋」に来ていた。

シャロ「うわ〜本がたくさんありますうー！ってあれは「かまぼこ」の本!？」

コーデリア「ホントねえ、「おいしい餃子の作り方」って本まであるわ」

ネロ「これは……誰にでも簡単にできるおいしいお菓子達」!

「？」

本屋に行くなり早速それぞれの世界に入り本を楽しんでいるシャロ、ネロ、コーディネリア達、そんな中エリーも黙々と本を探していた。

小林「エルキュール、見つかった？」

エリー「はい、これです……」

エリーが差し出した本、それは……

小林「「探偵恋物語」……？」

エリー「はい、これで探偵について勉強するんです」

小林「でも恋愛ものじゃないのかい？」

エリー「あ、それは……気になっていたんです。雄一と由梨がどうなるかどうか……あ、小林さん」

小林「なんだい？」

エリー「あの時は言いそびれてしまいました……洋館では助けただいて……ありがとうございます」

小林「いいんだよ、それでエルキュールが笑ってくれれば」

エリー「小林さん……」

小林「今回のことだ。みんな女の子らしいなって」

エリー「え？」

小林「だってほら、洋館ではあんな感じだったし、今の話を聞いてエルキュールも「恋愛」っていうのに興味があるみたいだし……」

エリー「あ、あ、あ、あの、わわわ、私、これ買ってきますね!!」

小林「え、あ、うん……」

エリーは赤くなりながらレジへと早歩きで向かった。そんな中小林は……

小林「ん〜、なんで赤くなってたんだろっ？」

小林は鈍感だった。

第二十五話 洋館での戦い（後書き）

というわけで終わりです

エリー「コアラさん、さ、最後・・・／／／」

あれ？書いてたらああなっちゃったんだよ

エリー「そんな恋愛なんて・・・／／／」

興味あるんでしょう？

エリー「／／／」

やっぱり（笑）乙女ですな

エリー「／／／」 トイズ発動

え、ちょ・・・

エリー「えーいー！！」 投げ飛ばしました

第二十六話 届いた予告状（前書き）

今回から新章です

コーデリア「次のヒロインは・・・」

はい、コーさんです！！

コーデリア「わ、私がヒロイン！？なんてお花畑」

さすが頭の中がお花畑の人だ、想像力が凄い（笑）

というわけでスタートです

第二十六話 届いた予告状

ストーンリバーの洋館での事件から数日後、小林は探偵室でくつろいでいた。

小林「うん、この紅茶美味しいな。流石紅茶好きのコーデリアが選
び抜いた味だ・・・」

小林はコーデリアに勧められた紅茶をカップごと少し回しながらそ
う言った。そしてまた口をつけたその瞬間だった。

シャロ「先生・・・!!」

小林「うっ、シャ、シャーロック?」

驚き、紅茶を吹き出しそうになるもなんとか持ちこたえた小林。そ
んな彼のもとにシャロが来た。その後ろからはコーデリアも来てい
た。

コーデリア「教官、大変です!!」

小林「何が大変なんだい!？」

シャロ「それが、それがですね・・・!!」

コーデリア「シャロ落ち着つくのよ!そうよ、深呼吸がいいわ、深呼吸するのよ!」

シャロ「し、深呼吸ですね、わかりました!!ふっ・・・」

コーデリア「ふっ・・・」

シャロはコーデリアの言葉を了承すると深く息を吸った。(なぜコーデリアもしているのかは分からないが)そして

シャロ「はぁ・・・」

コーデリア「ふっ・・・」

シャロ「ふっ・・・」

コーデリア「ふっ・・・」

シャロ「はぁ・・・」

コーデリア「はぁ・・・」

シャロ「ふう、コーデリアさん、あたし落ち着きました」

コーデリア「私もよ、シャロ」

シャロ「えへへ」

深呼吸により落ち着いていたシャロ（とコーデリア）。しかし小林は「
．．はい？」といった感じだ。

小林「あの．．．それで何があつたんだい？」

シャロ「あ、そうでした！予告状、予告状が来たんです！」

小林「予告状？誰から？」

シャロ「そ、それが．．．」

ネロ「もう、シャロったら少しは落ち着きなよ」

エリー「慌てても．．．解決には繋がらないから」

そこにネロとエリーが到着した。彼女たちの冷静な様子とシャロとのギャップに小林は少々不思議がっていた。

シャロ「でも予告状ですよ！？焦っちゃいますよお！」

小林「それで、結局誰からなんだい？」

ネロ「怪盗だよ」

小林「怪盗？」

エリー「これを見て下さい……」

小林「これは……音声メール？」

音声メール、それは一見手紙だが付いているボタンを押すと声（音声）が流れ、メッセージを伝えるものだ。

小林「これは聞いても？」

コーデリア「はい、お願いします」

コーデリアに許可をとり、小林は手紙についていたボタンを押した。すると声が流れてきた。

「まだまだ未熟な探偵の卵であるミルキイホームズのレディ達に、このメッセージを送る。僕の名は怪盗「トウエンティ」、ビューティフルの象徴さ。今回のメッセージは君たちを僕のシヨウウにお招きするために送ったものだ。時は明日のナイト、8時に博物館ランドマークタワーにあるトレジャーを頂くよ、それは……「ア・ダム・の・な・み・だ」……」

小林「アダムの涙!？」

「嚴重に保管されているあれを、この僕が、「ビューティフル」で「エクセレント」かつ「スマート」プラス「ダイナミック」に頂く。僕の美しく素晴らしい活躍を見たくばランドタワーまでカモン!!!
! !では、トウモロウにお会いするのを楽しみにしているよ、小さなレディ達、それでは・・・グッドナイト!!!」

小林「これが・・・送られてきたものかい？」

コーデリア「はい、そうなんです」

小林「これは凄い度胸の怪盗だな・・・自分のこれから盗むものまで教えて・・・」

「その予告状ならこちらにも届きましたよ」

シャロ「あ、アンリエットさん」

そこに生徒会長のアンリエットが登場した。表情は真面目で冷静さを感じさせる。

小林「今のはどういう意味ですか？」

アンリエット「そのままです。ここ、探偵学園自体にも予告状が来ているんですよ、どうやら警察にまで届いたらしいです」

小林「警察にも・・・一体怪盗の狙いは何なんだ・・・」

アンリエット「それは分かりませんが、しかしここまで広められてはこちらとしても放っておくわけにはいきません。そこで、お願いがあるのです」

アンリエット「怪盗「トウエンティ」との戦いに勝利していただきたいのです」

アンリエット「言葉に小林は「しかし・・・」といった顔だ。

小林「しかしアンリエットさん、これは重大な役目ですよ？僕らではなくもつと優秀な生徒さんの方が・・・」

アンリエット「小林さん、この学園でチームワークにおいてミルキイホームズに勝る生徒はいません。ですからミルキイホームズにお願いしたいのです。それに怪盗は「ミルキイホームズ」を呼んだのです、ミルキイホームズが行かなければ逃げることになりますよ？」

小林「それはそうですが・・・しかし・・・」

シャロ「あ・・・」

小林「？」

アンリエット「どうかなさいましたか？」

難しい顔の小林を見てシャロが言った。それに反応し小林もアンリエットもシャロを見た。

シャロ「先生は・・・なんであたしたちを現場に行かせたくないんですか？」

小林「え・・・」

シャロ「今までだつて危ない事件はありません。ビル倒壊の時も洋館の時も危険でした。でも今回は止めてるんです、なんでですか？」

小林「そ、それは・・・」

コーデリア「・・・アダムの涙・・・」

返答に困る小林の耳に聞こえたある単語、それを発したのはコーデリアだった。

コーデリア「アダムの涙が関わっているから・・・ですよ？」

ネロ「ちょっと待って、なんでそれが関わるとボク達を止めるのさ？」

コーディネリア「教官は……「怪盗」から「アダムの涙」を守ってトイズを失ったから」……ですよね？」

コーディネリアが真剣なまなざしで小林を見る。最初はごまかそうとしていた小林もその目を見て嘘をつけなくなったようだ。

小林「……そうだよ、5年前に僕はアダムの涙を護るため怪盗」と戦いその時にトイズを失ったんだ」

ネロ「そうだったんだ……」

エリー「聞いたことはありません。」「小林オペラは怪盗」との戦いでトイズを失った」……と。本当……だったんですね」

小林「ああ、そしてそれが君たちをこの事件に関わらせたくない理由でもある。君たちもアダムの涙に関われば僕と同じように……危険な目にあってしまうかもしれない。そんなことになってしまったら……」

コーディネリア「で、でもっ！」

小林「？」

コーディネリア「私達はこのまま逃げるなんて嫌です！」

小林「コーディネリア……」

コーデリア「教官が必死で守られたアダムの涙、それを私達で守りたいんです!!」

シャロ「先生、あたしたちを信じて下さい!!」

エリー「私達は・・・大丈夫です!!」

ネロ「頼むよ、小林!!」

小林「みんな・・・」

小林は4人の意見を聞いて心を動かされた。もちろん小林だって逃げるようなマネはしたくない。ただアダムの涙、これがまた最悪の事態を招くかもしれない、その気持ちの方が大きかったのだ。だが、ミルキイの4人はそれを恐れずに立ち向かおうとしている。それなのに小林がここから逃げるわけにはいかなかった。

小林「・・・分かった、行こうランドマークタワーに!」

コーデリア「教官!」

小林「君たちが立ち向かうのに、僕が逃げるわけにはいかないからね。そういうわけでアンリエットさん、この事件、担当させてもらいます」

アンリエット「それは助かります。ではお願いしますね」

ミルキイホームズ「「「「はい!!」」」」

こうしてミルクィホームズは「アダムの涙」を護る役目についた。
果たして無事に終わることができるのか、それとも・・・

小林「絶対に過去の僕のようにさせない、必ず!!」

第二十六話 届いた予告状（後書き）

コーデリア「アダムの涙・・・ですか」

ラグ冒をこ愛読の方はアダム涙・・・分かりますよね？

コーデリア「何か関連が・・・？」

いろいろ考えてたけどとりあえずはゲームにしたがって行くことかと思っただ。だから関連はないね

第二十七話 ランドマークタワーアダムの涙（前書き）

さあ、今回はランドマークタワーに行きます。

シャロ「それでアダムを涙を護るんですね、頑張るです!!」

果たしてそううまくいくな?

シャロ「え?」

第二十七話 ランドマークタワーアダムの涙

怪盗「トウエンティ」からの予告状を受け、「アダム」の警護をすることになったミルキィホームズ。そんな彼女達は今、その犯行予告の場所に来ていた。

エリー「ここが・・・ランドマークタワー・・・ですか？」

小林「そうだよ」

シャロ「おつきいですねー!!」

シャロの言った通りこのビルは大きく、7階まであるくらいだ。

ネロ「それで、怪盗の狙ってるアダムの涙は何階にあるの？」

小林「6階だね、屋上を除けば最上階だ」

ネロ「えゝそんなとこに行くの？疲れるなあ」

コーデリア「何を言ってるの、私たちはアダムの涙を護るためにきたのよ？それぐらいなことないじゃない」

ネロ「それは分かってるけどさあ・・・」

コーデリア「つべこべ言わずに、行くわよー!」

ネロ「しょうがないなあ」

コーデリアがビルの入り口へと向かい、それにネロがしぶしぶついて行く。はたから見ればお姉さんと仕方なくついていく妹のようだ。

シャロ「やっぱりコーデリアさん、張り切ってますね」

エリー「うん……」

小林「やっぱりって……どういうことだい？」

シャロ「コーデリアさん、この事件を無事に終わらせることが出来れば先生の Toys も復活するかもって……」

小林「え！？それって誰から聞いたんだい!？」

シャロ「コーデリアさんです」

シャロの笑顔での返答に小林は複雑な表情をする。もし Toys が戻ればいいが正直アダムを涙を護っただけでは戻る理由にはならない、つまり無事に終わらせても帰ってはこないと考えた方がいいのだ

小林「シャーロック、いくらなんでもそれじゃあ戻っては……」

シャロ「それにコーデリアさんはこんなことも言っていました。先生

の護ったものを今度はあたしたちが護れるなんて嬉しいって」

小林「!?!」

小林は驚くと同時に嬉しかった。自分の教え子が自分の護ったものを護る立場になって喜びを感じている、それは彼女たちの成長ではないか、そう考えたからだった

小林「・・・よし、今回の事件、無事に終わらせよう」

シャロ「はい!」

エリー「はい。では・・・いきましょう」

小林「そうだね、早くいかないと」

そういうと小林達は入口へと走り出した。

小林「中はもつと広いんだな・・・」

シャロ「あ、コーデリアさん達です!」

シャロの言葉に小林は反応しシャロの見ていた場所を見る、そこには……

ネロ「だ〜か〜ら〜ボク達はここのアダムの涙を護りに来たんだってば!〜!」

警護 a「君たちは探偵学院の生徒だろう?この事件を生徒に任せるわけにはいかないのだ」

警護 b「そうそう、アダムの涙は貴重な宝なのだ、それを学生に任せられるものか」

ネロ「でもボク達に予告状が来てるんだってば!〜!」

警護 a「じゃあその証拠を見せてみる」

ネロ「それは……」

警護 b「やはり通すわけにはいかないな」

ネロ「そんなあ」

ネロがなんとか粘っているが通してもらえそうになく、断られていた。そこにコーディネリアが小林に気付いた。

コーディネリア「あ、教官」

小林「コーディネリア、これは……?」

コーディネリア「私達が警護の方に6階への行き方を聞くと止められてしまったんです」

コーディネリアの言葉に小林は苦笑いをして答えた。

小林「あはは・・・まあここは博物館だからね、それに6階はアダムの涙がある場所でもある。厳しいのは仕方ないさ」

コーディネリア「ですがこのままでは・・・」

小林「もちろんこのままではないよ」

コーディネリア「え？」

コーディネリアが疑問に思い、何をするのか聞こうとした。しかし小林はまっすぐ警護の方へと歩いていった。

エリー「一体・・・どうするつもりでしょうっ？」

シャロ「説得じゃないですか？」

エリーとシャロが疑問に思う中、小林は警備員に声をかけた。

小林「あのすいません」

警備員「なんですか、今話を……ってあなたは小林オペラ!？」

小林「そうです。この子たちは本当に予告状を送られてきました」

警備員「こんな子供に……」

小林「子供ではありません、みんな立派な「ミルキイホームズ」という探偵チームです」

小林は少し怒りながら言う。普段が温厚かつ冷静なだけにこの時の小林はミルキイメンバーから見ても少し雰囲気が違う、そう感じ取れた。

警備員「わ、分かりました。あちらにエレベーターがあります。そこから行ってください」

小林「ありがとうございます」

話を終わると小林はスタスタとエレベーターへ向かった。

それから小林達はエレベーターを使って6階に来ていた。

小林「ここが今回の現場か・・・」

シャロ「わあ、すごい！こっちはトラさん、あっちにはお馬さんがいます！！」

シャロの言つとおり小林達の目の前には動物の模型があつた。

ネロ「これって全部作られてるんだよね？」

エリー「どれも丁寧に作られています・・・」

小林「この博物館の最高級のものだろうね」

???「そうよ、どれも職人に依頼してつくらせた一流品よ」

小林の言葉に返答するように女性が現れた。金髪に赤いスカート、しかし顔はへそ曲がりな性格を物語っているような顔だった。

コーディネリア「あの・・・あなたは・・・？」

???「私は宝田エリカ、この博物館の持ち主よ」

小林「宝田さん・・・あ、僕たちは・・・」

エリカ「ああ、聞いてるわ。探偵学院の生徒たちでしょう?」

小林「・・・はい、それでここの警備を・・・」

エリカ「ダメよ」

小林「え?」

まさかの返答に思わず「え?」と声を出す小林。そんな彼の表情を見ながら「はあ」とエリカは言った。

エリカ「そりゃそうでしょ、今回狙われているのは「アダムの涙」、世界でもトップレベルに美しいと言われる宝石よ?」

小林「知ってます。あまりの美しさに何でできているのかも調べられていない、いや調べることでできない未知の宝石・・・」

エリカ「よく知ってるじゃない。そんな物をあなた達に任せられると思う?」

小林「それは・・・」

エリカ「だからこの人たちに任せるわ」

そう言ってエリカは「来なさい」と奥に言葉を発する。すると5人の集団が出てきた。

小林「神津・・・G4か・・・」

神津「そうだ、この事件は我々G4が担当することになった。お前たちには退散してもらおう」

ネロ「でも今回はボク達に予告状が・・・」

咲「それならあたしたちの方にも来てるってば」

コーデリア「だから協力して合同であればいいんじゃないですか？」

シャロ「そうだよ、こころちゃ・・・」

小衣「こころちゃんって言うな！！とにかく、今回あなた達の出演はなしよ！..!」

エリー「そんな・・・むちゃくちゃです・・・」

神津「悪いな、だが依頼主の意見を尊重する、大切なことだろうか？」

小林「・・・ああ」

エリカ「・・・まあこの奥にあるアダムの涙の部屋に近づかないな」

らしいわよ」

シャロ「本当ですか!?!」

エリカ「なんかこつちが悪い気がするし……いいわよ。その代わり絶対に邪魔はしないで!」

小林「もちろんです」

神津「結局この様か……」

小林「神津、なんか言っただか?」

神津「いや、なんでもない。だがな小林、俺たちの邪魔だけは絶対するなよ、絶対にだ」

小林「わ、分かってるよ……」

神津「そうか、ならいい。小林、これは探偵VS警察の戦いだ。どつちが強いかはつきりさせえてやる」

小林「僕は別に……そんなつもりは……」

神津「おい、いくぞ」

神津はそう言い残すとさっさとどこかへ行ってしまった。

コーデリア「神津さん、ひどいわ」

ネロ「ボクああいうやつ嫌いだね」

エリー「なにかあったんでしょっか？」

小林「分からないけどいつものアイツらしくないな・・・」

シャロ「やっぱりあたしたちのせいでしょうか・・・？」

平乃「それは違うと思いますよ」

現れたのはG4のメンバー、平乃、次子、咲だった。

コーデリア「平乃さん・・・」

次子「なんかな、機嫌悪いんだ、警視」

咲「理由はわかんないけどね」

コーデリア「そうなんですか・・・」

平乃「悪くは思わないでくださいね」

次子「極力あんた達のサポートするからさ」

咲「そういうことなっ」

小林「ありがとう」

神津「おい、お前ら何をやってる。早く行くぞ」

次子「やべっ、じゃあな」

そう言つて次子達は神津のもとへと向かった。

小林「さて、僕たちも調査を開始しようか」

ミルクィ「」「」「はい」「」「」

こうしてミルクィホームズは調査を開始することになった。

トウエンティ「しっかり楽しませてくれ、レディ達」

第二十七話 ランドマークタワーアダムの涙（後書き）

というわけで何とか調査開始です

シャロ「でもアダムの涙警護じゃないですよお」

まあ実際生徒と警察だからね、仕方ない。

シャロ「うーんこうなったら一生懸命調査しておきますよー!!」

流石です!!

第二十八話 調査、怪しい〇〇は？（前書き）

さあ久々のファクター探しです。

ネロ「でも今回は少し違うんだよね？」

うん、行の下に答えを書いた。これなら間違っ
て先に答えを見ちやうことはないでしょ！！

第二十八話 調査、怪しい〇〇は？

「生徒だから」ということで警備ではなく調査をすることになった
ミルキイホームズはそれぞれに手がかりがあるかも知れない場所に
分かれて調査をしていた。

小林「シャーロック？」

シャロ「あ、先生！」

シャロが明るく小林の方を向く。

小林「ここを調べていたのかい？」

シャロ「はい！」

シャロが調べていた場所、そこは「廊下」だった

小林「「廊下」とは・・・よくここが怪しいと思ったね」

シャロ「はい、いくつか疑問に思うことはありませんよ」

- ・宝田が道の長さを測っていた
- ・神津が壁を触っていた
- ・神津と宝田が道を確認していた

小林「なるほど・・・これが怪しいと思った点かい？」

シャロ「はい、宝田さんはメジャーで廊下を測っていて、神津さんは壁を少しの時間触って、神津さんが道を確認した後に宝田さんも確認しに来てました」

小林「確かに1つ目が怪しいな・・・」

シャロ「ですよね？」

小林「ああ、なんで宝田さんが道の長さを測っていたのか・・・それがわからない」

シャロ「神津さんが壁を触っていたのは何か仕掛けを探すため、確認していたのは犯人の逃走経路を把握するため・・・ですよね？」

小林「断言はできないけどとりあえずはその考えでいいんじゃないかな・・・ってシャーロック？」

シャロ「はい？」

小林がシャロを呼ぶ、一方彼女は「なんだろう」といった感じで答える。

小林「何をしているんだい？」

シャロ「ほら、先生、ここから下を見て下さい」

小林「？」

小林は疑問に思いながらシャロの示した窓から下を見る。そこには・

小林「うわ、マスコミが多いな・・・」

そう、マスコミがたくさん来て、博物館の前で集まっていたのだ

シャロ「凄く多いですね、なんででしょう?」

小林「きつとマスコミにも予告状が届いたんだろう・・・それでマスコミの間で話題になったんだ」

シャロ「なるほど・・・先生?」

小林「ん?」

シャロ「先生はたくさんの方のマスコミの人とかにインタビューとか受けたことありますか?」

小林「インタビュー? まああるけど・・・」

シャロ「どうでした?」

小林「どうって・・・特にどうこうじゃないよ。ただ自分の意見を聞かれて答えるだけ、僕はスターじゃないしね」

小林は苦笑いしながら答える。しかし実際小林は並大抵のスターでは太刀打ちできないほどのファンを持ち、かなりの人気があった。それを小林があまり好んでいないためこう答えたのだろう。

小林「大丈夫だよ、シャーロックは優秀だ。もうすぐインタビューもたくさん来るさ」

シャロ「あ、あたし別にインタビューを受けたいわけじゃないんです」

小林「え？」

小林は思わず声を出して驚きを表現する。そんな小林を目の前にシャロは少しおとなしい表情をする。

シャロ「あたし・・・ただみんなと一緒に事件を解決して・・・困っている人を助けたいんです。ネロ、エリーさん、コーディアさん、それに先生と・・・仲良く人を助けたいんです」

小林「シャーロック・・・」

シャロ「あ、ごめんなさい。インタビューに全然関係ない話しちゃって・・・インタビューのことを聞いたのはどんな感じかなって思ったからなんです」

小林「大丈夫だよ」

シャロ「え？」

今度はシャロが驚く、それに対して小林は「ニコッ」とほほ笑い言葉をつづけた。

小林「別に頑張ってインタビューを受けるくらいになっただってみんな一緒さ。だって僕たちは「ミルキイホームズ」、探偵学院の探偵チームじゃないか」

シャロ「・・・そうですね、あたしたちはずっと一緒ですよね！」

小林「ああ、そういうえばインタビューを受けるとなると笑顔も常に行けるようにならないとね、その点はシャーロックはいつも笑顔だから良いね」

シャロ「あ、あたしだって怒ったりもするんですよ！ブウ~~~~」

小林「わ、分かったからそんなにほつぺを膨らまないで。シャーロックは笑顔の方が似合ってるんだから」

急に怒り始めたので焦る小林、そんな彼を見てシャロはほほ笑んだ

シャロ「冗談ですよ」

小林「じよ、冗談？シャーロックはいたずら好きだなあ」

シャロ「えへへ それじゃああたし他の所も見てみますね」

小林「うん」

そういつてシャロは他の場所へと向かった。

小林「次はここか・・・あ、エルキュール」

エリー「小林さん・・・」

小林「君はここを調べていたのかい？」

エリー「はい・・・調べ置かないといけないとおもったので・・・」

エリーが調べていた場所、そこは・・・

小林「確かに、調べておかないといけないね。ここで電気を操作でき
きるから」

ブレーカーのある部屋だった。この部屋はもちろんブレーカー専門の部屋ではなく、接客をする場所でもあるようだ

小林「それで・・・何かあったかい？」

エリー「はい、それがいくつか・・・」

- ・ 神津がテーブルのイスを動かしていた
- ・ 宝田がブレーカーを触っていた
- ・ 神津がブレーカーを触っていた

エリー「以上です」

小林「うん……これはまた難しいな……」

エリー「そう……ですよ……」

小林「ところでエルキュールはどれが怪しいと思っただい？」

エリー「わ、私ですか!？」

小林「うん」

エリー「私は……わかりません」

小林「え？」

エリー「私は……その……ただ情報を集めるだけですから……」

小林「……違うよ」

エリー「え？」

エリーは声に出して驚いた。一方小林は真剣なで、だけど温かい表情をしていた。

小林「君たちは情報を集めるだけじゃない、ちゃんとそこから自己判断をしていかないといけないんだ」

エリー「そう・・・でしょうか？」

小林「ああ、それに君の判断は的を得た答えが多い。自信を持っていいよ」

エリー「は、はい！」

小林「それに色んな意見が飛びあってこそより真実へと道は近付く、間違いを恐れてはいけない。わかったかな？」

エリー「はい・・・わかりました。でもまだ集まった情報が少ないので今は何とも言えないと思います」

小林「それが君の意見ならそれでOKさ」

エリー「はい、他のところも・・・調べてみますね」

小林「うん」

それからエリーは少し嬉しそうに他の場所へと移動した。

小林「やあネロ」

ネロ「あ、小林じゃん」

次に小林が向かった場所・・・それはエレベーターだった。

小林「ここを調査してたのかい？」

ネロ「まあね」

小林「それで・・・何か怪しいことはあったかい？」

ネロ「それがさあ・・・」

- ・ 神津がエレベーターを調べていた
- ・ 神津が屋上へ行った
- ・ 宝田が屋上へ行った

ネロ「これぐらいだね」

小林「うーん、これもまた難しいなあ」

ネロ「そういえばさ、小林」

小林「ん？」

ネロ「小林はこのこの模型のこと……どう思う？」

小林「どうって……上手いなとは思っよ。でも……」

ネロ「でも？」

ネロは小林に迫り下から見つめてくる。一般的に言う「上目」にな

っているわけだ。

小林「これが本物の動物じゃなくて良かったって思うよ。剥製とかじゃなくて良かったってね」

ネロ「へへ、流石小林だね」

小林「え？」

小林は驚きネロはほほ笑んだ。

ネロ「ボクもさ、同じことを思ったんだ。ボクは動物が好きなんだ。だからこれが剥製じゃなくて良かったって・・・小林と同じこと考えたんだ」

小林「ネロ・・・」

ネロ「あ、ごめん。つまらない話して・・・」

小林「いいや、つまらなくなんてないさ。僕はネロのそういう優しさ、いいところだと思うよ」

ネロ「・・・ホント？」

ネロが「怪しいなあ」といった表情で小林を見つめる。しかし小林の表情は変わらなかった。

小林「うん、僕がネロの好きなポイントさ」

ネロ「・・・そっか・・・えへへ、なんか照れちゃうじゃん」

小林「え、え、え、？」

ネロ「ふふふ、小林はかわいいなあ」

小林「かわいいって・・・」

ネロ「じゃあボクは他の場所を探すよ。じゃあね」

小林「ああ」

ネロは小林を少しからかうと別の場所へと向かった。

小林「ラストはここ・・・かな」

小林は広い場所へと来ていた。そこは・・・

小林「やあ、コーディネリア」

コーディネリア「あ、教官！」

コーディネリアの調べていた「フロント」だった

小林「ここは・・・受付をしたりする場所だよね？」

コーディネリア「はい、従業員の方が終わられたので調べてました。ここにいれば出入りした人が分かりますから」

小林「なるほどね、それで、何かあったかい？」

コーディネリア「あ、はい。実は・・・」

- ・宝田が通った
- ・従業員が7人だった
- ・ソファァーの色が1個だけ違う

小林「・・・コーディネリア、これは一体どういうことなんだい？」

コーディネリア「あ、これだけじゃ分かりにくいですよ。えっと1つ目の宝田さんはさっき帰られたはずなんです。でもそのあと数分後にいつのまにかフロントから展示室、シャロの調べている道歩いていたんです」

コーディネリア「2つ目の従業員の方は調べたところ従業員は8名だったんですが1人足りないんです」

コーディネリア「3つ目はこのフロント、見渡すと分かるんですがソフ

アーは全て黒なんです。でもあそこにあるものだけ青いんです」

小林「なるほど、それで疑問を感じたわけか・・・」

コーディネリア「はい」

小林「これは・・・もう少し調べないと分からないね」

コーディネリア「ですね、あ、教官、1つ質問をいいですか？」

小林「なに？」

小林が振りかえる。するとコーディネリアは小林を真剣な表情でみた

コーディネリア「私はミルクィホームズの最年長としてチームを引っ張っていけるでしょうか？」

小林「なんでそんな急に・・・？」

コーディネリア「私思うんです。もしかして私は最年長者としての自覚がないんじゃないかって・・・」

小林「コーディネリア・・・」

コーディネリア「やっぱり年上がしつかりしないとみんなついていけないと思うんです。だからやっぱり私がしつかりしないと・・・」

小林「コーディネリア？」

コーディネリア「はい」

段々表情をしかめるコーディネリアを小林は一旦止めた。

小林「コーディネリアはしっかりしてるよ」

コーディネリア「それは・・・本当ですか？」

小林「ああ、ちゃんとチームを引っ張って行こうとしているよ。ただね」

コーディネリア「ただ・・・？」

小林「チームはコーディネリアだけじゃなくてみんなで支えていくものだと思うんだ」

コーディネリア「!？」

小林「ミルキイホームズはみんなで協力して事件を解決するチームだと思ってる。だからコーディネリアが責任をそんなに背負うことないんだ」

コーディネリア「教官・・・」

小林「だからあえて言うならコーディネリアはもう少し休まないといけない・・・僕はそう思っただけ」

コーディネリア「・・・あ、ありがとございます！！そうですね、ミルキイホームズは私「達」の探偵チームですものね」

小林「ああ、そうさ。何かあれば僕も相談に乗るから」

コーディネリア「頼りがいがあります。ありがとうございます。それじゃあ私、そろそろ調査に戻りますね」

小林「ああ」

こうしてコーディネリアも別の場所へと移動した。

第二十八話 調査、怪しい〇〇は？（後書き）

ということではファクター探し終わりです

ネロ「ああ〜疲れたなあ〜」

こっちもだよ、ファクター考えるの大変だよ^^；

第二十九話 訪れた予告時間（前書き）

さあいよいよ予告時間になりますよー!!

エリー「ついにトウエンティが・・・登場ですか？」

それは見てのお楽しみだよ

第二十九話 訪れた予告時間

ビル内の各場所でファクターを見つけたミルクィホームズは一旦作業を終えてアダムの涙のある部屋の前に集まっていた。

小林「さて、今回色んなファクターを見つけたけどどれも怪しくて「これだ！」ってものは判断できなかった」

コーデリア「どうするんですか？」

小林「だからあとは怪盗が来るのを待とうと思うんだ。今の時刻が7時55分、トゥエンティの予告した時間まではあとわずかだしね」

シャロ「じゃああたしたちが今回やったことって……」

ネロ「無駄だったってこと？」

小林「それはないよ。ちゃんと調べて色んな人の行動も知ることができた。それにこのビルの構造も少しわかったからね。これで怪盗が使う経路も見当がつく」

エリー「コーデリアさんの調べたフロント、シャロの調べた廊下……」

ネロ「ボクの調べたエレベーターとあとは……」

小衣「アダムの涙の展示室の窓よ」

シャロ「こころちゃん!」

小衣「こころちゃんって言うな!」

シャロ「あつ!」

「こころちゃん」という言葉を聞いてこころがシャロをごく自慢の仮面で叩く。

小林「神津……」

神津「小林……どうだ、そちらは何か見つかったか？」

小林「いや見つからなかった。というより怪しいことだらけでどれも本当に怪しいかわからない」

神津「そうか、俺も独自で調査したが何も見つからなかった。やはり8時に来てそのまま盗む予定らしいな。全く、何も考えずにくるとは……面白い怪盗だ」

小林「……そういえばアダムの涙はどうするんだ?誰も見張らないのか?」

小林が神津に尋ねた。ミルキイホームズは宝田からの指示によりアダムの涙の展示室は系にできない。となるとG4に任せるしかないからだ。

神津「俺がつく。展示室に入る為にはお前らの調査通りフロント等ここを通らなければならぬ。それで俺もここにしようと思ったがアダムの涙の展示室の窓からも一応侵入可能なんでな、あの部屋には俺がついてG4にはここを護らせる、ということだ」

小林「そうか、僕達もここにいていいかな？」

神津「かまわんだろう、依頼主はもう帰られた。それにここまでなら入る許可をもらっているだろう？」

小林「ああ」

神津「ならここでしっかり見張っていてくれ。怪盗は90%以上ここから侵入することとなる。もしかしたらこの前のストーンリバーのようなトイズを持っているかも知れん。頼んだぞ」

小林「分かった。神津も気をつけてくれよ。何かあったらすぐに駆け付けるから」

神津「もちろんだ」

そういうと神津は展示室へと入って行った。

小林「さて……ここからが正念場だ！」

小林は自分のほっぺを2回パチツパチツと叩く。気合いを入れているのだ。自分がアダムの涙がきつかけでトイズを失ったから、ミルキイホームズにはそんな思いをさせたくないから……。

そしてついに8時は訪れた

エリー「あ、8時……です」

シャロ「何も変化はないですね」

平乃「そうですね、犯行予告は嘘だったんでしょうか？」

次子「かな？」

ミルキイホームズとG4はあたりを見渡しながらそう言った。確かに何も変化はない、しかし小林はまだ油断していなかった。すると

パリン！！

シャロ「な、なんですか!？」

ネロ「展示室からだ!！」

小衣「展示室つて・・・警視!？」

小衣が神津の安否を気にして急いで展示室に入る。

次子「おい、ちょっと待てよ小衣!」

平乃「単独での行動は危険です!」

咲「追跡なう!」

それと同時にG4の他のメンバーも展示室の中へと入って行った。

コーデリア「教官、どうしましょう?」

小林「これは緊急事態だ。僕達も入ろう!」

そう言つて小林達ミルキィホームズも入った。そこでは信じられないことが起きていた。

小林「神津!？」

なんと神津が倒れていたのだ。

コーデルリア「アダムの涙のもないわ！」

小衣「け、警視！？大丈夫ですか!？」

神津「くっ……待て!!！」

小衣が急いで近づこうとするが神津はそれを止めた。小衣はそんな神津に驚いていた。

神津「犯人は……トウエンティは窓を割って入りこみ、俺を殴ってアダムの涙を奪い逃走した」

次子「でも逃げる為のルートは1か所だけだろ？そこならあたしたちが塞いで……」

神津「お前達がこの部屋に入ってくる時にこっそり出て行ったんだ」

平乃「あの時……」

咲「確かに騒ぎに紛れて行けば可能だね」

神津の言葉にG4は納得の意を表す。確かにあの慌てた状況ならで

きないこともない。ましてや相手のトイズは分からないのだ、もし透明になれるトイズだった場合それはいとも簡単にできる。

神津「いいか、今回の俺達の役目は……」トウエンティの確保」と「アダムの涙の保守」だ。奴は恐らくフロントから逃げるだろう。今ならあそこには誰もいないからな。だから急いで追いかける」

小衣「でも……警視が……」

神津「俺のことはいい。それよりも……早く……行け！怪盗をのがしてしまつては……いかん!!」

小衣「……わかりました。G4、行くわよ!!」

小衣の掛け声に次子、平乃、咲は答え階段へと向かう。その途中で小衣は小林にすれ違い何かアイコンタクトを受け取った。すると神津は今度、小林の方を見た。

神津「小林、お前たちも追つてくれ。人数は多い方がいいだろう」

小林「……ああ、そうだな。みんな行くぞ!!」

小林は了承、ミルキイホームズを連れてG4を追いかけた。

第二十九話 訪れた予告時間（後書き）

エリー「神津さんが・・・」

殴られましたね、そしてトゥエンティ登場です

エリー「でもまだ姿を見てません」

逃げてるからね、さぁみんなはトゥエンティを捕まえることができるのか!?

第三十話 参上！怪盗トウエンティ！！（前書き）

コーディネリア「いよいよ怪盗の登場ですね」

・・・うん

コーディネリア「どうしました？」

いや、トウエンティをついにこのGRに出す時が来たなあ・・・と

コーディネリア「コアラさん、こういうキャラ好きじゃないですか！」

まあね

第三十話 参上！怪盗トウエンティ！！

怪盗トウエンティが神津を殴りアダムの涙を奪った。それを聞いてG4、ミルキイホームズがトウエンティの追跡に行つて数秒後、神津はまだ倒れていた。

しかし

神津「・・・ふう、ちよろいな」

神津はムクツと起き上りそう言った。まるで何事もなかったように、起き上つたのだ。そして眼鏡を合わせて壁を見た。

神津「さて、では俺は・・・」

小林「どうしたんだ、神津？」

神津「!？」

神津は驚き入口を見る。そこには行ったはずの小林とミルキイホルムズがいた。

神津「……小林、あいつを……トウエンティを追ってくれと……」

」

小林「その必要はないさ、何せもう分かったからな」

神津「まさかG4だけに行かせて・・・」

小林「G4のみんなは警察を呼びに行ってくれたさ。トウエンティの確保じゃなくてね」

小林の言葉を聞いて神津はもっと驚いた。あえて言うなら「何だど!?」という表情だろう。

神津「俺の指示を無視したのか・・・」

小林「ああ、G4にみんなは神津のいう指示なら聞くだろうけど、神津じゃない人間」の指示は聞くわけないだろう?」

神津「・・・小林、お前は何を言って・・・」

小林「暴露を・・・始めようか」

神津「暴露・・・だと?」

神津が更に驚くと同時に一步後ろへ引いた。明らかに動揺しているのだ。

小林「ああ、この事件の犯人、トウエンティがどこにいるか分かったからな」

神津「……一体どこに……」

小林「いるじゃないか、僕達の目の前に……」

小林はじつと神津を見た。それを見た神津は自分が疑われていると思ひ急いで反論した。

神津「ちよつと待て、なぜ俺を見る？」

小林「お前が……トウエンティだからさ」

神津「な……しよ、証拠は……」

小林「証拠がみたいのか？それじゃあ聞かせてあげるよ。シャーロツクー！」

シャーロ「はい！！」

小林に呼ばれてシャーロが大きな声で返事、話を始めた。

シャーロ「あたしは廊下を調べていたんですけど宝田さんが道の長さを測っていたり、神津さんが壁を触っていたり、神津さんと宝田さんが道を確認していました。」

神津「それがどうした？俺がトウエンティだという証拠にはならん
だろう。なにより宝田さんの方が怪しいじゃないか」

神津は反論するがシャロは静かに否定した。

シャロ「いえ、実はあの後宝田さんが帰る時に聞いたんです。なん
で道の長さを測っていたのかつて。そしたら今度リフォームするか
ら、その為に測っていたそうです」

神津「だが・・・」

シャロ「それに、これは先生に聞きました。が神津さん、調査の時は
先に道を確認しておくそうですね。あたし達がここに来た時には神
津さん達はもう到着していました。つまりホントは道の確認はもう
終わったはずなんです。なのにまだしていなかった・・・これは重
要なファクターだと思います！！」

小林「よし、次はネロ！！」

ネロ「ほいほーい、ボクはさ、今回エレベーターを調べてたんだ。
そしたら神津さんがエレベーターを見ていたり、宝田さんと神津さ
んが屋上へ行っていたんだ。」

神津「ああ、俺はただ道を確認しただけだ。これは通路ではない、
怪しくないだろう」

ネロ「それがそうでもないんだよねえ」

神津「なに？」

ネロは何かを狙うように鋭くニヤリとほほ笑んだ。

ネロ「これも小林に聞いたんだけど、神津さんさ、少しでも経験を積ませるためにそういう調査は部下にやらせてるらしいじゃん」

神津「!？」

ネロ「そう考えるとこの行動おかしいと思わない？これは重要なフアクターだよな」

小林「よし、エルキュール!!」

エリー「はい、私は今回、ブレーカーのある部屋を調査していました。すると神津さんが机を動かしたり、神津さんと宝田さんがブレーカーを触っていました」

神津「机を動かしたのはきちんと並んでいなかったからだ」

エリー「はい、私も直そうと思っていたのでそれは分かります。でも問題は・・・ブレーカーなんです」

神津「ブレーカーだと？」

神津の言葉にエリーは頷いた。

エリー「ブレーカーはお2人と触っておりましたが、神津さんが触ったあとは蓋を閉めていなかったんです。それで私が閉めようとした時に宝田さんが来られてすぐに直してました。その時に何故開いているかも気にせずに直したんです。これは・・・重要なファクターだと・・・思います！」

小林「よし！コーディネリア！」

コーディネリア「はい、私は今回、フロントを調べていました。すると宝田さんが通られたり、従業員の方が8人中7人だったり、ソファの色が1個だけ違ったりしていたんです。これらを1つ1つ調べていくと」

コーディネリア「従業員の方がいらっしやらなかったのはおトイレに行かれていたからだそうです。なのであとから合流されていました」

コーディネリア「次にソファーですが従業員の方にお聞きしたところ急な用件があり、急遽ソファーを1つ増やさないといけないくなり、結果あつたのがその1つだけ色の違うソファーだったそうです」

コーディネリア「でもなぜ帰られたはずの宝田さんがいらっしやつたのか、それだけは分かりませんでした。これは重要なファクターだと思います！！」

小林「よし！・・・僕は彼女たちの調べた結果、シャーロックとネロ、エルキュールとコーディネリアの見つけた点からそれぞれにある共通点を見つけた」

神津「共通点だと?」

小林「シャーロック達の方ではお前が「らしくないことをしている」こと、コーディリアコーディリア達の方では「宝田さんとお前が一緒にいない」ということだ」

神津「!?!」

小林「もちろんいつもどおりじゃないのもおかしいが、いくらなんでも1回も一緒にいるのを見てないなんておかしいだろう。ましてや今回、僕達より警備を任されていたのは神津、お前達G4だろう?その責任者であるお前なら宝田さんからいろいろ情報を聞いたりしないといけないだろう?」

神津「・・・」

小林「さあ、どうなんだ」

小林は真剣なまなざしで神津を見る。すると神津は静かに笑い始めた。

神津「ふふふ・・・ははは、流石だ、ミスターオペラ。僕のパーフェクトな変装を見破るなんて」

小林「やはり・・・お前がトゥエンティなんだな」

小林は変わらないまなざしで神津・・・トゥエンティを見る。するとトゥエンティは服を脱いで答えた。

エリー「あれが・・・怪盗トウエンティ・・・？」

コーデリア「ただの変態じゃないの？」

ネロ「っていつか自己紹介長いし」

シャロ「あたしいい精神外科医さん知ってますよ」

小林「（シャーロックの天然さがこういう時に発揮されるな・・・）
・・・じゃなくて！！トウエンティ、そのアダムの涙を返せ！！」

小林は気を取り直してトウエンティに返還するように要求する。しかし

トウエンティ「ミスターオペラ、それはキャンノット！！な話さ。
このアダムの涙はアルサー又様のご命令により手に入れたもの、アルサー又様に献上しなければいけないのSA」

小林「だが逃げ道はふさいである。逃げ場は・・・」

トウエンティ「ノ プログレム！！」

そう言いながらトウエンティは後ろの壁を押す。すると壁は回転し通路ができた。

小林「な・・・そうか、非常用にもう一つ、画し通路があったのか

!？」

トウエンティ「イエス!!ではそろそろ撤退しよう。すまないね、もつと美しい僕を見ていたい気持ちは分かるが今日のシヨウはここまでだ。ではレディ達、グッドラック!!」

「グーサイン」でウインクをして逃げるトウエンティそんな彼を見て・・・

シャロ「あわわ、トウエンティさん、大丈夫でしょうか？」

ネロ「大丈夫じゃない？多分元から変なんだよ」

コーデリア「そうよ、世の中にああいう人もいるってことよ」

エリー「あ、あの・・・トウエンティを・・・追わないと・・・」

シャロは心配、ネロとコーデリアはあきれ、エリーはおろおろする。そんな中エリーの言葉に小林が「はっ」と気付き

小林「み、みんな、奴のペースに乗せられちゃだめだ!!追いかけよう!!」

小林の言葉にみんな自分を取り戻し返事をして追いかけた。

第三十話 参上！怪盗トウエンティ！！（後書き）

トウエンティ「HEY！読者のみんな、僕こそがこのGRの主人公・
」

じゃありません（笑）

トウエンティ「ワツツ！？なぜだ、コアラ！！」

だって・・・トウエンティじゃん？

トウエンティ「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

コーデリア「怪盗トウエンティ・・・変質者なんですね」

まあ簡単にいえばそんなところかな（笑）

ということで今回はトウエンティを追いかけます！！

トウエンティ「さあ！美しい僕を捕まえてみたまHE！！」

コアラ&コーデリア「・・・（汗）」

第三十一話 トウエンティ逃走！（前書き）

やっと更新です

シャロ「どうしたんですかコアラさん、遅いですよ!!」

ごめんごめん、九州大会とかで忙しくてさ。でも今回は凄いよ

シャロ「えっ、何がですか？」

ポリユームだよ、今回の話は5000文字を越しました（笑）

シャロ「それって凄いんですか？」

ミルクィGRは基本3000文字前後、長くて4000ぐらいです

シャロ「ってなんでですかあゝ」

いや間違いは言ってないんだけど・・・可愛いからいいや

第三十一話 トウエンティ逃走！

アダムの涙を持って非常口から逃走した怪盗トウエンティをとらえる為小林達「ミルキィホームズ」はトウエンティを追っていた。

小林「はあ、はあ、みんな大丈夫かい？」

シャロ「は、はい」

ネロ「なんとかね」

エリー「大丈夫・・・です」

コーデリア「あ、教官！」

小林「え・・・？」

コーデリアが走りながら小林より前を指差す。そこには

小林「非常用のシャッターか・・・閉まってるな」

シャロ「どうしましょう、これじゃあ先に進めません」

小林「ここは・・・」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「エルキュール!!」

エリー「は、はい」

エリーはトイズを発動、トライアセンドの「力量アップ」のおかげで怪力となった彼女はその力を使ってシャッターをつかんだ。そして

エリー「えーい!!」

思いっきり上にあげる。するとシャッターは簡単に開いて通れるようになった。

小林「ありがとう、エルキュール」

エリー「い、いえ……」

小林にお礼を言われたエリーは恥ずかしくなり赤くなる。そんな温かな後景もつかの間、今度も新たに問題が起きた。

ネロ「小林、エレベーターが!？」

小林「エレベーター……あ!」

小林が見たもの、それは閉じ始めているエレベーターのドアだった。

小林「みんな、走れ!!!」

「「「「はい」「」「」

小林の声と共にメンバーは急いで走った。

小林「でもエレベーターはネロのダイレクトハックで操作できるんじゃないのかい?」

ネロ「無茶言わないでよ。エレベーターの移動ならできるけどドアの開け閉めは無理、ハッキングしにくいんだ。まあ無茶すればできないこともないけど」

ネロが言うにはエレベーターの内部だとハッキングがしやすく、ドアを開けることぐらいはたやすいのだが外側からだとはハッキングしにくいらしい。このビルが建築してまだ新しいので材質が良い物を使っている、その影響もあるのだろう

コーデリア「あ、教官、閉まります!!」

小林「くそ、何かでは無いのか・・・」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「シャーロック！あそこにあるごみ箱をエレベーターのドアに挟んで！！」

シャロ「はい！うん・・・えい！！」

シャロがトイズを発動させて、ごみ箱が浮かぶ。更にシャロが念じるとドアの方へと飛んでいき、閉じそうなドアに挟まった。

小林「よし、これでエレベーターに乗れる！」

小林はゴミ箱によってつくられた空間を通り、エレベーターへ乗り込んだ。

それを見てミルクィのメンバーも真似をして乗り込んだ。

小林「よし・・・」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「ネロ!!」

ネロ「了解!」

ネロは返事をするとかくるとへらを回してエレベーターのボタンの近くにあてる。するとネロのトイズが発動し、エレベーターは一気に最上階へと向かった。

小林「ちょ、ネロ、速すぎないかい?」

ネロ「だってトウエンティは先に行ってるんだよ?早く追いかけてくちや逃げられちゃうよ!」

小林「それはそうだけど……っわ!」

ネロ「ほら着いた」

コーデリア「さあ行きましょう」

シャロ「はい」

エリー「はい、はい」

コーディネリアの言葉に返事をして5人は扉の向こうへ向かう。そこには

小林「屋上……」

エリー「だけど……誰もいません……」

小林「くっ……」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーディネリア

小林「コーディネリア！」

コーディネリア「はい！」

コーディネリアがトイズを発動し周囲を見渡す。そして

コーデリア「あ、あそこです。あそここの床の色が少し違う!」

コーデリアは少し離れた場所の床を指して言った。すると床はもぞもぞ動き、トウエンティが現れた。

トウエンティ「くっ、やはり僕の美しさは隠しきれないか・・・」

コーデリア「あなたのかぶった布の色が床の色と微妙に違っていただけです!」

トウエンティの言葉に反論するコーデリア。そんな中、トウエンティは「バルーン」に向かって走っていた。

小林「まずい、トウエンティが逃げる!」

シャロ「でもここ屋上ですよ?どうやって・・・」

コーデリア「バルーンだわ」

シャロ「バルーン?」

コーデリア「ええ、恐らくあのバルーンで飛んで逃走するつもりなんだわ」

ネロ「ええー!?!」

エリー「それは……まずいです……」

コーデリアの説明でミルクイメンバー全員が今の状況を理解した。「アダムの涙」を奪われ逃走される、非常に追い詰められていたのだ。その時、トイエンティの方から声がした。

トウエンティ「ではレディ達、「アダムの涙」は確かにもらったよ。今晚はすばらしい夜だった。僕の美しさに更に磨きがかかったようだ。では、グッバイ!!!!!!」

小林「待て!!」

トウエンティはそういうと煙り玉を投げる。小林は走ってトウエンティに近づこうとしたにも関わらず、あたり一帯は煙に包まれ見えなくなる。やむ追えなく小林はその場に止まりそれと同時に4人も小林のそばで止まる。そして煙がはれると

小林「……いない……」

小林の言葉通りトウエンティの姿はなく、空にバルーンが飛んで行った。バルーンのコモを何かがつかんでいる、トウエンティだろう。

ネロ「どうするんだよ小林！」

小林「どうするって……」

シャロ「このままじゃ逃げられちゃいます」

コーディネリア「それだけはダメよ！」

エリー「でもこのままだと……そうなっちゃいます……」

コーディネリア「ダメなのよ!!！」

コーディネリアがいきなり叫んだ。みんな驚き彼女の方を見る。するとコーディネリアは泣いていた。

コーディネリア「ダメよ……絶対に……教官が……必死で護ったのに……」

小林「コーディネリア……」

コーディネリア「教官が……トイズまで犠牲にして……護ったのに……教官……すいません……」

???「ちよつと、あなた達何やってるの!」

バルーンがコーディネリアは涙を流しながら小林に謝った。その時、後ろの方で聞き覚えのある声があった。

小林「た、宝田さん・・・」

シャロ「どうしてここにいますか？」

宝田「気になったから来たのよ」

小林「宝田さん・・・？」

そんな彼女の行動に小林の脳はある考えを彼に与えた。

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「コーデリア、トイズを・・・使ってくれるかい？」

コーデリア「トイズ・・・ですか？」

小林「ああ、それであるバルーンを見てくれ」

コーディネリア「・・・分かりました」

コーディネリアは涙を拭ってトイズを使う。その瞬間、彼女の五感強化された「ハイパーセンシティブ」の発動だ。

シャロ「先生、なんでコーディネリアさんのトイズなんですか？」

ネロ「そつだよ、五感を強化してどうするのさ」

小林「・・・僕の予想が当たってれば、まだトウエインはここにいる」

ネロ「はあ？何言ってるの？」

シャロ「そうですよ、トウエインならバルーンで・・・」

コーディネリア「いないわ」

シャロ「えっ？」

エリー「コ、コーディネリアさん？」

エリーがコーディネリアに近づいて問う。するとコーディネリアは「バツ」とエリーの方を見た。

コーデリア「トウエンティはバルーンにのっていません!」

ネロ「なんだって!？」

シャロ「本当ですか!？」

コーデリア「本当よ、間違いないわ。あそこにあるのは「抱き枕」でトウエンティではないわ!」

エリー「じゃあ・・・どこに・・・」

小林「ここにいるんだよ」

小林「ねえ、宝田さん?」

小林は鋭い視線で宝田をみる。そう、小林は宝田を疑っているのだ。

宝田「な、何を言ってるの!?! 私は宝田、宝田エリカよ! トウエンティではないわ!」

小林「トウエンティは変装のトイズを持っている。あなたに化けることも可能です」

宝田「そ、そんなの言いがかりだわ！そもそもトウエンティはあのバルーンのところに行ったのよ？ここじゃないわ」

小林「ええ、確かに。だから使ったんですよ。煙り玉をね」

小林は宝田を見て静かに答える。その目はかつて「名探偵」と言われていた頃の推理する時の目と同じだ。

小林「トウエンティがあの時直接逃げずに煙り玉を使った理由、それは急いでこの入口に戻り、宝田さんに化けてバルーンを飛ばし逃げたと勘違いさせるため、そう思うんです」

宝田「そんなの勝手な想像だわ！！大体トウエンティは男、私は女よ！間違えるなんてひどいにもほどがあるわ！！」

宝田はイライラを顔に出して答える。その表情は怒りに溢れており口調にもそれが出ていた。しかし小林は怯むどころか表情を変えなかった。そして彼女がトウエンティだという確信理由を言った。

小林「宝田さん、なぜトウエンティが男だと分かるんですか？」

宝田「！？そ、それは・・・」

小林「宝田さんはさつき「何やってるの」と来たばかりの証言を
していました。だからトウエンティが煙り玉を使って逃げた後来た
ことになる。つまりはトウエンティの姿を見ていないんです。それ
なのにあなたは今男と言った、なぜ男と分かったんですか？」

宝田「・・・カンよ、カン。名前からして男だと思ったの」

小林「そうですか、じゃあお聴きしますがそのトウエンティという
男、美しいですか？」

宝田「もちろん！！この地上でアルサー又様の次に美しいビューテ
ィフルでエクセレントで・・・！！？」

小林「どうやら変装はできても自信過剰は偽れなかったようだな」

宝田「くうー！ミスターオペラ、流石だよ。まさかこの僕の美しい変
装を見破るなんて」

小林「最後は自滅したようなものだけだね」

小林は肩を落とし、あきれながら言う。実際さつきのやり取りを見
てもらえばその反応にもなっとくだらう。するとトウエンティは服
を脱ぎ（宝田の衣装の上に元々の服を着ています）、走っていきなり
ビルから飛び降りた。

ネロ「ちょ、トウエンティが！」

エリー「落下……しました……」

シャロ「ここビルの高いところですよ！」

コーデリア「みんな待って!!」

慌てるメンバーをコーデリアが落ち着かせる。すると「ブロロロロ・
・」と大きな音がメンバーの耳に聞こえた。

シャロ「なんでしょう、ブロロロロって……」

ネロ「これは……ガソリンのにおい!？」

エリー「風が強いです……」

コーデリア「みんな、あれを見て!!」

コーデリアが指を指した方向にはある飛行用の機体がすでに飛翔していた。

小林「あれは……ヘリコプター!？」

トウエンティ「やあ、ミスターオペラ」

小林「トウエンティ!」

トウエンティは上昇するなり登場し小林にあいさつをする。どっちら余裕があるらしい。

小林「それで逃げるつもりか・・・」

トウエンティ「YES!!このへりでグッバイするよ!!アダムの涙に関しては安心したまHE!!」

小林「ああ、安心しておくよ。この服の中だろうからね」

小林は宝田の服を見せながら言う。トウエンティは宝田の服にアダムの涙を入れていたためアダムの涙は小林の手に渡ったのだ。

コーディネリア「すいません、教官。トウエンティを逃がしてしまっ
て・・・」

小林「いいんだよ、みんなが無事ならそれで。それにアダムの涙は護れた。君たちはしっかりと自分達の役目を果たしたんだ。自信を持って喜んでいいんだ」

コーディネリア「うう・・・教官!!」

小林「うわっ!!」

コーディネリアは泣きそうになりながら小林に抱きつく、それに小林は

驚くがしばらくすると優しい表情でこう言った。

小林「お疲れ様、よく、頑張ったね」

その瞬間他の3人も小林に抱きついた。

コーデリア「わあ、キレイ!!」

シャロ「本当にきれいですね!」

ネロ「これ・・・蜜吸えるかな・・・?」

エリー「それは・・・無理だと思う・・・」

小林「あはは・・・」

事件から数日後、小林達は今植物園に来ていた。コーデリアの要望だ。

小林「どうだいコーデリア、気に入ってくれた？」

コーデリア「はい、もちろんです。こんなにきれいで……でもこんなに頑張ってるって、応援したくなります」

小林「コーデリアは優しいんだね」

コーデリア「えっ？」

小林「だってほら、トウエンティに逃げられたって思った時も僕に謝ってくれたし、今だって……流石ミルキィホームズのお姉さんだね」

小林の笑顔での言葉にコーデリアが赤くなっていたことは、言うまでもなかった。

第三十一話 トウエンティ逃走！（後書き）

シャロ「また逃げられちゃいました・・・」

そう落ち込まないでよ、ちゃんとアダムの涙は取り返せたい良かったじゃん

シャロ「それはそうなんですけど・・・ってコアラさん!!」

は、はい！

シャロ「あたしまだお願いをかなえてもらってないんですけどなんででしょう!？」

お願い・・・？

シャロ「みんな事件後に活躍してご褒美をもらってるんです。なのにあたしだけ・・・」

シャロ、僕がシャロのご褒美を忘れると思ったかい？

シャロ「あるんですか!？」

もちろん!!

シャロ「やったー!!」

次の事件で活躍できたらね

「シャロ」あつー

第三十二話 パーティへの招待状（前書き）

ネロ「案外更新速かったね」

まあね、なんか書けたんだ。

ネロ「でもさあ」

？

ネロ「内容は題名で分かるんじゃない？」

いやいや、何のパーティかは分からないでしょ？

ネロ「あ、そっか」

ってことで第三十二話、スタートです！！

第三十二話 パーティへの招待状

シャロ「あうゝ何にもありませんでしたね・・・」

ネロ「そうだね、たまには聞き込みでもしようと思ったんだけど・・・」

エリー「怪盗帝国について知ってる方はいませんでした・・・」

コーデリア「よく考えてみれば知らなくて当然よね・・・」

4人「はあ・・・」

小林「み、みんな・・・」

探偵学園の小林の部屋に向かう廊下を歩きながらシャロをはじめにみんながつぶやいた。

実は今回、ミルキィホームズは怪盗帝国の情報を少しでも入手しようとして街に出て聞き込みをしていた。

しかし一般の人がそんなことを知ってるはずもなく、結果収獲全くなしの状態で帰ってきたのだ。

小林「まあ聞き込みをするのは悪いことじゃないしいい心掛けじゃないか。みんなよく頑張ったよ」

小林がなんとか励まそうとフォローするが4人は全く元気を出さない。そんな状況のまま小林の部屋についた。

ネロ「ただいま・・・」

ネロが顔を伏せながらドアを開ける。部屋は薄暗い・・・はずだがなぜか明かりが付いている。そしてそこには意外な人物がいた。

館「お帰りなさいませ」

ネロ「うわあ!？」

小林「た、館さん!？」

館「はい、なんでしょう?」

ネロ後ろにいた小林も驚き声を出す。しかし館は平然と返事した。本当の意味で「なんでしょう?」「だろっ

小林「「なんでしょう」「じゃないですよ!なんで館さんが部屋にいるんですか!？」

館「いえ、皆様にお伝えしとつことがございまして・・・」

小林「じゃあなぜ部屋に入れたんですか？ちゃんとカギが……」

館「かかっておりませんでしたか……」

小林「えっ？」

小林の思考が停止した。あたりは妙な空気に包まれた……。

ネロ「……んで、最後に部屋を出たのはシャロだったよね？」

シャロ「あ、あたしは2番目に出ましたよぉ〜！！最初にコーデリアさんであたし、エリーさんでした！」

ネロ「ホントにい〜？」

シャロ「ホントですう〜！」

ネロが「怪しい」と言わんばかりの表情でシャロを見る。シャロは首をブンブン振って全力否定、ある意味面白い光景である

コーデリア「でも確かにそうだったわね」

エリー「ということは・・・ネロ？」

ネロ「うっ！」

各メンバーの証言から犯人は特定された。3人の視線がネロに集まる。ネロはというと苦笑いだ。

ネロ「あはは・・・まあ誰にでもミスはあるよねえ・・・あはは・・・」

シャロ「ネロオ？」

小林「はい、はい、犯人探しはそこまでにしよう」

小林が二人の間に割って入る。このまま話していてもしょうがないと判断したのだろう。ネロは「危なかつた」、シャロは「まあ」と言った表情でいた。コーディアとエリーに関しては「あはは・・・」といった大人な反応だ。

小林「それで、館さん。お話しってなんですか？」

小林が館に聞く。それに対して館は答えた。

館「はい、実は皆様にパーティのご招待がありまして・・・」

エリー「パーティ・・・ですか？」

館「はい、パーティでございます。皆様には是非ご参加いただきたいとのことでした」

コーデリア「パーティ！！それは乙女が美しいドレスに身を包み、優雅で楽しいひと時を過ごす天国！華やかさに満ち溢れたその別次元のような世界にわたし達もついに参加することができるのねっ！！」

ネロ「あーあ、コーデリアがお花畑モードになっちゃったよ」

小林「あはは・・・」

コーデリアは不思議な踊りを踊り始めそれをネロが「またか・・・」と言った呆れた表情で見る。

シャロ「それで、そのパーティっていつあるんですか？」

館「今日でございます」

小林「きよ、今日ですか!？」

館「はい」

館は平然と答えた。しかし時刻はもうお昼、急すぎる時刻だ。だが館は「しかし・・・」と言葉を繋げた。

館「しかし、今日と言っても幸い夜からでございます。なのでお時間のご心配はいりません」

シャロ「あ、夜から何ですか。それなら大丈夫ですね！」

ネロ「ところで行くメンバーって誰？まさか探偵学園の全員じゃないでしょ？」

館「参加される方々は・・・全校生徒でございます」

ネロ「はあ？」

ネロが驚きの声を上げる。無理もない、この探偵学園にはそれなりの数の生徒がおりその全員を連れていくとなると相当な大事である。

小林「そもそもこれは一体なんのパーティなんですか？」

館「どうやら警察と探偵の交友を深める為のパーティだそうですが・・・私も詳しいことは分かりません」

小林「交友？探偵と警察が？」

小林がここで疑問を感じた。以前お話しした通り探偵と警察はあまり仲が良くない。よく似た職種だから、ということでは何年も前から

ずっと仲が悪いのだ。

小林「なぜ警察と探偵で交友を・・・？」

館「よくは存じませんが・・・小林様達の活躍の影響ではないでしょうか？」

小林「僕達ですか？」

館「はい、小林様達「ミルキイホームズ」様は様々な事件を警察の方と協力して解決してきました。ですから探偵と警察の距離が少しでも縮まった・・・のではないのでしょうか？」

小林「探偵と警察の距離・・・」

小林は考える。確かに自分たちは警察、もとい神津達「G4」と協力して事件を解決してきた。それが認められ少しでも警察と探偵との溝が埋まる、それなら非常に喜ばしいことだ。

館「まああくまで私の独自の考えでございますので」

シャロ「でもそうだったらとってもうれしいです」

ネロ「ボク達の活躍でみんなが仲良くなるってことだからね」

館「ふおふおふお、きつとそうですよ」

子供のように嬉しそうにするシャロとネロに館がほほ笑んでそういった。きつとこのあどけない2人の笑顔を見てのほほ笑みだろう。

小林「それでパーティーはどうでしょうか・・・」

コーデリア「あら、教官は行かれないんですか？」

小林「うん、僕はちよつと用事があつてね」

エリー「私・・・人が多いのは・・・苦手・・・」

ネロ「でもエリーはちゃんと行かないとダメだぞ」

エリー「う、うん・・・もちろん・・・頑張る」

ネロがエリーに注意するとエリーも頑張ると答える。恥ずかしがり屋な彼女が大勢の人の集まるパーティーに行くというのは本当に「頑張る」ということだろう。

館「では皆様、準備をなさつて下さい。準備が出来次第、出発いたしますしょう」

ミルキイホームズの「探偵警察交友パーティー」が今、始まることになっていた。

第三十二話 パーティへの招待状（後書き）

ということでミルクィホームズの4人はパーティへレッツゴーです！

ネロ「パーティ、ってことは豪華な料理が・・・」

あるかもね（笑）

ちなみに次回はパーティへの準備です。もっと可愛い彼女たちがあ
るかも

第三十三話 レッツ入浴タイム!! (前書き)

今回は・・・

エリー「にゅ、入浴・・・ですか・・・?」

YES

エリー「そ、そんなぁ・・・//」

第三十三話 レッツ入浴タイム!!

探偵と警察の交友パーティーに参加が決定したミルキィホームズの4人。そんな彼女達はお風呂場でお風呂に入っていた。

シャロ「ふう〜、気持ちいいです〜」

ネロ「そうだねえ、お昼からお風呂なんて久しぶりだからねえ」

エリー「落ち着きます・・・」

コーデリア「・・・ってみんな!くつろいでる場合じゃないわ!!」

コーデリアがくつろいでる3人そういうと3人は「はっ!」としてくつろぎタイムを終了する。

シャロ「そ、そうでした!あたし達はパーティーに行くためにお風呂に入っていたんです!」

ネロ「危なかったあ〜危うく数時間入るところだったよ」

エリー「コーデリアさん・・・ありがとうございます」

コーデリア「いいのよ、それより早く体を洗ってパーティーに急ぎましょー!」

4人は「ザバツ」とお湯から上がると体を洗う場所へ行き体を洗い始めた。

シャロ「それにしてもみんなでお風呂つて久しぶりですね！」

ネロ「まあみんなそれなりに忙しいしね」

エリー「空いた時間に・・・入ってます」

コーデリア「そうだね、せっかくだし洗いっこしましょう！」

エリー「え、そ、それは・・・」

シャロ「いいですね、洗いっこ!!」

ネロ「ボク張り切っちゃうよ」

コーデリアの意見にシャロとネロが賛成、流れでエリーも（強制的に）参加となった。

コーデリア「それじゃあ私はシャロ!!」

シャロ「はい!!」

シャロが元気良く返事をして椅子に座る。するとコーデリアが石鹸

とタオルを構えた。

コーデリア「いくわよ〜!」

シャロ「お願いします!」

コーデリアが石鹸をタオルでこすり泡立てる。そして程よく泡立った所でシャロの背中を洗い始めた。

コーデリア「シャロ、痛くない?」

シャロ「はい、大丈夫です。」

コーデリア「そう、よかったわ」

コーデリアは笑顔のシャロを見て微笑む。それはまるで母親のような暖かい微笑みだった。一方

ネロ「さあエリー、座って座って」

エリー「う、うん」

エリーが少しためらいながらも椅子に座った。

ネロ「そういえばさ、エリー」

エリー「何？」

ネロ「エリーって髪洗うの苦手って本当？」

エリー「!？」

ネロの言葉を聞いた瞬間エリーの表情が固まる。そう、彼女エルキユール・バートンは髪を洗うのが苦手だったのだ。(公式ではありません)

ネロ「ねえ、どうなのさ」

エリー「じ、実は・・・苦手・・・」

ネロ「そっか、苦手なんだ」

エリーは少し赤くなりながらも答えた。髪を洗うのが苦手、それが恥ずかしいのだろう。普通ならからかったりするかもしれない。しかしネロは違った。

ネロ「だったらボクが洗うよ」

エリー「えっ？」

ネロ「エリーは目を閉じといて、ボクが洗う、そうすれば全然怖くないでしょ？」

エリー「う、うん・・・」

エリーは返事した。躊躇いはあるものの是非それをお願いしたい、そんな返事だ。

ネロ「よし、それじゃあエリー、目を閉じといて」

エリー「うん」

エリーは目を閉じた。数秒後、彼女の髪に水がかかる。しかし不思議と怖くはなかった。

ネロ「大丈夫、エリー？」

エリー「うん」

ネロはエリーの返事を確認するとさっそく手にシャンプーをつけてエリーの髪を洗い始めた。

ネロ「うわぁ、エリーの髪って綺麗だね、絡まってないし枝分かれ

もしてない」

エリー「うん、寝る前にブラッシングをしてるから」

ネロの言葉にエリーは少し喜ぶ。それから数分、シャンプーを流してエリーのシャンプーは終了した。

ネロ「お疲れ様」

エリー「うん、ネロも・・・ありがとう」

ネロ「とんでもない、エリーが嬉しそうで何よりだよ。さてボクも・・・」

エリー「ネロ？」

ネロ「？」

エリー「今度は私が洗う・・・」

ネロ「えっ、いいの？」

エリー「うん、洗ってくれた・・・恩返し」

その後ネロは椅子に座りエリーが洗い始めた。

エリー「痛くない？」

ネロ「うん、エリーがとっても上手だからね」

エリー「そんな・・・」

エリーはまた赤くなる。そんな会話が続き、ネロの髪も流した。

ネロ「ふう、ありがとうエリー」

エリー「ううん、私もしてもらったから・・・。そういえば・・・
シャロとコーデリアさん・・・」

ネロ「そういえばいないね・・・っておい！」

ネロが辺りを見渡し探索する。すると二人はすぐに見つかった。

ネロ「なんでまたお湯に入ってたの？」

コーデリア「体が冷えたから入っていたのよ」

シャロ「あつたかいですう！」

ネロ「二人だけずるいなあ・・・それ！」

ネロもジャンプしてお湯に入る。水しぶきが舞ってコーディネリア達にあたった。

コーディネリア「もう、ネロったら」

ネロ「へへ、それ！」

ネロがコーディネリアに水をかける。

コーディネリア「やったわね、それ！お返しよ！」

ネロ「うわっ」

コーディネリアもネロにかけ返し、そのあと二人はかけ合う。

シャロ「エリーさんも入りましょう！」

エリー「え、わ、私も・・・？」

シャロ「はい、もちろんです！」

エリー「じゃ、じゃあ・・・」

エリーもゆっくりお湯につかる。お湯は温かく、少し冷えた体をすくに温めた。

エリー「あつたかい・・・」

シャロ「ですよね」

エリーが入ったということでコーデリア達の水かけ合いは終わる。
エリーに迷惑だから、という理由だ。

シャロ「でも・・・」

・・・と突然シャロが口を開いた。

シャロ「こんな楽しい生活が・・・いつまで続くんでしょうね」

ネロ「そうだね、ずっとこのままが良いけど・・・」

エリー「いつかは卒業しないといけない・・・」

コーデリア「卒業・・・ねえ・・・」

そう、あくまでここは学園、あまり詳しくは知らされていないがこの学園にも卒業はあるはず、となるといつまでもこんな生活が続くとは限らないのだ。

シャロ「あたし、この学園に来て・・・みんなに会えて本当に良かったです」

ネロ「シャロ・・・」

シャロ「あたし、立派な探偵になるのが夢でこの学園に来たんですけど、みんなでその夢に向かって頑張れて凄くうれしいんです」

エリー「シャロ・・・」

シャロ「先生も加わった「ミルキイホームズ」・・・あたし、みんな大好きです」

コーデリア「シャロ・・・」

シャロ「あ、ごめんなさい、雰囲気が暗くなっちゃいましたね。さ、上がりましょ！」

コーデリア「待って！」

シャロが苦笑いしながら湯を上がろうとする。するとコーデリアがシャロの手をつかんだ。

シャロ「コーデリア・・・さん？」

コーデリア「大丈夫よ、シャロ。私聞いたことあるの。学院は卒業しないって選択肢もあるって」

シャロ「え……」

ネロ「それホント？」

コーデリア「ええ」

エリー「あくまでも……うわさ……ですけど……」

コーデリア「それに……」

コーデリアはシャロの前に立った。その瞳は真剣さを表したまっすぐな瞳だ。

コーデリア「私たちはいつまでも一緒よ？だってミルクィホームズ……でしょ？」

シャロ「……そうですね、あたしたちはずっと一緒ですよね！」

ネロ「うん！」

エリー「はい」

シャロの言葉にネロとエリーが返事し、ほほ笑む。コーデリアもだ。とそこへ

小林「お〜いみんな、そろそろ上がらないと間に合わないよ?」

シャロ「はい!」

ドア越しで言う小林の言葉にシャロが返事をする。パーティはもうすぐだ。

第三十三話 レッツ入浴タイム！！（後書き）

エリー「い、意外と大丈夫・・・でした」

でしょ？シャロが良い子って分かる話だった（´・`・´）

エリー「でも・・・ミルクイホームズはいい人ばかりです」

エリーもね

エリー「え、わ、私ですか!？」

もちろん、エリーも含めて心温かい良い人たちだよ

エリー「／／／」

第三十四話 いざパーティへ！小林の予感（前書き）

さて、今回はパーティへ行きます

コーデリア「やっぱり教官は行かないんですか？」

彼には彼の仕事があるんでね

第三十四話 いざパーティへ！小林の予感

シャロ「えへへ、パーティへ行く準備できました！！」

小林「うん、ばっちりだね」

シャロがくるんと回って小林に準備ができたことをアピール、そんな彼女を見て小林もほほ笑む。

シャロ達ミルキィホームズがパーティーに招待されたことを知って数時間後、どうやら準備ができたようだ。

ネロ「準備はできたけどさあ」

小林「どうしたのネロ？そんな不服そうに・・・」

ネロ「そりゃそうだよ。だってパーティなのにいつもの制服だよ？」

ネロが残念そうに言う。そう、パーティはあくまで学校行事のような扱い、故に制服での参加なのだ。

小林「あはは・・・でもみんないつもなれた服で可・・・」

コーデリア「教官！」

小林「は、はいー！」

コーデリア「女の子は大きな舞台ではきれいな姿で参加したいんです！でも今回は制服・・・ドレスじゃないんです！女の子の口マンじゃないんです！！」

小林「は、はあ・・・」

小林はすっかり困ってしまいそれしか言う言葉がなかった。ちょうどその時

館「皆様、お車の準備が出来ましたよ」

小林「あ、はい。ほら、もう行かないと！」

エリー「制服でも・・・楽しめますよ」

コーデリア「そうね」

ネロ「まあおいしい食べ物もいっぱいあるかもだしね」

コーデリア「ネロったらまた食べ物？」

ネロ「もちろん、パーティーっていうぐらいだから豪華でしょ、食事」

コーデリア「そうね、期待しましょう」

小林「（ふう、なんとか・・・）」

シャロ「先生！」

小林「あ、シャーロック？」

安心もつかの間、小林が気付かないうちにシャロが近づいていた。

小林「早くいかないと置いていかれるよ？」

シャロ「そうなんですけど、なんかさびしくて・・・」

小林「・・・今回僕は行かないけど他のみんなはいるから、ね？」

シャロ「・・・はい」

小林「それにただのパーティじゃないか、また帰ってきたら待つてるよ」

シャロ「・・・そうですよね」

小林「そうそう、楽しまなくちゃ！」

シャロ「はい、あたし楽しんできます!!」

そういうとシャロは車の方へ少し走り小林の方を見た。

シャロ「先生、いつてきまーす!!」

小林「いつてらっしゃい」

そうしてシャロは車へと乗り込み、車は会場へ向けて走って行った。

小林「ふう、それじゃあ僕はテレビでも見ようかな」

小林は一息つくためにテレビを見ようとリモコンで電源を入れた。

キャスター「次のニュースです」

小林「お、ニュースか。事件がなければいいんだけど」

小林はテレビから目線を外し、コーヒーを入れながらそう言った。
ある意味普通の光景、しかし次のキャスターの言葉でこの普通は一
気に崩れた

キャスター「昨日・・・え、何？・・・き、緊急ニュースです！先
ほど世を騒がせる怪盗集団「怪盗帝国」からメッセージムービーが
届きました！」

小林「怪盗帝国！？」

「怪盗帝国」、その単語を聞き小林は驚きながらテレビを見る。もちろんそんな彼に反応することなくテレビにはそのムービーが流された。

アルサーヌ「ごきげんよう、皆さん。私わたくし、怪盗アルサーヌは入手に失敗していた「黄金鏡」、「魔剣」、そして「アダムの涙」を入手することができました」

小林「なっ、あれは警察で管理されているはずなのに・・・なぜ・・・」

アルサーヌ「しかし、入手が簡単すぎてつまらない、これでは勝負にもなりません。そこで、あなた方にもう一度チャンスを差し上げます。私わたくしの持つ3つの秘宝、これを取り返してごらんなさい」

小林「!?!」

アルサーヌ「しかし場所は秘密です。秘宝の場所を自分たちで探し出さない。そうでなければ私わたくしと勝負する資格はありません。では楽しみにしていますよ」

キャスター「・・・以上が怪盗帝国からのメッセージムービーです」

小林「怪盗帝国が・・・秘宝を・・・」

????「入るわよ!!」

小林「!？」

今回のことについて考えようと思ったその時、ドアが開き見覚えのある顔が現れた。

小林「こころちゃん」

小衣「こころちゃんって言うな!それよりあんた、今のニュース見た？」

小林「ニュースって・・・メッセージムービーの？」

小衣「それよ!」

次子「実は警察の方で保管してた秘宝が盗まれちゃったんだよ」

小林「全部かい!？」

平乃「はい、セキュリティもすべて突破され、奪われてしまいました」

咲「結構硬くしといたんだけどねえ」

小林「警察のセキュリティを全部か・・・ところでアルサーヌの言う秘宝の場所は分かるかい？」

平乃「それが全く・・・」

咲「ムービーと一緒に送られてきた写真ならあるんだけど」

小林「とりあえずそれを見せてくれるかい」

咲「はいはい」

小林の言葉に咲が答えバックか一枚の写真を取り出した。

咲「はい、これ」

小林「ありがとう、これか・・・」

小林は写真を見る。そこには

小林「この写真・・・傾いてる？」

そう、写真の画像は少し左に傾いていたのだ。

次子「そうなんだよ、なんでか全部傾いてて・・・撮る奴が相当下手だったのかもな」

小林「いや、この写真は足場が安定していないことを証明している、あと・・・この写真は水にぬれたりしたかい？」

咲「それはないよ」だって封筒に入れられた写真を見て戻しただけ、濡れてなんてないでしょ？」

小林「いや、この写真は少し濡れてる、いやしけつてると言った方がいいかもしれない」

平乃「変ですね、近頃雨も降ってないですから湿気るわけがないんですが・・・」

小林「これから分かることは・・・なるほど」

少し考えた小林だったがすぐに答えが出たようだ

次子「分かったのか、秘宝の場所？」

小林「ああ」

平乃「どこですか？」

小林「それはね、咲君、今日稼働している「船」の数を教えてくれるかい？」

咲「船？」

小林「うん」

咲「はいはい」

そう言いながら咲がパソコンで調べ始めた。

小衣「なんで船よ」

小林「この写真、傾いているのは恐らく安定した場所で撮っていないから、そして濡れていたのは水のある場所、そこで撮ったから湿っていると思ったんだ。揺れる場所で水のある場所、「海を移動中の船」だとおもったんだ」

小衣「あ、あんたこれだけ少ない情報でそこまで・・・」

小林「まあ、思い付きと言えば思い付きだけどね」

小林は苦笑いしながら答える。確かに思い付き、しかしその思い付きができたのは彼が今まで様々な事件に出会ってきたことによる経験、集めた知識によりできたこと、彼の実力の高さ故に導き出されたものなのだ。

咲「でたよ、三つ」

小林「三つか、咲君、その三つの中で一番大きな船を探してくれるかい？」

小衣「大きな船？秘宝なら小さい船にも隠せるわよ？」

小林「さっきの写真、傾きは少しだったんだ。小さな船だったらもつと揺れると思ったんだ。だから揺れの小さな大きなを探したんだ。分かる・・・かな？」

小衣「わ、分かるわよ！私はハーバード大を飛び級で卒業したIQ1300の天才美少女よ！それくらい分かってたわ！」

小林「そ、そう」

自信満々で言う小衣に小林は苦笑いしながら言った。もちろん小衣がそんなことを分かっていたはずもなく、簡単にいえば嘘なのだが彼女の高いプライドがそう言わせてしまったらしい

咲「検索かんりよー、大きな船は今日の夜に豪華客船があるよ。探偵と警察の交流を深めるってやつパーティに使われる船だけど」

小林「なんだって!？」

小林は大声を出した。小衣達がびっくりするほどの大きさだ

小衣「な、何よいきなり」

小林「さっきそこにシャーロック達が行った。それにこのままだとパーティに参加するみんなが危ない」

小衣「参加する人はいかないように止めれば・・・」

平乃「小衣さん、もう夕方、恐らくもうついています」

小衣「ええ!？」

次子「こりやまずいな、警視も出張でいないし・・・」

咲「ピンチなう」

小林「とにかく急いでパーティ会場に行こう!間に合わなかったらそれこそ最悪だ」

そう言っつて小林はG4を車に乗せてパーティ会場へと向かった。

第三十四話 いざパーティへ！小林の予感（後書き）

コーディリア「秘宝ですか・・・」

はい、三つ盗られました

コーディリア「それにしても教官の推理力、流石ですね」

まあ聞けば「簡単じゃん」って思っけどあの発想に行きつくまでが
難しいんだよね

第三十五話 アルセー又出現！秘宝をかけて（前書き）

シャロ「ええっと、今回のお話は・・・アルセー又!？」

そっだよ

シャロ「と、ということは対決ですね!」

うん「ち、っ、違っよ

シャロ「あっ〜」

第三十五話 アルサー又出現！秘宝をかけて

小林「はあ、はあ、こゝこゝが会場かい？」

小衣「そ、そうよ、この船が会場よ」

小林、そしてG4という意メンツで会場である船の入口に着いた小林。走ってきたようで息が荒かった

次子「まさか直接こゝじゃなくて駐車してからこないといけないなんてな」

平乃「疲れましたね」

咲「しばらく休みたい」

小林「ダメだよ、急いで会場の人にこのパーティについて話さないと手遅れになる」

小衣「そうね、いきましようー！」

小衣が入口に入ろうとする。すると

「ああ、ちよつと待って下さい」

小衣「誰よ？」

小衣がめんどくさそうに後ろを見て問う。そこには警備委員の服装をした人が立っていた。

「この警備員です。こちらに入られるのなら招待状を人数分見せて下さい」

小衣「招待状？警察署においてきちゃったわよ」

警備委員「そうですか、では入航は許可できません、お引き取りください」

小衣「ええー！？」

小衣が叫んだ。G4の4人も小林も招待状を持ってきてないのだ。しかし自体は緊急、小林はなんとか通してもらえるように試みる。

小林「すみません、実はこの船に怪盗アルサーヌが秘宝を……」

警備員「はあ？よく分かりませんので通すわけにはいきません」

小林「ん……」

こればかりは小林も悩んでしまう。相手は一般の警備員、手を出して突破するわけにはいかず、招待状を持ってくる余裕もない、どうしようもないのだ。

小林「弱ったな、これはどうすれば……」

次子「なあ、あんた、警察かい？」

警備員「えっ？あ、はい、警備ですが……何か？」

次子「あたしさ、あんたの顔……見たことないんだよね」

警備員「げっ!？」

平乃「そういえば……見たことないですね」

咲「確かに」

警備員「そ、そんな気のせいですよ。あはは……」

警備員は苦笑いで答える。しかしそんな警備員に小衣が怪しいと思いきい問いを出した。

小衣「じゃあ、今回の警備を任されたって証拠は？」

警備員「えっ？ああ、こ、今回は無いそうです」

小衣「じゃあ任命書なしでの警備？」

警備員「はい、任命書なしです」

小衣「ふうん・・・平乃、お願い」

平乃「はい」

小衣は納得し、なぜか平乃にお願いをする。すると平乃が警備員に近づき、そして

平乃「はあ！」

警備員「うぐっ!？」

小林「ひ、平乃君!？」

小林の驚く声が聞こえる。平乃が何をしたのか、警備員のおなかに手刀をくらわせたのだ。驚くのも無理はないだろう

警備員「なんで・・・いきなり暴行を・・・」

小衣「だってあんた、警察じゃないのに偽ったじゃない」

小林「偽った!？」

次子「そうさ、あたしら警察は任命書なんてもらわないんだ」

次子が警備員をにらみながら説明した。実際にここヨコハマ警察は警備の際に任命書なんても与えない。なんせただの警備なのだから。

咲「警察じゃないって自分から言ってるようなもんだよ」

平乃「そうでなくても警察手帳を拝借すれば分かることですが」

警備員「く、くそ！」

小林「あ、平乃君!？」

警備員がやけになり平乃に殴りかかる。そんな彼女を見て思わず叫んでしまう小林、しかしそんな小林の表情はすぐに啞然としたもの変わった

警備員「なっ・・・」

平乃「ただ殴りかかるだけでは・・・私には勝てません」

なんと平乃は拳を避けて警備員のおなかに改めて手刀をヒットさせていた。しかもさつきとは違い威力が高かったらしく、警備員はおなかを抱え込んで気絶している

小林「なんて威力……」

小衣「平乃は武道で合計50段だからこれぐらいお手の物よ」

小林「そうなんだ……」

「何かあっても彼女に逆らうのはなるべく止めよう、そう小林は心に誓った。

平乃「さあ、いきましょう」

小林「そ、そうだね」

小林達は入口へ入り奥へと進んだ。それとほぼ同時に入口にはシャッターが降りてきて通れなくなり、船は出発した。

小林「シャーロック達はどこだろう」

小衣「知らないわよ、どうせ料理でも食べてるんでしょ」

入ったはいいもののどこにみんながいるか分からず廊下を歩く小林とG4、小林と小衣の間でこんな会話がされていた

小林「あはは・・・」

平乃「ありえますね」

そんな時、次子が何かを見つけた

次子「あ、あそこなんか人多くない？」

咲「ホントだ」

小林「よし、行ってみよう」

急いでその場所に行ってみる。すると端の手すりの場所にみんなが集まっていた。

小林「いた、おい、みんなー」

シャロ「え、先生!？」

ネロ「なんで小林？」

エリー「意外・・・です」

コーデリア「教官、用事は良いんですか？」

4人は来ないと聞いていた小林が来たことに当然だが驚いた。そんな彼女達に対して小林

小林「そんな場合じゃないよ、この船に・・・アルサーヌが盗んだ秘宝があるはずなんだ」

ネロ「秘宝？それって前に護ったじゃん」

小衣「・・・盗られたのよ」

エリー「盗られた・・・？」

小衣「そうよ！防犯セキュリティも全部突破されたわ！」

コーデリア「そんな・・・しかもそれが・・・ここに？」

小林「ああ、恐らくね。さて・・・」

「この場の人をどうやって誘導しよう」と小林は考える。いきなり「事件が」と話せばパニックになり逆に危ない。パニックを起こさずに船に乗った人たちをどう避難させるか、それを考えた。

小林「・・・（ダメだ、何も思い付かない！）」

小林の表情が陰しくなる。幸い船は、小型だがこの人数が乗れる台数ある。しかし時間の無い中、避難理由を考えないといけないので苦しんでいるのだろう。するとシャロが口を開いた。

シャロ「あの・・・船が故障した・・・って言っちゃダメなんですか？」

小林「故障？」

シャロ「はい、船が緊急でエンジントラブルがあって動かないので一旦陸に上がって下さい・・・とか」

小林「それだ!!」

そういうと小林が船の管理室へ行き操縦士に事情を話す。幸い操縦士は話の分かる人だったのでマイクを貸してくれた。

小林「え〜皆さん、お楽しみ中のところ申し訳ございません。ただいまエンジントラブルにより船が停止、波に揺られている状態です。危険ではないのですが新しい船に乗っていただくため、大変かとは思いますが、小型の船に移動、陸に上がられるようお願いします」

小林が焦らずゆっくり、落ち着いた声で話す。すると参加者は納得したように次々と小型の船に乗る場所へ向かった。

そして操縦士を含め参加者全員が小型の船に移動、避難は成功した。

小林「ありがとうシャールック、君のアイデアのおかげだよ」

シャロ「えへへ」

小林はシャロの頭を優しい表情でなでる。それが嬉しいようでシャロも笑顔だった。だが

???「ふふふ、見事・・・ですわ」

小林「こ、これは。アルセーヌ!？」

小林は聞き覚えのある声にあたりを見渡す。すると声は続いた。

アルセーヌ「私のトイズわたくし、「幻惑」です。今この声が届いているのは小林さん、そしてミルキイホームズの4人だけです」

小林「!？」

小林は驚きG4を見る。しかしG4は何もないようにあたりを捜査していた。

小林「本当に聞こえていないのか・・・」

アルセー又「ごきげんよう、小林さん。あなたは見事この船に秘宝があると判断し、パーティーの参加者を避難させた・・・流石です」

小林「早く秘宝を返せ！」

アルセー又「そうはいきません」

小林「何！？」

アルセー又「私は警察の方との勝負では満足できませんでした。ですからあなた方探偵の皆さんと勝負をしたいと思いいチャンスを作ったのです」

小林「つまり・・・僕たちと勝負がしたい・・・と」

アルセー又「そういうことです」

声しか聞こえないがアルセー又はほほ笑むように言った。確かに大人しく返してもらえとは思わなかったが、いざこのような事態になってしまうとやはり厄介だと小林は思う。

アルセー又「では下の階に来てください。お待ちしておりますよ」

小林「あ、ちょ・・・」

小林がまだ話そうとしたが幻惑は終わり、アルサーヌの声はしなくなつた。

小林「G4のみんな、すまないが警察に連絡をしてもらえないかい？ 秘宝を探し出して本部に届けてもらうために」

小衣「それはいいけどあんた達はどつするのよ」

小林「僕たちは船の内部を探してみるよ。あいにく通信機器を持ってないんだ。だから君たちをお願いしたい」

次子「分かった。じゃああたしたちはこの船の上を探しておくよ」

平乃「気をつけて下さいね」

小林「ああ」

咲「捜査開始なう」

こうしてミルクィホームズVSアルサーヌの勝負が幕を開けた。

第三十五話 アルセー又出現！秘宝をかけて（後書き）

シャロ「次回がアルセー又と対戦ですね」

イエス！ミルキイホームズVSアルセー又です

シャロ「秘宝を取り戻すため・・・負けませんよ!!」

シャロ、それ負けフラグっぽい・・・（汗）

第三十六話 追跡！怪盗アルセーヌ（前書き）

ネロ「今回はアルセーヌの追跡？」

題名はそうだけど実際アルセーヌは出てこないね

ネロ「そうなの？早く捕まえてお菓子買いに行こうよ！..」

君はそっちなんだね（汗）

第三十六話 追跡！怪盗アルセーヌ

小林「・・・ここか」

シャロ「みたいですね」

小林があたりを見渡しながら言った。そこは船の階段を降りたアルセーヌの言った「下の階」だ。周りには何もなく、きれいな花柄の壁があり、部屋の横にブレイカーがあるだけ、物は何も置かれていない。

ネロ「こんなところで何しようとしてんだろ？」

エリー「気をつけた方が・・・いいかも」

コーデリア「みんな、見て！」

メンバーが警戒する中コーデリアが奥の方を見て言う。そこには見たことのある人物がいた。

小林「あれは・・・ラット!?!」

ラット「久しぶりだな、小林」

ニカツとイタズラな表情でビル倒壊事件を起こした「炎のトイズ」を所有する怪盗「ラット」が言った。

ラット「まさかお前がここまで怪盗帝国に関係してくるなんてな、思ってもなかったぜ」

小林「アルセーヌはどこだ、その奥か!？」

小林が走って奥へ向かおうとする。しかしラットが立ちふさがりそれを妨害した。

小林「!？」

ラット「お前らを通すわけないだろ、アルセーヌと勝負するんなら俺を倒してから行けよ」

小林「くっ!」

ラット「この・・・炎に対処出来ればだけどな」

ラットそう言いながらラットは自身の片手に炎を出現させる。これが彼の「炎のトイズ」だ。

ラット「さあ〜て、いくぜ!〜!」

ラットはそう言いながら小型の爆弾を取り出す。事件の際に使用したものと同じものだ。

小林「まさか、ここで爆破させるのか!〜?」

ラット「当たり前だろ、お前らのトイズでどう対処するのかな・・・それ!〜!」

ラットは爆弾に炎を点火させ小林達に向かって投げる。このままでは爆破、小林達は木っ端みじんだろう

シャロ「うぎゃ〜こっちきました!」

ネロ「ちよつとどうすんの!〜?」

エリー「このままじゃ・・・爆発・・・」

コーディネリア「どうしましょう、教官!〜?」

小林「・・・」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーディネリア

小林「コーディネリア！投げられた爆弾をキャッチするんだ！」

コーディネリア「はい！」

コーディネリアは瞬時に「パイパーセンシティブ（五感強化）」で視力を強化し爆弾を見る。視力の上がった彼女には投げられた爆弾はスローで見え、取りやすいのだ。そして数秒後、案の定コーディネリアは爆弾をキャッチした。

コーディネリア「それで、教官、これは・・・」

小林「部屋の隅に投げて!!」

コーディネリア「はい!!」

コーディネリアは爆弾を部屋の四角の隅に投げる。そして

小林「まだ数秒ある。今のうちだ!!」

小林は今自分たちの来た通路に戻る。こうすることで爆風から逃れることができるのだ。しかも数秒あるから確実に避難できる。

シャロ「なんとか間に合いましたね」

ネロ「だね」

小林「でもまだやることはあるよ」

コーデリア「え？」

小林「ラットはもちろん奥の道に隠れてる。このままじゃまたラットは爆弾を投げてくるだろう、だからこの隙にやつを気絶させるんだ」

エリー「でもどうやって・・・？」

- ・シャロ
- ・ネロ
- ・エリー
- ・コーデリア

小林「エルキユール、この壁を壊して、その断片を爆弾に投げるんだ」

エリー「ええ!?!」

小林「大丈夫、ちょっと作戦があるから」

エリー「わ、わかりました」

エリーは決意するとパンツと壁を叩き、壊す。そして・・・

エリー「えーい!!--」

爆弾の元へ投げる。するとズドンと音を立てて破片はぶつかり爆弾は衝撃を受ける。その瞬間爆弾は爆発した。

小林「ど、どうだ・・・」

ラット「くそっ、避けやがったか、次は確実に爆発させるぜ!!--」

黒い煙の中、小林はラットの声を聞く。どつやらラットも奥の道に

隠れて爆発を回避したらしい。

シャロ「それで、どうするんですか!？」

小林「大丈夫さ、爆弾によってラットの視界を奪うのが目的だから」

・シャロ

・ネロ

・エリー

・コーデリア

小林「ネロ、あのブレーカーの電気をハッキングで落として!!」

ネロ「オツケー!」

ネロは勢いよく部屋に飛び込みブレーカーへと走る。ネロは微弱な電流を読み取れる為、暗い中でもどこにブレーカーがあるのか分かるのだ

ネロ「くらえ、ボクのトイズ!」

そう言いながらネロがブレーカーにヘラで刺してハッキングする。これによりブレーカーはネロに操られ、部屋は暗くなり、見えなくなった。

ラット「な、なんだ!?!」

小林「いまだ、行こう!!」

小林は4人に声をかけて奥の道へと進む。暗くて行けたのは小林が覚えていたかららしい。道を通る際もラットにはもちろん見えない為、こっそりと通過することができた。

そして次に出た部屋では・・・

小林「ストーンリバーとトウエンティか・・・」

ストーンリバー「ここは・・・通さん！」

トウエンティ「美しいこの僕がNE」

ストーンリバーとトウエンティが待ち受けていた。部屋はたくさん
のカーテンに囲まれた部屋だ。

ネロ「トウエンティ相変わらずだし・・・」

シャロ「精神科さん行ったんでしょうか？」

エリー「それよりも・・・ここをなんとかしなきゃ」

コーデリア「そうね、教官、何か策はありますか？」

小林「もちろん」

・シャロ

・ネロ

・エリー
・コーデリア

小林「シャーロック、あのカーテンをストーンリバーに!!」

シャロ「はい!」

シャロは自身のトイズ「サイコキネシス」でカーテンを操り、ストーンリバーにかぶせる。しかし

ストーンリバー「こんなものが・・・効くと思ったか！」

ストーンリバー所持している剣でバツサリカーテンを切る。

ストーンリバー「こんな無意味なこと・・・」

小林「無意味じゃない」

ストーンリバー「!？」

ストーンリバーは小林の声のした方を見た。声のした方、それはストーンリバーの足元だった

ストーンリバー「なっ、今の際に・・・」

小林「たあああ!!！」

小林は体全体で体当たり、ストーンリバーの体は壁に打ち付けられ気絶した。

小林「ふう、あとは・・・」

トウエンティ「この僕を倒せるかな？」

シャロ「はい？」

エリーが何か言いたそうにシャロに言うとシャロも「なんだろう？」
といった意味も込めて返事する。

小林「とにかく、行こう。この先にアルセーヌがいるはずだ！！」

「「「「はい！」「」「」

そして小林達ミルクィホームズは奥の部屋へと向かった。

第三十六話 追跡！怪盗アルセー又（後書き）

ネロ「次回に持ち越し？」

YES

ネロ「でも次回アルセー又と対決でしょ？」

・・・

ネロ「あれ？なんで何も答えないのさ」

・・・

ネロ「なんか言えよ！」

・・・次回もお楽しみに！！

ネロ「えー」

第三十七話 対決！怪盗アルセーヌ・・・？（前書き）

エリー「今回はアルセーヌと対決・・・ですか？」

・・・

エリー「あの・・・コアラさん・・・？」

・・・

エリー「はじめてもいいですか・・・？」

うんいよ

エリー「そこは返事されるんですね」

第三十七話 対決！怪盗アルセーヌ・・・？

アルセーヌの部下、ラット、ストーンリバー、トウエンティの妨害をかいくぐり、ついに奥の扉に着いた小林達。彼らの目の前には大きな木造の扉があった。

シャロ「おつきいですね、この扉」

小林「そうだね、恐らくここがアルセーヌがいる場所だろう」

小林は少し眉をひそめた。これからどんな罠が仕組まれているか分からない部屋に入る、アルセーヌが人を傷つけることを嫌っているとはいえ警戒心を緩めるわけにはいかなかった。

ネロ「・・・それじゃあ、行こう」

コーデリア「ちょっと待って!」

ネロ「うわっ!？」

ネロが先に出て扉を押そうとする。その時、コーデリアが何かを捉えネロを止めた。それに驚いたネロは反射的に扉に触れる前に体を引っ込め、扉から離れた。

ネロ「ちょ、なんだよコーデリア、ビックリしただろ！」

コーデリア「ごめんなさいネロ、でも・・・火薬の臭いがするのよ」

ネロ「火薬？」

ネロがそう呟いた時だった。

小林「!？」

扉から突然凄まじく光が輝く。

シャロ「きゃ!？」

エリー「なんででしょう、この光・・・」

小林「（火薬の臭い、光・・・あっ!）みんな、急いで扉から離れて！」

小林は「火薬の臭い」と「光」にある予感を感じ四人に指示する。四人は返事をする余裕もなく小林と共に扉から離れる。すると

バンツツツ!!!!!!

と大きな音をたてて扉は粉々になり吹き飛んだ。
その衝撃で四人も吹き飛ばされる。幸い小林が気づき離れるように指示していたので衝撃自体は少々なもの、怪我はなかいようだ。

ネロ「いたた・・・なんだよ、今の爆発？」

エリー「そう・・・みたい・・・」

コーデリア「なんで・・・爆発・・・？」

小林「分からない・・・もしかしたらアルセーヌの畏かもしれない」

小林は必死で自分の頭をフル回転させる。この4人の無事をどう確保するか、そしてどうやってアルセーヌを捕まえるか、2つの答えを出すためにだ。そんな中シャロが立ちあがり、部屋へ向かいながら言った。

シャロ「アルセーヌは大丈夫でしょうか？」

シャロの口から放たれた意外な一言、それに小林はただただ驚くしかなかった。

小林「（こんな状況で敵の心配！？なんて子だ）シャーロック、危ないから・・・」

シャロ「でも今の爆発は凄かったです。もしかしたらアルセーヌも怪我をしてるかも」

小林「ダメだ罷かもしれない、その場合君が危ないんだ」

シャロ「でも中には入らないと何もはじまりません。だから行きましょう」

小林「それなら僕が・・・」

シャロ「・・・先生、あたしたちはみんなで「ミルキイホームズ」じゃないんですか？」

小林「えっ？」

小林はつい言葉を止める。シャロは顔を伏せて話を続けた。

シャロ「先生は優しいです。何かあるかもしれないからって自分で行こうとします。でもそれって先生が危ない目にあうってことですよね？」

小林「そうだよ、でもそれは・・・」

シャロ「よくないことです。あたしたちはみんなでミルキイホームズなのにそんなのダメですよ」

シャロが伏せていた顔を少し上げると悲しそうな表情をしていた。そんな彼女の表情を見て小林は「ハッ」とする。彼女たちは確かに教え子、でも今はそれと同時に事件解決を目指す「仲間」なのだ。

小林「・・・ごめん、シャーロック。僕は1人でなんとかしようとしていた。君たちを安全に・・・でも違った。安全を重視することは違わないけどだからって君たちを「仲間」として見てないのは確かに間違ってた、ごめん。でも・・・」

シャロ「うわ!？」

小林は突然シャロに近づき凸ピンをくらわせた。

シャロ「な、何するんですかあ？」

小林「だからって君一人で入って行くのも間違っている。僕たちはみんなでミルキィホームズ・・・でしょ？」

シャロ「あう・・・すいませんでした」

小林「さて、それっじゃ行こうか、もちろん油断せずね」

「」「」「はい」「」

小林の言葉に4人は返事をし、中へ入る。煙だらけのそこは少し視界が悪かったが見えないわけではない。すると意外な光景がそこに

あつた。

小林「アルセー又!？」

アルセー又が倒れていたのだ。5人は急いでアルセー又の元へと行き声をかけた。

小林「アルセー又!アルセー又!」

アルセー又「……小林さん……」

何度も呼ぶとアルセー又は目を開けた。なんとか意識はあるようだ。

小林「アルセー又、この爆発は……」

アルセー又「私が仕掛けたものではありません」

シャロ「やっぱり……」

アルセー又は弱弱しく答える。シャロは予測していたらしい!

小林「じゃあこの爆発は予想外の事……」

アルサー又「そうですね、私^{わたくし}は人を傷つけるのは好きじゃありません。ましてや爆弾なんて……」

アルサー又の反応から小林はアルサー又の言葉が本当のことだと判断する。彼の長年の勘ではあるが今は彼女の言葉を信じるしかなかった

アルサー又「秘宝は……そこにあります」

アルサー又が指を刺した方、それはソファアだった。

アルサー又「その下にボタンがあります。それを押せば出てくるはずですよ」

小林「ネロ、エルキュール！」

エリー「はい」

ネロ「任せて！」

ネロとエリーはソファアの下を見る。すると確かにボタンがあり、押すとソファアが開いて秘宝が出てきた。

ネロ「それじゃあこれ持って行くよ」

小林「ああ、頼む」

ネロとエリー、コーデリアにシャロで秘宝を持って行く。鏡が重いらしくコーデリアとシャロで、剣はエリーが、アダムの涙はネロが持ち上へと通じる階段を上がった。

小林「さあ、アルセーヌ、肩を貸すから早く……」

アルセーヌ「げ、幻惑のトイズ！」

小林「なっ!？」

アルセーヌは突然トイズを発動、小林の目の前に立ちあがったアルセーヌがいた。

アルセーヌ「さあ小林さん、急いで上へあがりましょう」

小林「あ、ああ」

小林はアルセーヌと共に階段を上がる。すると元いた場所、小衣達がいる場所に戻ってきていた。

シャロ「あ、先生!……あれ、アルセーヌはどうしたんですか？」

小林「アルセーヌ？アルセーヌならここに・・・」

小林は横を見る。するといるはずのアルセーヌはいなかった。

小林「いない！？そんな、さっき一緒に上がってきたのに・・・はっ！」

小林は思いだす。自分が「トイズ」にかけられていたことを。

小林「そうか・・・アルセーヌのトイズ・・・」

咲「あ、来た来た」

小林「？」

咲の言葉に反応するように上空から風が吹いてくる。何事かと思いついてみればそこにはヘリコプターが来ていた。

小林「これは・・・」

次子「実はこの船に爆弾があるのが分かってさ、だからこいつで非難するってわけ」

小林「なるほど・・・それじゃあ早くアルセー又達を・・・」

小林が階段を戻ろうとした瞬間、バンツ！！！！と音を立てて船の下が爆発した。

次子「爆発が始まったか」

平乃「皆さん、急いで乗ってください」

降りてきたへりに乗りながら次子、平乃が言った。

小林「でもこれじゃあアルセー又達が・・・」

小林が言ったその瞬間だった。船から何かが海へと飛び込んでいたのだ

シャロ「あ、アルセー又でしょうか？」

小林「だと思っ、よしみんな乗り込もう！！」

小林の言葉に4人は乗り、小林も乗った。

小衣「みんな乗ったわね、急いで離れるわよ!!」

小衣がそういうと操縦士が急いで船からへりを離す。そして

船は爆発、沈んでいった。

シャロ「うわあ〜可愛いです!!」

小林「よろこんでもらえてうれしいよ」

シャロの反応に小林はほほ笑む。安心の意味での微笑みだろう。

今回はシャロの言葉があったからより信頼度が上がった、ということとでシャロのお願いを聞いたわけだが、シャロのお願いが「先生のお勧めの場所に行きたいです」とのことだったのでふれあい動物園に来ているのだ

ネロ「こいつ〜可愛いなあ」

エリー「可愛い・・・」

コーデリア「あ、キャベツ食べたわ」

他の3人も動物、「うさぎ」と遊んでいた。気に行ったようだ。

シャロ「うさぎさん、可愛いです」

小林「あはは、シャーロックが喜んでくれてよかったよ」

シャロ「あ……先生？」

小林「ん？」

小林がシャロの言葉に返事をし、シャロを見る。

シャロ「これからも……もっともつとみんなで色々な思いで、作
つていきましようね!」

小林「うん、もちろんさ」

シャロの言葉に小林はそう答えた。

第三十七話 対決！怪盗アルセーヌ・・・？（後書き）

というわけで対決はなしでした！！

エリー「だから返事されなかったんですね」

そういうこと。まああくまでゲームに沿ってるんで！

エリー「でも部屋に入る前のシャロと小林さんの会話はありませんでしたよ？」

そこは追加しました！

そして次回はいよいよ・・・

エリー「いよいよ・・・？」

僕が一番描きたかった部分です！！ちなみに「第十話それぞれの優しさ」のように4つつくるので結構時間かかるかもです

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！シャロ編（前書き）

さて、今回ははっきり言いましょ、ほのぼのの回です！…

シャロ「わーい、平和なんですネ！」

そゆじや…！…

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！シャロ編

小林「・・・早く・・・来すぎたかな・・・？」

遊園地の目の前で小林がつぶやいた。

秘宝強奪事件から数日後、怪盗帝国から何もなにということで平和を取り戻した小林達「ミルクィホームズ」は「たまには休憩を」ということで休日を取ることになった。

そしてその休日を遊園地で遊び、過ごすことになった。なので小林はここにいるのだ。しかし誰も来ておらず小林が一番乗り、ということらしく待っていた。
とそこへ

シャロ「せんせーい！」

小林「あ、シャーロック」

シャロが登場、どつやら急いだらしく走ってきた。

シャロ「すみません、遅れちゃって」

小林「大丈夫、僕も今来たところだから。それよりみんなは？」

シャロ「え、みんなですか？あたしより早く来たと思ったんですけど・・・」

シャロがキョロキョロと周りを見渡す。しかし現れる気配は全くなかった。

小林「何かあったのか・・・ん？」

小林は自分のポケットの中でPDAが振動していることに気付き取りだした。

小林「電話だ、もしもし」

ネロ「あ、小林？」

小林「ネロ？」

小林に電話をかけてきた相手、それは今探しているネロだった。

小林「ネロ、一体どこにいるんだい？僕とシャーロックはもう着いたよ？」

ネロ「ごめんごめん、それが今日これなくなっちゃってさ」

小林「え？」

ネロ「あ、コーデリアとエリーもだから」

小林「3人とも？何かあったのかい？」

ネロ「ボク達にも用事があるんだよ。それじゃ」

小林「あ、ちょ」

小林の呼び声も空しく、電話は切れてしまった。

小林「うーん、みんな今日何か用事があるとか言ってたかい？」

シャロ「いいえ、そんなことは言っていなかったはずなんですけど・・・」

小林「そっか、困ったな・・・」

小林は頭をかいた。この展開は全然予測していなかったためどうしようか困っているのだ。

小林「どうしよっか、今日はみんな来ないみたいだけど・・・」

シャロ「あじゅう……どうしましょう……」

シャロは下を向いて考える。その時小林は思った。

小林「（もしかしてこのまま帰ればシャーロックは1人、休日にそれはさみしい）あの……シャーロック、もしよければ2人でいかないかい？」

シャロ「え、先生と2人で遊園地ですか？」

小林「うん、せっかくだしまた行くときにどれがおススメか勧める為の調査って意味も含めて……どうかな？」

シャロ「でも……いいんですか？先生お忙しいんじゃない……」

小林「大丈夫、僕は今帰っても暇だから。あ、もちろんシャーロックがいいならだけど」

シャロ「あたしも暇です！」

小林「それじゃ行こうか」

シャロ「はい！」

そういうとシャロは小林の手を掴み遊園地へと入った。

シャロ「先生、早く行きましょー!!」

小林「分かった、分かった、分かったからそんなに引っ張らないで」

引っ張るシャロに抵抗せずついていく小林、どうやらシャロは早く遊園地で遊びたくて仕方ないようだ。

小林「（やっぱり入って正解だったな）」

小林は心の中でそうつぶやいた。

――

シャロ「先生！次はあれに乗りましょー！」

小林「う、うん」

元気に次のアトラクションを指差して言うシャロに答える小林。シャロは嬉しいらしくスキップしながら移動していた。

小林「（シャーロックは元気だなあ）」

若さに負けないように（小林もまだ19だが）振舞う小林だったが
シャロの元気の良さには劣るようだ、スキップするシャロに追いつ
くことができず歩いていた。

シャロ「あれ？先生、どうしたんですか？」

シャロが小林の方に戻ってきて問う。

小林「（シャーロックに心配かけちゃいけないよな）大丈夫だよ、
行こうか」

小林は苦笑いしつつも答えた。しかしシャロには見破られたらしく

シャロ「先生、ちょっと休憩しましょう。あそこにベンチがありま
すから」

シャロはほほ笑いベンチへと向かう。それに素直に小林はついてい
き座った。

小林「（助かる・・・）」

シャロ「・・・先生？」

小林「ん？」

シャロ「先生は今、楽しいですか？」

小林「もちろん、楽しいよ。でもなんでそんなこと聞くんだい？」

シャロ「だって先生にも楽しんでもらわないとダメじゃないですか。あたし1人が楽しんでも。」

シャロが持っていたバックを見ながら言った。優しい、何かを思うような瞳で。

小林「シャーロック・・・君は優しいんだね」

シャロ「そんな・・・ただあたしミルキイホームズのみんなと、先生と一緒にいてとっても楽しいんです。だからみんなにも楽しいって思っただけ、それだけです」

小林「素晴らしいことだよ」

シャロ「えっ？」

小林「自分1人の事だけでなく他の人のことも考えて行動できる、そこはシャーロックのいいところ、長所だよ」

シャロ「えへへ、ありがとうございます」

シャロは笑顔で答える。小林は、いやこの笑顔を見た人はみんなきつと「この笑顔を護りたい」と思うだろう、それぐらい素敵な笑顔だ。

小林「さて、それじゃあそろそろ行こうか」

シャロ「はい！じゃあ次はあれで！」

小林「いいよ、行こう」

またスキップで移動するシャロを見ながら小林はほほ笑んだ。

シャロ「ふう〜メリーゴーランド、楽しかったです！」

小林「僕も久しぶりに乗ったよ」

シャロ「あたしもです、今度はみんなで乗りましょうね！」

小林「ああ。・・・っともうこんな時間が、シャーロック、最後に乗りたいものとかある？」

小林が時計を見ると時間は夕方の6時、そろそろ帰る時間というところで小林はシャロに希望を聞く。

シャロ「・・・じゃあ最後に・・・あれ、いいですか？」

シャロの目線の先、そこには大きな観覧車があった。

小林「いいよ、最後は観覧車だね」

小林とシャロは観覧車へと向かって歩いた。

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！シャロ編（後書き）

いやぁ平和でしたねえ

シャロ「そうですね、遊園地楽しかったです！！」

書き手はネタに困りますがね、基本を1つとして4人別々に考えた
んで（苦笑い）

シャロ「そういえばゲームとは違いますよね、これってコアラさん
が考えたんですか？」

そうだよ。

シャロ「ありがとうございます……！」

シャロにお礼を言われると最高ッス！！

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！ネロ編（前書き）

こちらはネロ編ですね

ネロ「あれだよね、今回のストーリーはコアラが考えたんだよね？」

うん、基本はゲームに沿ってるけど経過は変えました。

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！ネロ編

小林「・・・早く・・・来すぎたかな・・・？」

遊園地の目の前で小林がつぶやいた。

秘宝強奪事件から数日後、怪盗帝国から何もなにということで平和を取り戻した小林達「ミルキイホームズ」は「たまには休憩を」ということで休日を取ることになった。

そしてその休日を遊園地で遊び、過ごすことになった。なので小林はここにいるのだ。しかし誰も来ておらず小林が一番乗り、ということらしく待っていた。とそこへ

ネロ「小林〜」

小林「あ、ネロ」

お菓子のうまうま棒を口にくわえてネロが登場、小林は苦笑いしながら迎えた。

小林「またお菓子かい？」

ネロ「まあね、うまうま棒おいしいしさ」

小林「あはは・・・」

理屈が通っているのかよくわからないが小林はとりあえず返事をす
る。この子はどんな状況でもお菓子を欲し、得たいのだろう。そ
ういうマイペースな子だと小林は認識していたからこそその反応だ。

小林「ところで・・・みんなは？」

ネロ「みんな？シャロ達のこと？」

小林「うん、一緒に来てないのかい？」

ネロ「うん」

小林「弱ったなあ、待ち合わせはこのはずだけど・・・」

ネロ「おかしいなあ、何やってんだろ」

・・・とその時、小林に電話がかかってきた。小林はポケットから
PDAを取り出しながら

小林「あ、電話だ、みんなかも。・・・もしもし」

コーディリア「あ、教官ですか？」

小林「ああ、コーディリア、どうしたんだい？待ち合わせは入口の前で・・・」

コーディリア「それが・・・その・・・用事が出来てしまって・・・」

小林「用事？一体どんな？」

コーディリア「えっ、その・・・とにかく今日は用事が出来て私とシヤロとエリーは行けなくなりました！」

小林「とりあえずコーディリア、全然会話が成り立ってな・・・」

コーディリア「失礼します！！」

小林「ちょ、あ・・・切れた・・・」

ネロ「ねえ、みんななんて？」

PDAをポケットにしまう小林にネロが聞いた。

小林「今日は来れないんだって」

ネロ「えっ？」

小林「なんでも用事があるらしくて……」

ネロ「用事って……どんな？」

小林「さあ？ただ用事としか答えてくれなかったから」

ネロ「そっか……ねえ小林ってこれから暇？」

少し落ち込んだネロだったが表情を戻し、小林に尋ねる。

小林「いや、特には何もないから暇だけど……」

ネロ「それじゃさ、ボクと行かない？」

小林「えっ？」

ネロ「遊園地だよ遊園地。だって暇なんでしょ？だったら行くっしょ」

小林「それは別にかまわないけど……」

ネロ「よし、それじゃあレッツゴー!!」

小林「ちょ!!」

ネロが小林の服を掴んで入口から入る。小林は引つ張られて行くよ
うな形となった。

ネロ「ん〜今のおいしかったねえ」

小林「う、うん」

ネロは笑顔で言うが小林として単純な笑顔ではいらなかった。

小林「（遊園地に来てあちこちの施設のご飯を食べるってどうなんだろう・・・）」

そう、実はネロ、遊園地に来てあちこちの食べ物を買ってる場所で食べ比べをしているのだ。

小林「（そろそろ財布の中身が・・・）」

ネロ「・・・あっ」

小林「ネロ？」

小林が財布を見て心の中で呟くとネロは何かを見つけたらしく茂みへと走った。もちろん小林もそれを追いかける。

小林「どうしたんだい？」

小林が追いつくとネロは座り込んで何かを見ていた。見ていたものは……

ネロ「このネコ……迷子かな？」

小林「子猫……？」

子猫、ネロはこの子猫を見つけてここに来たのだ。

ネロ「お母さんと離れちゃったのかな」

小林「そうかもし……いや、大丈夫みたいだよ」

ネロ「えっ？」

小林の言葉に軽く驚くネロ、しかしその大丈夫の理由はすぐに分か

った

ネロ「あ、お母さんだ」

そう、この子猫のお母さんであろうネコがこちらに来たのだ

ネロ「よかったね、もう離れちゃだめだよ？」

ネロはそう言いながら子猫をお母さんネコの元へと運ぶ。すると親子は一緒に茂みの中へと行った。

小林「よく気付いたね、ここに子猫がいるって」

ネロ「たまたま見えたんだ。それで気になって」

小林「ネロは・・・優しいね」

ネロ「そ、そんなことないよ。だってほら、子猫が一匹でいたら危ないでしょ？」

小林「そう思えることって凄いいことだと思っよ」

照れるネロに小林は温かな表情で言った。実際子猫がいたからといって助けられない人もいる。だがネロは助けた。そこが違いなのだ。

ネロ「つ、次はあそこいこ！」

小林「あ、ちよ、ネロ？」

ネロは赤くなりながら他のお店を指して歩き始める。まるでこの話を早く終わらせるようにだ。

小林「照れ屋なんだな、ネロ」

小林は苦笑しつつ、心の中でそう思いながらネロの後を歩いた。

ネロ「いやあくおいしかったおいしかった」

小林「うう……」

数時間後、夕暮れ時となった頃に小林の財布は軽くなっていた。かと思うとネロは満足そうな笑顔でいる。どうやらあれからまた色々周り、食べていたようだ

ネロ「そういえば結構暗くなってきたね」

小林「え、ああ、そうだね。そろそろ帰ろう。ネロは最後に乗りた
いものとかある？」

ネロ「うん、そうだなあ・・・それじゃさ、あれに乗る！」

ネロが指を指した先には・・・

小林「観覧車？」

ネロ「ダメ・・・かな？」

小林「いや、よし、それじゃ行こうか」

ネロ「うん」

小林とネロは観覧車へと歩き始めた。

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！ネロ編（後書き）

こんな感じですよ

ネロ「なるほど・・・確かにエリーやシャロ、コーディネアとは違
う・・・」

でしょ？これ考えるの苦労したんだから（笑）

ネロ「まあコアラにしてはよくやったよね」

ははあ！！ありがたきお言葉！！

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！エリー編（前書き）

こちらはエリーさんの物語です

エリー「え・・・主役・・・ですか？」

もちろんです！！

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！エリー編

小林「・・・早く・・・来すぎたかな・・・？」

遊園地の目の前で小林がつぶやいた。

秘宝強奪事件から数日後、怪盗帝国から何もなにということで平和を取り戻した小林達「ミルクィホームズ」は「たまには休憩を」ということで休日を取るようになった。

そしてその休日を遊園地で遊び、過ごすことになった。なので小林はここにいるのだ。しかし誰も来ておらず小林が一番乗り、ということらしく待っていた。とそこへ

エリー「こ、小林さん」

小林「あ、エルキュール」

エリーが走ってくる。急いで走ってきたらしく少々息が荒かった。

エリー「ハアハア、すいません。遅れてしまって」

小林「いいよ、僕も今来たところだから。それよりみんなは？」

エリー「え、みんな……ですか？」

小林「うん、シャーロックたちは一緒じゃないのかい？」

エリー「……はい」

小林「うくん、どうしたんだろ……ん？」

腕組をする小林のポケットが振動する。PDAが電話を受信したようだ

小林「あ、電話だ、みんなかも。もしもし」

シャロ「あ、先生ですか？おはようございます！」

小林「ああ、おはよう。ってシャーロックたちはどこにいるんだい？僕とエルキュールはもう着いたよ？」

シャロ「すいません！それが今日は行けなくなっちゃって……」

小林「行けなくなった？何かあったのかい？」

シャロ「それがちょっと用事ができちゃって……あ、ネロとコーデリアさんもです」

小林「3人とも！？一体……」

シャロ「とにかく用事が出来ちゃったので今日は先生とエリーさんで楽しんでください！では！！」

小林「ちょ、シャーロック！？・・・ダメだ、切れた・・・」

エリー「どうか・・・されたんですか・・・？」

小林はゆっくりとPDAをポケットにしまう。そんな彼の様子を見てエリーがふと声をかけた。

小林「それがシャーロック達がこれなくなったらしいんだよ」

エリー「シャロ達が・・・？」

小林「エルキュールは何も聞いてない？」

エリー「はい」

小林「そうか・・・」

小林は言いながら考えた。これからどうしようかと、だ。

小林「（このまま帰ってもいいけどそれだとエルキュールがかわいそうだ。ここはシャーロックの言った通り・・・）エルキュール、もしよかったら僕と遊園地に行かないかい？」

エリー「え・・・?」

小林「いやほらこのまま帰っても暇じゃないかなって思って・・・
もちろんエルキュールに時間があればの話なんだけど」

エリー「い、行きます。小林さんと・・・行きたいです」

小林「それじゃあ行こうか」

エリー「はい」

エリーが嬉しそうに入場口へと向かった。しかも微妙にスキップしていた。

小林「（相当嬉しかったんだな、遊園地）」

小林はそう思いながら彼女について行った。

エリー「見て下さい、小林さん、あれ」

小林「おっ、コーヒークップだね」

エリーがゆっくり回るコーヒーカップを見て小林を呼んだ。どうやらこれに乗りたいたいようだ

小林「これに乗るかい？」

エリー「あ、いえ、そんな、ただ・・・コーヒーカップがあるなあと思っただけですから・・・」

小林「・・・エルキュール、乗ろう」

エリー「えっ、えっ？」

乗るか聞かれて「ハッ」とし、遠慮するエリーを小林は引っ張ってコーヒーカップと一緒に乗った

エリー「小林さん？」

小林「せっかく来たんだし、楽しもうよ。エルキュールはこれに乗りたかったんだらう？」

エリー「えっ・・・はい」

小林「じゃあ乗ろう。これは日ごろ頑張ってるご褒美、とでも思っ
てちょっと贅沢しちゃうおつよ」

エリー「え・・・ふふふ」

小林の言葉にほほ笑むエリー、そんな表情を見て小林は安心したよ
うだ。

小林「この次はどれに乗ろうか？」

エリー「あの・・・実は私・・・激しく回ったりするのが苦手で・・・」

小林「ああ、だからゆっくりなコーヒーカップってわけか・・・」

エリー「すいません、こんなで・・・」

小林「いいや、誰にだって苦手はある。実際僕も絶叫系が苦手さ」

エリー「ホントですか・・・？」

小林「もちろん、こんなことじゃ嘘はつかないよ」

エリー「そうですね・・・あっ」

小林「どうかしたかい？」

エリー「あそこのおばあさんが・・・」

小林「ん？・・・あっ」

小林はエリーの目線の先に何かがあるかを確認める。するとそこにはメガネを落としたらしいおばあさんがいた。地面をキョロキョロ見ているのでほぼ間違いないだろう。

小林「ホントだ、それじゃあ探しに……ってアレ？」

小林がエリーに話そうとするとエリーはすでにおらずおばあさんの方へ行っていた。

エリー「あの……大丈夫ですか？」

おばあさん「ああ、メガネを落としてしまっただけねえ」

エリー「……これ……ですか？」

エリーは少し黒いメガネをおばあさんに見せた。おばあさんは近くまでよって見て、自分のだと判断したらしく

おばあさん「おお、これじゃ、ありがとう」

エリー「い、いえ」

エリーは照れながら返事をする。それから少し会話をし、おばあさんはどこかへと向かった。

小林「凄いじゃないか、エルキユール」

エリー「い、いえ、たまたまですから・・・」

小林「行動もとても速かった。エルキユールは優しいね」

エリー「え、あの、その・・・」

小林の言葉が発せられるとエリーは急に赤くなり、小林に背を向けた。

小林「あの・・・エルキユール・・・」

エリー「つ、次はあっちに行ってみましょう」

小林「あ、うん」

小林は歩くエリーを追って歩いた。

小林「さて、そろそろ帰ろつか。エルキュールは最後に何か乗りた
いものとかある？」

エリー「え？」

小林の問いにエリーが少々驚く。あたりは夕日に染まり、もうすぐ
変えるべき時間ということを証明していた。

エリー「それじゃあ……あれに……」

小林「ん？観覧車？いいよ、行こつか」

エリー「はい」

小林とエリーは観覧車へと歩き始めた。

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！エリー編（後書き）

エリーさん編はこんな感じでした

エリー「は、恥ずかしいです」

照れてますね

エリー「でも小林さんの前でちゃんと喋れてよかった・・・」

緊張するみたいだもんね

エリー「最初の頃よりはしないんですけど・・・やっぱり・・・」

まあそれがエリーさんの良いことと思っけど

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！コーデリア編（前書き）

さあこちらはコーさん編です

コーデリア「どんな物語が!？」

そんなそうだいなもんじゃないけどね

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！コーディネリア編

小林「・・・早く・・・来すぎたかな・・・？」

遊園地の目の前で小林がつぶやいた。

秘宝強奪事件から数日後、怪盗帝国から何もなにということで平和を取り戻した小林達「ミルキイホームズ」は「たまには休憩を」ということで休日を取ることになった。

そしてその休日を遊園地で遊び、過ごすことになった。なので小林はここにいるのだ。しかし誰も来ておらず小林が一番乗り、ということらしく待っていた。とそこへ

コーディネリア「きょうか〜ん」

小林「コーディネリア」

コーディネリアが走ってくる。転ばない程度の速さだ。

コーディネリア「すみません、遅れてしまって・・・」

小林「大丈夫、遅れてないから。ところで他の3人は？一緒じゃないのかい？」

コーデリア「えっ、エリー達ですか？先に来てませんか？」

小林「ああ、まだ来てないよ」

コーデリア「おかしいわねえ、先に来てると思ったんだけど・・・」

コーデリアがあたりを見渡す。しかし3人の姿は全く見えない。とそこへ小林のポケットに変化が起きた。

小林「あ、PDAが・・・もしもし」

どうやら電話だったらしく小林は出てみる。その声の主は・・・

エリー「あの・・・小林さん」

小林「あ、エルキュールかい？今どこ？僕とコーデリアはもう着いたよ？」

エリー「それが・・・今日は・・・行けなくなっ・・・」

小林「行けない？」

エリー「はい」

小林「何かあったの？」

エリー「え、ええ、少し・・・用事が・・・」

小林「用事？どんなだい？」

エリー「それは・・・とにかく用事なので。あ、大丈夫です。何か悪いことがあったわけではありません。では・・・失礼します。しつかり楽しんで来てください」

小林「ちょ、エルキユール！？あ・・・切れた」

コーデリア「教官、されたんですか？」

コーデリアが頭にクエスチョンマークを乗せるような表情で小林に聞いた。

小林「それが今日は来られないって」

コーデリア「ええ、どうしてですか！？」

小林「分からない、用事・・・としか・・・。ただ悪いことじゃないって言ってたから大丈夫とは思っけど・・・」

コーデリア「そうですか・・・」

コーディネリアは少しさびしそうに下を見た。その瞬間小林の小林の脳が働き、思考した。

小林「（もしかしてコーディネリアはこのまま帰ったら暇・・・なのかな）コーディネリア」

コーディネリア「はい、なんですか？」

小林「コーディネリアは今から・・・暇？」

コーディネリア「暇って・・・はい、時間はありますよ」

小林「もしよかったら僕といかないかい？」

コーディネリア「えっ？」

小林「実は僕も今帰っても暇でさ。せつかくならコーディネリアと楽しみたいなって・・・どうかな？」

コーディネリア「きよ、きよ、教官がよろしいのであればぜ、ぜひー！」

小林「よかった」

小林はほほ笑んだ。一方コーディネリアはなぜか赤くなっており今にも湯気が出そうな状態だ

コーデリア「それでは行きましょう!!教官!!」

小林「う、うん（急に元気になった・・・）」

コーデリアに引っ張られ、入場する小林だった。

コーデリア「ふう、あれ、楽しかったですね」

小林「ああ、あれなら絶叫系じゃないから助かるよ」

コーデリア「私も苦手なんです絶叫系。うちではシャロやネロが好きなんですけど・・・」

小林「あはは、確かに好きそうだね」

2人がこんな会話をしていると

コーデリア「あら？」

小林「どうしたんだい？」

コーディネリア「あそこの子供が・・・泣いてますね」

コーディネリアは小林に返事をするとき子供まで歩き膝を曲げて子供の視線に合わせた。

コーディネリア「僕、どうかしたの？」

子供はどうやら男の子だったようでコーディネリアが優しく問う。すると子供は答えた。

子供「お母さんと・・・はぐれちゃったの・・・」

コーディネリア「そう・・・じゃあお姉さんと一緒に探しましょう」

子供「・・・ホント？」

コーディネリア「ホントよ、お姉さんのトイズってそういうトイズだから」

そういつてコーディネリアは立ち上がりトイズを発動、五感が強化され、コーディネリアがあたりを見る。すると

コーディネリア「いたわ、子供を探してるお母さん。さあ行きましょう」

子供「うん」

コーディリア「すいません教官、少しお待ちしていただいてもよろしいですか？」

小林「もちろんだよ」

小林が了承するとコーディリアはニコツとほほ笑み子供と一緒に親の元へと向かう。数分後、コーディリアは帰ってきた。

コーディリア「すいません教官、お待たせしちゃって」

小林「いやいいんだよ。それよりもコーディリア優しいね」

コーディリア「当然のことをしただけですよ。その為にある力ですから」

コーディリアが少し照れながら説明する。彼女は自分のトイズを正し使えているようだ。

小林「さて、それじゃあまた回ろっか」

コーディリア「はい！」

小林「結構回ったね」

コーデリア「そうですね、メリーゴーランドも楽しかったです」

小林「あはは（ちょっと恥ずかしかったけど・・・）」

小林は心の中で苦笑いする。これは絶対に口に出してはいけな
いとなのだ。

小林「そういえばもう暗くなってきたね、次に乗るアトラクション
で最後にしよう。コーデリアは何か乗りたいものある？」

コーデリア「そうですね・・・教官がよろしければ・・・あれに・・・」

小林「観覧車？」

コーデリア「ダメ・・・ですか？」

小林「いいや、コーデリアがいいなら。行くつか」

コーデリア「はい...」

小林とコーディネリアは観覧車へと向かい歩き始めた。

第三十八話 たまには休憩！遊園地！！コーデリア編（後書き）

ということでコーさん編でした

コーデリア「お疲れ様でした」

いやあ、コーデリア、乙女だね

コーデリア「っえ？」

小林に照れて……

コーデリア「……技かけますよ？」

すみませんでした！！

第三十九話 訪れたその時 シャロ編（前書き）

今回は観覧車内でのお話です

シャロ「わーい、観覧車ですう！！」

喜んでいるな？喜んでいるな？

シャロ「あれ？喜んじゃいけなかったですか？」

そんなことないよ

第三十九話 訪れたその時 シャロ編

シャロ「わあ〜すつごく高いです！すごいです！..」

小林「ホントだ、随分上がったね」

シャロが窓から外を見て元気に言う。只今観覧車に乗り中、あれからちゃんと観覧車にのったようだ。

シャロ「すごい、誰もいませんよ」

小林「もう帰ったんだと思うよ。結構遅いから」

シャロ「あつ・・・」

小林が外を見ながら言う。確かに夜に近づいており、あたりは暗くなっている。たいていのお客はもう帰る時間だろう。すると小林のその言葉を聞いたシャロの表情が少し暗くなる

シャロ「すいません、あたしなんかの為に遅くなってるのに・・・」

小林「そんな、僕はねシャーロック、君と楽しみたいからここにいるんだよ？何も悪く思うことはない、むしろこんなに楽しい1日をおくれたんだから感謝してるよ。シャーロックは楽しかった？」

シャロ「はい！とつても楽しかったです！」

小林「そっか、それはよかった」

シャロ「えへへ」

小林の問いに答えたシャロの表情が笑顔になる。本当に楽しかったのだろう。彼女の持つ独特の少し幼いその笑顔から小林はそう判断した。つといきなり、シャロの表情が笑顔から疑問を持つような上目遣いに変わった

シャロ「あつ、あの・・・先生？」

小林「何だい？」

シャロ「先生はどうして一緒に行こうっていつてくれたんですか？」

小林「えっ？」

シャロ「あの・・・遊園地に入る前に・・・」

小林は記憶をたどってみる。そこで記憶にあったのは遊園地に入る前、自分がシャロを遊園地に誘った場面だった。

小林「ん・・・ああ、あの時かい？・・・シャーロックがさびしい

んじゃないかって思ったんだ」

シャロ「あたしが・・・さびしい・・・ですか？」

小林「ああ、前に洋館を調査した時、君は1人であることを嫌がっただろう？」

シャロ「はい」

小林「怖いから」っていうのもあつたのかもしれないけど僕にはなんとなく君が1人であること自体を嫌がってる気がした。だから、そんな思いをさせたくなくて誘ったんだよ」

シャロ「そう・・・だつたんですか」

シャロがほほ笑み少し赤くなる。こんなことを言われたのだ。照れているのだろう。その様子がなんとも微笑ましい

シャロ「あたし・・・嬉しいです」

小林「えっ？」

シャロ「先生がそんなにあたしのことを気にしてくれていたなんて」

小林「シャーロック・・・」

小林が見るとシャロはまっすぐな瞳で小林を見ていた。喜びに満ち

た、そんな優しい瞳だ。そんな瞳は少し暗くなつた外を向きシャロは口を開いた

シャロ「あたし、やっぱり大好きです」

小林「えっ!？」

シャロの一言に小林は固まる。「好き」、その言葉の意味は小林も理解していた。だからこそ、この場でその言葉を言ったシャロに驚きを隠せなかった。

シャロ「初めて会ったときからずっとですけど、今はもっともっと好きです」

小林「シャ、シャ・ロック・・・それはほ、本当かい？」

緊張のあまり小林の言葉は震える。「恋愛」に疎い(うとい)小林がもしかしたら初めてかもしれないドキドキを感じていた。

シャロ「はい、あたし「みんな」のことが大好きです」

小林「あ・・・そ、そうなんだ」

小林の固まった表情が緩くなる。緊張のほぐれた証拠だ

小林「（みんなのことか・・・）」

シャロ「もちろん先生のこと大好きです」

小林「えっ・・・」

シャロ「今回みたいにあたしのことよく見ていてくれて・・・やっぱり先生は先生ですね」

小林「そんなことはないよ。僕はただ、たまたま気付いただけだから」

シャロ「あはは、それが凄くうれしかったんですよ」

シャロが笑いながら言う。この笑いはもちろんおかしいからではなく小林と会話できていることの喜び故だろう。そんなシャロの笑顔も数秒すると普段の顔に戻り、口が開いた。

シャロ「これからも・・・大切にしていきたいですね、みんなの思い出」

小林「ああ、大切にして行こう。今度はみんなでここも来よう。みんなでワイワイ楽しもう」

シャロ「はい！」

シャロが笑顔でいう。シャロにとってみんなは大切な存在、そのみんなとの思い出を作るのは彼女にとって楽しくてうれしくて仕方ないのだろう。

シャロ「あの・・・先生？」

小林「なんだい？」

シャロ「ずっと気になっていたことを質問・・・してもいいですか？」

小林「どうぞ」

優しい視線で小林がシャロを見る。するとシャロはもじもじしながら言った。

シャロ「あの・・・せ、先生の・・・トイズってどういふのだったんですか？」

小林「僕の・・・トイズ？」

シャロ「はい」

小林「・・・」

小林は黙り込む。小林にとってトイズ、もっといえば過去の話はし

てはいけない禁止事項、それはシャロも分かっていた。しかし彼女は知りたかったのだ。どうしても、それによってどうこう出来るわけではないが、話せば少しは楽になる、そう考えたのだ

シャロ「あ、すみません。今の質問は忘れて下さい。あたしが調子に乗っただけですから」

小林「・・・いいよ」

シャロ「えっ・・・？」

シャロが苦笑いして答えると小林は許可を出した。そのことに関してシャロの表情は一変、真面目な表情になる。観覧車はゆっくりと回りつづけた。

第三十九話 訪れたその時 シャロ編（後書き）

・・・

シャロ「・・・」

・・・

シャロ「なんですか！？この中途半端な終わり方は！」

まあ全部書くと長いんで分けました

シャロ「次回・・・まさか・・・！？」

どうなるだろうね

第三十九話 訪れたその時 ネロ編（前書き）

ネロ「今回は？」

観覧車内でのお話です

ネロ「もしかしてゲームと同じ？」

いや、違うよ。しかも全員内容が少々違います（キリッ

ネロ「それじゃあいつてみようか」

第三十九話 訪れたその時 ネロ編

ネロ「……」

小林「……」

ネロ「……」

小林「……（なんだこの気まずい雰囲気……）」

小林は目の横に汗が流れていくのを感じながら心の中でそうつぶやく。今彼らがいるのは観覧車の中。先ほどのネロの要望で乗ったものだ。小林は当初ネロが凄く喜ぶと思っていた。自分が行きたいと言ったな場所だから。しかし実際は違った。乗った時からネロは口を開かないのだ

小林「……あのさ、ネロ？」

ネロ「ん？なに？」

小林「もしかして……楽しくない？」

小林は恐る恐る聞いた。ここでもし「楽しくない」なんて言われれば益々雰囲気は悪くなるが聞かずにはいれなかった。しかし

ネロ「何言ってるの？楽しいに決まってるじゃん」

ネロが平然と答えた。偽りのなさそうなその言葉に小林は安心の表情を見せた。

ネロ「でもなんでそんなこと聞くの？」

小林「いや、ずっと黙ってるから・・・」

ネロ「ああ、ごめんごめん。外の景色が綺麗だったからさ、つい見とれちゃって」

ネロは舌を出しながら小林に謝罪した。その表情はごめんとといった感じではなかったが彼女なりの謝罪なのだろうと小林は納得した。

小林「それならよかった」

ネロ「ねえ、小林？」

小林「なんだい？」

小林が納得するとネロはすぐに自分の質問に切り替えた

ネロ「小林は今日、楽しかった?」

小林「もちろん、楽しかったけど・・・なんで?」

ネロ「だって今回は小林を休ませようと思ってここに入ったからさ」

小林「え?」

ネロ「だってこの前の事件といい小林は休んでないでしょ?ボク達はパーティに行つてある意味休んでるけど」

ネロが言うには自分たちは息抜きをしているが小林はしているようには見えない、だから少し強引ながらこの遊園地に連れ込んだ、ということらしい。そう小林は判断した。

小林「つまり・・・ネロは僕のことを心配してくれてるってこと?」

ネロ「そういうこと。えへへ、優しいでしょ、ボク」

少し胸を張つて言うネロ。そんな彼女に小林は苦笑した。

小林「あはは、それは自分で言うことかい?」

ネロ「いいでしょ、別に。本当のことなんだし」

小林「そうだね、ありがとう、ネロ」

小林は感謝の気持ちを込めてネロに言った。

小林「ただ・・・ちょっと財布の中身が・・・」

ネロ「あ、それはボクへのお礼ってことだ！」

小林「あはは・・・」

小林が残念そうに財布の中身をネロに見せるがネロは上手くスル、
小林はもはや苦笑いしかできなかった。

ネロ「・・・小林？」

小林「ん？」

ネロ「好きだよ」

小林「えっ？」

小林の表情が一変し驚きを露わにした。

小林「好きって意味わかってるのかい？」

ネロ「わかってるよ、「好き」ってことでしょ？」

説明になっているかどうかわからないネロの説明（仮）は余計に小林の頭を混乱させた。

小林「（ど、ど）どういうことだ。ネロがいきなり「好き」だなんて・・・しかもここには僕とネロしかないから対象は完璧に僕じゃないか！）」

小林は頭の中で整理しようとするが結果的に混乱しかなかった。

小林「あ、あの・・・ネロ？よく考えた方が・・・」

ネロ「・・・ふふ・・・」

小林「ネ、ネロ？」

ネロ「あははははは、引つかったね、こゝば〜や〜し！」

小林「引つかかった・・・？」

いきなり笑い出すネロにどういふことかわからない小林。そんな彼にネロは説明をした。

ネロ「冗談だよ、冗談」

小林「冗談!？」

ネロ「そう、冗談!」

このとき小林はようやく理解した。ネロは小林をからかっていたのだ

小林「全く・・・君には適わないな」

ネロ「へへん、すごいでしょ!でも・・・あの時の小林、おもしろかったよ」

小林「僕は疲れたよ」

ネロ「ごめんごめん、あ、でも嫌いじゃないから」

小林「それってどういうことだい?」

ネロ「まあどっちかっていうと好きかな」

小林「そんな曖昧な・・・」

苦笑いする小林、ネロは小林を引っかけてご満悦のようだ

ネロ「でも・・・冗談じゃなくて大好きだよ、ミルキイホームズのみんな」

小林「？」

ネロ「その中には小林も入ってるんだよ。だから好きじゃないけど嫌いじゃない、ね、間違ってるじゃないでしょ。好きと大好きで違うから」

小林「た、確かに・・・」

ネロの言葉に納得する小林。そんな彼を見てネロが少し表情を変えて言った。

ネロ「・・・ねえ、小林？」

小林「なんだい？」

ネロ「ずっと気になってたこと・・・聞いてもいい？」

小林「答えられる範囲ならいいけど・・・なんだい？」

ネロ「小林のトイズって・・・どういふのだったの？」

小林「・・・」

急に小林は黙り込む。小林の過去、触れてはならないそれにネロが今触れた。だから自然と黙り込むのだ

ネロ「ごめん、気に障った……よね？今は忘れて……」

小林「……いいよ」

ネロ「えっ？」

ネロは自分のいったことが成立したにもかかわらず驚いた。観覧車はゆっくりと回りつづけていた。

第三十九話 訪れたその時 ネロ編（後書き）

ネロ「なるほど・・・小林のトイズねえ・・・」

気になる？

ネロ「気になるよ。ちょっと次回の台本見せて」

え、そりゃダメだよ

ネロ「ケチい」

第三十九話 訪れたその時 エリー編（前書き）

さて、これはエリーさん編ですね

エリー「もしかして・・・」

あの後、小林先生とエリーさんが一緒に観覧車に入ったお話です

エリー「は、恥ずかしい／＼」

第三十九話 訪れたその時 エリー編

エリー「見てください、小林さん、夜景がとってもきれいですよ」

小林「ホントだ、街の明かりがキラキラしてるね」

観覧車に乗った小林とエリーはそのきれいな光景を楽しんでいた。いや、外は暗く、夜のようなだから夜景といった方がいいかもしれない。

エリー「建物があんなに小さく……すごい……」

小林「エルキュールは観覧車は初めてかい？」

エリー「いえ、初めてではありませんが小さい頃で……覚えてないんです。だからすごくうれしくて……あつ、すいません」

小林「どうして謝るんだい？」

楽しそうに話すエリーの表情が一気に謝るとき表情が変わる。いきなりのことだったのだ小林は思わず理由を聞いてしまった

エリー「騒ぎ過ぎて・・・すみません」

小林「大丈夫、エルキュールのそれはまだ騒いでる内に入らないさ。それにここには僕たち二人だけだから騒いだとしても大丈夫だよ」

エリー「ふ、二人だけ！」

優しく話す小林の「二人だけ」という言葉にエリーは急に反応し、少し大きな声をだした。

小林「ど、どうしたの？」

エリー「い、いえ、すみません」

驚きながら聞く小林の言葉に冷静さを取り戻したらしいエリーは「ハッ」とし謝まる。もちろん小林は「いいよ」と優しく言った。

小林「エルキュールは、これが楽しみだったのかい？」

エリー「えっ？」

小林「いや、ほら、ここに入園する前に入ろうとしたときスキップしながら行ってただろう？」

エリー「あ・・・そ、それは・・・こ、小林さんと一緒に入れるのが・・・うれしくて・・・」

小林「ぼ、僕と一緒に!？」

意外な返答に驚く小林。まさか自分と一緒に入るのが嬉しいなんて言われるとは思ってなかったので驚いたのだ。

小林「エルキュール、それってどういう・・・」

エリー「そ、そのままの・・・意味です・・・。小林さんと一緒にというのが嬉しかったです・・・」

恥ずかしながら言うエリー。しかしそれ以上に混乱していたのは予想外のことを言われた小林だ

小林「あ、あの・・・エルキュール?どうしてそんな・・・」

エリー「だって・・・小林さんと遊びに行けるなんて滅多にないから・・・」

小林「あ・・・そういうこと」

エリー「は、はい」

エリーが赤くなりながらしかし嬉しそうに言った。一方小林はほっとしたと同時になぜか少し寂しいものを感じた。

エリー「小林さん……どうかされたんですか……?」

小林「い、いや、何でもないよ」

エリー「すみません」

エリーがまた謝る。そんなエリーを見て表情を真剣にした小林は口を開いた。

小林「エルキユール、もっと自信を持ちなよ」

エリー「え……?」

小林「エルキユールは本当に素直でいい子だと思う。でも人の意見に流されるんじゃないかってもっと自分の意見に自信を持っていいんだよ」

エリー「小林さん……」

小林「わかってくれたかい?」

エリー「……はい、私もっと自信を持ってみます」

微笑むエリーに思わず小林も微笑む。室内が暖かい空気ではいっばいになる、そんな感じがした。

小林「さて、もうすぐ半分、一番高いところかな？」

エリー「こ、怖いです」

小林「そうか、エルキュールは苦手だったね。でも下を見なければ大丈夫だと思うよ。一度見てみなよ」

エリー「は、はい・・・」

エリーが小動物の様に外を覗き込んだ

エリー「うう・・・あ・・・」

おびえながらエリーが見たもの、それはさつきよりも高く、輝きの増えた街だった

エリー「きれい・・・」

小林「さつきもきれいだったけどこれもきれいじゃない？」

エリー「はい、さつきよりも高い分たくさん光が見える・・・もつときれいです」

小林「だろう？エルキュールが勇気を持って見てみた結果だよ。少

しは自信に結びついたかな・・・？」

エリー「はい、なんとなくですけど・・・結びつきました」

エリーが嬉しそうに言う。エリーが自分で無理だと思っていたことを乗り越えられ、それによって自分の世界が広がった、それが彼女にとってとても嬉しかったのだろう

エリー「・・・あの・・・小林さん・・・？」

小林「なんだい？」

エリー「ずっと気になっていたことがあるんですけど・・・お聞きしてもいいですか・・・？」

小林「うん、いいよ。僕の答えられる範囲でなら」

エリーが座りながら小林に尋ねる。そんな彼女の言葉に小林は許可をした。そしてエリーは質問した。

エリー「小林さんのトイズは・・・どのようなものでしたか・・・？」

小林「!？」

その質問は小林にとってとても意外なものだった。小林の過去、小林がメンバーに明かしていない事柄のなかでも特に話さない内容だ

エリー「あ、あの……すいません。今は……」

小林「……いいよ」

エリー「えっ？」

黙り込む小林にエリーが慌てて訂正をしようとしたがその必要はなかった。観覧車はゆっくりと回りつづけた。

第三十九話 訪れたその時 エリー編（後書き）

エリー「小林さんの・・・トイズ・・・」

そう、次回は・・・

エリー「どうなるか・・・楽しみです」

とりあえず怯えないようにね

エリー「こ、怖いんですか・・・」

第三十九話 訪れたその時 コーデリア編（前書き）

さて、コーさん・・・来ましたよ・・・

コーデリア「き、来たって何がですか？」

乙女のドキドキイベントオオオ！！でしょ？

コーデリア「そ、そんな・・・別に観覧車に乗るだけですし・・・」

そうですか

コーデリア「／／／」

第三十九話 訪れたその時 コーデリア編

コーデリア「……」

小林「……」

コーデリア「教官！き、きれいですね」

小林「えっ、僕！？」

コーデリア「えっ、いえ、教官のことではなくその……景色が……」

小林「ああ、そういうこと。うん、きれいだね」

驚きを抑えて小林は優しく答えた。今二人がいるのは観覧車の中、あの後何事もなく乗り込めたようだ。

コーデリア「あ、あ、きよ、教官、み、見てください！海がき、きれいですよ」

小林「そ、そうだね」

コーデリア「ああ！！教官！ランドマークタワーにライトがあああ
あ……」

小林「そ、そうだね」

それからしばらくコーディネリアが叫び、小林が反応、という状態が続いた。

コーディネリア「ハアハア、あああああ!!きよ、教官!!」

小林「・・・コーディネリア」

コーディネリア「は・・・はい?」

小林「とりあえず落ち着くんだ」

コーディネリア「落ち着く・・・ですか?」

コーディネリアの声は落ち着いた声となり、冷静さを取り戻したことがうかがえた。そんなコーディネリアを見て、小林は少し微笑んだ

小林「コーディネリア、どうかしたのかい?さっきから落ち着いていないように見えるけど・・・」

コーディネリア「じ、実は・・・その・・・き、緊張してしまって・・・」

小林「緊張?なんで?」

コーディネリア「え？そ、それは・・・その・・・今・・・教官と・・・一緒に・・・」

小林「ん？なんで僕と一緒にだと緊張するんだい？」

コーディネリア「え！？そ、それは・・・その・・・」

小林「ん？」

コーディネリア「・・・もう！いつもの洞察力はどこに行ったんですか！？」

小林「・・・はい？」

コーディネリア「もう・・・」

小林の言葉にコーディネリアは赤くなりながらため息混じりに「もう・・・」という。一方小林は全く訳がわからないようだ。

コーディネリア「教官・・・？」

小林「なんだい？」

コーディネリア「教官は今日のデ・・・遊園地楽しかったですか？」

小林「もちろん、楽しかったよ。まるでデートみたいで」

コーディネリア「デデデ、デートー!？」

小林の言葉にコーデリアはまた赤くなり興奮した

コーデリア「そんなデートだなんて・・・」

小林「ああ！ごめんごめん。コーデリアも17歳、立派な女性だもんね。デートするなら君の意中の人の方がよかったね」

コーデリア「あ、いえ、そういうわけでは・・・」

コーデリアのこの言葉を最後に二人はしばらく黙りこむ。小林は何を話したらいいか分からないようだ。するとコーデリアが口を開いた

コーデリア「すごく・・・嬉しかったです」

小林「えっ？」

コーデリア「教官がこの遊園地に入る前・・・誘ってくださいって・・・」

コーデリアが赤くなりながら言う。しかし今度の赤くなるのは暴走の証拠ではない、純粹にうれしかったという感情を表す、そんな感じだ

小林「もしあの後分かれてたら・・・コーデリアが暇かなと思ってね」

コーデリア「そうやって私のことを考えて下さって・・・ありがとうございます」

小林「いやいや、いいんだよ。コーデリアは今日、楽しかった？」

コーデリア「はい、とても」

コーデリアがほほ笑む。それを見て思わず小林もほほ笑んだ

小林「それはよかった。コーデリアに楽しんでもらわないと今日遊んだ意味がないからね」

コーデリア「メリーゴーランドは特に楽しかったですよ」

小林「そ、そう？」

コーデリア「はい、でもあの時の教官、少し恥ずかしがってませんでした？」

小林「そ、そんなことないよ。楽しかったからそうみえたんじゃないかな？」

コーデリア「そうですか？」

小林「そうそう、きっとそうだよ」

コーディネリア「だといいいんですが・・・私のせいで教官にご迷惑をおかけしたくなくて・・・」

小林「・・・コーディネリア？」

コーディネリア「はい？」

コーディネリア少しさびしそうに言うコーディネリアに小林は真剣な表情となり話しかける。そんな小林の表情に気付き、コーディネリアも自然と真面目な表情になった

小林「迷惑は・・・かけていいんだよ」

コーディネリア「そんな、ダメにきまつてるじゃないですか」

小林「いいんだ。だって僕たちはミルクィホームズっていうチームだろう？」

コーディネリア「あっ・・・」

小林「チームって言うのはお互いが表面上仲良くやっていくんじゃない。お互いのいい点、悪い点も知った上で協力していくのがチームだ。だから迷惑をかけてしまうのは当然なんだ」

コーディネリア「教官・・・」

小林「もちろん自分で迷惑をかけないようには努力しないとイケな

い。でも多少の迷惑なら・・・人の命にかかわったりするような重大なことじゃなければ・・・かけてもいいんじゃないかな？人間は完璧じゃないわけだし・・・と思うんだけど」

小林は一生懸命話している途中で「ハッ」と我にかえりコーディネリアに聞いたすると

コーディネリア「私もそう思います」

コーディネリアはニコツとほほ笑み答えた。

コーディネリア「あの・・・教官？」

小林「なんだい？」

コーディネリア「ずっと気になっていたことがあるんですけど・・・お聞きしてもよろしいでしょうか？」

小林「いいよ、僕の答えられる範囲でなら」

コーディネリア「教官のトイズは・・・どのようなものでしたか？」

小林「僕のトイズ・・・？」

コーディネリア「はい」

それからしばらく小林が黙りこむ。それと同時に会話も止まりその場の空気が止まった。数秒後それに耐えられなくなったようでコーデリアが口を開いた

コーデリア「あ、すみません。私ったら・・・い、今は忘れて・・・」

小林「いいよ」

コーデリア「えっ？」

小林の返答にコーデリアが驚く。観覧車はゆっくりと回りつづけた。

第三十九話 訪れたその時 コーデリア編（後書き）

コーデリア「教官のトイズ・・・ですか？」

そうです、あの人のトイズ、まだ知らないよね？

コーデリア「ええ・・・って次回は!？」

さて、どうなるでしょう？

コーデリア「早く執筆してください!!」

第四十話 鳴り響く鐘 シャロ編（前書き）

さあ、いよいよここまで来ました！！

シャロ「つ……ついに……ですか？」

そう、ミルクィゲームである全ゲーム中最高クラスのカツコよさを誇る「INFINITE CRISIS」の直前のストーリーです！

シャロ「コアラさんがミルクィのゲームにハマったきっかけでしたよね？」

イエス！これを見たからミルクィをアニメだけでは終わらせないよう、と決断したわけです！

シャロ「それに内容も気になります！」

小林のトイズでしょ？さあ、果たして何があるのか……！？

シャロ「ゲームをやったことがある人も是非見て下さいね！」

第四十話 鳴り響く鐘 シャロ編

遊園地に遊びに行き、シャロと楽しんだ小林。そんな彼らが最後にのった観覧車でシャロの質問「トイズはなんだったのか」というものに今、小林は答えようとしていた

シャロ「いいんですか・・・？」

シャロは自分が聞いたことながら改めて了承を取る。あの時は雰囲気と言ってしまったが後々考えるとやはりまずかつたのではないかと思っただろう。小林は真剣な表情で答える

小林「いつまでも黙っておくわけにはいかないからね。それにいい加減僕もこれに関して受け入れなければいけないから」

静かに言う小林のその言葉はまさに「克服」しようとしていると分かるものだった。また小さくガタガタという観覧車の回る音が場に緊張を持ちこんでいた

小林「僕のトイズはね」

・・・と小林がそこまで言った時、窓の外が光り、観覧車内も光に包まれる。それによって小林は喋ることを中断した。

小林「なんだ・・・今は・・・」

シャロ「先生！見て下さい！！」

光はすぐに収まり小林は目を少しずつ開けていく。そこへシャロの声がして彼女の言う方を見てみる。そこには

小林「なっ、爆発してる！？」

遠くで何かが燃えており、火災しているのがすぐに分かった

シャロ「あれはなんでしょうか・・・」

小林「あの方向から言って・・・発電所かな・・・。でもなんで発

電所が・・・」

小林がそう言った瞬間今度はある音が聞こえた

ゴーン、ゴーン・・・

小林「!？」

シャロ「こ、これは・・・なんでしょう・・・」

小林「・・・」

シャロ「先生・・・？」

小林「開幕・・・」

シャロ「えっ？」

小林「開幕を告げる鐘の音・・・」

シャロ「どうしたんですか、先生！」

いきなり何かを唱えるように言い始める小林にシャロは怖くなりど
うしたのかと問う。そんな彼女の言葉も届かないのか、小林がつぶ
やいていると突然声が聞こえた

????「フハハハッ!!」

シャロ「な、何!？」

小林「この・・・この声は・・・まさか・・・」

小林がつぶやくのをやめてあたりを見渡す。すると先ほど聞こえた声が始めた

????「この街の多くは私と初対面となる。まずは自己紹介という。我が名は・・・」
「怪盗だ」

シャロ「L!？」

L「今回放送させていただいているのは他でもない、私が新たな「謎」を作り出したからだ。今から6時間後・・・この街は・・・消える!!」

シャロ「えっ!？」

L「もし嘘だと思う方がいらっしやるならお教えしよう。怪盗に不可能はない。謎を作り出す創造者なのだから!!そして私は怪盗だ、創造者だ。この街の破壊は・・・可能だ」

シャロ「そんな・・・」

L「この私の創造を是非諸君たちの全てで感じ取ってほしい。私の

力を・・・全て。そして全ての探偵よ、絶望するがいい。この怪盗Lの力を・・・身をもって体験し、己の無力さを知るがいい。では6時間後を楽しみにしている。フハハハハハ」

そう言うところの放送は終わり、街は静かになる。それはもちろん観覧車内も同じだったがそんな空気を打ち破り、シャロは小林に話しかけた

シャロ「先生・・・怪盗Lって確か先生が・・・」

小林「そうだよ、怪盗Lは5年前に僕が倒した・・・倒したはずなんだ」

シャロ「それが・・・どうして・・・」

小林「分からない・・・全く・・・」

小林は頭を書きながら言った。彼自身全く状況がどうなっているのかわからないのだ。しかしそれでも時間は過ぎていくもので

シャロ「・・・あ、先生。もうすぐ地上です」

シャロの言うとおりもうすぐ観覧車は小林達が降りられるくらいまで下がってきていた。数十秒もすれば降りられるだろう

シャロ「先生……あたし……怖いです。何か……嫌な予感がして……」

小林「大丈夫……大丈夫……だよ」

観覧車を降りた小林達はすぐに遊園地から出ようと出入口口に向かった。するとそこには3人の人物がいた

小林「ネロ、エルキュール、コーデリア……」

ネロ「あ、来たね」

エルキュール「こんばんわ」

コーデリア「早速ですが教官、さっきの放送はお聞きになりましたか？」

小林「ああ、もちろん聞いた。怪盗……だろう」

ネロ「でもさ、おかしくない？確か怪盗……って小林が5年前に倒したんでしょ？」

小林「ああ、そのはずさ。でも放送前の金の音、あれは怪盗……が事

件前に鳴らす音だった」

エリー「偽物という可能性は……ないでしょうか」

小林「0とは言えないが理由がわからない。なぜ怪盗Lを名乗ってわざわざ放送したのか……」

コーデリア「謎だらけですね……」

全員が怪盗の謎の行動に困った表情をする。見えぬ敵、正体がわからないのでは手の打ちようがないのだ

小林「そう言えば発電所の方向で爆発があつたみたいんだけど」

ネロ「発電所の爆発でしょ、その影響で電気がつかなくなってる」

小林「なんだって！？でも僕たちの乗ってた観覧車は……。そうか、予備の電気で動くか……」

エリー「それによってPDA以外の通信機器も使えなくなっていて……」

コーデリア「町は結構混乱しているようです」

小林「混乱か……無理もない。電気、通信機器が使えなくなり、あんな放送があつたんだ。当然と言えば当然か……」

シャロ「・・・あの・・・ちょっといいですか」

小林「ん、なんだいシャーロック？」

沈黙の中手を挙げたシャロに小林が聞く。するとシャロは喋り始めた

シャロ「とりあえず・・・学院に行ってみませんか？」

コーデリア「学院に？」

シャロ「はい、あそこに行けば会長がいます」

エリー「あそこなら大きな施設だから何かできるかも・・・」

ネロ「ボク、あそこに大型の通信機があるって聞いたことあるよ。もしかしたら通信できるかも」

小林「よし、学院に行ってみよう」

こうして小林達は学院へと向かう。6時間後の、この街の消滅を阻止し、怪盗としての決着をつける為に。

第四十話 鳴り響く鐘 シャロ編（後書き）

いよいよよしが来たあああああ！！

シャロ「怪盗……でも先生が倒したんじゃ……」

それが謎だよね。果たして彼は本物なのか！？それとも偽物なのか！？

そしてどちらにせよこんなことをする理由は！？

シャロ「いよいよクライマックスですね！」

第四十話 鳴り響く鐘 ネロ編(前書き)

さあ、いよいよこの時が来たああああ！！

ネロ「う、うるさいよ、コアラ」

だってだって「INFINITE CRISIS」の直前のストーリーだよ？僕がやってきたゲーム史上最高のカツコよさを誇るOPPのストーリーだよ！？

ネロ「ったく、どこの子供なんだか・・・」

第四十話 鳴り響く鐘 ネロ編

遊園地に遊びに行き、ネロと楽しんだ小林。そんな彼らが最後にのつた観覧車でネロの質問「トイズはなんだったのか」というものに今、小林は答えようとしていた

ネロ「いいの？今まで黙つたのに・・・」

ネロは自分が聞いたことながら改めて了承を取る。あの時は雰囲気と言つてしまつたが後々考えるとやはりまずかつたのではないかと思つたのだろう。小林は真剣な表情で答える

小林「いつまでも黙つておくわけにはいかないからね。それにいい加減僕もこれに関して受け入れなければいけないから」

静かに言う小林のその言葉はまさに「克服」しようとしていると分かるものだった。また小さくガタガタという観覧車の回る音が場に緊張を持ちこんでいた

小林「僕のトイズはね」

・・・と小林がそこまで言った時、窓の外が光り、観覧車内も光に包まれる。それによって小林は喋ることを中断した。

小林「なんだ・・・今は・・・」

ネロ「ちよつと小林！あれ！！」

光はすぐに収まり小林は目を少しずつ開けていく。そこへネロの聲がして彼女の言う方を見してみる。そこには

小林「なつ、爆発してる！？」

遠くで何かが燃えており、火災しているのがすぐに分かった

ネロ「ねえ、あれって何が燃えてるの？」

小林「あの方向から言って・・・発電所かな・・・。でもなんで発

電所が・・・」

小林がそう言った瞬間今度はある音が聞こえた

ゴーン、ゴーン・・・

小林「!?!」

ネロ「な、何!?!この音!?!」

小林「・・・」

ネロ「小林・・・?」

小林「開幕・・・」

ネロ「えっ?」

小林「開幕を告げる鐘の音・・・」

ネロ「ちよつと小林、どうしちゃったのさ!?!」

いきなり何かを唱えるように言い始める小林にネロは異常を感じど
うしたのかと問う。そんな彼女の言葉も届かないのか、小林がつぶ
やいていると突然声が聞こえた

????「フハハハッ!!」

ネロ「な、何!?!」

小林「この……この声は……まさか……」

小林がつぶやくのをやめてあたりを見渡す。すると先ほど聞こえた声が始めた

????「この街の多くは私と初対面となる。まずは自己紹介という。我が名は……」
「怪盗」だ

ネロ「!!?!」

「今回放送させていただいているのは他でもない、私が新たな「謎」を作り出したからだ。今から6時間後……この街は……消える!!」

ネロ「えっ!?!」

「もし嘘だと思う方がいらっしやるならお教えしよう。怪盗に不可能はない。謎を作り出す創造者なのだから!!そして私は怪盗だ、創造者だ。この街の破壊は……可能だ」

ネロ「そんな……」

「この私の創造を是非諸君たちの全てで感じ取ってほしい。私の

力を・・・全て。そして全ての探偵よ、絶望するがいい。この怪盗Lの力を・・・身をもって体験し、己の無力さを知るがいい。では6時間後を楽しみにしている。フハハハハハ」

そう言うところの放送は終わり、街は静かになる。それはもちろん観覧車内も同じだったがそんな空気を打ち破り、ネロは小林に話しかけた

ネロ「小林・・・怪盗Lって確か小林が・・・」

小林「そうだよ、怪盗Lは5年前に僕が倒した・・・倒したはずなんだ」

ネロ「それが・・・どうして・・・」

小林「分からない・・・全く・・・」

小林は頭を書きながら言った。彼自身全く状況がどうなっているのか分からないのだ。しかしそれでも時間は過ぎていくもので

ネロ「・・・小林。もうすぐ地上だよ」

ネロの言うとおりもうすぐ観覧車は小林達が降りられるくらいまで下がってきていた。数十秒もすれば降りられるだろう

ネロ「小林・・・ボク・・・怖いよ。何か・・・嫌な予感がして・・・」

小林「大丈夫・・・大丈夫・・・だよ」

観覧車を降りた小林達はすぐに遊園地から出ようと出入り口に向かった。するとそこには3人の人物がいた

小林「シャーロック、エルキュール、コーデリア・・・」

シャロ「あ、来ました」

エルキュール「怪我はないようです」

コーデリア「早速ですが教官、さっきの放送はお聞きになりましたか？」

小林「ああ、もちろん聞いた。怪盗・・・だろう」

シャロ「だけど、おかしくないですか？確か怪盗って先生が5年前に倒したはずじゃないんですか？」

小林「ああ、そのはずさ。でも放送前の金の音、あれは怪盗が事

件前に鳴らす音だった」

エリー「偽物という可能性は……ないでしょうか」

小林「0とは言えないが理由がわからない。なぜ怪盗Lを名乗ってわざわざ放送したのか……」

コーデリア「謎だらけですね……」

全員が怪盗の謎の行動に困った表情をする。見えぬ敵、正体がわからないのでは手の打ちようがないのだ

小林「そう言えば発電所の方向で爆発があつたみたいんだけど」

シャロ「発電所の爆発ですよ、その影響で電気が使えなくなってます」

小林「なんだって！？でも僕たちの乗ってた観覧車は……。そうか、予備の電気で動くか……」

エリー「それによってPDA以外の通信機器も使えなくなっていて……」

コーデリア「町は結構混乱しているようです」

小林「混乱か……無理もない。電気、通信機器が使えなくなり、あんな放送があつたんだ。当然と言えば当然か……。これからどうするべきか……」

ネロ「・・・ねえ・・・ちよつといい？」

小林「ん、なんだいネロ？」

沈黙の中手を挙げたネロに小林が聞く。するとネロは喋り始めた

ネロ「とりあえずさ・・・学院に行ってみようよ」

コーデリア「学院に？」

ネロ「うん、あそこに行けば会長がいるし何か情報を持つてるかもしれないでしょ」

小林「確かに・・・」

エリー「それにあそこなら大きな施設だから何かできるかも・・・」

シャロ「あたし、あそこに大型の通信機があるって聞いたことがあります。もしかしたら通信できるかも」

小林「よし、学院に行ってみよう」

小林達は学院へと向かう。6時間後の、この街の消滅を阻止し、怪盗しとの決着をつける為に。

第四十話 鳴り響く鐘 ネロ編（後書き）

ということでした来たあああ！！

ネロ「ここまでほぼゲームと同じだね」

基盤は変えてませんから（キリッ

ネロ「ここからの展開に期待だね」

そっだねえ、基盤は同じでも途中経過は変わるからねえ

ネロ「ゲーム経験者もない人も注目だよ」

第四十話 鳴り響く鐘 エリー編（前書き）

さあ、いよいよこれを投稿する時が来たあああ！！

エリー「コアラさん・・・今夜中です・・・」

でも仕方ない！

だってあんなことやこんなことが・・・

エリー「ええ！？／＼／」

いやいや、そう意味じゃなくてだね・・・（汗）

エリー「こ、小林さんのトイズ・・・なんなんでしょうか・・・？」

第四十話 鳴り響く鐘 エリー編

遊園地に遊びに行き、エリーと楽しんだ小林。そんな彼らが最後にのった観覧車でエリーの質問「トイズはなんだったのか」というものに今、小林は答えようとしていた

エリー「本当に……いいんですか？」

エリーは自分が聞いたことながら改めて了承を取る。あの時は雰囲気と言ってしまったが後々考えるとやはりまずかつたのではないかと思っただろう。小林は真剣な表情で答える

小林「いつまでも黙っておくわけにはいかないからね。それにいい加減僕もこれに関して受け入れなければいけないから」

静かに言う小林のその言葉はまさに「克服」しようとしていると分かるものだった。また小さくガタガタという観覧車の回る音が場に緊張を持ちこんでいた

小林「僕の……トイズはね……」

・・・と小林がそこまで言った時、窓の外が光り、観覧車内も光に包まれる。それによって小林は喋ることを中断した。

小林「なんだ・・・今は・・・」

エリー「小林さん・・・あれを・・・見て下さい」

光はすぐに収まり小林は目を少しずつ開けていく。そこへエリーの声がして彼女の言う方を見てみる。そこには

小林「なっ、爆発してる!？」

遠くで何かが燃えており、火災しているのがすぐに分かった

エリー「一体何が燃えてるのでしょうか・・・」

小林「あの方向から言って・・・発電所かな・・・。でもなんで発

電所が・・・」

小林がそう言った瞬間今度はある音が聞こえた

ゴーン、ゴーン・・・

小林「!？」

エリー「な・・・なに・・・?この音・・・鐘の音・・・?」

小林「・・・」

エリー「小林・・・さん?」

小林「開幕・・・」

エリー「えっ?」

小林「開幕を告げる鐘の音・・・」

エリー「小林さん・・・どうされたんですか・・・?」

いきなり何かを唱えるように言い始める小林にエリーは恐怖を感じ
どうしたのかと問う。そんな彼女の言葉も届かないのか、小林がつ
ぶやいていると突然声が聞こえた

????「フハハハッ!!」

エリー「!?!」

小林「この……この声は……まさか……」

小林がつぶやくのをやめてあたりを見渡す。すると先ほど聞こえた声が始めた

????「この街の多くは私と初対面となる。まずは自己紹介という。我が名は……」
「怪盗だ」

エリー「L!?!」

L「今回放送させていただいているのは他でもない、私が新たな「謎」を作り出したからだ。今から6時間後……この街は……消える……!」

エリー「えっ!?!」

L「もし嘘だと思っ方がいらっしやるならお教えしよう。怪盗に不可能はない。謎を作り出す創造者なのだから!!そして私は怪盗だ、創造者だ。この街の破壊は……可能だ」

エリー「そんな……」

L「この私の創造を是非諸君たちの全てで感じ取ってほしい。私の

力を・・・全て。そして全ての探偵よ、絶望するがいい。この怪盗Lの力を・・・身をもって体験し、己の無力さを知るがいい。では6時間後を楽しみにしている。フハハハハハ」

そう言うところの放送は終わり、街は静かになる。それはもちろん観覧車内も同じだったがそんな空気を打ち破り、エリーは小林に話しかけた

エリー「小林さん・・・怪盗Lって確か小林さんが・・・」

小林「そうだよ、怪盗Lは5年前に僕が倒した・・・倒したはずなんだ」

エリー「それが・・・どうして・・・」

小林「分からない・・・全く・・・」

小林は頭を書きながら言った。彼自身全く状況がどうなっているのかわからないのだ。しかしそれでも時間は過ぎていくもので

エリー「・・・小林さん。もうすぐ地上です」

エリーの言うとおりもうすぐ観覧車は小林達が降りられるくらいまで下がってきていた。数十秒もすれば降りられるだろう

エリー「小林さん……私……怖いです。何か……嫌な予感がして……」

小林「大丈夫……大丈夫……だよ」

観覧車を降りた小林達はすぐに遊園地から出ようと出入り口に向かった。するとそこには3人の人物がいた

小林「シャーロック、ネロ、コーディネリア……」

シャロ「あ、来ました」

ネロ「なんともないみたいだね」

コーディネリア「早速ですが教官、さっきの放送はお聞きになりましたか？」

小林「ああ、もちろん聞いた。怪盗……だろう」

シャロ「だけど、おかしくないですか？確か怪盗……って先生が5年前に倒したはずじゃないんですか？」

小林「ああ、そのはずさ。でも放送前の金の音、あれは怪盗……が事

件前に鳴らす音だった」

ネロ「偽物っていう可能性は？」

小林「0とは言えないが理由がわからない。なぜ怪盗Lを名乗ってわざわざ放送したのか・・・」

コーデリア「謎だらけですね・・・」

全員が怪盗の謎の行動に困った表情をする。見えぬ敵、正体がわからないのでは手の打ちようがないのだ

小林「そう言えば発電所の方向で爆発があつたみたいんだけど」

シャロ「発電所の爆発ですよ、その影響で電気が使えなくなってます」

小林「なんだって！？でも僕たちの乗ってた観覧車は・・・。そうか、予備の電気で動くか・・・」

ネロ「そのせいでPDA以外の通信機器も使えなくなっていて・・・」

コーデリア「町は結構混乱しているようです」

小林「混乱か・・・無理もない。電気、通信機器が使えなくなり、あんな放送があつたんだ。当然と言えば当然か・・・。これからどうするべきか・・・」

エリー「・・・あの・・・ちょっといいですか？」

小林「ん、なんだいエルキュール？」

沈黙の中手を挙げたエリーに小林が聞く。するとエリーは喋り始めた

エリー「とりあえず・・・学院に行ってみませんか？」

コーデリア「学院に？」

エリー「はい、あそこに行けば会長もいらっしやいますし、何か情報を持つてるかもしれせん」

小林「確かに・・・」

ネロ「それにあそこなら大きな施設だから何かできるかも・・・」

シャロ「あたし、あそこに大型の通信機があるって聞いたことがあります。もしかしたら通信できるかも」

小林「よし、学院に行ってみよう」

小林達は学院へと向かう。6時間後の、この街の消滅を阻止し、怪盗しとの決着をつける為に。

第四十話 鳴り響く鐘 エリー編（後書き）

しが来たああああ！！

エリー「コアラさん・・・今、夜中です・・・（2回目）（汗）」

仕方ない（2回目）だってこの後にINFINITE CRISISが流れるんだよ！？あのカツコイイOPが流れるんだよ！？

エリー「確かにカツコイイですね」

でしょ！そして物語も盛り上がってきたよ！！

エリー「怪盗・・・正体が気になりますね・・・」

第四十話 鳴り響く鐘 コーデリア編(前書き)

さあいよいよこの話を投稿する時が来ました!!

コーデリア「ついに教官のトイズが!？」

そしてこれから何があるのか!

コーデリア「実は・・・」

ネタばれはダメエエ!!

コーデリア「大丈夫、ちょっとしたイタズラですよ」

焦ったあ(汗)

第四十話 鳴り響く鐘 コーデリア編

遊園地に遊びに行き、コーデリアと楽しんだ小林。そんな彼らが最後にのった観覧車でコーデリアの質問「トイズはなんだったのか」というものに今、小林は答えようとしていた

コーデリア「あの・・・本当に・・・いいんですか？」

コーデリアは自分が聞いたことながら改めて了承を取る。あの時は秀困気で言ってしまったが後々考えるとやはりまずかったのではなにかと思っただろう。小林は真剣な表情で答える

小林「いつまでも黙っておくわけにはいかないからね。それにいい加減僕もこれに関して受け入れなければいけないから」

静かに言う小林のその言葉はまさに「克服」しようとしていると分かるものだった。また小さくガタガタという観覧車の回る音が場に緊張を持ちこんでいた

小林「僕の・・・トイズはね・・・」

・・・と小林がそこまで言った時、窓の外が光り、観覧車内も光に包まれる。それによって小林は喋ることを中断した。

小林「なんだ・・・今は・・・」

コーディネリア「教官・・・あれを・・・あれを見て下さい!!」

光はすぐに収まり小林は目を少しずつ開けていく。そこへコーディネリアの声がして彼女の言う方を見てみる。そこには

小林「なっ、爆発してる!？」

遠くで何かが燃えており、火災しているのがすぐに分かった

コーディネリア「一体何が燃えてるのかしら・・・」

小林「あの方向から言って・・・発電所かな・・・。でもなんで発

電所が・・・」

小林がそう言った瞬間今度はある音が聞こえた

ゴーン、ゴーン・・・

小林「!？」

コーディネリア「なに・・・この音・・・鐘の・・・音？」

小林「・・・」

コーディネリア「・・・教官？」

小林「開幕・・・」

コーディネリア「えっ？」

小林「開幕を告げる鐘の音・・・」

コーディネリア「教官・・・どうされたんですか・・・？」

いきなり何かを唱えるように言い始める小林にコーディネリアは異常を感じどうしたのかと問う。そんな彼女の言葉も届かないのか、小林がつぶやいていると突然声が聞こえた

????「フハハハッ!!」

コーデリア「!?!」

小林「この……この声は……まさか……」

小林がつぶやくのをやめてあたりを見渡す。すると先ほど聞こえた声が始めた

????「この街の多くは私と初対面となる。まずは自己紹介という。我が名は……」
「怪盗だ」

コーデリア「L!?!」

「今回放送させていただいているのは他でもない、私が新たな「謎」を作り出したからだ。今から6時間後……この街は……消える!!」

コーデリア「えっ!?!」

「もし嘘だと思う方がいらっしやるならお教えしよう。怪盗に不可能はない。謎を作り出す創造者なのだから!!そして私は怪盗だ、創造者だ。この街の破壊は……可能だ」

コーデリア「そんな……」

「この私の創造を是非諸君たちの全てで感じ取ってほしい。私の

力を・・・全て。そして全ての探偵よ、絶望するがいい。この怪盗Lの力を・・・身をもって体験し、己の無力さを知るがいい。では6時間後を楽しみにしている。フハハハハハ」

そう言うところの放送は終わり、街は静かになる。それはもちろん観覧車内も同じだったがそんな空気を打ち破り、コーデリアは小林に話しかけた

コーデリア「小林さん・・・怪盗Lって確か小林さんが・・・」

小林「そうだよ、怪盗Lは5年前に僕が倒した・・・倒したはずなんだ」

コーデリア「それが・・・どうして・・・」

小林「分からない・・・全く・・・」

小林は頭を書きながら言った。彼自身全く状況がどうなっているのかわからないのだ。しかしそれでも時間は過ぎていくもので

コーデリア「・・・教官、もうすぐ地上です・・・」

コーデリアの言うとおりもうすぐ観覧車は小林達が降りられるくらいまで下がってきていた。数十秒もすれば降りられるだろう

コーデリア「教官・・・私・・・怖いです。何か・・・嫌な予感がして・・・」

小林「大丈夫・・・大丈夫・・・だよ」

観覧車を降りた小林達はすぐに遊園地から出ようと出入り口に向かった。するとそこには3人の人物がいた

小林「シャーロック、ネロ、エルキュール・・・」

シャロ「あ、来られました」

ネロ「なんともないみたいだね」

エリー「早速ですが小林さん、さっきの放送はお聞きになりましたか？」

小林「ああ、もちろん聞いた。怪盗・・・だろう」

シャロ「だけど、おかしくないですか？確か怪盗って先生が5年前に倒したはずじゃないんですか？」

小林「ああ、そのはずさ。でも放送前の金の音、あれは怪盗しが事

件前に鳴らす音だった」

ネロ「偽物っていう可能性は？」

小林「0とは言えないが理由がわからない。なぜ怪盗Lを名乗ってわざわざ放送したのか・・・」

エリー「謎だらけですね・・・」

全員が怪盗の謎の行動に困った表情をする。見えぬ敵、正体がわからないのでは手の打ちようがないのだ

小林「そう言えば発電所の方向で爆発があつたみたいなんだけど」

シャロ「発電所の爆発ですよ、その影響で電気が使えなくなってます」

小林「なんだって！？でも僕たちの乗ってた観覧車は・・・。そうか、予備の電気で動くか・・・」

ネロ「そのせいでPDA以外の通信機器も使えなくなっていて・・・」

エリー「町は混乱しているようです」

小林「混乱か・・・無理もない。電気、通信機器が使えなくなり、あんな放送があつたんだ。当然と言えば当然か・・・。これからどうするべきか・・・」

コーディネリア「・・・ちょっといいですか？」

小林「ん、なんだいコーディネリア？」

沈黙の中手を挙げたコーディネリアに小林が聞く。するとコーディネリアは喋り始めた

コーディネリア「とりあえず、学院に行ってみませんか？」

エリー「学院に・・・ですか？」

コーディネリア「ええ、あそこに行けば会長もいらっしやいますし、何か情報を持つてるかもしれないわ」

小林「確かに・・・」

ネロ「それにあそこなら大きな施設だから何かできるかも・・・」

シャロ「あたし、あそこに大型の通信機があるって聞いたことがあります。もしかしたら通信できるかも」

小林「よし、学院に行ってみよう」

小林達は学院へと向かう。6時間後の、この街の消滅を阻止し、怪盗しとの決着をつける為に。

第四十話 鳴り響く鐘 コーデリア編（後書き）

ということでもしがき・・・

コーデリア「しがきましたね!!」

ちよ、それ僕のセリフ（笑）

コーデリア「それは他の3人での後書きでのことですから」ニコッ
「

まあいいけどさ（笑）それよりこのあとINFINITE CRI
SISが流れるんだよ

コーデリア「あのカツコイイOPですよね？」

そう！だからこの話はゲームでも沢山見ました！

コーデリア「次回からどうなるか・・・楽しみですね」

第四十一話 学園で待つもの（前書き）

さあ、久々の1話ですな！

コーデリア「今までは私達4人分を書いてくださってましたもんね」
いやもちろん楽しかったけどね

コーデリア「一刻も早く会長の元へ向かわないと・・・」

緊迫の第四十一話、スタートです！！

第四十一話 学園で待つもの

小林「ハアハア、着いた・・・」

小林は走ることによって荒くなってしまった呼吸を整えながら正面を見る。そこにあるのは探偵学院、シャロ達探偵の卵が通うこの学院に、小林達は走ってきた

シャロ「つ、疲れました・・・」

ネロ「確かに・・・ちよつと休憩したいかも」

コーデリア「ダメよ、早く会長の元へ急がないと！」

エリー「生徒会長室は・・・」

エリーがあたりをキョロキョロしながら生徒会長室を探す。学院内
部からなら分かるものの外からだと分からないのだろう。すると電
気不使用な中1つだけあかりのついている場所を見つけた

エリー「小林さん、あそこだけ明かりが・・・」

小林「本当だ」

ネロ「あそこにいるんじゃない？会長」

コーデリア「そうね、他に明かりのついている場所は無いです……」

シャロ「行ってみましょう！」

シャロ「会長！」

シャロが勢いよくドアを開ける。急いでいる証拠だろう。しかしそこにいたのは「会長」ではなかった

館「これはこれはシャロ様。ということはミルクィホームズの皆様もご一緒ですか？」

小林「た、館さん！？」

シャロの後ろから部屋の中をのぞいた小林が驚く。無理もない、ここは会長の部屋であり、会長がいると思ってきたのだから

館「小林様……」

小林「・・・館さん、もう気付かれていますよね、街の事」

館「ええ、先ほどはこちらも停電してましたから・・・今は緊急の帯電機で明かりをつけています」

ネロ「だからここだけ明かりがあったわけか・・・」

エリー「それより・・・会長を・・・」

コーデリア「そうよ、館さん、会長はどこへ？」

館「お嬢様ですか？実は・・・ただいまイギリスへ向かわれているのです」

小林「イギリス!？」

まさかの事を聞き小林が同じ国名をもう1度返した。そんな彼に館は話し始めた

館「実は数時間前に怪盗Lから通知が届いたのです。「数時間後に謎をばらまく」・・・と」

コーデリア「もうすでに予告はあったのね・・・」

館「はい、その予告状を調べるべく、お嬢様は飛行機でイギリスへ向かわれました。するとその数時間後こんなことに・・・」

館が顔を下に向けながら言う。そんな真実に小林達は少々困っていた

ネロ「どうすんのさ、会長はここにはいないよ？」

小林「分かっている。イギリスへ向かったんなら途中で引き返すことも無理だろう。ましてや帰りを待ってたら6時間なんて余裕で過ぎてしまう・・・館さん、ここにある大型の通信機は使えないんですか？」

館「申し訳ございません。あれは消費電力がかかりすぎる為、今の状況では使えないのです」

小林「そうですか・・・」

正直小林は「マズイ」と感じていた。頼りであった「会長」、そして切り札であった「通信機」が使えない、となると何か新しい策を考えなければならぬからだ。

と、そこへ

・・・ブ、ブ、ブ、ブ、ブ

PDAが鳴った

シャロ「先生、先生のPDAが鳴ってます」

小林「あ、うん。今でるよ・・・もしもし」

小林はPDAを取り出して電話に出る。すると意外な人物からの連絡だった

怪盗L「久しぶり、とでも言うべきかな、小林オペラ君」

小林「L!?!」

突然のことに驚き小林は声をあげた。また小林の「L」と言う言葉にミルキイの4人、館も驚いているようだ

館「こ、小林様、Lと言いますと」「怪盗L」「でございませうか!?!」

小林「はい、どうやらそのようです」

コーデリア「相手から連絡をとってくるなんて・・・」

ネロ「なかなか大胆な奴だね・・・」

怪盗「・・・さて、早速本題へ入ろうか・・・」

小林「（話すタイミングが・・・ずれてる・・・？）」

怪盗「今、君達は恐らく、私の6時間後に起こす「謎」について調べ、解決しようとしているだろう」

小林「もちろんだ、絶対にお前の計画を阻・・・」

怪盗「しかし、それは叶わないことだ」

小林「!?!?・・・なぜだ、はっきり理由を言ってみろ!」

小林の問いに、しばらくその場は静かになる。そして

怪盗「・・・私はとても憎んでいる、憎んでいるのだ。そう、
全て」が醜いのだ!」

ネロ「ちよつと、小林の質問に答えてないじゃん!」

コーディネリア「なんて人なの!」

しが小林の質問を無視をしたことにコーディネリアが怒る。しかしそんな声もしには届いていないようだ

怪盗「……小林君、私は今回の計画でこの街を壊滅させる。そして忌々しいこの……いや、これ以上は話す必要もないだろう。話す価値など……ない」

シャロ「それを伝えるために連絡してきたんですか！」

怪盗「……つまり私が今回連絡した理由は「君達に諦める」ということを伝える為だ。今回の計画は私の、怪盗史上最大の「謎」だ。大人しく諦めるといい」

小林「ふざけるな！僕たちは探偵だ、必ず謎を解き、計画を阻止してみせる！！」

怪盗「では」

小林「おい、ちょっと待て！……くっ」

「の別れの言葉に小林はストップをかける。しかしそれは無意味な行動となり、「は連絡を切ってしまった

エリー「どう……しますか？」

小林「もちろん諦めるつもりはないさ」

ネロ「でも何にも情報はないよ。どうするの？」

小林「それは……」

小林は何か策を言おうとする。しかし彼の頭に良い策などなかった。故に言葉が続かない。そこへ「ピピピ」とまたPDAがなった。

小林「こんな時に誰だろう?・・・もしもし」

神津「小林」

小林「神津!？」

神津「ヨコハマ湾に來い。少し話がある」

小林「話して・・・」

神津「いいから來い。必ずだ。なるべく急げよ」

小林「ちょ、神津!」

小林が言った時にはもうすでに連絡は切れていた

シャロ「どうしたんですか?」

シャロが心配そうに問う。そんな彼女に小林は困った表情で答えた

小林「神津がヨコハマ湾まで來いだって」

エリー「なぜでしょう・・・」

小林「分からない、話があるって言ってたけど・・・」

コーデリア「とりあえず・・・行くしかないですね」

小林「ああ、行こう。ヨコハマ湾へ」

こうしてミルキィホームズは神津の話しを聞くため、ヨコハマ湾へと向かった

第四十一話 学園で待つもの（後書き）

コーディネリア「神津さんから・・・？」

そうです

コーディネリア「一体何なんでしょう・・・」

それは秘密だよ。そしてゲームにはなかったLの連絡も入れてみました

コーディネリア「オリジナルですね」

そゆこと

第四十二話 ヨコハマ湾での神津の話し（前書き）

今回は神津の話しです

シャロ「あたし達、なんで呼ばれたんですか？」

それは本編で分かるよ

シャロ「もしかして……」
「……ちゃんて言い過ぎたから怒られる。」

ではないかと（汗）

第四十二話 ヨコハマ湾での神津の話し

小林「着いた・・・」

小林は静かな海を見ながら言った。

学園を出てから数十分、車を走らせたことでここ「ヨコハマ湾」に着いたのだ。理由はただ一つ、神津からの「話し」を聞くためだ

シャロ「街が・・・凄いことになってますね・・・」

ネロ「うん、電気が使えないから混乱してる・・・」

エリー「大丈夫でしょうか・・・」

コーデリア「大丈夫・・・信じるしかないわ。それを解決するためにも急いで怪盗しを止めないといけない」

コーデリアが決心をしたような表情で言う。実際「探偵」として「怪盗」であるしを捕まえることに責任を感じているのだろう。コーデリアの話聞いた他の3人も同じような表情をしているところを見るとそう感じる

小林「そうだね。そして・・・話して言うのはそれについてか、神津？」

小林が少し奥にある建物を見ながら言う。そこには確かに「神津」がいた。更に

小林「・・・なるほど、G4のみんなも一緒か」

彼のとなりには「G4」もいた

小衣「あたりまえじゃない、警視あるところに小衣ありよ!」

次子「んゝ、なんかそれおかしくないか？」

平乃「私たちもいますし・・・」

咲「小衣ミスったね」

小衣「あゝもううるさいわね、それより重要な話しをしなきゃいけないでしょ!」

小林「重要な話?やはり事件についてか、神津？」

小林が神津にそう言う。そんな彼の質問に神津も答えた

神津「そうだ、今回我われは様々な情報を集めてきた。そこで重要なことがわかったのだ」

小林「それはなんなんだ？教えてくれ、神津」

神津「当然だ、でなければここに呼んだ意味はないからな・・・まず、俺達G4は以前あった船の爆発、あの爆発の後急に怪盗帝国の話しを聞かなくなり、おかしいと判断、調査を始めた。これらはその中で知った事だ。いいか？」

小林「ああ」

神津「そしてそれらのである「共通点」を見つけたんだ」

小林「共通点・・・？」

神津「順を追って説明する。次子」

次子「あいよ」

神津に呼ばれて次子が小林の前に来る。そして話を始めた

次子「あたしは今回さ、怪盗ラットが盗んだ「黄金鏡」について調べてたんだ」

小林「黄金鏡？あの中華街のかい？」

次子「そつ！それで知ったんだけど、あの鏡、あまりに運がよくなるから「何らの特殊なエネルギーの塊じゃないか」言われてたらしいんだよ」

小林「何だつて!？」

次子「これならアルセー又達が狙うのも分かるよな。何かのエネルギーに変換出来れば良いし、ダメでも誰かに売れば金になる、狙わない方がおかしいだろ？」

小林「どつちに転んでも得が出来ると言うことが・・・」

次子「そゆこと。しかも依頼自体が王偉さんから直接のものだからな、やりやすかったと思うよ」

小林「なるほど・・・」

次子は話しを終えたようで、後ろへと下がる

神津「次、平乃」

平乃「はい」

次は平乃が小林の前に立つ。そして先ほどの次子と同じように話し始めた

平乃「私は次子さんとは別で、以前洋館にあり、怪盗ストーンリバーに奪われかけた刀について調べていました」

小林「刀か・・・」

平乃「はい、その刀を調べていくうちに分かった事なんです。あの刀、どうやら黄金鏡と同じで強力なエネルギーの塊と言われている。そうなんです」

小林「刀もかい？」

平乃「はい。どうやらあの洋館は昔軍事施設として使われていたようで、その際に制作された「エネルギー兵器」ではないか・・・ということからエネルギーの塊と言われていたそうです」

小林「そうだったのか・・・」

平乃「そこでそのエネルギーを狙ってアルサー又達は動いたのではないか・・・と思います」

平乃が言い終え、次に咲が出てくる。いつも通り無表情・・・ではあるのだが、しかしどこか焦るような表情にも見えた

咲「あたしはさ、怪盗トウエンティの盗もうとした「アダムの涙」を調べただけだし、どうやらあれ、調べられてないがために「大型エネルギーの塊」と思われてるらしいんだよね」

小林「また・・・エネルギー？」

咲「あたしも何回も同じ単語言うのは嫌だけど仕方ないじゃん、それが結果なんだし。とにかく、あれは大型のエネルギー体、あと理由は・・・まあ黄金鏡や刀と同じ理由で狙ったんじゃないかって思うよ〜」

小林「あ、ああ（なるほど・・・）」

やや適当な説明に苦笑いの小林。しかし何かを感じ取ったようだとすると

小衣「さあ！最後はこのIQ1300の天才美少女「明智小衣」の
出番よ！」

シャロ「わ〜こころちゃ・・・」

小衣「こころちゃんって言うな！それで小衣の方はね、かなり重大なことを発見したのよ！」

小林「何を発見したんだい？」

小衣「今、強大なエネルギー反応が出ている場所があるのよ」

小林「何だつて!？」

エリー「強大なエネルギーってことは・・・」

コーデリア「街を壊滅させる為のエネルギー、しが仕掛けたものと

考えて間違いないわ」

小林「それで、それはどこ？」

小衣「・・・あそこよ」

小衣がゆっくりと指を差す。そこには

小林「なっ・・・」

シャロ「そんな・・・お花さん!？」

そう、小衣が指を指したものの、それは人工のエネルギー生産場「フオーチュンリーフ」だった

エリー「フオーチュンリーフで・・・巨大なエネルギーが・・・？」

小衣「そうよ」

小林「・・・そうか、今までのみんなの話しにはすべて「エネルギー」という単語が含まれていた。つまりそれがキーワードってことか」

神津「そう言うことだ」

今度は神津が前に出てくる。それに応じるように小林も前に出た

神津「アルセー又達は何らかの理由でエネルギーを集めていた。そして今フォーチュンリーフでは巨大なエネルギー反応がある。これで奴らの居場所が分かるだろう」

小林「でもアルセー又達は人に危害を加えることを好んではない。ということば・・・」

神津「アルセー又達は怪盗しに利用されていた、と考えるべきだ」

小林「ああ、そして犯行予告と巨大なエネルギー反応・・・しが犯行をしようとしている証拠だ」

ネロ「でも今までそのエネルギーだと思われたものは全部奪われなかったよ？なんでフォーチュンリーフで巨大な反応が・・・？」

小林「フォーチュンリーフは人工のエネルギー生産場だろう？あそこでならエネルギーを作り出すことが可能さ」

神津「そしてあそこのシステムは手動だ。つまりフォーチュンリーフには今、アルセー又達が怪盗しがいるだろう」

小林「まあアルセー又達は人を傷つけることを嫌っているからこの計画には参加しないはず。つまり必然的にあそこには怪盗しがいると言っことになる・・・」

と、その計画を把握したように言いつつ小林は危機感を感じていた。

まさか彼がここまで前々から計画的に準備をしていたなんて思っていなかったからだ。もしかしたら更なる何かを考えているかもしれない。そんな気持ちもある中、小林はある疑問を抱いた

小林「・・・でもなんでそれを僕らに教えてくれたんだ？」

ネロ「どういうこと？」

小林「今回神津たちG4はここまで調べている。これらの情報での居場所は特定できているから僕たちに話さなくてもG4だけでいけるはずなんだ」

ネロ「そっか、確かにそうだよな」

G4達警察は以前も話した通り探偵とは職務上あまり仲が良くない。それは彼らG4においても同じはずだった。しかし今回の連絡は警察である彼らからあった。これが疑問なのだ

ネロ「明智、なんでだよ」

小衣「・・・」

ネロが聞くが小衣は下を向いていて答えない

ネロ「明智・・・？」

シャロ「にじろちゃん・・・？」

急に黙った小衣に対してネロが心配そうに見つめる。シャロやほかのメンバーも同様に小衣を見つめていた。そして

小衣「・・・小衣達だけじゃダメなのよ」

シャロ「えっ？」

小衣「小衣達はここまで情報を集めた。でもこれ以上先へ進むにはその・・・あんた達の力が・・・必要なのよ」

小衣は顔を真っ赤にして言う。恥ずかしいのだろう。しかし

ネロ「・・・ごめん明智。なんて言ったか聞こえなかったからもう一回言ってみよ」

ネロは聞いていなかった

小衣「う、うるさいわね！もう一回言ったから言わないわよ。あんな達の力が必要なんて・・・」

シャロ「あ、言ってくれました！」

小衣「あ、しまった！」

ネロ「なんだよ、ボク達の方が必要なら素直に言えばいいのに……
ツンデレ？」

小衣「ち、違うわよ……！」

平乃「小衣さん、そういうのをツンデレというんですよ」

小衣「なっ、平乃まで何言ってる……！」

次子「ホントホント、素直じゃないよな、小衣は」

咲「ツンツンデレデレ」

小衣「だから違……う……！」

小衣が更に赤くなりながら恥ずかしそうに言う。そんな彼女をみて
みんな微笑んでいた。そう、この光景がいつまで見られるか分から
ない状況ながら笑っているのだ

神津「……小林」

小林「ん？」

神津「必ず……怪盗Lを捕らえるぞ」

小林「・・・ああ、そしてこの事件を・・・終わらせよう」

小林と神津は拳と拳をぶつけて誓う。必ずしを捕らえ、この町を護
つて見せる・・・と

第四十二話 ヨコハマ湾での神津の話し（後書き）

ということとで合流しました

シヤロ「わーい、こころちゃ・・・」

小衣「こころちゃんって言うな！」

まあまあ（汗）

小衣「でも合同なんて・・・ホントにゲームと違うのね」

それが「GR」です（キリッ

小衣「ゲームリメイク版なのに？」

うっ・・・そこは少々変えた方が面白いでしょ

第四十三話 壊滅の方法と極秘のエネルギー（前書き）

さあ、タイトルは悩みに悩んでこれです！！

ネロ「コアラ、センスないからこの題名考えるのに15分ぐらいかかってるんだよ」

だ、だって・・・

ネロ「ってことで大事な第四十三話、スタートだよ」

い、言われた・・・

第四十三話 壊滅の方法と極秘のエネルギー

神津達「G4」と合同で動くことになった小林達ミルキイホームズは、神津の車に乗って怪盗しがいると思われる「フォーチュン」へと向かっていた

シャロ「街が・・・火事になってます・・・」

ネロ「ホントだ、あちこちから火が出てるよ」

平乃「電気が止まったことで停電し、信号なども止まってしまいました。その影響から事故が多発、その結果街でこのような事態が起こってるんです」

コーデリア「ヒドイ・・・こんなことを怪盗しは計画していたのね・・・」

コーデリアが眉をひそめながら言う。今彼女たちの目にはあちこちから火が出て燃える街が見えている。それを考えると「ヒドイ」という感情を持つのも納得だろう

エリー「・・・あの・・・小林さん・・・？」

小林「なんだい？」

運転をしている神津の隣、助手席に座っている小林がエリーの声に
応答する。そんな小林を確認してエリーは質問をした

エリー「今回の事件なんですけど、怪盗はこの街は「消える」と
言っていました。確かに今起こっている火事はヒドイです……。
でもそれだけで「消える」というレベルにまで達するでしょうか。
・？」

小林「……」

次子「そうだよな、確かにこれだけ混乱してれば危険ではあるけど
「消える」、「壊滅する」まではいかない。ましてや6時間後なん
て時間を決めてる……。おかしいよな」

小衣「一体どうということなのかしら……」

小林「……」「爆発」……だよ」

エリー「爆……。発……。？」

静かに言う小林の言葉をエリーもつられて言ってしまう。そして小
林は話しを始めた

小林「さっきG4のみんなが教えてくれた「エネルギー」というキ

「ワード、それを使って爆発を起こし、壊滅させる気なんだ」

「シャロ」でもエネルギーを使って爆発を起こすとしてもその方法がわかりませんか？」

「シャロが首をかしげて言う。例えばいきなり「爆発を起こせ」と言われても、普通の人は分からないだろう。「だからエネルギーがあっても爆発は起こせないのではないか」、そう思ってシャロは小林にこのように聞いたのだ」

小林「確かに・・・でも「フォーチュンリーフ」と言う名の巨大なエネルギー生産場ならばそれは可能なんだ」

平乃「どうしてですか？」

小林は「それはね」と言うと説明を始めた

小林「フォーチュンリーフはエネルギー生産場と言うくらいだから生産したエネルギーを保存しておく場所があるはずなんだ。仮にそこを「エネルギー保管所」と名付けるとしよう。その保管所にはもちろん、保管できる限度があるはずだ。無限にためることができるわけではないからね」

「コーデリア「保管所の限度・・・あっ！」

小林「そう、その限度を超えれば制御がきかなくなり、暴走する。」

そして暴走すれば溢れたエネルギーは・・・爆発するだろう。恐らくはこの爆発によって町を消そうとしているんだ」

次子「なるほどな・・・それなら説明がつく」

小林「でも・・・」

そう言った瞬間小林が眉をひそめた

小林「実はこれでもまだ説明が出来ないんだ」

ネロ「どういうこと？」

小林の推理は完璧だと思っていたネロが聞いた

小林「多分しらが狙ってるのは爆発で間違いない。でも暴走で起こった爆発でこの街を消せるかって言うと無理だと思う」

コーデリア「どうしてですか？」

小林「純度が必要なんだ」

エリー「純度・・・？」

聞き慣れない言葉にエリーは首を傾げる。意味は知っているがいきなりエネルギーの純度と言われても分かるはずがない。そして小林

は説明を続けた

小林「ああ、爆発を起こす際に他の物が混じった混合物よりも、混ざっていない純粋なものの方が爆発しやすい。例えば100%の内90%が爆発を起こす成分でできている物と100%爆発を起こす成分で出来ている物を比べた場合、爆発に使える成分が多い方がより大きな爆発を起こしやすくなる・・・だからより純度が高い方がいいんだ」

シャロ「なるほど・・・」

シャロは小林の言葉に納得したらしく頷いた。しかし小林の表情は曇ったままだった

小林「でもそんな高純度な物は滅多に見つけることは出来ない。だからフォーチュンにあるエネルギーも純度の高い物とは思えない・・・」

コーデリア「つまり純度の低いものを暴走させても壊滅させるまでのエネルギーは持たない・・・ということですか？」

小林「そういうことさ」

小林の説明にミルキイとG4のメンバーは納得したらしく難しい顔をする。そんな中神津が口を開いた

神津「・・・小林」

小林「・・・なんだ？」

神津「今のお前に話したと」「高純度のエネルギーがあれば街を壊滅させることができる」「・・・と言った感じだな」

小林「そりゃ確かには分からないがそれだと可能性は高くなるだろう？それがどうかしたか？」

神津「実はな・・・怪盗達に奪われたアダムの涙、あれの検査をされた痕跡があつたんだ」

小林「検査・・・？」

神津「そうだ、恐らくアダムの涙を調べて・・・その「コピー」を作ろうとしていたのだろう」

小林「コピー・・・」

神津「そしてアダムの涙、あれは回収したあと念の為検査を行った。その結果・・・あのアダムの涙は・・・高純度のエネルギー結晶とということが分かった」

小林「高純度のエネルギー結晶！？」

神津「そうだ、つまり奴の手には今・・・」

小林「アダムの涙のコピー……つまり「高純度のエネルギー結晶」がある……ということか」

神津「ああ」

しばらく車内は沈黙に包まれる。「怪盗」の手にアダムと名の高純度のエネルギー結晶」がある。そして小林はさっき説明していた。「高純度のエネルギー」があれば壊滅も出来る……と。それを考えれば静かになっってしまうのも当然だろう

ネロ「でもさ、そのエネルギーってなんとかして止められないの？」

小林「止める……？」

ネロ「うん、だって火は水で消せるでしょ？あの要領で……」

神津「それは無理だ」

ネロ「なんで！？そのエネルギーって対処が分からないほど未知のエネルギーなの！？」

神津「そうではない。ただ……その高純度のエネルギーと言うのが……」

小衣「警視……！」

神津が言おうとした瞬間、小衣が間に入り会話を止める。そう、「必死に」止めるのだ

ネロ「なんだよ明智」

シャロ「お願いだからお話しを聞かせて下さい！」

コーデリア「お話しを聞かないと分かりません」

エリー「もしかしたら何か方法が・・・」

小衣「ダメよ！！だって・・・」

神津「小衣！！」

小衣「！？・・・警・・・視・・・」

小衣が何かを言おうとした瞬間、今度は神津が止める。その表情もまた、暗闇ながら小衣と同じように「必死」と言うことが分かる

神津「話すしかないだろう。この街が消えるかも知れないんだ。それに比べれば俺達のリスクは少ないだろう」

小衣「・・・」

小林「リスク・・・？どういうことだ」

小林の問いに答えようと神津は一度「・・・ふう」大きく深呼吸をする。そして

神津「フォルトニウムだ」

小林「フォルトニウム・・・だと」

コーデリア「なんなんですか、そのフォルトニウムって・・・？」

小林「高純度のエネルギー結晶だよ。そのエネルギーの大きさは凄まじいんだ。でもまだ国で調べてる段階の言わば「極秘」のエネルギーで・・・あつ、ということは・・・神津・・・」

小林はさびしそうな表情で神津を見る。今、自分で言って分かったのだ。フォルトニウムは極秘の事。つまりそれを話すことは禁止されていはずなのだ。それを神津は教えた。これは

神津「ああ、そうだ。これは話してはいけない、上から禁止されていることだ」

小林「それって・・・」

神津「バレればよくて解散、悪ければクビだろうな」

シャロ「そんな!」

話を聞いたシャロが後ろの席から乗り出す。それほど驚いているの
だろう

シャロ「そんなのってヒドイですよ。神津さん達は街を救うために
教えてくれてるのに・・・」

神津「それが「警察」という組織だ。ルールがなければ誰もが好き
かってに動いてしまい、まとまりがなくなる。社会をまとめるため
の警察がそうであってはダメだろう。だから仕方のないことだ。そ
れぐらいの覚悟はできている。それより今はこの街を救わなくては
そんな未来すら来ないぞ」

小林「・・・」

神津「それで小林、怪盗Lがフォルトニウムを持っているという圧
倒的にマズイ状況だが、これでもまだ打開策はあるか？」

小林「・・・ああ、まだ終わったわけじゃない・・・だから方法
ならあるさ。いや、方法というほどの事でもないかな。だって・・・
」

小林「「怪盗L」を爆発前に捕らえて、爆発を未然に防ぐ・・・
ってことだから」

神津「単純・・・しかしストレートな良い方法だな。もちろん俺達
G4も強力させてもらおう」

小林「ありがとう、助かるよ」

神津「少しスピードを上げるぞ」

そういつて神津は車のスピードを上げる。目指すは「フォーチュン」、止めるべくは「怪盗」、防ぐは「フォルトニウムの暴走」だ

犯行予告時間まであと・・・

『3時間』

第四十三話 壊滅の方法と極秘のエネルギー（後書き）

ということでもフォルトニウムが登場です

ネロ「ちなみにこれ、ゲームでも出たよ」

そこら辺は変わってません。これからは・・・分かりませんが

ネロ「まあ次回もお楽しみにつてことだね、いよいよフォーチュン
リーフに入るし・・・ボク達の活躍に期待だね」

第四十四話 フォーチュンリーフ（前書き）

さて、かなり久しぶりの更新となってしまいました

エリー「長かったです・・・」

ごめんよ、エリーさん！

エリー「それよりもつすぐ連載から1年ですけど、何かされるんですか？」

それはまだ考えてないかなあ、とりあえずこっちに全力投球って感じ

エリー「そうですね」

もちろん何かあれば連絡しますよ！

第四十四話 フォーチュンリーフ

怪盗Lの犯行方法、そしてその使用エネルギーが国家機密である極秘エネルギー「フォルトニウム」であることが分かった小林達はフォーチュンリーフに向けて車を走らせること数十分、ついに現場である「フォーチュンリーフ」にたどり着いていた

エリー「ここが・・・フォーチュンリーフ・・・」

シャロ「おつきなお花さんです！」

ネロ「いや、間近でみたら花じゃないでしょ・・・まあ確かに大きいけど」

平乃「建設、研究規模が国家クラスですからね・・・大量の資金を費やしているんですよ」

メンバーが巨大なタワーのようなフォーチュンリーフの上部を見る。その高さはとても高く、高層ビル並みに感じる。シャロの言い方を借りるならまさしく「おつきなお花さん」という言葉がぴったりだ

次子「それで・・・いきなり突入するのか？それとも何か作戦とかある？」

神津「時間がないからな、危険ながら突入するしかないだろう。咲、フォーチュンリーの入口は分かるか？」

咲「えつと・・・あ、ちょうどそこから入れるらしいッス」

咲が指を指した先、そこには確かに少し大きめの鉄で出来たいかにも頑丈そうな扉があった

神津「そうか・・・それでは今から突入だ、いいな？」

G4「はい」

コーデリア「それじゃあ私たちも行くわよ」

小林「・・・みんな、待ってくれ」

神津の指示を聞き、G4とミルキイホームズが扉に向かって走る。しかし小林だけは走らずにその場で止まり、建物の入り口を見ていた。そして彼の声に走り出した全員が止まる

神津「どうした小林？早く突入するぞ」

シャロ「そうですよ先生、一刻も早く行かないと・・・」

小林「残念ながら、いきなり突入・・・というわけにはいかないよ
うだ」

神津「なんだと？」

シャロ「どついうことですか？」

神津とシャロが小林に問いかける。すると小林の視線はすぐ扉の横にあつた陰に移った

小林「でてこないのか？そこにいるのは分かつてるんだが」

小林が少しにらみながら言った。すると

ラット「へえ〜流石じゃん。よく俺がいるって分かつたな」

ネロ「げっ、アイツって……」

エリー「爆破が得意な怪盗……」

コーデリア「ラットだわ!!」

建物の蔭からゆっくりと何かが出てくる。それは以前ビル爆破事件の際に犯行を行った怪盗「ラット」だ。彼は少し微笑していた。まるでかくれんぼで見つかってしまったよう表情だ

ラット「なんで俺の事が分かったんだ？教えてくれよ」

小林「理由は2つ。1つはこの周りだ」

ラット「周り？」

小林「ここは今から犯行が行われようとしている場所、普通は見張りくらいいるもんだ。、それに怪盗しともなれば手下ぐらい数十人というだろうからいてもおかしくなかった。だけど誰もいなかった。だから怪しいと思い建物内、あるいはその外で待ち伏せしていると予測したんだ。すると微妙にだが火薬のにおいがあったね。それで火薬を扱う者がいることが分かった。後はみんなが突入していく時に影が少し動いたからそこにいると分かったのさ」

ラット「2つ目は？」

小林「僕らの足元には火薬が少々ながら落ちていた。ここは火薬を使うような場所じゃない。つまりは誰かが持ち込んでいるということ。このことから火薬使いがそこにいると分かった。以上が理由だ」

シャロ「す、すごい・・・」

ネロ「小林・・・そんなところにまで気がついてたんだ・・・」

シャロやネロが思わず驚きを口に出す。それは他のメンバーも同じ、言葉にはしなくても彼の観察力に圧倒されていた

ラット「・・・あははは！さすがだぜ、さすがだな、小林オペラ！
もう尊敬の域だぜ」

小林「それはどうも。しかし、尊敬してくれても僕たちはそこを通
る。そして怪盗Lの計画を阻止する。これだけは譲れない！」

ラット「そうか・・・ふう、それじゃあ・・・」

小林がラットに向かって言う。その言葉にラットはニヤリと笑い手
をあげた

ラット「出てこいよ！ストーンリバー、トウエンティ！」

ストーンリバー「ようやく出番か」

トウエンティ「僕の美しすぎる輝きが我慢の限界じゃないか！」

小林「ストーンリバーにトウエンティ！？」

ラットの声に反応し、彼の後ろから登場した二人に小林は驚いた。
それは神津やシャロ達も一緒だ

神津「奴らがいたのか！？」

シャロ「も、もう二人でできましたー！？」

ネロ「アイツらって確か前の事件で犯人だった奴らだよね？」

エリー「うん、確か洋館で刀を奪ったストーンリバーと……」

コーデリア「アダムの涙を狙ったトゥエンティだわ！」

少し構えるような仕草をするメンバーにストーンリバーとトゥエンティは1歩だけ近づいた

ストーンリバー「久しいな、ミルキィホームズにG4。そして……
小林オペラ」

小林「……ああ、そうだな」

トゥエンティ「レディ達も僕に会えなくて寂しかっただろう？」

シャロ「そんなことはありません！」

ネロ「そうだよ、お菓子には会いたって思ってもお前なんかに会いたいと思うか！」

エリー「……出来れば……もう会いたくなかった」

コーデリア「そうよね、すぐに脱ぎ出すし」

シャロとネロは反抗を、エリーとコーデリアはひそひそと嫌そうな顔をしながらトゥエンティを見た。するとそんな彼女たちの反応に

トウエンティ「おお！その眼差し、この僕への愛しの眼差しかい？
いいだろう、その愛、僕が受け止めてあげよう！！」

トウエンティは脱ぎながら答える。そんな彼の行動に神津すら引いていた

神津「あ、相変わらず変わってないようだな・・・」

小林「・・・みたいだね。・・・さて、ストーンリバーとトウエンティ、君たちも僕たちの行く手を阻むのか？もしそうなら僕たちは君たちと戦わなくてはならない」

小林が苦笑いから一変、ストーンリバーとトウエンティに向かって問う。すると彼らは小林のその質問にフツとほほ笑んだ

小林「何がおかしい？」

ストーンリバー「我々を倒す？そしてこの先へ向かう？正気か？ここにいる我らを倒しても奥にいるのは最強と言われる伝説の怪盗「L」だぞ？奴のトイズはお前達も知っているだろう？」

小林「・・・ああ、知ってるさ。確かにアイツのトイズは使い勝手がいい。簡単には止められないだろう。でもそんなことで諦めてこのままヨコハマを壊滅させるわけにはいかない。僕たちは出来るこ

とをして必ずアイツを止める。そしてこのヨコハマを護るんだ」

トウエンティ「アッハーン、本当にそんなことが出来ると思っているのか〜い？」

小林「もちろんだ、なんせここには僕だけじゃない・・・ミルキイホームズにG4・・・みんながいるんだ。必ず出来る!!」

ストーンリバー「そうか・・・では手始めに私達から倒す・・・ということだな？」

小林「出来れば戦うのはやめたいが・・・君たちが手を引かないなら・・・仕方ない」

小林は少し眉をひそめながら言う。実際ここで戦って体力を消費したくないのだろう。しかしそうも言ってもらえない、ここにいる3人の敵を倒さなければ先へは進めないのだから。小林達はそう思い自然を構えた

ストーンリバー「そうか、そこまでの覚悟が・・・ならば良いだろう」

トウエンティ「僕たちも全力で行くSA」

ラット「覚悟しろよ!!」

ストーンリバーが剣を目の前に出し、トウエンティも右手を引いて

構える。そしてラットが爆弾を取り出した

小林「やはり戦うしかないのか・・・仕方ない。3人を倒して必ず先へ進む!!」

小林は心の中で、決心を、固めていた

第四十四話 フォーチュンリーフ（後書き）

エリー「……」

・
・
・

エリー「……今回もゲームとはかなり違う展開でしたね」

YES！探偵&警察VS怪盗ですよ。かなり見ものでしょ

エリー「でも残り時間わずかなのに……大丈夫でしょうか？」

そこもちゃんと考えてありますよ、大丈夫！

第四十五話 驚きの展開、真の「協力」（前書き）

コーデリア「ついに・・・怪盗帝国との戦いですね」

今回はタイトル通り真の「協力」です！

コーデリア「注目の第四十五話です」

第四十五話 驚きの展開、真の「協力」

小林「（どう来る気だ・・・？）」

小林が自分たちの前に立ちふさがり、この先へ行かせんとする怪盗帝国の3人を見ながら思った。「戦う」、そうは言ったものの小林達に武器はない。戦えるとしてもトイズを発動したエリーと平乃、次子くらいなものであり、他のメンバーではとてもじゃないが戦闘なんて出来るわけがなかった

小林「（どう考えても爆弾、剣、トランプと戦える道具の揃った彼らを倒すのは難しい・・・ましてや爆弾なんて投げられれば対処出来ずに・・・終わる）」

神津「おい、小林！」

小林「どうした、神津？」

神津「上だ、入口の上を見る！」

小林「上・・・？なっ！？」

神津に言われた小林がラット達の奥にある入口の上を見た

小林「あれは・・・」

神津「ああ、怪盗・・・アルセー又・・・だ」

アルセー又「お久しぶりですね、小林さん、神津さん」

そこには怪盗帝国の首領であり、小林達と幾度か関わってきた怪盗、アルセー又がいた。するとアルセー又はニコツとほほ笑み下、地面へとジャンプし降りてくる。そんな彼女を見て小林も返事をした

小林「ああ、久しぶりだ。でも意外だったよ・・・まさか君たちが今「敵」として僕たちの前に現れるなんて・・・君たちは・・・こんなことしないって思っていたのに・・・」

小林が少し寂しそうに言った。

小林達ミルキイホームズやG4、怪盗帝国は確かに敵同士ではあった。捕まえる側と逃げる側、お互いの立場上それは仕方のないことだ。

しかし一度だけ、一度だけながら小林はアルセー又の優しさを知った。

船での爆発時、アルセー又は小林を犠牲にしないためにトイズを使いある意味小林を逃がした。

その時に小林は彼女の優しさを感じていた。だから信じられないのだ。みんなを犠牲にする計画を補助しているなんて思いたくもないのだ

小林「君たちは「命」って言うのの大切さ、尊さを充分理解しているだろうか？」

アルセーヌ「ええ、もちろんです。だから船での爆発の時、あなたを逃がしたのです」

小林「なら何故こんなことをするんだ！？怪盗しを止めなければみんなが犠牲になるのに、何故アイツを止めないんだ！？」

神津「小林……」

小林の必死さに神津が思わずつぶやく。他のみんなも同じだ。小林の思いに共感していた。するとアルセーヌが少し眉をひそめた

アルセーヌ「……小林さん、たちは怪盗帝国です。「怪盗の美学」を極め続ける存在……それが私達のあるべき姿であると思っていますし、そうあるべく行動しています」

小林「じゃあ何故！？」

アルセーヌ「小林さん！」

叫ぶ小林を一瞬でアルセーヌが止める。そのいつもより大きな声に圧倒されてか小林は黙り込む。そしてアルセーヌが口を開いた

アルセーヌ「怪盗の美学・・・とはどんなものかご存知ですか？」

小林「怪盗の・・・美学・・・？」

アルセーヌ「ええ、私達怪盗帝国がいつも口にするそれ、それがどんなものかあなた方は認識なさっているのかしら？」

アルセーヌが少し疑いの目で問う。実際小林にその答えは分からない。それは全員が同じだ。はつきり言ってしまうばそんなものは怪盗帝国にでも入らないと教えてくれないだろう。だからそれを小林が知っているわけがなかった。しかし

小衣「人を傷つけずに謎を広げること・・・じゃないの？」

小林「えっ？」

急に言った小衣の方を小林は見る。すると小衣はアルセーヌの方を見ていた。そう、真剣なまなざしだ

シャロ「なんで小衣ちゃんは分かるんですか？」

ネロ「まさか、明智実は元怪盗帝国のメンバー？」

小衣「そんなわけないでしょ！今までコイツら怪盗は事件は起こしても人を傷つけようとはしなかった。それが理由よ」

アルセーヌ「なるほど、確かにその通りです。私たちはそれを「美

学』としています。ではそれを行うことで私たちは何を得ているか・
・分かりますか？」

小衣の解答が正解で終わったかと思えば2個目の質問をアルセイヌ
がする。これはさつきより難しいことだ。今までの話しの中でそん
な話は聞いたこともない、つまり情報がないのだ。これには流石の
小衣もお手上げ、全員がしばらく沈黙に包まれる。そんな時、彼の
目にあるものが映った

小林「・・・あれは・・・」

彼の目に映ったもの、それは堂々と自分たちの前に立っているラッ
ト、ストーンリバー、トウエンティ、そしてアルセイヌだった

小林「・・・分かったよ」

アルセイヌ「えっ？」

小衣「分かったって・・・何がよ？」

小林「今の問いの答えさ」

次子「ええ！？アンタ分かったのか？」

平乃「一体なんなんですか？」

小林のその言葉にメンバー全員が驚きを隠せない。神津すら「なんだと……」と言って驚いていた

小林「怪盗としての誇り」だろう?」

エリー「怪盗としての……誇り?」

コーデリア「どういことですか、教官?」

驚いたかと思えば小林の答えを聞き、今度はみんなが首をかしげる。すると小林は解説を始めた

小林「どういことなんてないよ。ただ怪盗帝国を見ていたらすぐ堂々としている。とてもじゃないがこれから自分たちの美学を捨てるようなことをするには見えない」

ネロ「それはアイツらがボクたちを止めようとしてる、自分たちの美学に反してないからじゃ……」

小林「違うよ。彼女たちにとって僕らを止めることは美学じゃない。彼女たちの美学は……怪盗しを「止める」事なんだ」

シャロ「止めることですか?」

驚きの事にシャロが少し大きな声で言う。今まで小林達を止めていたと思つた彼女たちが実はしを止めようとしているというのだ。驚くのも無理はない

小林「怪盗の美学によつて怪盗帝国は「怪盗としての誇り」を得ている。怪盗として芯が出来ているんだ。そして彼女たちの怪盗としての誇りの条件には「人を傷つけない」ということがある。これはさつき小衣君が言っていた通り、今まで人を傷つけないことで証明されている。でも今回の事態は人を傷つけることだ。つまり彼らが怪盗としての誇りを護るため、美学を貫くなら怪盗しを止める必要があるんだ」

神津「なるほど、確かにそう考えると筋が通るな」

小林「どうだろう、アルセーヌ。僕の言っていることは・・・間違っているかい？」

小林が少し離れたアルセーヌに聞く。すると彼女はクスツとほほ笑んだ

アルセーヌ「正解ですわ、小林さん。そうです、私たちはあなた方ではなく怪盗しを止めようとしているのです」

シャロ「ほ、ホントですか!？」

アルセーヌ「ええ、ではお聞きしますが何故私たちが敵だと判断されたんですか？」

コーディネリア「あの時・・・教官が説得した後武器を構えて・・・」

ストーンリバー「あれは中へ突入するためだ」

コーディネリア「え？」

ストーンリバー「フォーチュンリーフ内に入るのに警戒し武器を構えた、それだけだ。別にお前達を狙おうとなどしてない」

トウエンティ「そうSA つまり君たちの勘違い、ってことだね！」

ラット「つたく、人騒がせだぜ」

3人が少々疲れたような表情をする。先ほどのような緊迫した雰囲気はない。どうやら本当のことを言っているらしい

アルセーヌ「でも小林さん。私たちがあなた方の敵でないといつ気付かれました？」

小林「みんなを見てみると凄く堂々としていたんだ。だから誇りを持っていてって分かったんだ。少し勘ではあったけどね。まああえて具体的な理由をつけるとしたらこの落ちてる火薬かな」

エリー「どうして・・・ですか？」

小林「ここに火薬があるのはラットがいる証拠だけど他にもここで

争いがあつた証拠にもなる。つまりラット達はここで戦つたんだ。そこまで来るともう分かるだろう？」

平乃「ここで監視者を倒していた・・・ということですか？」

小林「その通り、だから誰もいなかったんだ。ほとんど怪盗帝国が倒してくれたからさ」

そこまで言つとアルセーヌがまたほほ笑んだ

アルセーヌ「ふふ、流石ですわ小林さん。そこまで観察してらっしゃるなんて」

小林「たまたま気付いただけさ。それより、アルセーヌ・・・」

アルセーヌ「そうですね・・・ゴホンツ。ミルキイホームズ、G4の皆さん、私たちは今回の怪盗Lの行動を黙って見ているわけにはいきません。ですが彼は大怪盗の名にふさわしい強さを持っています。ですから私たちだけでは勝てません。そこであなた方に協力させていたきたいのですが・・・どうでしょう？」

アルセーヌがそう言った。彼女の表情は怪盗と言うより芯のしつかりした人間と言つた感じで、嘘はとてもじゃないがついていないと分かつた。その影響かその言葉を聞き全員が嬉しそうにする

小林「・・・とのことだが、みんなはどうかな？」

小衣「私たちは警視の言うことに従うわ」

シャロ「あたしたちも先生に従います」

小林「ありがとう。神津、僕は今回、この大きな事態に立ち向かうためには少しでも有力な戦力が必要だと思っている。彼女たちの力は苦戦してきた僕たちがよく分かっているはずだ。何より今回あちらから協力したいと言ってくれてる。ここは一旦一時休戦と言うことで協力しないか？」

小林が少し不安気味で問う。神津の堅苦しい性格上「怪盗との協力などダメだ」と言うと思っただろう。しかし現実とは違っており、小林の話が終わると「フッ」とほほ笑んだ

神津「良いだろう、俺もちょうどそう思ったところだ」

小林「神津……」

神津「確かに怪盗帝国は俺達の敵ではある。だが今回の事態には協力が不可欠だ。俺たちだけでは立ち向かえない。故に拒否する理由もない」

アルセーヌ「ありがとうございます」

神津の言葉にアルセーヌがほほ笑む。自分たちの事が理解されて嬉しらしい

コーデリア「協力者が増えましたね、教官」

小林「ああ。今回のこの事態はヨコハマの運命がかかっていると言つても過言ではない。それほど危ない事態だ。でもこうして探偵、警察、そして怪盗が協力する時が来たんだ。みんな・・・絶対にこの計画を阻止しよう！」

神津「そうだな」

アルセーヌ「ええ」

シャロ「みんなで頑張りましょう！！」

みんなが頷いた。小林はフォーチュンリーフを見る。怪盗はすぐそこに、決戦の時は刻一刻と近づいていた

第四十五話 驚きの展開、真の「協力」（後書き）

コーデリア「ま、まさかの怪盗帝国も仲間になったんですか!？」

YES、今回のこの大きな事態、彼女たちにも協力してもらおうしかないでしょ!!

コーデリア「そうですね、ヨコハマを護るため・・・頑張ります」

というわけで（多分）今年最後のミルキイGR更新です

シャロ「もう始まって1年ですよ？これ本当に終わるんですか？」

段々とクライマックスに近づいてるよ。今回もクライマックスへの1話だしね

シャロ「そうなんですね、安心しました。そういえば新システムがあるって聞きましたけど・・・」

あ、ダブルトイズね。では説明をいたします

ダブルトイズとは単純に2つのトイズを組み合わせで物語に出てくる障害クリアーしていく方法です。今までトイズ発動の際にはシャロ、ネロ、エリー、コーディアの中から1人を選んで発動をしてきました。それを2人、組み合わせを選ぶことになるだけです。

なお、組み合わせは今までのようにこちらで複数用意しますのでその中からお選びください。

また選択肢の下では正解での物語が始まります。なので今まで通り探偵になりきった要素として楽しんで頂けると光栄です。

ってというのが新システム「ダブルトイズ」です

シャロ「益々考えるのが面白くなったんですね、楽しみですよ！」

それではダブルトイズも登場の第四十六話・・・

シャロ「スタートです！」

第四十六話 第1管制室 発動！ダブルトイズ part 1

怪盗しによるヨコハマ壊滅作戦を阻止するため、小林は本来的敵である「怪盗帝国」と協力、結果探偵、警察、そして怪盗という3勢力が協力することになった

平乃「はああああ！！」

ストーンリバー「はっ！はっ！」

平乃、ストーンリバーが先頭でラクロスで使うクロスと日本刀を使ってフォーチュンリーフ内の敵を倒していく。その後ろから小林達はついて行っていた

小林「やっぱり頼もしい2人だね」

シャロ「平乃さんもストーンリバーさんもすごいです！！」

アルセーヌ「ありがとうございます」

ネロ「それにしても怪盗帝国のみんながいてくれてよかったよね。ボク達だけじゃこの建物の構造はわかんないからさ」

ラット「だろ？全く、感謝しろよな」

神津「まあこれでお前らが日ごろどんなことをしているかが分かるがな」

ラット「うう……」

ネロの言葉にラットが少し自慢気に答えるものの神津の言葉にそれも失せてしまう

神津「だがそれ以上に重要なこともわかった」

小林「ああ、この施設内にもたくさんの手下がいる……」

アルセーヌ「私たちも外で結構な人数を倒しましたが……まだいたのですね」

3人が少々苦い顔をする。外にも中にも敵ばかり……つまりこれはあることを意味していた

小林「これは急がないと取り返しのつかないことになる。みんな、急ぐ」

神津「そうだな」

アルセーヌ「ですわね」

それから数分後、小林達はある大きな部屋に来ていた

シャロ「ここは・・・どこですか？」

アルサーヌ「第1管制室です。このフォーチュンリーフは廊下以外大きく分けて4つの部屋があります。ここはその1つです」

ネロ「それじゃあこの先は・・・」

ラット「第2管制室、第3管制室、第4管制室がある。その先にようやく中央管理室があるんだ」

エリー「つまりここを進まないといけない・・・ということですか？」

ストーンリバー「その通りだ」

コーデリア「それじゃあ急ぎましょう、早く次の部屋へ行かないと！」

神津「待て！」

コーデリア「えっ？」

先へ急ごうとするコーデリアを神津が呼び止める。コーデリアと一緒に行くこうとしていたミルキイメンバー、G4全員が止まった

小衣「どうしたんですか、警視？」

神津「お前たちは怪しいと思わなかったのか？今まで沢山の手下がいたのにここには誰もいない。明らかに怪しいだろう」

小林「神津の言うとおりだ。こういう場合どこかに何か仕掛けてある」

エリー「仕掛け・・・？」

咲「確かにそれありかも」

ネロ「でもそんなのどこにも・・・」

次子「小衣、危ない！！」

小衣「えっ？」

仕掛けと聞いてみんながあたりを見渡す。すると次子の眼には何かが見えたようで小衣に飛びつく彼女を抱えて地面に滑り込む。その瞬間先ほど小衣のいた後ろの壁には焦げた跡があった

小林「あそこになにかある！？」

次子「よくもやったな!!」

次子はすぐに振り向き銃を構えて放つ。するとその狙いのよさから
が見事に命中、壊れる音と共に小林達の目に見える位置に落ちてきた

小林「これは・・・鉄、ロボットか!」

小林が落ちてきた方を見ながら言う。するとそこには10体以上の
同じようなロボットがいた

神津「小林、アルセーヌ」

小林「ん?」

アルセーヌ「どうされました?」

神津「あれは国が開発していた警備用のロボットだ。それも高性能、
予定としては銀行などの嚴重に警備すべき所に置く位のな。対象を
光で人間の目のように判断し、攻撃してくる」

小林「お前、あのロボットについてやけに詳しいな」

神津「以前会議で話題が上がっていてな。その時に覚えたただけだ」

アルセーヌ「それではお聞きしますが神津さん。あのロボットの放
つたものは何かしら?」

小林「放ったもの？」

小林が不思議そうにアルサー又に聞く。するとアルサー又は壁を指差した

アルサー又「ええ、先ほどの壁を見ると少し焦げています。つまり何か高温度の光線のようなものが飛ばされたということ。もしそう言った物をあのロボット達が所有しているならその特徴を把握しておくべきです。ですから教えて頂きたいのです、あれが何なのか」

神津「あれか、あれはあのロボットに装備されている「HTR」という武器だ」

小林「HTR？」

神津「High temperature rays、高熱光線の頭文字からそう呼ばれている。温度自体は1000度以上、あたれば最悪の事態だろうな」

小林「そんなものを・・・」

神津「あれがあつたからあのロボットの制作は中止になったんだ。危険すぎるからな」

神津の話しを聞いて改めて小林はロボットを見る。いくら次子の銃で倒せたレベルとはいえそれが10体以上いておまけにあたれば最悪の光線まで持っている。とてもじゃないが油断出来る状況ではない

シャロ「あ、ネロ！ネロのトイズであるロボットさん達を操ることは出来ませんか？」

ネロ「無理じゃないけどそれは1体の場合、この状況でやっても1体をハッキングしている間に光線撃たれておしまい。あんなにいたんじゃない流石に無理だよ」

シャロ「あう、無理ですか・・・」

小林「くっどうすれば・・・」

小林が歯を食いしばりながら考える

小林「（やつらは数で押ししてくる。何よりあの光線、奴らが放つ前に対処しなきゃいけない・・・その前に対処する方法・・・。落ちて着け、冷静になろう。あのロボットは次子君の銃で倒すことが出来る。あとはやつらが光線さえ撃ってこなければ対処できる。その為にはトイズを使うしかないけど1人1人のトイズではどうしようもない。一体誰と誰のトイズを合わせれば・・・」

・ シャロ&コーデリア

・ ネロ&エリー

・ エリー&シャロ

・ コーデリア&ネロ

小林「（・・・そうか）分かった!!」

神津「何？」

アルセー又「小林さん？」

小林「分かったんだ、奴らの対処方法が。次子君、君は目をつぶっても銃を撃てるかい？」

次子「目をつぶって!?!そりゃあ誰かに右とか左とか言ってもらえるんなら撃てるけど・・・まさか感覚で撃てなんて言わないよな・・・?」

まさかと思った次子が汗を垂らしながら聞いてみた

小林「流石にそんなことは頼まないさ。でも撃てるなら良かった。それじゃあネロ、コーデリア、次子君今から作戦を話すから聞いて

くれ」

ネロ「えっ、ボクも？」

コーデリア「私もですか？」

小林「ああ、この作戦は君たちがいないと成り立たないからね」

小林の言葉を聞いた3人が彼の元へと向かう。そして作戦を聞いた

ネロ「なるほど、それならいけるね」

コーデリア「幸いロボットも私達側にはいないから危険もないわ」

次子「あとはあたしがやるだけか・・・分かった、この銭形次子に任せな！」

小林「頼んだよ」

神津「小林、一体どんな作戦を立てたんだ？」

小林「今に分かるよ。それじゃあ作戦開始だ！！ネロ！！」

ネロ「オツケー！！」

小林の合図とともにネロが壁にあった「スイッチ」向かった。そのスイッチは・・・

神津「何をする気だ小林。言っておくがあこのスイッチはこの部屋の電気のものだぞ。イジればこの部屋の明かりが消えることになる」

小林「分かってるさ、それを承知でネロに向かってもらったんだ」

神津「承知の上でだど？」

小林「ああ」

ネロ「それじゃあいくよ！」

小林「頼む！！」

ネロ「はあああああ！！」

少し離れたところで小林の確認をとったネロが手首の金属へラを取り出してスイッチへと刺し、トイズを発動させる。すると電気は一瞬でハッキングされ、消えてしまった

シャロ「真っ暗になっちゃいました！」

ラット「おい、これじゃ何も見えねえぞ！」

小林「そう、こうして光を断ち切れればしばらくは視界を暗くする」
とが出来るんだ」

ストーンリバー「……そうか、これであのロボットは私達を狙うことが出来ないんだな。「光がない」から」

小林「その通り」

トウエンティ「でもこれじゃあ僕らも何も出来ないじゃないKA！」

小衣「そうよ、ここからどうするのよ」

小林「それも心配はいらないさ、コーディネリアー！」

コーディネリア「はい!!」

コーディネリアは返事と共にトイズを発動させる。それと同時に彼女の視界は「微妙な光を利用して」見えるようになった

エリー「コーディネリアさんのハイパーセンシティブでこちらだけ視界が見える……ということですか？」

小林「そうさ、後は……」

コーディネリア「銭形さん、少し右です」

次子「あいよ!!」

コーディネリアの指示を聞いた次子が銃を構えて弾を放つ。すると弾は見事ロボットに命中、壊れてしまった

平乃「これならロボットに撃たれずに壊していけますね」

咲「便利便利」

神津「こんな短時間で考えると、流石だな小林」

小林「そんなことないさ、この作戦だって彼女達がいなかったらできなかつた。みんながいてこそ出来たことさ」

そうこう話しているうちに次子が全機を撃ち終えた

コーデリア「教官、もう全て壊しました」

小林「分かった、ネロ、明かりをつけてくれ」

ネロ「オッケー！」

ネロが改めてハッキングをする。すると電気は操られ、明かりがつき、見えるようになった

小林「さあ、この調子で進もう。時間も限られてる」

神津「そうだな」

アルセーヌ「さあ、参りましょう」

3人の言葉で全員が急いで次の部屋「第2管制室」へと向かった

第四十六話 第1管制室 発動！ダブルトイズ part 1（後書き）

というわけでまずは突破です

シャロ「ダブルトイズ・・・こんな風に組み合わせるんですね」

そつだよ、本当はミルキイの2人＋誰の力を借りるかってしようかとも思っただけど流石にそれは難しすぎるからね

シャロ「ネロとコーデリアさん、流石でした！！」

というわけで次回も（恐らく）ダブルトイズは登場です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5826p/>

探偵オペラ ミルキィホームズ ~ Game Remake Ver ~

2011年12月29日04時47分発行